

天災二人と馬鹿一人

A C S

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

篠ノ之束と織斑千冬、この二人の共通の友人にとびきりバカな男が一人。

座右の銘が『ガンガン行こうぜ!!』の男は人間関係もゴリ押し、心の壁全開の兎も近寄れば斬られる戦乙女とも強引に仲良くなる!!的な作品にしたいなあ。

日常とラブコメの練習&リハビリ作品です。

目次

小学一年生	1	1
小学一年生	2	4
小学一年生	3	8
小学一年生	4	12
小学一年生	5	16
幕間：兎から見た馬鹿		19
小学一年生	6	23
小学一年生	7	26
小学一年生	8	29
小学一年生	9	33
小学一年生	10	36
幕間：兎から見た馬鹿	2	40
小学一年生	11	44
小学一年生	12	47
小学一年生	13	51
小学一年生	14	55
小学一年生	15	58
幕間：兎から見た馬鹿	3	62
小学一年生	16	66
小学一年生	17	69
小学一年生	18	73
小学一年生	19	77
小学一年生	20	81
幕間：兎から見た馬鹿	4	85

小学三年生	1	175
幕間：戦乙女から見た馬鹿	4	172
小学二年生	20	169
小学二年生	19	165
小学二年生	18	161
小学二年生	17	158
小学二年生	16	155
幕間：戦乙女から見た馬鹿	3	152
小学二年生	15	149
小学二年生	14	145
小学二年生	13	142
小学二年生	12	139
小学二年生	11	136
幕間：戦乙女から見た馬鹿	2	132
小学二年生	10	128
小学二年生	9	125
小学二年生	8	121
小学二年生	7	117
小学二年生	6	113
幕間：戦乙女から見た馬鹿		109
小学二年生	5	105
小学二年生	4	101
小学二年生	3	97
小学二年生	2	93
小学二年生	1	89

小学四年生	2	258
小学四年生	1	254
幕間：戦乙女から見たアイツ	2	250
小学三年生	20	247
小学三年生	19	244
小学三年生	18	241
小学三年生	17	238
小学三年生	16	234
幕間：兎から見たアイツ	2	230
小学三年生	15	227
小学三年生	14	224
小学三年生	13	221
小学三年生	12	218
小学三年生	11	215
幕間：戦乙女から見たアイツ		212
小学三年生	10	209
小学三年生	9	206
小学三年生	8	202
小学三年生	7	199
小学三年生	6	195
幕間：兎から見たアイツ		192
小学三年生	5	188
小学三年生	4	185
小学三年生	3	181
小学三年生	2	178

小学四年生	3		261
小学四年生	4		265
小学四年生	5		269
幕間：戦乙女から見た彼			273
小学四年生	6		277
小学四年生	7		281
小学四年生	8		286
小学四年生	9		290
小学四年生	10		294
幕間：兎から見た彼			298
小学四年生	11		302
小学四年生	12		306
小学四年生	13		310
小学四年生	14		314
小学四年生	15		318
幕間：戦乙女から見た彼		2	322
小学四年生	16		326
小学四年生	17		330
小学四年生	18		334
小学四年生	19		338
小学四年生	20		342
幕間：兎から見た彼		2	346
小学五年生	1		350
小学五年生	2		354
小学五年生	3		358

小学六年生	4	456
小学六年生	3	451
小学六年生	2	447
小学六年生	1	443
幕間：兎の秘密	4	440
小学五年生	20	436
小学五年生	19	432
小学五年生	18	428
小学五年生	17	424
小学五年生	16	420
幕間：兎の秘密	3	417
小学五年生	15	413
小学五年生	14	409
小学五年生	13	405
小学五年生	12	401
小学五年生	11	397
幕間：兎の秘密	2	393
小学五年生	10	389
小学五年生	9	385
小学五年生	8	381
小学五年生	7	378
小学五年生	6	374
幕間：兎の秘密		370
小学五年生	5	366
小学五年生	4	362

小学六年生	9	480
小学六年生	8	476
小学六年生	7	472
小学六年生	6	467
幕間：戦乙女の秘密		464
小学六年生	5	460

小学一年生 1

——俺の隣の席には変わった女が居る。

普段からクラスの誰とも話さず、授業態度も不真面目を通り越して椅子に座ってるだけ、義務教育だから仕方なしに出席していると言う雰囲気を纏ったコイツはこのクラスの腫れ物だった。

常に暇そうで無気力、偶に考え事でもしてるのか上の空で外を見てるだけのよく分からない女。

俺の印象はそんな程度だったが、幼稚園から知ってる奴らからしたら甘い評価らしい。

曰く不気味、コイツの話を誰も理解出来ない、難しい事ばかり喋る上に口も悪い、仲良くしてる人を一人しか知らない、話しかけても無視する、など。

何気無しに聞いたたらそれはもう悪口が出るわ出るわ、余程の事をやったのか聞いた事を後悔するレベルだった。

直接話した事がない癖に又聞きの話で人を判断するのは我ながらどうかと思うが、実際教師に暴言吐いたり人の話を無視したりするのは良く目にするから正当な評価なんだろう。

今更ながら、じゃあ何故俺がそんな事をわざわざ考えてるのか？

それは席替えで丁度左の席にコイツが来たのと、俺が今日算数の教科書を忘れたからだ。

右隣は離れてて借り辛い、かと言って左は問題児、小学一年生の時点で早速人生の山場に来てしまった感がある。

「つー訳できよーかしよ見せて？」

「は？ なんで東さんがそんな事しなきゃならないの？ てか、お前誰だよ気安く話しかけんな」

すげーな、他人が言われてると自分が言われてるとじゃ全然ち

げーわ、目付きと語調のせいでめっちゃ心にぶっ刺さる。

「いやほら、きょーかしよ忘れたからさ」

「それこそ知らないよ、お前が何忘れようと知った事じゃないんだけど？　しかも気安く話しかけんなって言わなかった？　馬鹿なの？　猿並みの知能しか無いのかよ」

よし、教科書は諦めよう、先生の説教よりコイツの罵倒の方が効く。思わず泣きそうになった俺は上を向いて涙を堪えて前を向き、どーせ忘れたんだからと開き直って横の女に振り返った。

黒板の書き写しとか色々やれるだろうけど、俺はコイツと違って社交的な奴だからこのクラスの人とは全員友達だ(約1名以外)、ノートは後で誰かに見せて貰えば良いや。

それよりも、その唯一例外のこの女と友達になるにはどうしたもんか。

これから先も教科書を忘れる度に罵倒されちゃたまつたもんじゃ無い、いくら俺が馬鹿でも精神攻撃は地味に刺さるのだ、将来的にくらうであろう攻撃を何とかして回避せねば。

「うん決めたぞ篠ノ之、お前俺の友達になれ」

「頭おかしいんじゃないの？　なんで束さんがお前みたいな凡人の相手しなきゃなんないの？　つかさ、話しかけんなって言ったよね？

三回目だよ？　三回聞いて理解出来ないくらい低脳なの？　単細胞生物ですらもう少し賢いよ？　そもそも教科書貸してって話からなんで友達になれて話になんの？　しかも上から目線でき、お前私の爪の垢以下の価値しかないクセに私より上にいる気？　生意気だね、二度と外歩けない様にしてやろうか？　あ？　つかこんだけ罵倒されてる癖になんで話しかけてくるんだよ、マゾかよ気持ち悪いから近寄らないで欲しいんだけど？　席離せよ、変な菌が移るかも知れないだろ？」

……た、他人に対する拒絶感半端なくね？　あまりのマシニング
トークに俺も何言われたのか全然理解出来なかった。

少し強気に行ったら相手に対抗できんじゃね？　みたいな軽い気
持ちで話しかけたら手が付けられなくなったんだけど、ど、どーすっ
かな？

いやでも、ほら、クラスでぼっちってのは辛いだろ？　本人も辛い
だろうし、見てる俺も辛い。

うん、100%の善意が嫌がらせになる訳が無い、そうに決まっ
てる。

「——聞いてんのか馬鹿、お前自分から話しかけといて無視って
のはどう言う了見だよ。舐めてんのか？　お前如きに舐められると
か東さんも随分落ちたものだね、不愉快極まりないぞお前」

「え？　ごめん聞いてなかった、なんだって？」

まくし立てる様に言われたもんだから頭に入って来なかった、とい
うか考え事してたから途中からマジで何言われたのか理解してな
かったし、多分聞いてたとしても理解出来なかっただろう。

ただその発言を聞いた瞬間奴はキレたんだろう、俺は見るからに青
筋を浮かべた篠ノ之のガチ罵倒で授業中にも関わらず大号泣させら
れるのだった。

後々になって、他人に関心が無い篠ノ之が俺に対してキレた事が非
常にレアな事だった事を知る。

普段なら冷たい目で見つめてそれ以降一切口を利かないと言うパ
ターンに入るらしく、此処まで感情的になる事は早々ないと言う。

——この日を境に俺は篠ノ之の中で“特別”になっただけらしい、
尚それは良い意味での“特別”では無く“特別ムカつくクソ野郎”
“って意味らしいが。

小学一年生 2

ボロクソに貶された俺が漸く泣き止んだのは昼過ぎだった。

鬼の形相で罵倒されまくったけど、超前向きに受け取れば誰も成し得なかった篠ノ之との会話を成功させる事が出来た、つまり俺と奴の距離は縮んだはず!!

保健室で寝かされてた俺は、ベッドの上から飛び起きると廊下を全力で走って自分のクラスの所へ行く。

丁度昼休み、今日中に友情の握手まで漕ぎ着けてやるからな!! 覚悟しろよ篠ノ之。

幸運な事に篠ノ之は弁当持って教室を出た所だったらしい、すかさず前へ回り込みながら指を指して話しかける。

「へい、篠ノ之!! 一緒にメシ食おうぜ!!」

「豚とエサでも喰ってろ便所コオロギ」

秒で返事が返って来たしクツソ冷たい目を合わせてくれたから俺嬉しい!! けど、なんでかな? 涙が溢れて止まらないや……。

立て直したメンタルがワンパンで崩壊しました、しつこく食い下がろうかと思っただけで篠ノ之が拳握ったから諦めた、だって握り拳作っただけで漫画見たいにゴキゴキ言ってるんだもん、流石にコレは行けない。

しゃーなしに教室に戻ったんだけど、クラスの人から凄く憐れんだ目で見られてるのを感じる、へへっ燃え尽きたぜ、真っ白にな。

まるで戦場帰りの兵士を迎える様な態度の友人達と雑談しながら、俺はテイク2の作戦を考える。

否が応でも五限目がある以上、いくら奴が俺を嫌って居ても席が隣な事は変わらない、つまり次の授業時間は丸々篠ノ之との対話に使える訳だ。

なんなら放課後もある、なーんだ時間はまだ沢山あるじゃないか、ポジティブに行こうぜポジティブに。

そんな俺の決意宣言に友人達は『おまえが勝つにごひやくえん』とか『おこった篠ノ之にまた泣かされるにさんびやくえん』とかそんな感じのメールを送ってくれた、やったね褒められた!!

冗談はさておき、基本的に篠ノ之は昼休みになると別のクラスにいる唯一の友人の所に行くらしい、昼だけ行くくらいなら普通の休み時間の間から行けば良いのと思ったけど、その友人も篠ノ之以外の友人が居るから一応気を利かせてるのかもしれない。

本人がアレだから憶測で語るしか無いのがなんとも言えないけど。

まあいいや、親しい友人に気を使えるって事は根が悪い奴じゃ無いつて事だし、俺はそう前向きに受け取ろう。

それに仲良くなったら気を使ってくれてくれるって事は、教科書忘れても見せてくれる、罵倒もされない、あれ? 完璧じゃね?!

後は会話の内容だけど自己紹介とかかな? 好きな物とかで攻めてみよう。

———という訳で五限目、すっごい椅子を離されてるので態度が既に『近寄んじやねえ』状態で既に心が折れそう。

だが俺はメゲない、授業なんぞほったらかしでレッツコミュニケーション!!

「所で篠ノ之、俺はオムライスが好きなんだけどお前好きな食べ物ってなんなの?」

「いくら天才の束さんでも便所コオロギの使用言語は理解出来ないんだ、何言ってるのか分からないし分かる気もないから黙ってる」

……俺以上に悲惨なアダ名付けられた奴はいるんだろうか? いや、メゲるな!! コミニュケーションこそ最強の武器なんだから!!

「ふーん、便所コオロギの言葉も分からないってーどの天才なんだー、大

した事無いねー」

俺がそう言った瞬間、篠ノ之はどっから取り出したのか殺虫剤を吹き付けて来た。

「ばっ、人に向けて使うなよ!! つかじゆぎよーちゆうだぞ?!!」

「あん? この程度の授業とか受ける価値無いだろ、そもそもお前は人間じゃなくて便所コオロギじゃないか、早く死ねよ」

ジェット噴射される白い殺虫剤にむせながら、椅子から転げ落ちた俺は顔面に向けて噴射されたガスから逃げる為に一旦距離を取った。

嫌われてるってレベルじゃねーような気をするけど、逆に考えれば特別なリアクションを取る程度には俺はコイツに認識されてる訳だ、何とか乗り越えれば勝てる。

離ればジェット噴射は来ない、ある程度近付けば再び噴射されるけど奴の手には殺虫剤は一つ、使い切るまで行ったり来たりすれば攻撃手段は口だけだ。

自称天才の割には浅はか!! ふっふっふっ、その手の薬剤が切れた時が見ものだなア!!

そんなニヤつきが顔に出てたんだろう、薬剤の切れた殺虫剤の缶を捨てた篠ノ之は手品の様に袖からトリガーの付いた殺虫剤を取り出して来た。

「オーケー悪かった篠ノ之、謝るからソレを俺に向けなくてくれ」

「は?なんで束さんの言う事聞かないお前の言う事聞かなきゃならないんだよ」

その言葉と共に奴はトリガーを引く、躊躇いが一切ねえ。

殺虫剤は蜂とかに使う様な強力な奴らしく、さっきの殺虫剤とは比じゃない勢いでガスを吹き付けてくる、そのせいで俺は授業が終わるまで泣く泣く立ちっぱなしされた挙句、篠ノ之を刺激した藪蛇を突いたという理由で先

生に説教もされてしまった、ちくしょうめ。

だが俺は諦めない、何故なら評価が底辺なら後は上がるだけだからな!!

……そう、思わせて下さい、ハイ。

小学一年生 3

篠ノ之と友人になると決めた翌日、俺は教室に一番乗りし、仁王立ちをしながら奴を待った。

正直校門前で待とうかとも思ったんだけど、今日は風が強いので仕方なしに教室の中にいる。

それと朝は友人と登校してるだろうしそれを邪魔するのも悪いし、何となくそこに乱入したら致命的な目に遭わされる気がするからな。

ふっふっふ、とカツコ良い笑いを浮かべながらHRの時間まで待ち、漸く御登場された篠ノ之に向けて指を突き付けた。

「よーやく来たな篠ノ之!! 俺はお前と友達になるほーほーを考えて
——」

考えて来た、そう言い切る前に篠ノ之は無表情で俺の横を素通りし、自分の椅子に仕方無さそうに座る。

アウト・オブ・眼中!! うーん、朝から強烈な対応で不安しか無いな!!

しかし、俺は秘策を用意して来たのだ、そう、絶対に篠ノ之と会話が出来る秘策、それは!!

——手ぶらで登校する事。

「ふはははははっ、これで貴様は否が応でも俺にきよーかしょを見せなければならぬのだー!! いや、きよーかしょだけじゃなく、ペンや消しゴムと言ったひつきよーぐもなア!!」

「おい、ダーウィン賞レベルの馬鹿、初めから最後まで全部口に出てるぞ」

「……………コレが噂のゆーどーじんもんって奴か」

めっちゃ冷たい目で睨まれた、無言のメンチビームが一番キツイっ

す。

それになんちやら賞レベルってどのぐらいなんだろうか？ 取り敢えず賞を貰えるって事はそれなりに凄いつて意味なんだろう、本人に聞くのが一番手っ取り早いんだろうけど教えてくれそうにねーしな、いやダメ元でも会話のキツカケになるか？

「なーなー、そのなんちやら賞ってなんだよ？」

「お前みたいなどびきりの馬鹿専用の賞だよ」

おっ？ やった返事してくれた、てつきりメンチビームが無視されるかの二択かと思っただけど、案外打ち解けられたんじゃね？

そう思い、握手しようとして手を伸ばしたら小指を反対側に曲げられた、しかも思いつきり。

「なに触ろうとしてんだよ便所コオロギ」

「ちくしょう、一日空いたのにまだ便所コオロギかよ……」

どうやら打ち解けられたのは幻想だったらしい、しかも俺を触った手をウエットティッシュで入念に拭いてる、すげーな悪口以外にも人って精神攻撃できるんだ、知らなかったや。

……泣いてない、俺は泣いてないからな!!

思わず目から流れそうになった物を堪え、気を取り直しながら一限目の授業に入ると同時に篠ノ之さんへ振り向いた。

「さあ!! きょーかしよを渡して貰おうか!! ついでに鉛筆と消しゴムもなア!!」

「んなもん持つてる訳無いじゃん、私はこの学校の教師よりも頭良いんだよ？ なんでそんな私がお前と同レベルの授業を受ける必要があるの？ 無いよね？ そんな単純明快な事も理解出来ないとか馬鹿じゃないの？ あ、馬鹿だったね？ 人類史に残るレベル——ううん、残しちやいけないレベルの馬鹿だもんね。そっかそっか、

あんまりにも馬鹿過ぎると流石の束さんも何を考えてるのか全く分からないなあ、もう少し人間レベルの知能付けてくれないかな、最低限き？　ねえ便所コオロギ君、それともカマドウマ君って呼んだ方がいいかい？　ああ、オカマコオロギなんてのもあるね。お前は頭の中お花畑だからもしかしたら横文字の名前の方が気がいるかな？　ならアタキシネス・アピカリスとかラフィドフィオーディーもあるよ？　好きな呼び方で呼んでやる、ちーちゃん以外をあだ名で呼ぶなんて初めてだから要望に応えてやるよ」

この女の罵倒のプリセットは一体いくつあるんだろうか？　俺の事を木の股から産まれた何かとでも思ってたか、コイツ。

というかそもそも持って来てないってアリかよ、計画が初手から頓挫してんじやねーか、予想外過ぎる。

頭が良いのは知ってたけど教科書要らないレベルとは思わなかった、篠ノ之が嘘を吐く必要は無いから多分事実なんだろうけど、すげーな。

けどどーすつかなあ、教科書を借りる事で会話のきつかけを作る基本戦術が台無しになったぞ、新しく戦術を練り直さなきゃならねーのか、はあ……。

いや、待てよ？　教師より頭が良いから授業を受ける必要が無い、だから教科書を持って来ない、それはつまり常に教科書を忘れて来てるって事になる訳だ。

それなら逆に俺がコイツに教科書を見せれば良いんじゃないやね？　常に持って来てないなら毎日会話の口実を作れるし、それをウザがつて教科書持って来たらそれこそ当初の予定通り行ける。

なんだ、我ながら完璧じゃねーか、これなら篠ノ之と肩組んで遊びに行くレベルになるまで一気じゃね？

何という名案、思わず俺は篠ノ之の顔を見ながら親指を立てて笑顔を浮かべてしまった。

「やっつきからニヤニヤしてて気持ち悪いんだよ、こっち見んな」

——
が、相変わらずのコレである。

小学一年生 4

手ぶらで登校作戦は空振りに終わった、先生の説教と言う苦行を耐え忍んだにも関わらず奴も手ぶら登校をしてる事は予想外だった。

先生からも『篠ノ之はあんな奴だから、お前も無理してちよつかい出さなくても良いぞ』と言われたが、俺は馬鹿だからそんな忠告なんて無視だ無視、好きで構ってるんだからほっとけ。

とりあえず三限目の体育の時間で次の作戦を考える、今回はサッカーなので動きの少ないキーパーにしてもらったからゆつくりと考える時間があるぞ。

……と、思ってた時期がありました。

いやさ、普段体育をサボってる篠ノ之が何故か珍しく体操服着てたなあと教室に居た時から疑問に思ってたんだよ。

偶には身体動かしたいんだとか考えてたら、漫画みたいな鋭いシュートを俺にぶっ放しやがった、それが目的だったのか……。

おかしいな、サッカーってゴールにシュートするスポーツだったよな？ 決してキーパーをK.Oするスポーツじゃなかったよな？

腹に強烈なボールが直撃した俺は蹲りながら篠ノ之を見る、お前頭だけじゃなく身体能力もやべーのか。

「し、篠ノ之？ サッカーってさ、ゴールにシュートするんだぞ？ 俺を倒すゲームじゃねーからな？」

「そんな事知ってるに決まってるだろ、単にお前が私のシュートを止められなかっただけじゃん、自分の無能を他人の所為にしてんじやねーよ」

転々とするボールを踏みながら俺を見下す篠ノ之、ゴールラインを

越えずにキーパーに当てたから得点になってないし、それはつまり俺をボコボコにできるってわけだ。

容易に想像ができる未来に涙目になりつつも、所詮女のシュートだと自分自身に言い聞かせると、俺は自信満々に立ち上がって篠ノ之を指差した。

「お前のシュートなんざ屁でもねえ!! ぜーんぶ止めてやる!!」

尚、足がガクガクしてるのは秘密だ。

コレはアレだよ、シュートを受けた勢いで膝が崩れた訳じゃなくて、そんな一発をぶっ放した篠ノ之に対して震えてるだけだから、ダメージは無い。

「ふーん、じゃあ試してみようか」

「ドンと来やがれ!! お前のシュート如きで俺をけーおー出来ると思うなよ?」

カッコ付けて啖呵を切ったんだけど、何故か次の瞬間には昼休みだった。

おかしい、何が起きたんだ?

一瞬篠ノ之の足がブレたと思ったたらそこから記憶が無い、何かが顔面にぶっ飛んで来たのは覚えてるんだけど……まさかサッカーボールで意識飛んだのか?

おのれ、許さんぞ篠ノ之!! 俺も今まで以上に本気であんにやろうと友達になっちゃうからな、精々貴様は無駄な抵抗を諦めて俺と友達になるが良い!!

………割と真面目にお願いします。

昼休みだからお弁当の時間だけど、今日は作戦の為に鞆ごとウチに置いて来たから飯の時間を作戦立案に費やせる。

先ず奴は頭も身体能力も俺より上なのに、あの心の壁全開の状態なんだから付け入る隙がなあ……。

保健室のベッドに寝転びながら篠ノ之に対する作戦を考えただけど、やはり仲良くなるうぜアタックしか思い浮かばない、俺は馬鹿だから仕方ないな。

しかし『友達になろうぜ!!』って言っても初日の反応の二の舞だから手段を考えなきゃまた大号泣する羽目に……いや、待てよ？

正面に立って何か言うからボロツカスに言われるんだろ？ だったら正面に立たずに『友達になろうぜ!!』って言えば良いんじゃない？

そう、名付けてお手紙作戦!! 下駄箱の中にでも入れときゃきつと読んでくれるし罵倒もされない、やだもしかして俺って天才？

そうと決まったら即実行、昼休みを利用して女友達から可愛い紙を貰って、男友達と共に文面を考えながら借りたペンを走らせる。

まず必要なのは俺が篠ノ之と友達になりたいと言う事実、それをストリートに伝えるにはどうしたらいいか聞いたら『しのののがすきだーでいいんじゃない?』と言われたのでその一言を中心に次々とアドバイスされた言葉を書き足して行く、ただ途中で他の友人が『それってらぶれ——』と何かを言いかけたのをきっかけに手伝って貰った奴らが全員ソイツをつれてどっか行っちゃったので、効果的か全く分からん。

時間的にも推敲する時間が無いので急ぎ足で玄関まで向かい、篠ノ之の下駄箱の中にハート柄の封筒に入れた手紙を入れてミツシヨコンプリート。

ふはははは!! 暴言を吐かれる事は無いし、仮にゴミ箱に捨てたとしても文面をパワーアップして何度でも書いてやる!! 明日が楽しみだなア篠ノ之!!

翌日、俺の出した手紙は篠ノ之によって赤ペン先生の如

く、誤字脱字の指摘、文法の修正といった添削をされた挙句、コピーされて学校中に張り出される事になるのだが、この時の俺はまだその事に気が付かないのだった。

小学一年生 5

朝登校したら学校の至る所に例の手紙が貼りまくられていた、しかも俺の下駄箱にはびっしりと罵倒が書かれた返信が何十枚も詰め込まれてるし、考えが甘かったんだなちくしょう。

………篠ノ之の奴め、何という所業をしてくれたんだ、これじゃ単純に俺が恥晒しただけになったじゃねーか。

しかも俺への返事には丁重に漢字やカタカナにフリガナまでふってあった、や、やっぱり篠ノ之は優しい奴だなあ。

初手から反撃がエグい、一枚一枚怨念が籠ってる様な凄い筆圧で書かれてるから例の手紙で何かあったんだらうか？

返信の手紙をカバンにしまいながら自分のクラスに向かってたんだけど、俺はその途中で気が付いてしまった。

教室が嫌に静かで、しかも一步近づく事に嫌な汗が流れて心臓がバクバク言ってきた、あれ？俺ニュータイプにでもなったのかな？

自分の通り慣れた教室なのに何故か全く別の部屋に見える、中を確認したくても扉が閉まつてるから何が起きてるのかサッパリだ。

まるでボス部屋の様な雰囲気を出す教室に俺は意を決して入る、というか登校してるんだから入るしかない。

ガラリと扉を開けると、見るからに不機嫌全開の篠ノ之が珍しく席に座っていた。

短い付き合いの俺にも分かる、アレは超怒ってるって。

そんな篠ノ之を見たら何故か足が震えてきたけど、意を決して彼女の前に行き、笑顔で挨拶をする事で爽やかな朝を迎えて貰おうという俺なりの気遣いだ。

「よっ!! おはよー篠ノ之、今日こそ友達になろうぜ?」

「漸く来たんだね便所コオロギ、お前の所為でちーちゃんに変な邪推

されたし、一緒に帰れなかったじゃないか、お前の所為だぞクソ野郎」

わーい、篠ノ之が俺に会いたくて態々早めに教室に来て待つてくれたらしいぞー。

目が超冷たいし、声のトーンが何時も以上に低いけどね!! 超怖くてちびりそうです。

しかし何か返さないと会話のキャッチボールが成立しない、此処は一步踏み出すんだ俺!!

「ほ、ほーん、けどそれって篠ノ之が意地張って俺と友達にならねーからじゃね? ほら、お前が俺と友達になればぜーんぶ解決、俺もはっぴーお前もはっぴー、違わね?」

「なんでそうなるのさ!! というか、お前は どうして そんなにも友達友達って私に言うんだよ!!」

感情的になった篠ノ之が思いつきり机を叩きながら立ち上がる、そのちーちゃんという子と一緒に帰れなかった事が余程シヨックだったらしい、別に嫌がらせをする気じゃなかったんだけどなあ……。

「いい加減にしろよお前!! この間からずっと私にちよつかい出して来やがって、そんなにいい人ぶりたいのかよ、どうせ誰も理解出来ない女に構う俺カッケーとでも思ってたんだろこの偽善者!! 本気で目障りなんだよ!!」

よっぼど頭に来てたのか、篠ノ之は俺の襟を掴んで身体を持ち上げて来た。

同じ学年の男子を軽々と持ち上げてる時点で小学生の腕力じゃない、いくら馬鹿な俺でもここまでされれば篠ノ之が他の人間とは違う事とそしてそれが異常だという事はわかる。

だから誰もコイツに関わろうとしなかったんだろう、俺も確かにこんな真似されたら怖い、怖いんだけど、涙目で俺を睨む篠ノ之を見て

しまったらそんな怖さは消えてしまった。

「……し、篠ノ之、俺はそれでもお前と友達になるって決めたぞ」
「はあ!? ここのままでされてもまだそんな寝惚けた事抜かすなんて馬鹿を通り越して精神障害じゃないの?」

「よーは、そのりかいしやってやつが、ほしーん、だろ? だったら、俺は絶対にお前と友達になってやる」

真つ直ぐに見つめ返しながらそう告げた瞬間、篠ノ之は苛立った様に俺から手を離した。

そして奴は俺を見下しながら深い溜息を吐き、そのまま席へと座る、幸いな事にみんなビビって先生を呼びに行って居なかったからお互いに怒られる事は無いだろう。

「……君は極まった馬鹿だね、流石の私ももう疲れたよ」

「えっ、どういう事よそれ?」

立ち上がって席に座ったら疲れ様にボソツと篠ノ之が呟いた。

どういう意図がその発言には込められているのかは分からないけど、ポロクソに貶される事が無かったから少し進展したんだろうか? 疑問の声に関しても精神攻撃が飛んで来なかったし、多少は仲良くなれたんだろうか?

「仲良くなれたとか勘違いしてそうだから先に言っとくけど、別に君に気を許した訳じゃないからな」

「エスパーかよ……」

俺のその言葉を聞いた篠ノ之はふいっと顔を背け、何時もの様に空を見上げるのだった。

幕間：兎から見た馬鹿

——私の右の席にはとんでもない馬鹿が居る。

ちーちゃんと別のクラスだったから毎日が苦痛で仕方ない中でソイツは特別嫌いな男。

毎日毎日色んな奴に話しかけて、アホな事を言っつて、ヘラヘラとした私と真逆の人間、元々興味が無かったから気にも止めてなかったのに、最近になって矢鱈と話しかけてくるから嫌でも覚えてしまった。何度も何度も罵倒してもめげずに話しかけてくるし、肉体的な嫌がらせをしても無意味、その結果なにを思ったのか例のラブレターだ。

ちーちゃんと帰る時にひらりと落ちたそれは、よりよってちーちゃんに拾われ、見た事も無いような良い笑顔で『ラブレターだぞ束!!』と私に手渡されて困惑した事を覚えてる。

『いやはや、私も実物を目にするのは初めてだ、中身に興味はあるが他人が横から盗み見る物でもあるまい、私は先に道場に行ってるから返事は返すんだぞ』とちーちゃんは変な勘違いをして行つちやつたら、嫌々ながらも読むしか無く、こんな目に遭わせた馬鹿を殺したくなかった。

内容はベタなラブレター、しかも文法の誤りや誤字脱字が多くて無駄にストレスが溜まるだけの物。

差出人の名前なんて見なくても直ぐに分かった、こんな頭の悪いクソみたいな文章を考えられるのはあの馬鹿以外に居ない。

当然報復はしたけれど、元々私は忍耐強い人間じゃないから今回の件で遂にキレてしまった。

……………今まで良く堪えてたのが不思議なくらい頭の中に血が上ってたと思う。

襟を掴んで持ち上げて、コイツが死んでも良いやって気持ちで締め

上げてやったのに、よっぽど馬鹿なのかそれでも友達になるって言うてきたのは本気で呆れたよ。

同時に思った、この手の馬鹿には何をやっても無駄だって。

だから諦めてこの馬鹿の言う『トモダチ』とやらを好きにやらせてやる事に決めた、私からは何もしてやらないし、勝手に好きにすれば良い。

どーせ、コイツも私がオカシイとか狂ってるとか、良く理解しようとしてもしない癖にそんな事を言っただけで離れて行くんだろう、何時もの事だ。

——そう思ってたのに、コイツは一瞬垣間見た筈の私の異常性を忘れた様にヘラヘラと毎日話しかけてくる。

あのアニメが面白かったとか、俺はこの野菜が嫌いだとか、身にならない無駄な話ばかり。

時間の無駄だし、コイツの無駄話へ反応を返す為だけに脳のリソースを使うのが嫌だったから無視し続けても当たり前前の様に話しかけてくる。

「なーなー、篠ノ之ー？ 石の上にも万年……だったよな？」

「一生座ってたらいいんじゃないかな、君の頭だったら三年じゃ足りないからそれくらいは必要だと思おうよ？」

「おー、三年だったのかー、やさしいな篠ノ之」

イヤミを言ってもコレだ、今日は宿題を持って帰るのを忘れたとか何とか言ってた様な気がする。

『二限目が始まるまでに終わらせる』なんて意気込んでるが、二問に一問の間隔で私に答えを聞いてくるから鬱陶しいなんてレベルじゃない。

「なー篠ノ之、仏の顔もサンドバッグ……でいいんだよな？ なんかちよつと違う気がするけど」

「……日本の諺になんで横文字が出て来るんだよ、それこそ君の顔をサンドバッグにするぞ」

八割正解なのになんでそうなる、天才のこの私にもこの男の発想が分からない。

この間も理科の授業で泥棒草の事をタンポポの種が飛ばずに枯れた物だと頑なに信じてたし、非常におめでたい頭をしてるんだろう。

しかも答えに詰まったり、分からない事があると教師じゃなくて横にいる私に遠慮なく聞きに来る、おかげでお昼休みにちーちゃんに会いに行くまでの退屈な時間が無くなった。

……まあ、悪い意味でだけ。

「なーなー篠ノ之、しゅくだい出来たから見てくれよ」

そんな事を考えたら馬鹿が何か言ってきた、何でわざわざ私が宿題の答えを確認しなきゃならないんだろうか？

しかしココで断つてもこの男は絶対に食い下がって来るので、その分絡まれるから大人しく見てやった方が早い。

「はあ……ホラ、見せなよ」

「ほい、どーよ？」

確認した内容は諺の宿題にも関わらず『五十歩（キヤット）に『壁に耳あり（正直メアリー）』と言った訳の分からない回答が書いてあった。

「……………君は数秒前に私が言った言葉すら忘れるほど頭が悪いんだね？ ある意味凄い才能だよ？ 少なくとも東さんには出来ないし」「いやあ、それほどでも無いかなあ？」

この反応、もしかしなくても馬鹿にされてるんだろうか？

イラツとした私はそのまま間違いを訂正してやらず、その宿題を彼に返してやった。

案の定彼は意気揚々とその宿題を提出し、教師に片っ端からツツコミを入れられる。

——ま、今日もちーちゃんとの話のタネになるマヌケな姿が見れたからそれで溜飲下げるとしよう。

小学一年生 6

篠ノ之とコミニュケーションが取れる様になってから大体一ヶ月くらい経った。

最初の内は暴言に心がやられそうになったんだけど、きつと人との距離感が測り辛いだけなんだろうと考えたら、あんまり気にならなくなった。

「はい、じゃあ来週にある運動会の種目決めやるぞー」

この言葉の通り来週には運動会がある、初めてなので俺もみんなも緊張してるが、目指すは勿論学年優勝!!

委員長の俺は先生に種目決めを任せられたので黒板の前に立ち、リレーや短距離走なんかの出場者の名前をチョークで書いて貰う、無理矢理補佐に付けた篠ノ之に。

「なんでこの私が……」

「いや、俺の字が下手だって散々馬鹿にしたのはお前だろ？」

宿題を見て貰ってる毎毎『ミミズがのたくったような字だね』とか、『猿でももう少し上手な字が書けるのにねえ』とか一言多い事を言ってきたからその意趣返しだ。

ふははははっ!! どーだ篠ノ之、他人からの視線が嫌いだろう？

この一番目立つ先頭に立ったお前はまさに針針の室伏室!! ざまーみろ!!

そんな考えを読まれたのか篠ノ之からめっちゃ鋭い目で睨まれた、やっぱニュータイプだろコイツ。

「君、今失礼な事を考えただろ？」

「なんで分かったのよ? やっぱニュータイプなのか!？」

「分かりたくは無いけど表情筋の動きを見れば分かるよ、君のは特にね。だからそんな訳の分からないモノに私をカテゴリーするのはやめてくれない?」

その言葉と共に枯れた枝の様な音を立てて折れるチョコク、うーんやっぱコイツの握力やべーな、この間スチール缶を握り潰してたしあんまりからかうのはよそう。

自分の身の危険を感じた俺は真面目にやる事に決めて各種目の人を振り分けて行く、篠ノ之も人の顔を覚えては居ないらしいけど、俺が一人一人の名前を告げてやると大人しく書いてくれる。

こうして見るとやっぱ篠ノ之は悪い奴じゃないなと思うんだよなあ、周りが必要以上に怯え過ぎつつーか、なんつーか、普通に接すりゃ大丈夫なのになあ。

そんな思いと共に篠ノ之の横顔を覗いていたら俺はある事に気が付いた。

「おー、篠ノ之ってよそーより字が上手だな」

「馬鹿にしてんの？ 君の悪筆に比べたら誰だって上手でしょ？」

「確かに俺は字が下手だけどいーすぎじゃね？、まあいーやそれよりもいつこいーか？」

「何さ？」

「……………なんで俺の名前が全種目に入ってるの？ おかしくね？」

しかも全部一番初めに書かれてる、あまりにも淡々と書いてたもんだから全く気が付かなかった。

「君なら出来ると思うんだよねー、何せこのクラスのリーダーなんだろう？ リーダーならこれぐらいは朝飯前なんじゃない？」

「ま、まー確かに？ いいんちよーだし？ クラスのリーダーっちゃリーダーだけど？ それほどでもあるのかな？」

「そうそう、だから全種目に出場するのは普通だし、リーダーにしか出来ない事だから一番目立つのは間違いないね」

いやーでもそうかあ!! 俺はこのクラスのリーダーなんだもんな

!! 全種目出るのもリーダーの務めだもんねー!!

なんか横で篠ノ之が『……単純な奴』とかなんとか言ってた様な気がするけど気の所為だよな? まっ、細かい事を気にしてちゃダメだしどーでも良いか。

『よーしお前ら全員俺に付いてこーい!!』とか言って結局そのまま決定しちやっただけど、何となくなにかがおかしい気がしたので放課後に帰る前に篠ノ之に聞いてみた、俺より頭いいし多分何がおかしいのか分かるだろう。

「なあ篠ノ之、なんかごまかされた様な気がするんだけど、実際どーなの?」

「さあ? そう思うならそうかもしれないし、もしかしたら違うかもよ? まあ好きな様に解釈すると良いさ」

「……………つまり俺ならイケるって訳なんだな!」

取り敢えずよく分からなかったからそう言う事にしよう、つまりさっきのアレは篠ノ之なりのエールって訳か。

よーしなら頑張るぞー、すっげえ小馬鹿にされた目されてるけど、まあ何時もの事だから気にしたら負けだ。

そもそもエールを送ってくれたと言う事は少なくとも友情を感じてくれてる筈、ならその友情に答えるしか無い。

ふっふっふ、はーっはっはっは!! 見てろよ篠ノ之!! 俺の活躍をその目にしかと刻み込んでやるからな!!

小学一年生 7

みんな大好き運動会、全種目に出場する事になった俺は張り切って準備体操をしてただけど、活躍を見せ付けたい相手である篠ノ之は『ちーちゃん!!』とか言っただけで別のクラスの女の方へ行ってしまった。「コレがねとられて奴か……」

とか何とか呟いてたら履いてた靴をぶん投げられた、投げ返した時全然届かなかったから、結構距離離れてる筈なんだけどもなあ……。

地獄耳なのかマジモンのニュータイプなのか、個人的にはニュータイプであってほしい、男のロマンだし？

今度から大佐とでも呼んでやろうかな？ いや頭いいし参謀とでも呼ぼう、うん。

良く考えたらあだ名で呼び合うは友達と言う法則が成り立つし、仲良くなるなら俺側からあだ名を付けるのもありじゃね？

そう考えると参謀ってあだ名は中々アリだと思う、カツコいいし頭いい感じも出てるからきつと篠ノ之も気に入ってくれるだろう。

しかも、奴は俺にあだ名も付けてくれた、内容は泣きたくなるような悲惨な奴だったけどとりあえず名前を付けてくれた事実には変わらない。

なんだ俺達ってとつくに友達だったのか、それは盲点だった。

早速篠ノ之に確かめに行ってみよう、ただちーちゃんと言う子と一緒に居る時にちよっかいかけると悲惨な事になるからもう少し待たねば。

……この間、そのちーちゃんと昼飯食ってた篠ノ之に構いに行ったらボコボコにされてゴミ箱に捨てられたしな。

目が覚めたら頭からゴミ箱に突っ込まれてるわ、カラスが鳴いてるわ、篠ノ之に会いに行つた時の前後の記憶が消えてるわで何事かと思つたよ、あの時ばかりはおもつきり反省したわ。

けど行進の時にはクラスの方へ帰ってくる筈だし、その時にでもあ

だ名で呼んでやろう。

「つー訳で篠ノ之、今日からお前のあだ名さんぼーな？ カツケーだろ!!」

「……ごめん、束さんでも理解が追いつかないんだけど、なんでそうなったのさ?」

あれ? 参謀ってあだ名が気に入らなかったのか? いや違うな、あだ名に関してはノーリアクションだから理由が知りたいんだなきつと。

「なんでって、お前頭良いだろ? んで俺に色々教えてくれるだろ?

だからさんぼー」

「違うそうじゃない、私が聞きたいのはそう言う意味じゃない、なんであだ名を付けるって話になったのかが聞きたいって言ってるんだよ!!」

「えっ? お前ニュータイプだろ? なら俺の頭の中で考えてる事くらい分かるじゃん?」

「だ・か・ら!! そんな意味不明なカテゴリーに私を入れるなつての!!」

むー、ニュータイプってカッコいいと思うんだけどなあ、でも不評みたいだし取り敢えずは本題に戻ろう。

「いや、お前と今よりもっと仲良くしたいじゃん? そんであだ名呼びは仲良しの証、友達との証拠!! っつてなったんだ。 ちよつと前まであだ名で呼んでくれてたし」

「アレで友情を感じるのかあ……どーしよ、勝てる気がしない」

なんかよく分からない内に篠ノ之の肩が落ちた、凄く大きい溜息も吐いてるので俺の発言に疲れたのかな? 普段から君の相手は疲れると言われてるし、多分そうなんだろう。

頭痛でもして来たのか頭を抑えた篠ノ之は、心配そうに覗く俺に向けて『過程を省いて結論だけを話す癖を直してくれない? 私が言うのもなんだけど、会話が成り立たないんだよ』と言って来た。

「おーなるほど、次からは気をつけ……ん？」

「何だよ、何か変な事言った？」

「いや、そのいーかただともっと俺とお話ししたいって聞こえるんだけど？」

その瞬間篠ノ之は顔を青くし、しまったという表情を浮かべて一歩後ずさる。

……一瞬多少仲良くなったと思ったのに、この反応は全然そんな事無かったね、流石の俺もグサつと来た。

なんだろうね、篠ノ之つてクラスで一番可愛いからさ、そんな子に青い顔して引かれたら誰だって傷付くだろ？

これじゃ最近流行り出した『天災の天敵』つてあだ名を否定出来ない、なんてこった。

何とか話し合いに持ち込みたくても競技の時間になったので泣く泣く篠ノ之から別れ、第一種目の20m走に出場する。

結果は初っ端の競技だから当然一位だったんだけど、よく考えたら俺は全競技に出場する事が決まってるから連続して走ったり何なりしている内に、『体力的に無理じゃね？』と悟ってしまった。

しかし、隣のクラスの委員長が俺とおんなじ事をやって全く息が乱れてないから俺がへこたれる訳には行かない!!

特に相手は女の子、『おりむら』つてネームタグが付いてるし、さつきから篠ノ之が全力で応援してるからこの子が所謂ちーちゃんなんだろう。

つまり、コイツに勝てば篠ノ之を寝取り返せるって訳だな!?

——そう考えた瞬間、俺の頭にスポーツドリンクのパウチパックがぶつけられるのであった。

さて、例のちーちゃんから篠ノ之を寝取り返す為に頑張ると決めたんだけど、「おりむら」の身体能力も半端じゃなかった。

短距離とか女の子なのに男の俺より圧倒的に速かったし、走り切っても息切れどころか汗一つかいてなかった。

ま、まああの篠ノ之が唯一友達だつて公言してる人物だし？ そー言う事もある、よな？ 世の中ってひでーや……。

いや待てよ？ 逆に考えるとだ、おりむらに勝てれば篠ノ之の興味を引く事も出来るんじゃないやね？ そーなったら俺もアイツも友達が増えて万々歳じゃん!!

よーし次は上級生の競技を挟んだ後のリレーだし、体力も回復出来るから体調も万全!! しかも奴も俺もアンカー!! くっくくく、覚悟しろよおりむら!!

「何かアホな事を考えてない？ ちーちゃんに迷惑かけたらまたゴミ箱に突っ込むぞ」

「アホな事つてなんだよ、俺はただあの「おりむら」に勝つぞ!! っって気合い入れただけだからな？」

「ふーん」

……めっちゃ興味が無いってのが声のトーンで丸分かりなんだけど、アレかな？ 絶対のちーちゃんへの信頼つて奴なのかな？ 単純に俺に興味が無いって可能性もあるけど、きっと前者だな!!

「と言う訳で、俺があのおりむらつて女に勝ったら友達になつて貰うぞ!!」

「……だから、結論だけ話すなって言っただろ、もう少し過程を話させて」

「うーん、いや今回はそのまんまだろ？ さんぼーはふつーの奴にきょーみが無い、だからきょーみ持つてるおりむらに勝つ、そしたら

お前も俺にきよーみが湧くし、俺もお前と仲良くなれてりよーほーはっぴー」

笑顔で親指を立てながらそう言ったら、珍しく篠ノ之も俺にすっごく可愛い笑顔を返してくれた。

………：親指を立てて首を切るジエスチャーをしながら。

あれ？ おかしいな？ 目から汗が流れて来たよ？ 今は他の学年の競技中だし、日陰に居るから暑く無いのになんでだろなあ……俺馬鹿だから分かんないや。

そんな俺を見た篠ノ之はある程度満足したのか、俺を鼻で笑って去っていった、多分「おりむら」の所に行ったんだろう。

ぐぬぬぬ、俺がこんなにアピールしてもつれない反応なのに、おりむらの奴め!! 幼馴染なのか家が近いのか知らねーけどずっこいぞ!!

これはますます負けられない、篠ノ之を俺に振り向かせる為にもおりむらに勝ってやる!!

そんな闘志を滾らせていると上級生の競技が終わり、俺達のクラス対抗リレーが始まった。

お互いアンカーなので他のクラスメイト達の足でハンデの有る無しが決まるんだけど、おりむらのクラスと俺のクラスが良い感じに接戦になったのでこれでお互いの強さでの勝負になる。

「くつくつく、おりむら!! ココアで会ったが百万年!! 俺はお前に勝って汚名挽回、名誉返上し、篠ノ之と仲良くなってやるからな!!」

「……それを言うなら『ここであったが百年目』と『汚名返上』『名誉挽回』だ」

「えっ? マジで?」

「束の話の通り、愉快的奴だなお前は」

レーンに並んだ時に軽く話しかけて見たけど、あっさりと流されて

しまった。

「成る程、おりむらはクールビズなんだな」

「クールビューティと言いたかったのか？ まあいい、私は織斑千冬だ」

さりげなく織斑が自己紹介してくれたので、俺も自己紹介をしながら近付いて来たバトンを受け取る為に身構えた。

織斑のクラスのランナーは途中で転けたので俺のクラスの奴に離されている、なのでこれ幸いと助走を付けながら素早く受け取って全力で走る。

身体もあつたまつたので俺の足は軽快に動き、織斑がバトンを受け取った頃には半周ほど引き離す事に成功し、少々後ろめたかったが勝ちを確信していた。

けど、織斑はバトンを受け取った瞬間に猛スピードで走り出し、半周遅れだったにも関わらず俺が最後の直線に入る前に抜かれてしまう。

は、速すぎね？ 前のランナーが転けたからこの勝負は無効じゃね？ とか考えてたのがブツとんだ、さ、流石あの篠ノ之の友達。

あく待って、速いって、もー少し手を抜いても良いんじゃないかなあ？ 俺も頑張って追い付くからさ？

……こんな虚しい事を考えてたらゴールテープを悠々と織斑に切らせてしまった、ちくしょう。

「ふっ、残念だったな？」

「ま、まだまだ、まだ終わらんよ!! 玉入れとか綱引きとかいっぱいあるし？ どっか一つでもお前に勝てば——」

「ちーちゃん!!」

話してる途中だったんだけど、後ろから織斑大好き篠ノ之に突き飛

ばされた挙句、背中を踏まれて上に乗られてしまった。

「いやあ流石だねちーちゃん!! 前の奴が転けた時はどーしてやろうかと思っただけど、ちーちゃんの前ではハンデにもならなかったね!!」

「おい束、踏んでるが良いのか?」

「ん? この下に居る奴は何やってても脳内で友情に変換される新手のマゾヒスト野郎だから大丈夫だよ?」

「お、重いから降りて——」

「あん? 誰が重いつて?」

俺の発言が聞こえてたのか、篠ノ之は下敷きになっている俺の頭を踏み付けやがった。

はあ、中々友情を築くには程遠いなあ……。

あつはつは織斑ヤベーな、あの後全競技で最後まで張り合っただけど全敗、しかも本人は俺と同じ全競技出場と言う無茶苦茶やってるのに汗一つかいてねえ、流石クールビューティ。

え？ 俺？ シヤツが汗でぐっしょくしょくよになつて足ガツクガクになつて大の字で倒れてるよ？ 一年生の競技は昼までには終わつたし、後は上級生の競技を観戦するだけだから倒れてても問題無いし。

後で水道の水でも頭から被らなきゃなー、とか考えてたら視覚外から急に水を掛けられる。

立ち上がるだけの体力が無いので頭を動かして犯人を捜すと、意外にも篠ノ之が2Lサイズのペットボトルを俺の頭に掛けてくれた。

「あり？ 織斑んところに行つたんじゃねーの？」

「ちーちゃんも居るに決まつてるだろ、単純に汗だくの君が見苦しいんだよ」

その言葉の通りよく見れば水道の方に蛇口から直接水を飲んでる織斑が居た。

なんと言うか織斑はカツコイイな、理想の男性像的な何かがある。

「……何か今失礼な事を考えなかつたか？」

「織斑もニュータイプなのか……」

勘が鋭過ぎねえ？ もしかして俺ってそんなに顔に出るタイプなのか？ 篠ノ之からも表情筋の動きで大体何を考えてるのか察せるとか言われたし。

うーん、いや前向きに考えたら俺は何も言わなくても会話が成立す

る特殊な能力を持つてるんだろう、試しに篠ノ之を見上げながら真っ直ぐに目を見つめてみる。

「……いきなりなんだよ、人の顔をまじまじ見やがって」

睨み返されたけど負けじと俺も無言のまま目を合わせ続ける、すると段々と篠ノ之が困惑し始めたので俺の仮説は間違ってた事が証明された、つまり奴らはニュータイプって訳だな。

「おい、いい加減私の目を見つめるの止めろよ」

「さんぼーにも分からない事があるんだな」

「……君の思考回路を理解出来る人間は私を理解できる人より少ないと思うよ、絶対」

肩を落として溜息を吐いた篠ノ之は、そのまましゃがんで俺に視線を合わせると『で？ 何してたんだよ？』と聞いて来た。

「織斑にもさんぼーにも考え読まれるからもしかして俺って会話しなくても考えてる事伝わるんじゃないかね？ って思ってたよ」

「この上なくアホな事を……そもそも何考えてたんだよ？」

「何考えてって……特に何も？」

「馬鹿だろ!! 馬鹿すぎるだろ!! 実験に必須な物が無いじゃん!」

なんでそれで私が君の考えてる事が分かるって思ってたの!?! 何にも考えて無かったら何にも分からないでしょ!?!」

「なんだ束、中々仲良くやってるじゃないか」

呆れた声で俺を蔑んだ目で見える篠ノ之だったが、水道で喉を潤すついでに頭にも水を被ったのか、タオルで髪を拭いていた織斑に茶化されてしまう。

「なっ!?! ち、ちーちゃん!?! いくらちーちゃんでもその一言は見過ごせないよ!?!」

「そうか? 少なくとも他の連中と話してる時よりは会話が成立してるんじゃないか」

「ちーちゃんはこの馬鹿のしつこさを身を以て経験してないからそん

な事言えるんだよ!? 毎日毎日実のない話ばかりして来てき、時間の無駄って言葉が身に染みて実感出来るレベルでコイツの相手は疲れるんだよ!?!」

茶化された事に対して篠ノ之が珍しく必死になりながら弁解している、その姿が少しウケたのか織斑が少し笑いを堪えてる、多分篠ノ之をちよつとからかったただけだったんだらうけど返って来た反応が必死過ぎて、謝るに謝れないっぽい。

「お、おちつけ東、ほら、彼はラブレターを送ってくれたんだろ? だったら邪険にするのもだな」

「ちーちゃん!?! 普段からかわれるのが嫌いだって言ってる癖に今日は東さんの事からかいまくってるよね!?! もしかして普段の意趣返しなのかな? ごめんちーちゃん、謝るからもうやめて!?!」

いやー、あれだね、俺の知らない篠ノ之が知れて良かった、うん。

俺と仲良しって言われただけで本気で涙目になられてるけどこれからだよこれから、だから俺の両目よ汗を流すのをやめたまえ。

前向きに考えたらさ、俺と篠ノ之の関係は他人から見たら仲良しに見える訳だし問題無い筈。

体育祭と言う学校行事で篠ノ之との距離を縮める気だったんだけど、まあ織斑とも知り合いになれたし、俺が思ってるよりは仲良しになれてるみたいで安心したよ。

「おい、ドサクサに紛れて私と仲良くなれたとか考えていないかい? 言っとくけど私は君のしつこさに折れただけでぜんっぜん君に興味無いからな?」

……………やっぱコイツニュータイプだわ、絶対そうだろう。

小学一年生 10

運動会が終わってから数日した頃、俺は初めて篠ノ之達と一緒に下校していた。

普段は他の友達と帰宅してるんだけど、今日は偶々帰り際の織斑と出会い『一緒に帰るか?』と言うお誘いを受けてホイホイとその誘いに乗った訳よ。

始めは篠ノ之が猛反対してたんだけど、織斑の『私も偶にはこの愉快な男を直接見たいんだ』と言う一言で諦めた、なんか釈然としない理由な気がするが、織斑は漢らしいから特に深い意味は無いんだろう。

「今何か考えたか?」

「ん? 織斑は漢らしいなーって」

「ちーちゃんは君とは比べる事すら烏澁がましいくらいカッコいいからね、当然だよ!!」

「……私は、女なんだがなあ」

褒めたのに難しい顔をする織斑、いやだって雰囲気もそうだし行動の節々からも格好良さが滲み出てるんだぜ? 漢らしいって言う以外無いと思われただけど……。

「まーいや、ところでお前ら帰り道って寄り道してるのか?」

「普段は東の家の道場に寄って剣の鍛錬をしてから家に帰るんだが、今日は稽古が休みでな」

「ちーちゃん、そんな奴と話していると馬鹿が移っちゃうよ? だから東さんとお話ししよーよー」

後ろを歩く織斑に話しかけてたら途中で篠ノ之に遮られてしまった、相変わらず一言多いけど新しい知識を得られたからまあいいや。「そっかー馬鹿ってうつんのかー、そーなったら病院で治すのかさん

ぼー?」

篠ノ之が言うんだから間違いないだろう、何時もコイツは何だかんだ言いながらも俺の知らない事沢山教えてくれるし間違い無い。

「……ね? この馬鹿は想像を絶するレベルの馬鹿でしょ?」

「で? 実際どうなんだ束? 馬鹿を治すには病院に行くのが良いのか?」

「ちーちゃん!? この馬鹿のボケに乗らないで!? 束さんの精神力が音を立って削れてるから!!」

「なーなーさんぼー、どーやって馬鹿って治すんだー?」

「君は少し黙っててくれるかな!?!」

珍しく声を荒げた篠ノ之はそのまま愉快そうに笑う織斑に縋り付く。結局馬鹿を治す方法は教えてくれなかったので多分篠ノ之も知らないんだろう。

天才にも分からない事があるんだなー、なんて考えてたらゲームセンターが目に入って来た。

二人とも一応用事が無ければ真っ直ぐ家に帰る派らしいし、今日は俺が二人のゲーム代を奢ってやろう。

「つー訳でゲーセン行こうぜ!!」

「だから、結論だけ話すなって言ってるだろ……」

ぐったりとした篠ノ之が何時もの様に俺へツツコミを入れて来るが、もう此処までくると何時ものやり取りになりつつあるので実はワザとやってたりする。

取り敢えずニュータイプ二人に勘付かれない内に背中を押してゲーセンに入店、女の子を連れて来る様な場所じゃないかもしれないけど、それこそ偶にはね?」

篠ノ之は興味無さそうだったけど、どうやら織斑は初めて来たらし

く周囲を見回して興味深そうにしてくれている。

ま、クールビューティな織斑には縁の無い場所だろうから仕方ないと思うけど、俺はもう一つの思惑があって此処に二人を連れて来た。

「まーまー織斑さんや、見てるだけっても暇だろ？　俺とゲームでもしようぜ？　お金は出すからさ」

「いや、そのだな、私はあまりこの手の物はやった事が無くてだな……」

「何事もけーけんだって、さあレッツトライアングル!!」

「それを言うならレッツトライじゃないのか？」

そう言いながらも俺から百円を受け取った織斑は俺の座ってるアーケードゲームの反対に座ってお金を入れる。

くつくつく、掛かったな織斑？　お前が今座ったのは某漫画の格闘ゲーム!!　世紀末バスケとも言われているワンキルゲー!!　初心者には狩られるだけの運命が待ち受けているのだ!!

悪いな織斑、だが世の中はそんな物だから安心して俺に狩られるが良い!!

2ラウンド先取のルールでの対戦なので最初の一戦目は操作を覚えさせる為にワザと負けてやり、二戦目から本気を出して織斑を圧倒する。

いくら身体能力が高くてゲームの腕前までには反映されまい、勝ったな!!

とか思ってたら三戦目に入った瞬間、人が変わった様な超反応を見せられて開幕から十割持つて行かれた。

明らかに初心者動きじゃ無いので安心してたら俺の画面を後ろから織斑が覗いてた、多分途中からボタンタッチしたんだろう。

そして追加の百円玉が入られる音がする、多分俺が織斑をハメようとした事がバレたのかな？　『早く金入れろ』ってドスの効いた声

で言われたし。

——その後、俺は篠ノ之の気が済むまで初心者狩り狩りをされた挙句、その動きを見て覚えた織斑にもボコボコにされる事になった。

精神的にフルボッコにはされたけど、最後は強引に三人でプリクラ撮ったので結果オーライとしよう。

初心者狩り、ダメ絶対。

幕間：兎から見た馬鹿 2

「おー雨止んでんなー、今日一日降ってるって話だったのになー」

あの日この馬鹿と一緒に帰ってからというものの、時折私とちーちゃん
の帰り道にコイツが加わる事になった。

普段から良く私に話しかけては来るが、コイツ自身は本当に友人が
多いらしく、昼休みや放課後などは良くクラスの誰かしらと話してた
りする姿を良く目にする。

多分コイツの友人の多くは私の様に強引な押しでなし崩しの友
達にされたんだろう、そう考えると妙な親近感を感じてしまう。

と言っても所詮はその他大勢、感じた親近感も同情から来る念の意
味が強い。

「なんつーかさー、雨上がりの帰り道だとなんとなく漫画とかゲーム
の技を真似したくなるよなー」

「ゲームの技？ 以前にやった格闘ゲームみたいな奴か？」

「織斑はあんましゲームやった事ねーんだっけ？ じゃ見てろよ？」

そう言つて、この馬鹿は『虎牙破斬!!』とか『魔神剣!!』とか叫び
ながら傘を剣に見立てて振り回し始めた。

私もちーちゃんもゲームはやらないから馬鹿のやつてる技とやら
が元々どんな技か分からない、だからちーちゃんもコメントに困った
顔をして馬鹿を見ている。

……………私は完全に冷めた目で見ていたが。

とにかくそんな私達の視線に気が付いたのか、恥ずかしそうに馬鹿
が傘を振り回す事を辞めた。

「コレがジエノサイドギャラクシーって奴か…………」

「……………すまん束、通訳を頼む」

「多分、ジエネレーションギャップって言いたかったんじゃないかな？」

何をどうしたらジエネレーションギャップが
ジエノサイドギャラクシーになるんだろう？ 中途半端に覚えた知識をあやふやなままで使うからそれこそ変な必殺技みたいな名前になってるじゃないか。

私が呆れた溜息を吐くと、馬鹿は『そうだっけ？ やっぱさんぼーは頭いいなー』と言う頭の悪さ丸出しの褒め言葉を投げかけて来た、馬鹿にしてるんだろうか？

冷めた目で更に睨んでやったが、馬鹿はそんな私の視線を気にも止めずに長靴で水溜りの中を歩いている。

そしてある程度歩いたところで、馬鹿はふと思い出した様にランドセルの中から一冊の漫画を取り出し、それをちーちゃんに見せた。

「つー訳でさ、織斑もコレやってみろって」

「このアバン、ストラツシユ？と言うのをか？」

「そーそー、必殺技だけどやれそうな奴だし、確か剣術習ってるんだろ？ ならいい感じにイケるんじゃないかね？」

「おい馬鹿止めろ!! 私のちーちゃんに変な事吹き込むなよ!!」

この馬鹿は何を言い出したかと思つたら……そもそもちーちゃんがそんな事する訳無いだろ。

「ねっちーちゃん、そんなアホな真似ちーちゃんはやらないよ——」

「アバンストラツシユ!!」

「ちーちゃあああん!!? ちーちゃんに馬鹿が移つたーツ!!?」

同意を得ようと振り返つたら、ちーちゃんが傘を剣に見たてて漫画の通りの構えをしながら傘を振っている姿が私の目に映る。

しかも流石ちーちゃん、傘を振つた瞬間の軌道が凄く真つ直ぐで、

寸分のブレも無かったから本当に漫画の必殺技が撃てそうな良い感じだった。

……アイツとおんなじ感想を持ったって事は、もしかしたら馬鹿が移ったのは私の方なんだろうか？

「さあさんぼー、お前もコレやってみるよ」

「は!? なんで私がそんな事しなきゃならないのさ!？」

「束、踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損、と言う言葉もあるだろう?」

「ちーちゃん待つて!? 何時ものクールなちーちゃんは何処に行ったの!？」

私の叫びに口元を隠しながら笑うちーちゃん、普段ペースを握ってる私がこの馬鹿に振り回されてるのが楽しいんだろう、私は全然楽しくない。

しかもこの流れだとやらない方が謎の疎外感まで感じる始末、仕方なしに私はムカつくくらい明るい笑顔を浮かべる馬鹿の手から漫画を取った。

そして其処に書かれて居たキャラクターと同じ構えをし、同じような動きで傘を突き出した、なんで私がこんな目に……。

「が、牙突!!」

「そつから式式!!」

「えっ? が、牙突・式式!!」

「はい次参式!!」

「さん、牙突・参式!!」

「最後零式!!」

「牙突・ぜ——つて、何時までやらせるんだよ!!」

いや、言われたままに傘を振り回してた私も悪いけど、コイツ調子に乗りすぎだろ!? ちーちゃんもちーちゃん中途からお腹押さえ

ながら大爆笑してるし、笑ってないで途中で止めてよ!?

「さんぼー、良い感じの牙突だったぜ!!」

「そつ、そうだな……東、良い感じの牙突だったぞ?」

「あーもー!!」

——結局、こんなやり取りが家に帰るまで続き、私はぐったりしながら自分の部屋に入ってベッドの上に倒れ込んで疲れを癒すように身体を伸ばす。

そしてふと何気無しに視線を向けた勉強机の上に例のプリクラがある事を思い出し、思わず手に取ってみる。

ちーちゃんはあんまりこういった経験が無いからか、若干緊張が浮かんだ顔。

私はそもそも興味が無かった事と、馬鹿の押しに負けて撮影しただけだからそつぽを向いている。

肝心の馬鹿は、何が楽しいのか満面の笑みを浮かべてピースサイン、しかも私達の間に来てセンターをしっかり陣取って。

ちーちゃんと二人だけなら良かったのにと、私は油性マジックに手を伸ばして中央の馬鹿だけ塗り潰そうとしたが、何となくそんな気も失せてしまう。

「……………ばーか」

聞こえるはずも無いのに、思わず屈託の無い笑顔を浮かべた馬鹿に向かって、私はそう呟いてしまうのだった。

小学一年生 11

食欲の秋、芸術の秋、スポーツの秋、運動会も済んで次は文化祭と秋は学校行事が目白押しで暇をする事がない季節だと思う。

そんな話を篠ノ之にしたら鼻で笑われた、そもそも他人に興味の無いコイツから見ればどの行事もうざったいだけらしく、LHRの時間に何時もの様に空を見上げてしまった。

まあ俺たち一年生は展示物の掲示なのでやる事も無いので今回ばっかりは篠ノ之と同意見なんだけど、なんだかなあ……。

前々から思ってたけどコイツは頻繁に空を見上げてる。

普段自分を天才だと言ってるし、本人曰く『何でも分かる出来るって事はある意味じゃ不自由なんだよ』との事、俺は馬鹿だからよく分からなかったけど、コイツからしたら切実な問題なんだろう。

今も『将来の夢』と言うタイトルの作文を書かずに居る、行儀が悪いけど横を覗くとタイトルと書き出しの『私の夢は』とだけ書き込まれたまっさらな作文の紙のままだ。

ちよつとだけそれをからかってやろうかと言うイタズラ心がくすぐられたけど、退屈さの中に寂しさみたいなのが混ざってる気がしてそんな気が失せた。

———なので、別の方向からちよつかいを掛ける。

「なんだよさんぼー、お前まだ作文出来てねーのかよ」

「うっさいな、私に将来の夢なんてある訳無いだろ」

少し苛立った様な声、久々に不機嫌丸出しの篠ノ之なんだろうけど、鬱陶しいくらいに構ってやるから覚悟しろよ？

「何言ってるんだよ篠ノ之、お前のしょーらいの夢はせかいせーふくに決まってるんだろ？」

「そんな物今すぐ出来るし、した後の統治とか面倒くさい」

……さ、流石篠ノ之、冗談めかして言ったのにあっさり返して来やがった、スケールが違いすぎる。

ツツコミが返って来る事を予想してたのに返って来たのはガチ回答、俺も予想外過ぎて言葉に詰まった。

けどほら、俺は篠ノ之の友達だしなんとかしてやりたい。

「ならさ、宇宙の果てを目指してみたらどうだよ？ 男のロマンだし？」

「……なんで私がそんな事しなきゃならないんだよ、というか男のロマンとか言われても分からないから」

「いやさ、前にテレビでうちゅうは今も広がってるとか言ってたからさ、その先端に何かあるかとか気になるじゃん？ もしかしたらマジでうちゅうじんとか居るかもしれないねーしよ」

なんだっけ？ 名前忘れたけどすげー爆発が起きてから宇宙が出来たって話で、今もその力で宇宙が広がりまくってるって聞いた気がする。

宇宙が広がってるって事は地球みたいな星がゴロゴロしてるかもだし、今わかってる惑星にだってもしかしたら住んでる生物がいるかもしれない、こーいう考えこそがやっぱロマンだよなー。

「それにさんぼーは神様って訳じゃねーじゃん、色々知ってるつつつても世の中の事ゼーんぶは知らねーだろ？」

「なにその暴論……」

「でも実際そーだろ？ さんぼーは人間だし、自分の知らねー事って絶対あると思うんだよなー」

「……馬鹿じゃないの」

珍しく篠ノ之の罵倒にキレが無い、それどころか空を見上げる事をやめて俯いてしまった。

触れられたく無い話題だったのかな？ でも言ってしまった以上最後まで言い切ってしまう。

「きよーりゆーの化石とかもそーだけどき、実際にそれが生きてた姿を見て確かめられる奴つていねーだろ？　もしかしたらティラノサウルスがそーしよくだったかも知れないしさ」

「……普段結論ばっか話してる癖に、今日は回りくどいじゃないか」
「えっ？　じゃあ結論だけ、難しく考えるな簡単に行こうぜ簡単に!!」
「……ぷっ、あははっ」

超笑顔で親指立てながらそんな事言ったんだけど何故か笑われてしまった。

今の俺の熱い語りの何処に笑う要素があったんだろう？　まーいいや、篠ノ之がちよつと元気出たみたいだし、結果オーライって奴だな。

「もう……君はなんでそう単純に物事を考えられるのかな？」
「むしろ俺の方が聞きたいんだけどなー、何をそんなに難しく考えれるのかってさ」

「天才だからだよ、君みたいに脳みそすつからかんのお馬鹿さんには分からないだろうけど」

おー、ちよつとだけ調子出てきたな、悪口に何時ものノリがプラスされてら。

うん、やっぱ篠ノ之はこれぐらいの方が良いな、凹んでるのはコイツらしく無いし、見ててこっちが悲しくなるし。

「なんにせよ元気になって良かった良かった」

「ふん、別にちよつとナーバスになってただけだから元々君に心配される筋合いなんて無いんだよ」

「へーへー、さんぼー様の笑顔が見れて俺は幸せですよー」

「ふん!!　……ありがと」

「ん？　なんか今言った？」

「別に？　ただちよつとだけ宇宙に興味が出たって言ったただけだよ」

そう言っつて、篠ノ之はそっぽを向くのだった。

小学一年生 12

「そーいやよー、お前ってしのののが好きなのかー?」

ある日の放課後、一緒に遊んでた男友達の一人が何気無くそんな事を聞いて来た。

「んー? そりゃ好きに決まってるだろー? 友達だし」

「いや、そうゆー意味の好きじゃなくてさー」

好きに違うも違わないも無いんじゃないか? だって例え好きって感情に色々種類があつたとしても、結局は好きって感情に落ち着くわけだし。

「ほら、てれびでもおとことおんなのゆーじょーって存在しないってゆーじゃん? だからお前がしののの好きなんじゃねーのかなーって、前にらぶれたー書いてたし」

「なん……だと?」

男と女じゃ友情が成立しない、だって?

そんな馬鹿な!! 俺は親しみを込めて篠ノ之を『参謀』ってあだ名付けて呼んでるだろ? ……勝手にだけけど。

この間だつて一緒に帰っただろ? ……織斑に誘われたから渋々って感じだったけど。

毎日顔合わせたら挨拶するだろ? ……返事貰った事ねーけど。

あれ? 俺ってもしかしてそんなに篠ノ之と仲良くなかったのか?

「——てなわけでさんぼー様や、今日はほーかごお前ん家に遊びに行つて良いか?」

こう言う時、分からない事は頭の良い奴に聞くのが一番なので早速次の日の朝に登校してきた篠ノ之へ聞いてみた。

「だから、結論だけで話す癖を止めろってば……」

溜息混じりの篠ノ之は何時もの台詞を言いながら椅子に座り、俺の方を見ながら発言の説明を待ってくれているらしいので取り敢えず俺も椅子に座る。

……あれ？ そーいや今まで目を見て話聞いてくれた事あったっけ？

ふとそんな事を考えそうになったけど、話が脱線しそうなのでそのまま昨日の放課後のやり取りを説明したんだけど、割と話の序盤から篠ノ之からの視線が呆れを含んだ物になっていた、何故だ？

「はあ、君はそんな話して恥ずかしく無いのかな……」

「ん？ 俺は別にはずかしー事言ってるつもりないんだけどなあ、さんぼーだって織斑に良く好きって言ってるだろ？」

「いや、うん、私も言ってるけどさ……」

なんだろ？ 珍しく篠ノ之の歯切れが悪いな、何時もならスラスラと説明してくれるのに。

そんな事を考えたけど篠ノ之にだって分からない事があるだろうし、多分コイツも分からないだろうと納得した俺は、そのまま本題に入った。

「そーいや結局お前ん家に行っただけの？ ダメなの？」

「まだ君の質問の途中だろ!? どーやって噛み砕いて教えようかコッチは考えてる途中なのに聞いて来た本人が質問投げっぱなしにするなよ!？」

「えっ？ でもほら、さんぼーの歯切れが悪かったし分からないのかなーって思っただけ」

俺がそう言うと、篠ノ之は頭を抑えながら溜息を吐きながら諦めた様な声で『もうそれで良いよ……』と言っただけだったり机の上で突っ

伏した。

「おーけー、じゃあほーかごお前ん家直行な？」

「はあ!? なんてそんな話になってんのさ!？」

「だって今それで良いって言ったじゃん、遊びに行つて良いって事でしょ?。」

「いや、それは……分かった、分かったから!! まったくもう、君の相手は本当に疲れるよ」

「うそ、マジで行つて良いの!？」

根負けしたと言つた雰囲気篠ノ之は遊びに行く事を許してくれただけで、正直言つて断られると思つてたからはつきり言つてノープランなんだけど、どーしょ?

一回家に帰つてから遊び道具持つてくるか? いやいや、折角篠ノ之と遊べるんだから時間の無駄遣いはしたくない、となると今持つてるので遊ぶしか無い。

けど断られる前提だったから篠ノ之が楽しめそうなゲームは今持つて来てない、強いて言うならトランプくらいか? 携帯ゲーム機に関してはダンジョン攻略RPGだから一人でやるタイプの奴だし、うーん。

ま、良いや、人生ガンガン行こうぜ!!がモットーだし、なるようになるさ。

それによーく考えたら篠ノ之ん家の道場に織斑が通つてるから篠ノ之も道場に顔を出す筈、なら身体を動かして遊ぼう、何というナイスアイデア。

「……言つとくけど、玩具なんか無いからな」

俺が自分の天才的アイデアに満足していると、ボソツと篠ノ之が呟いたのが聞こえた。

多分俺に気を使つてくれたんだと思う、自分でも落ち着きの無い性格をしているのは自覚してるから玩具が無い事につきりすると思われれてもおかしくない。

しかし甘いな篠ノ之!! 何も友達と遊ぶつてのは玩具やゲームが無ければ出来ないつて訳じゃない、お互い手ぶらでも必然となにかしら思い付くもんなんだよ。

「だから安心しな!! 俺がお前をリーダーしてやるからタイタニックに乗ったつもりでほーかごを待ってる!!」

「リーダーつて、それを言うならリードでしょ? 後大船つて言葉が思い出せなかったからそれっぽいの連想したんだろうけど、泥舟並みに信用無いよそれ」

……あれ? 違ったっけ?

妙に緊張した学校が終わり、帰り道に合流した織斑とも道場で別れた俺は少し緊張しながら篠ノ之の部屋に上がって居た。

最初は道場の方に篠ノ之と一緒に行くつもりだったんだけど、門下生の人も多くて迷惑を掛けそうだったからコッチに来た訳なんだけど……少し気まずい。

と言うのも篠ノ之ん家に着いたら家の人に物凄く喜ばれたんだよ、何となく理由は分からない気もしないけどいくらなんでも大袈裟過ぎねえ？

「なーさんぼー、お前いつつも家族にどんな態度してんだよ、めっちゃお菓子もジュースも貰ったんだけど？」

「別に？ 普段と変わらない態度だよ」

どつちの態度なんだろう？ 織斑への態度か俺に対する態度なのか……多分俺とおんなじ態度してるんだろうなあ、というか家族に対してもそっけない篠ノ之が簡単に想像出来てなんだか笑えてきた。

「おい、何笑ってんだよ」

「いやーほら、お前の悪口ゆる顔がそーぞーできちゃってさ、何となく笑えちゃって」

「失礼極まりない発言だよ、それ？」

ベッドに腰掛けながら篠ノ之はジトつとした目で俺を睨む、前までなら罵倒が飛んで来ただろうけどなんだか最近はこんな感じに冗談言っても篠ノ之の当たりがキツく無くなったからついつい余計な口を聞いちゃうんだよなあ。

「で？ 私をリードしてくれるんだろ？ 何するのさ」

「んー、何するって言われてもなーんも考えてないしなあ」

「……行き当たりばったり」

「あははは、まー俺は何時もそんな感じだしなー」

頭を掻きながらそんな事話してたけど、今までこんな風にコイツとゆつくり話した事なんてあんまりなかったなあ、折角だし今日はこのままお喋りに切り替えよう。

「てな訳でさんぼー、ロボットの話でもしようや」

「コフツ、急すぎない!? 後結論だけ話すなつての!!」

ジュースを飲んでいた篠ノ之は思わずむせてしまったらしく、こほこほと咳込んでしまった。

まあ俺の持つてる話題つてのは大体こんなもんだし、気にせず話を続けてやろう。

「俺さー、ロボットに必要なのつてロマンだと思うんだよなー」

「またそれか、ほんと君はロマンつて言葉好きだよね」

「そら男だからなー、それにロマンつてのは海の底とか山のとっぺんとか、何があるか分からないってワクワクがじゅーよーだし?」

「何があるか分からないワクワクかあ」

俺の言葉に篠ノ之は考え込む様にそう言つて何時もの様に窓から空を見上げながらほんの少しだけ笑った。

「……その気持ち、ちよつとだけ理解できるかな?」

「おつマジか? ならロボットの武装で必要なもんつてなんだと思うよ?」

「へっ? えつと……じゅ、銃? とか剣、かな? てか私は別にロボットに興味は——」

「銃も剣もありきたりじゃん!! どーしたんだよ参謀!! らしくねーぞ!! ひつよーなもんつたらよゆうで相手ぶつた斬れるぐらいにつけえ蟹みたいなハサミとか、ガッチガチの装甲ブチ抜く釘打ち機とかだろ!」

後変形するのとか複数機体の合体とかもロマンだよな。超合金とかめつちやくちやカツコイイ。篠ノ之も何故この良さが分からない

んだらうか？

「いや、それ両方とも実用性無いよね!? 特に蟹みたいなハサミって何!? 釘打ち機ってパイルバンカーの事言ってるの!」

「じつよーせーでロマンを語るなよ!! そんな物は武器にはいらねーって!!」

「ロボットの武装に必須な物って言ったの君だよね!? 武装には実用性こそ必須だろ!」

「いらねーよ!! なんならロボットも1000m級のちよー巨大な物が良いんだよ、俺は!! だからそんなちまちました武器なんて認めん!!」

「そんなサイズで何と戦うんだよ!! 絶対適当におっきい数字言っただけだろ!」

し、篠ノ之の奴、ロボットに興味無いか何とか言っさつきからダメ出しばつかじゃねーか。

いや、待てよ? 逆にこつちからも奴のロボット観を聞いて、それにダメ出しばかりしてやれば俺のロボット感の良さが分かるんじゃない? 流石俺、名案じゃん!!

「じゃあさんぼーならどうするんだよ!! 俺より頭いいんだからとーぜん分かるだろ?」

「えっ? 私? うーん、私なら……」

そう言うと、篠ノ之はランドセルからノートとペンを取り出し、真剣な表情でさらさらと何かを書き出した。

気になったので覗いて見ると巨大ロボットとは言えない小型のモノで、横に書かれた設定から超速いらしい。

「私ならロボットは大きくしない、攻撃の当たる面積を少なくしつつ高速戦で相手を圧倒する様に設計するよ、だからこそ余計な武装は必要無いし極論したら銃と剣の二つで事足りる」

「う、うーん、こーそくせんもカツコいいよなあ……はっ!? あぶねー思わず巨大ロボット派の俺が洗脳されるどころだった!!」

結局、俺は門限が来るまでこんな事ばかり話してたので、遊びらしい遊びは出来なかった。

でも最後は玄関で篠ノ之が見送ってくれたので、多分アイツもそれなりに満足してくれたんだろう。

帰り道に篠ノ之の様子を聞いて来た織斑とそんな事を話しながら俺は満足しながら家に帰るのだった。

今日は土曜日、珍しく宿題も無いスペシャルハッピーな1日なので朝から街を歩いてただけで、運良く織斑と出くわした。

小さな手提げ鞆を持ってるので朝からまた剣術の稽古なんだろう、ちよūdōなんのあても無くふらつと外へ出ただけだし、篠ノ之ん家の道場でも見に行こうそーしよう。

前々から剣術つてのには興味があつたんだよねー、鉄とか斬つたりすんのかツケーじゃん？ 俺も今から練習したら斬鉄出来たりすんのかな？

「よほどの達人でないとなんな真似は出来んぞ？」

「さ、流石ニュータイプだな……」

「顔に出ていただけだぞ？」

キョトンとした顔でそう言う織斑、篠ノ之なら変なカテゴリーに入れるなって怒るだろうに流石クールビューティ、中々やりおる。

しつかしなーに話すつかなあ……、地味に織斑と二人つてのは今までなかったからなあ、常に篠ノ之が間に居たし。

ゲームとか漫画の話をしようにも篠ノ之とは反応が違うから下手したら話膨らまねーし、うーむ。

考えながら歩いてるけど中々話しかけるタイミングが見当たらない、篠ノ之と話してると基本的に会話が途切れねーからどー切り込むかねえ……。

「おっ？」

「ん？ どうした？」

「いやほら、あの雲なんかひこーきつぽくない？」

道中の話題が無いから何話そうか考えてたら偶々空に浮かぶ雲の形がそう見えたから思わず口走っただけで、それに織斑が反応してくれた。

「コイツも単に口下手なだけなんだろうな、思った事を考え無しに口走っただけなんだけど、折角だしこのまま話を膨らませよう。」

「織斑ってさー、空と海ってどっちが好きよ?」

「空と海? ……そうだな、強いて言うなら空の方が好きだと思う」

「ほーん、海の方が色々あると思うんだけどなあ」

「それでも、私は空の方がいい。何せ何処までも広がってるしなんのしがらみもないんだからな」

「まるでさんぼーみてーな事言うんだな、お前」

俺と同じ様に飛行機型の雲を眺める織斑を横目で見ると、何となくだけど一瞬篠ノ之と同じ様な表情を浮かべていた様な気がした。

「コイツは篠ノ之と違って友人が多かったと思う、確か俺の友達にも織斑と知り合いだつて奴も居たはずだし。」

真面目に考えようとしたものの、分からない事は篠ノ之に丸投げしてたから途中で考えるのを止めた、だつて分かんねーしなー。

そんな馬鹿な俺がやれるただ一つの事、そうそれは一緒に遊ぶ事だ

!!

「つー訳で織斑!! 明日暇ならさんぼーと一緒にどっか行こうぜ!!」

「何が『と言う訳で』なのか分からないが、うーむ」

「どつたの? よーじでもあんのか?」

「……いや、邪魔して良いのかと思つてな」

邪魔つて何の事よ? 別に俺は織斑を邪魔だつて思つた事は無いんだけど……もしかして運動会の時の発言を気にしてんのか? 織斑が居ると俺が篠ノ之と仲良くなれないとか考えてたり? うーん分からんけどとりあえずは邪魔じゃ無いって事を伝えねば。

「織斑、心配しなくても俺とさんぼーはもう友達だからさ、問題ねーつて。それにさんぼーの友達なら織斑も俺の友達、簡単な話でみんなはっぴー、だろ?」

「……ふつ、その理論を束が聞いたら怒るぞ?」

「大丈夫大丈夫、怒んねー怒んねー」

根拠のない自信で織斑に笑いかけてやるとクールな笑いを返してくれた、やっぱカツケーなコイツ。

そこからペースを取り戻した俺は漫画とかゲームの必殺技の話を思い付くままに話してた。

特に現実でやれそうな技に関しては剣術を学んだら良い感じに再現出来るのかな？ とか、それこそ刃物で何処まで切れるかとか、気が付いたら篠ノ之ん家まで喋りっぱなし。

道場の前で別れたけど、今日は見学をしに来た訳だし問題無し、一応明日遊びに行くって話はまとまったから後は篠ノ之を誘うだけだな。

丁度織斑が来たって聞いて道場の方に来た篠ノ之も居るし、今の内に聞いとけ。

「てな訳で、明日遊びに行こーぜ？」

「だから結論……もういいや、なんで私が遊びに行かなくちゃいけないのさ」

「休みの日なんだぜ？ 外で遊ぶのも偶には良いだろ？」

「……外出とか面倒だから嫌だ」

ふいつと顔を背けた篠ノ之、結構コイツも強情な奴だからこうなったら多分意地でも来ないだろう、しゃーねーか。

「わーったよ、なら織斑と二人で遊びに行行って来る」

「……………ちーちゃんが行くなら私も行く」

……………流石織斑、名前出ただけであっさり篠ノ之が折れやがった。

日曜日になったから俺は今篠ノ之達と一緒に遊ぶ日なんだけど、ちよつと困ってる。

はじめはゲーセンにでも行こうかと考えてたんだけど、篠ノ之が人の多いところを嫌ったもんだから流れて俺ん家に行く事になった。

この間篠ノ之ん家に行ったからそのお返しに家に招くつてのはありなんだけど、部屋散らかってるんだよなあ……。

漫画とかゲームとかさ、片付けるつもりだったんだけど結局忘れてたからぐつちやぐちやになって足の踏み場が無い。

かと言つて他に人気の無い場所つて言ったら海とか山になるんだろうけど遠いんだよね。

「本気で俺ん家でいいの？ お前らのきよーみがありそうなもんはねえと思うんだけど……」

「は？ 誘つたのは君だろ？ 普段私の事を友達扱いしてる癖になんでまた今日は渋るんだよ？」

「いやほら、部屋が散らかってるからさー」

「ならまずは片付けか、三人でやれば直ぐに片付くさ」

「マジで？ 手伝ってくれんの？」

それなら話は別だ、三人でやれば直ぐに片付くし母さんにも叱られないし。片付け忘れたら小遣いを100円減らすぞとか言う鬼みたいな圧力を跳ね除けられる!!

「さあ行こう、やれ行こう!! 磯野は回るだ!!」

「……急がば回れだろ？」

「そーとも言うー」

「急にテンションが上がったな」

俺は二人の手を掴んで自分の家まで走る、その時に篠ノ之が一瞬身構えた様な気がしたけど、振り払われる事は無かったから構わずに家

まで一直線。

「さあ着いたぞ、此処が俺の家だ!!」

二階建ての一軒家、自転車が無いから母さんは買い出しに行ってるし、車が無いから親父も昔のアニメやゲームを買いに出かけてるので家には誰も居ない。

「つまりただけさわいでもあばれても問題無し!!」

「問題……無い、のか?」

「……なんでもいいけど、着いたなら手、離してよ」

「ん? ああ悪りい悪りい」

普段遊びに行く事は多いけど、遊びに来られる事は少なかったから思わず張り切って連れてきちゃったから、篠ノ之と織斑の手を握りっぱなしだった。

その事に気が付いたのでとりあえずポケットの中から家の鍵を取り出して中に入ったんだけど、中々篠ノ之が入って来ない。

「どーしたんだよさんぼー? 入って来いって」

「う、うん……」

「束は緊張してるのさ、何せ初めて私以外の友達にお呼ばれされたんだからな」

「ち、ちーちゃん!」

「なるへそ、ならえんりよしてねーで早く来いよ」

「あつ……」

俺は玄関前で立ち止まってる篠ノ之の手を握ってそのまま中に引き入れる、そして玄関の鍵をしっかりと施錠して自分の部屋に案内した。

部屋を開けると散らかってた筈の部屋が何故か綺麗さっぱり整理されてたので首を傾げたんだけど、よく見たら机の上にひらがなで書かれた手紙が置かれてる。

三人で覗き込んだらデカデカと『こんげつはこづかいなし!!』と、母

上様から書かれていた。

「お、鬼!! 悪魔!! 母さんは俺の事を分かっちゃ居ない!! 後でやろうと思ってたのに!!」

「……なんだろう、この上なく信用出来ないセリフだよそれ」

「……そもそも私達が片付けを手伝うからやる気を出したんじや無かったか?」

すっごい呆れられた視線がぶっ刺さってるけど気にするものか、だって息子を信用しない母さんが悪い、うん。

とりあえず文句は母さんに言うとして、ジューズくらいは持ってった方が良いよな? 後はチョコレートがあつた筈だし、それも一緒に持ってこう。

「んじや一人とも待っててくれー、ジューズとチョコ持ってくつから」

ひらひらと手を振ってから台所に行つて冷蔵庫を物色すると、なんちやらペツパーとか言うコーラみたいなのと、ミックスジューズがあつたからそれを両手で持ち、口にチョコの袋を啜えて部屋に帰つた。

ウチの親父はたまーに変なチョイスのもんを買つて来るんだよなー、俺の部屋にも『宇宙人です!!』つて書かれたシャツが掛かつてるし、今日も親父のシャツには『重量過多』とか書かれてたし、あの人変だわ。

部屋に帰つたら織斑も篠ノ之も本棚に置かれた漫画を読んでいた、前にやった傘を使った必殺技の元を読んでる感じだったけど。

邪魔すんのわりーかなと思つただけど、篠ノ之が俺に気が付いたのか顔を上げながら漫画を閉じた。

「それで、何して遊ぶのや?」

「うーん、ゲームでもやる? 三人でやれる奴」

と思つたけど織斑は例の牙突が出て来る漫画を真剣に読んでるの

でまだちよつと気が引けるし、二人でやれるテトリスでもやるか。
くつくつく、篠ノ之!! 親父直伝のテトリスの腕を見せてやるぞ!!

……そう意気込んでたら腕の差を見せ付けられたのは俺の方でした、篠ノ之の奴強すぎる。

幕間：兎から見た馬鹿 3

——最近、学校に行くのが苦痛じゃなくなって来た。

それまでは朝起きて、ちーちゃんと登校して、お昼にちーちゃんと喋って、放課後にちーちゃんと帰るだけの単調なルーチンワークでしかなかったのに。

……理由は決まってる、あの底抜けの馬鹿。

別にアイツの事を私はなんとも思っていない、勝手に友達だとか言っ
て私に付きまとい、何の意味も無い話を一方的に話すだけの男だっ
た筈なのにいつの間にか一緒に居ても不快じゃ無くなって、最近では
時々遊ぶ様になってしまった。

以前はコイツ以下の存在なんて居ないってレベルで何よりも嫌いな存在だったのに、最近は不思議とそうは思わなくなっている。

「よーさんばー、おはろー」

「……ふん、毎日毎日馬鹿の一つ覚えだね」

「おっ、褒められた!!」

「褒めてないって……」

「ふーん、でも俺はお前があいさつ返すまであいさつし続けるからな
!!」

朝に会うと必ずコイツは挨拶をしてくる、今まで全く気にしてな
かったし返事を返す気も無かったんだけど、未だにこうも挨拶を続け
られると呆れを通り越して感心するよ。

——でもさ、その言い方だと、もし私が挨拶を返したら次の日
から挨拶してくれないんじゃないの？

喉まで出かかった悪態、思わずそのシチュエーションを想像した
時、何故か私はほんの少しだけ寂しさを感じたので途中で言葉を飲み
込んでしまう。

コイツとの会話に殆ど意味は無い、話す内容なんて下らないテレビ番組とか昨日の晩御飯の話だとか、身にならない話を中心だから聞いてるだけ時間の浪費なのに。

——何故、話しかけてくれない事を寂しいと感じたんだろう？

「おーい、さんぼー？ 聞いてんのー？」

「……何？ 君の話には生産性がないから全く話聞いてなかった」

「えーマジでー？ んじゃさ、もっかい言うけど席替えがあるらしーぜ？」

席替え、今までの私なら『やつと君と離れられるのか、清々するよ』とでも言っただろうし、実際口にするつもりだった。

けど喉まで出かかったその言葉が中々出ない、次に私の隣に座るのがこの馬鹿じゃないって考えたら、そんな悪態が引っ込んでしまう。らしくない、自分でもそう思うんだけどもし席替えで横のコイツが誰か別の誰かと入れ替わったら、また退屈な時間が始まるんだろうか？

横の馬鹿は授業中でも休み時間でも暇になったら話しかけてくるし、分らない事があったら真っ先に私に聞きに来る。

それは全部不必要な会話だったのに、話しかけられる事がイライラした筈なのに、それが今じゃ嫌じゃない。

過程を省いて結論だけを話してくる癖ももう慣れた、ツツコミを入れる必要も無いのについっい入れてしまう様になってさ、ほんとなんでなのかな？

そこまで考えて、認めたくない事だけどコイツと他の連中ならこの馬鹿と一緒に居る方が何倍もマシだと感じている事に気が付いた。

私はコイツの事をなんとも思っていない、思っていない筈なのに。

——コイツ以外の誰かが私の横に来る事が嫌だった。

「また一緒の席だといーな、なあさんぼー？」

「……まあ、君は他の奴よりはその、少しはマシだからね」

——そして席替えの時間が来た。

箱の中に数字が書かれた紙が入った簡単なくじ引き形式、席順的に先に私が引いて次にこの馬鹿が引くんだけど、今まで感じた事の無い緊張感に私は包まれていた。

問題は私の引いた番号じゃなくてこの馬鹿の番号、私の隣かそうでないか。

私の引いた紙には窓際から一列離れた場所の番号が書かれて居た、だから右側にコイツが来てくれれば……。

「おっ見ろよさんぼー、お前の右の席だぜ？ マジでまた隣だと思わなかつたなー」

「……ふーん、あつそ」

「なんだよ、そっけねーなー」

「要は今の場所が入れ替わっただけでしょ？ 空が見えないじゃん」

席がまた隣だと分かった瞬間、私はふつと顔を逸らしながら何時もの様に悪態をついた。

今までと変わらない状態になった事に対する安堵と、私にこんな思いをさせるこの馬鹿に対してのちよつとした意趣返し、特別な意味は無い。

「まっ、俺が窓際になつたし空は諦めるんだなー」

「君が少し身体をどけたら良いんじゃないの？ それで解決すると思っけど？」

「うへえ、絶対疲れる奴じゃん」

そう言つて、馬鹿はぐてつとうつ伏せになった。

横顔がふてくされたような顔で、何時もの様に頭の中で何かを考えてる様な顔をしているのでそろそろあの言葉を言うタイミングなんだろう。

「てな訳でさんぼー、今日は俺も一緒に昼メシ食つていいか？」

「だから結論だけ話すなつて言つてるだろ？ ………………ばーか」

「えっ？　なんで馬鹿って言われたのよ!？」

——私はこの男の事を何とも思っていない、少なくとも嫌な方向には。

篠ノ之と話す様になってからあつと言う間に時間が過ぎて冬になつた。

昨日の夜から雪が降つてただけど、その量が多くて朝起きたら積もつてたから学校に行くのがめっちゃくちゃ楽しみなんだよなー。

親父も雪が積もつてるからつて、めつちや早起きして出勤前に庭で『キヤタピラ付きのロボット!!』とか言つて雑な雪だるまもどきを作つて母さんに叱られてた、俺も親父に起こされて母さんの雪だるま作つただけど、親父にチクられて一緒に叱られた。

夏が大好きつてシャツを着せたのがダメだつたんだろうか？ それとも鬼レベルを表現する為に頭に杖をぶつ刺したのがアウトだったのかな？

説教の所為で何時もよりも遅い時間に登校しながらそんな事を考えてると、前の方に見知つた二人が歩いてるのが見える。

普通に声を掛けようと思つただけど、雪玉を作れるくらいには湿つた奴だつたから思わず雪玉を作つて二人の頭に投げてやった。

織斑は勘が冴えてたのか咄嗟に避けられたけど、ポストと篠ノ之の頭には当たる雪玉、正直ニュータイプ能力で投げた雪玉を避けられると思つてたので当たるとは思わなかつた、仕返しが怖ええ。

「おいそこの馬鹿、ちよつとこつち来い」

「ふつだが断る!! 俺はこの後さんぼーにボコられる未来しか見えな
いからな!!」

「ちーちゃん、お願いあの馬鹿に雪玉投げて?」

「ちよつと待て、織斑を味方にすんのはダメだろ!? なあ織斑!」

「……私にどうしろと?」

困惑する織斑を挟みながら睨み合つてたけど、ついまたいたずら心が芽生えたので一度しやがんで足元の雪を丸め、野球のボールの様に篠ノ之の顔面に投げ付けたんだけど、正面から投げたからか余裕で避

けられた。

そしたら直ぐに篠ノ之は足元の雪を固めて俺に投げ返して来たので、こつちも同じ様に避けたら避けた先に雪玉を投げつけられた、おのれニュータイプ!!

「はっ!! 丁度良かったじゃないか、君のその顔を雪で良く洗ったら少しはマシになるかも知れないよ?」

「やったなさんぼー!! ぜったいにゆるさん!!」

「おい二人とも? まだ私達は登校の途中……」

何か織斑が言ってる様な気がしたけど、篠ノ之の奴が新しく雪玉を作り始めたから一旦無視し、俺も新しい雪玉を作ってから狙い撃ちされない様に身体を左右に揺らしながら篠ノ之の攻撃を躲す。

「ふははは!! 必殺分身の術!! 当てれるもんなら当ててみろーだ」
「あつそ、なら当ててやる」

雪玉を作り終わった篠ノ之は素晴らしいながら本当に俺の顔面に雪玉を命中させまくって来た、というか吸い込まれる様に全部当たったんだけどね。

しかし奴の雪玉は尽きた、いくら篠ノ之とは言え雪玉を作ってる最中に攻撃されちゃ避けられないだろ? 親父にやられた俺が一番よく知ってるからな!!

「喰らえ親父直伝!! ヒーローの変身合体中にこーげきする反則アタック!!」

「わぷっ!」

俺の雪玉は篠ノ之の横顔に当たり、珍しく驚いた様な声を上げたので一旦俺の中のいたずら心は満たされたんだけど、雪を投げられた篠ノ之がまた仕返しにぶん投げて来たもんだからしばらくの間戦いが終わらなかった。

なので禁断のランドセルバリアーを発動し、片手で攻撃を防ぎながらもう片方の手で雪を投げるといふ最強の戦法を使いつつ篠ノ之の攻撃を耐えながら反撃を返して行く。

「おいこの馬鹿!! そんなもん使うなよ!! 当たらないだろ!!」
「俺を本気にさせたさんぼーが悪いんだ、親父からは『決して使うな、週3が限度だ』って言われたこの技をかいきんさせたさんぼーが!!」
「週3で使ってたなら禁断でも何でもないだろ!? 君のお父さんは馬鹿なのかよ!!」
「うん、だってこの間も『タラバガニ買ってきたぞー』とか言っただけで来たのがヤシガニ?とか言う変なカニだったし」

いやーあの時は本当にびっくりした、おつきな箱開けたら中でわしゃわしゃしてたし、親父が母さんに家追い出されて朝まで玄関前で体育座りさせられてたからさ。

「君の馬鹿はお父さん譲りだったのかあ……」

「いやあそれほどでも」

「褒めてないから」

「えっ? そーなの? でもまー落ち着いたし学校いこーぜ、なっ織斑?」

そうやって振り返った先に織斑が居ない、篠ノ之も居ない事に首を傾げてたけど、それと同時に聞き慣れたチャイムの音がし始めた。

そーいや、登校中だっけ? なんか雪合戦してる最中に織斑がそんな事言ってたよーな……。

ふと足元を見ると織斑らしき足跡が真っ直ぐに学校に向かってる、なるほど先に学校に行ったのか、そりやそーだよなー。

——あれ? 俺たちちって置いてかれた上にもかけて遅刻した?

小学一年生 17

——昨日は篠ノ之と雪合戦してたから学校に遅刻して一緒に先生に叱られてしまった。

俺の横で篠ノ之が『なんで私まで……』とかグチってたけど、流石にちよつと悪かったかな？

でもまあ今日はそんな心配は無い、何故なら!!

……今俺は風邪ひいて病院だからね。

雪合戦で服がびしょ濡れになったのが悪かったのかなあ？ それとも凍った水溜りで滑って遊んでたからかなあ？ 夕方に家に帰ったらなんか身体が怠かった。

んで朝起きたら熱出てるし、頭ぼーつとするし、咳が出るしフラフラするしで気が付いたら病院行き。

注射打たれて散々な目にあつたよ本気で……。

母さんからは『治つたらお説教ね』と地獄の宣言を食らって今は寝てる所、学校に行けないってこんな暇なんだな。

冷えピタ貼ってベッドに横になりながらテレビを点けてても面白いアニメやってねーし、ゲームも頭がぼーつとしてるからやる気ねーんだよなあ。

仕方ないから漫画に手出したんだけど、なんか俺の漫画なのに知らない葉が挟まつてる、あれ？

えっ？ 何これ？ 怪奇現象？ 俺の部屋幽霊でも住んでんの!?

ペラペラとページめくってたら丁度キラクター同士の一騎討ちの場面に挟まつてる、なんとなーく見覚えがあるなと思ったら織斑がちよくちよく読んでる漫画だった気がする。

アイツもクールな顔してこーいこの読むんだよなー、普通女の子って少女漫画じゃねとは思ってたんだけど、まあ本人が好きなんだし俺も話し相手が出来て良いんだけどねー。

このまま次はスーパードロイドを教えよう、飛ぶパンチとか目からビームとか……いや待てよ？ やっぱリアル系もいーなあ、色々ロマンが詰まつてるしやっぱロボットは最高だぜ!!

変形合体に超合金、悪の軍団と戦う正義のスーパーロボットは最強無敵!! 全てを弾き返す硬い体にどんな相手も一発で倒すパワー、やっぱ男ならスーパーロボット一択!!

熱でおかしな方向に頭が行ってるとは思うけど止めてくれる人が居ないから止められない、興奮して立ち上がった瞬間に思わずクラッと来たけど、DVDを見たくてたまらない。

待ってる俺のスーパーロボット!! 風邪ひいて丸一日休みだからずーっと見られる!! はーっはっはっは!!

……とか言ったら電池切れになったみたいで身体の力が抜けて眠たくなって来た、ちくしょう。

——眠気に負けた俺が次に目が覚めたのは夕方になってからだった。

せ、せつかく丸一日アニメが見れる貴重な日だったのに、織斑に見せるスーパーロボットを選べなかったぞクソッ。

気を取り直して今度こそDVDを再生しようとしたら、部屋の扉が開いて篠ノ之が入って来た、何故に？

「ふーん、風邪ひいたって聞いたけど元気そうじゃん」

「すまんな、病み上がりに」

「なんでさんぽーと織斑がいんの？」

「プリント持ってけって言われたんだよ、まったくなんで私が……」

ぶつぶつと文句を言う篠ノ之と申し訳無さそうに部屋に顔を出す織斑、暇してた俺はベッドから起き上がって二人の方を向いて篠ノ之からプリントを受け取った。

内容は宿題だったからとりあえず机の上に放り投げて、暇そうにしてる篠ノ之とさり気なく漫画に目が行ってる織斑に向かって手に持ってたDVDを渡した、男のロマンを理解させたいだけだからあんまし渡した理由は無い。

「は？ 何コレ」

「何ってDVD」

「いや、それは分かるんだが……何故私と束に？」

「織斑……コレには男のロマンが詰まってるって親父が言ってたんだ、だからお前らにもロマンを知ってほしくて……」

「……普段君がロマンロマンって言ってる理由はお父さんかよ」

疲れたように肩を落とした篠ノ之だけど、コイツは少し迷った上で俺の差し出したDVDを受け取ってくれたし、織斑も何の抵抗もなかったので俺の目的はひとまず達成出来たわけだ。

「いっとくけど、別に私は断ってもしつこく渡そうとするだろうから受け取っただけだからね？ 興味本位で見るわけじゃないから勘違いするなよ」

「ん？ 別にんな事考えてねーけど？」

「あつそ、ならとつと寝て風邪治したら？ 毎日プリント届けに来るとか束さん嫌だからね」

そう言っつて篠ノ之は部屋から出てった、もー少し話したかったんだけどなあ。

ま、でてったもんはしゃーないので織斑に話し相手になって貰おうかと思っつたらコッチもランドセルの中にDVDをしまつて帰る準備をしてた。

「なんだよ織斑、お前ももう帰っちゃうのかよー」

「すまん、私は束の付き添いで来ただけだから用事も無い」

「あー、クラス別だしなあ」

「ああ、だから早く風邪を治せ、束も普段騒がしいお前が居なくて暇してたからな」

織斑はそう言っつてクールな笑いを浮かべながら部屋を出て行った、時間的に学校が終わって直ぐにこっちに来たんだろうけど、帰るのもはえーな。

ちよつとした寂しさを感じながら俺は別のDVDを見ようとしたんだけど、篠ノ之達と入れ替わるように他の友達がお見舞いに来てくれた。

あーなるほど、篠ノ之はあんまり他の人が好きじゃねーもんな、だからさつさと来てさつさと帰ったんだな、納得したわ。

———こうして俺の風邪の日は終わるのだった。

「俺ふっかつ!! はーっはっはっは!!」

風邪も治ったので元気よくクラスの扉を開けて挨拶したらみんなから『おはよー』と言う普通の挨拶が帰って来た、もうちよつと捻った挨拶の方が良かったかなあ？

「よっさんぼー、おはろー」

「はあ……病み上がりの癖にもう少し静かに出来ないの?」

「えーやだよ、せっかく久しぶりに篠ノ之と話せるんだし、もつとお前と話してーんだけどなあ」

「あつそ、私は別に君が居なくて清々してたんだけど?」

「ちえー、もう少し俺に優しくしてくれても良いじゃんかよー」

「ちーちゃんにならともかく、なんで私が君に優しくしなくちゃいけないのさ」

そう言いながらジトツとした目で俺を睨む篠ノ之、今日は何時もありも機嫌が悪いのかな? 何となく当たりが強い気がする。

もしかしたら渡したDVDが気に入らなかつたのか? そーいや前に男のロマンは分からないって言ってた気がするし、多分そうなんだろう。

うーんでもどーやって篠ノ之の機嫌取るかな、今まで篠ノ之の機嫌を直せた事ねえし割と困ったぞ。

じーつと篠ノ之の目を見ながら考えてると何を勘違いしたのか睨み返されたけど、此処で目を逸らしたら負けだから絶対目を逸らすものか。

無言のまま睨み合ってたら段々篠ノ之の目が泳ぎ始めた、ここで曇み掛ければ勝てる!!

俺はそのまま視線を逸らさずに段々と顔を篠ノ之に近付けてったんだけど、途中から教科書で顔をはたかれた。

「まじまじ見んなばか」

「ぐつ、さんぼー!! きよーかしよで視線切るとかひきよーだぞ!!」

「君は視線逸らしたら負けだと思ってるの?」

「うん、なんでかしらねーけどなー」

ウチの母さんが目合わせると逸らしてくんないんだよなあ、しかもめちやくちや目付きが怖いからどーしても勝てない。

あの親父でも母さんに結婚指輪渡そうとした時も、目を合わせた瞬間すつげえ目付きでガン見されて一回心が折れたとか何とか言つてた様な気がする。

親父と話す時思わず視線合わせちゃうし、今も篠ノ之との会話で視線が離せなかった、こんなところは母さん似なんだな。

「んで? なんで今日は機嫌わりーのよ?」

「は? なんで私が君の事で機嫌悪くしなきゃならないんだよ、自意識過剰なんじゃないの?」

あれ、なんだろ? 話しかけたばかりの頃を思い出すやりとりでちよつと懐かしい。

「なーなー、なんでそんなイラついてんだよー」

「……単純に君が来る事を君の友達連中から言われ続けてただけだよ、鬱陶しい」

「あーなるほどなー、さんぼーは人付き合い苦手だもんなー」

そつかそつか、そりや確かに機嫌悪くなるわな、篠ノ之からしたら知らない奴に話しかけられまくるんだもんよ、朝から大分人が来たみてーだし。

「大体なんだよ友達の友達だから自分も友達つて、そんな無茶苦茶な理屈で東さんに話しかけてくんよ、なんの興味も湧かない奴等がピーチクパーチク喋つても耳に入って来ないって、そのくせキツくあしらっても次から次に人が来るし……大体君は一体何人友達が居るんだよ?」

よほどイラついてたんだな、なんかブツブツ言い出したと思ったらまたコツチ向いてきた、何人友達居るかって言われてもなあ……。

「この学校だけでいいの？ 同い年だけ？ それとも全部？ 全部だどちよつとわかんねーわ、近所の高校生の兄ちゃんとか犬の散歩してるじーさんばーさんも友達だし」

「君のコミュニケーション能力ってどーなってんの!？」

「さんぼーが人と話さな過ぎるんだよ」

「それにしても限度があるでしょ!？」

「んー？ でもさー、毎日顔合わせたら挨拶するだろー？ 休みの日に会ったらなんか面白そうな話聞くだろー？ そしたらもー友達じゃん？」

「た、単純……」

俺って人の話聞くの好きだから、なんか色々聞いたり話したりすると何時の間にか向こうから話しかけてくれるようになってるんだよなー。

篠ノ之からも色々話し聞きてーんだけど、なっかなか話しかけてくれねーから結局俺が話しかけてるんだよね。

偶にはコイツの趣味の話でも……篠ノ之に趣味ってあったっけ？

あれ？ 俺友達って言うてる筈なのにコイツの事何にも知らねー気がするんだけど、ダメくね？

「さんぼー!! 俺はお前の事が知りたい!! 割と今すぐに!!」

「は？ やだよ面倒くさい、君みたいにお喋りじゃないの、私は」

意気込んで篠ノ之に迫ったら何時ものように顔を背けられてしまった。

くっ、俺と篠ノ之はまだ友達（仮）だったのかちくしょう。

だけど諦めねーからな篠ノ之、何時かお前から話しかけさせてやる

から覚悟してろよ!!

仲良くなつたつもりだったんだけど、篠ノ之の事を全く知らない事に気が付いた俺は部屋で横になりながら作戦を考える、というか久しぶりだなこんな作戦考えんの。

アイツの誕生日すら知らねーってのは恥ずい、誕生日おめでとーくらい言いてーのになあ。

織斑なら知ってそうだけど、こー言うのは本人から聞いた方がいいって親父から聞いたし、そもそも俺が篠ノ之の口から聞きたいんだよね。

また手紙出すか？ んーでもまたいっばい印刷されてそこら中に撒かれても嫌だしなあ、前なんか学校だけかと思つてたら町内全部に撒かれてたから顔見知り全員にからかわれたし。

お菓子持つて遊びに行くとか？ ダメだなアイツがなに好きなのかわかんねー、俺が好きなもの持つてつてもアレだしなあ。

好きな物……好きな物……そーいや前に宇宙に興味沸いたとか言つてたっけ、でも宇宙？

宇宙系のアニメはいっばい持つてるけど、結局それって俺が好きなものになっちゃうだろ？ それだと多分アイツプレゼントしても興味ねえだろーしなあ……宇宙っぽいなんかを探すしかねーや。

「つー訳で親父ー？ 宇宙っぽいなんかつてねー？」

「宇宙っぽいなんか？ うーん、スノードームくらいしか思い付かんなあ」

「なに？ そのスノーなんちゃらつて？」

「……よし、確かちよつと遠いけど体験教室だったかがあるし、次の休みにとーちゃんと一緒に行くか!!」

「マジで!?! よっしや!!」

やっぱ親父は頼りになるなー、アニメも漫画も教えてくれたし、色

んなところ連れてつてくれるし。

『そんじゃ、今の内にデザイン考えとけよー』つって親父は紙と色鉛筆を俺に手渡してどっかに電話しに行った、後で聞いたら予約の電話だったらしい。

そんで俺は親父といっしょにその体験教室とか言うので親父やその先生に手伝って貰って作ったスノードーム？のキーホルダー作って篠ノ之の所へ持って行った。

「てな訳でふれぜんとふおーゆー？」

「……いきなり来たと思つたら、なにそれ？」

「ん？ いやお前が何好きか分かんねーから宇宙っぽいのは作って持って来た」

めっちゃ呆れた顔されたけど親父と一緒に作ったキーホルダー渡したら突っ返されなかつたし、ちよつと興味深そうにしてたから当たりだったらしいやつたぜ親父、大成功だ!!

「これ君が作ったの？ ヤケに出来がいいけど？」

「もちろん!! つて、言いたいんだけど実は殆ど親父が作ってくれたんだよ、俺がやったのは絵を書いたのと最後の仕上げだけ」

「だと思つた」

「まー次はきつと俺一人で作るからさ、今はそれで良いだろ？」

「……ふん、期待しないで待つとくよ」

そう言つて篠ノ之は俺の渡したキーホルダーを机の上に置くと、『で?』と言いながら俺に目を合わせてくる。

「今日はコレだけ？ 他に用事は無いのかな？」

「えっ？ 用事作つて良いの？ お前に用事つていっばいあるよ？」

「……墓穴掘つたかな」

用事つつつても篠ノ之の話聞きたいってだけの事だし、別に用事ら

しいもんじゃねーけどな。

取り敢えず一番聞いとかなきやいけないのはコイツの誕生日、後好きな食べ物と好きな趣味と好きな漫画と好きなテレビと好きな動物と好きな遊びと……ダメだ多すぎる。

「うーん、何から聞けば良いのかなあ？　とりあえずさんぼー、何か俺に話してくれよ？」

「何かって、何さ？」

「えっ？　さあ？　なんでもいーよー？　俺お前の話が聞きてーだけだし？」

「なにそれ、随分アバウトだね」

「なーなーさんぼー、良いだろー？」

「はあ……」

諦めた様に篠ノ之はため息を吐き、本棚の中から分厚い図鑑を取り出して俺の目の前で広げ始めた。

首を傾げながらその図鑑を覗くと英語で書かれた星がいっぱい書かれてて全然読めねー。

「……この星とこの星、あとココも」

「ココがどーしたの？」

「……もしかしたら、生き物がいるかもしれないって言われてるんだよ」

「ほえーすげーなー」

「おい馬鹿、何が凄いのか言ってみろよ？」

「すげーからすげーんだよ」

「あのねえ……意味分かって言ってる？　地球とは遠く離れた星に私達人類の様な文明を持った生物がいるかもしれないんだよ！　それこそUFOとか宇宙人とかが実在してる可能性があるんだよ！　もしかしたらそれこそもう一つの地球ともう一つの人類が居てもおかしくないんだよ！　それこそ宇宙のロマンだと思わない！　この星も！！　こっちの星も！！　地球からの観測だけで実際に目で見た事のある人なんて居ないんだよ！　何かあるかわからないし、私だって

分からない!! 第一月面にすらアポロ計画以降有人着陸が行われてないんだから!! その理由は? コストの問題? それとも世間の陰謀説みたいにも有人着陸が嘘だったとか? 調べれば分からない事は無いけど、やっぱり私はこの目で見たいの!!」

最初は説教口調だった篠ノ之も話してるうちにだんだん熱がこもって来たのか、凄く生き生きと話しかけて来た。

俺が相槌を挟む暇も無く一時間も二時間も篠ノ之は喋り続けただけでなく、最終的に部屋のパソコンで海外の論文?とか言うのを見せられたけど日本語じゃねーから全然読めねー。

——— けどま、コイツが楽しそうだし俺もそれで良いか。

小学一年生 20

——篠ノ之ん家に行ってから暫くして、冬休みになった。

夏休みの冬版だけど休みみじけーのな、その割には宿題あるし先生は絶対鬼だろ。

篠ノ之に宿題の答え教えて貰おうかと思っただんけど、宿題のたんびにアイツ頼ってるよーな気がすんだよなあ。

頑張ってるよーな気がすんだよなあ。

かと言って今から篠ノ之ん家行くのも無理なんだよねー、チラツと外みたら台風かっつてくらい雨降ってるし。

多少の雨なら勉強教えて貰いに行っただけだなー、宿題も飽きちゃったしどーしよっか？

普段ならゲームとかアニメ見てるんだけど雨の日ってなんか無性に外に出たいんだよなあ、流星に雨戸がバシバシ言ってるこの雨だと出るの我慢するけど。

締め切ってジメジメしてっし、窓がガタガタ言ってるからどんな風になってるか外見たいんだけど、夏にそれやって部屋の中ぐっちゃぐちやにして母さんにめちやくちや叱られたからなあ。

今日も『雨戸開けたらひっばたくぞ？』って脅されてるし、母さん怖えから逆らえねえ。

……こないだ親父からスノーなんたら貰って珍しく照れてた癖によ。

けど母さんみたいなキツイ性格の人でもあーいうもん貰ったら喜ぶんだなー、大人になったら俺も真似してみようかな？

余計な事を考えながらベッドの上に横たわってテレビ見てると丁度星座占いが始まったところだった、割と占って話のタネになるから好きなんだよなー。

んで俺の運勢は……下から二番目かあ、ラッキーアイテムは電話機

？

「――てなわけできー、俺の今日の運勢下から二番目だったんだよねー」

『いや、なんでそれで態々私の家に電話したんだよ？』

「なんでって？ そりやお前ラッキーアイテムが電話機だからに決まってるじゃん」

『ならなんで余計に私に電話したのさ、別にちーちゃんでも良かったんじゃないの？』

そりやそうなんだけどな、電話機の横の壁に貼った連絡網で一番最初に見えたのが篠ノ之だったんだー、なんつったら怒るだろーしなー。

取り敢えずなんとか理由言つとけばいいか、通話越しだったら顔に出るなんて事はねーだろーし」

『途中から声に出てるんだよ馬鹿野郎!!』

「えっマジで？ どっから?」

『連絡網で一番初めにくのどっからだよ、用事無いなら切るよ!?!』

「えーっ、もー少し話そうぜ？ 俺暇なんだよ」

『だったらそれこそ私以外の奴と話せよ、君と話しているとコッチは疲れ溜まるんだからさ』

「だってお前は俺が知らねー事教えてくれるじゃん？ この間の宇宙の話だって面白かったし」

『あつアレは忘れるよ、ガラにも無かったんだからさ!!』

その割には部屋中ひっくり返しながら色々見せて語ってくれたし、俺の門限が来るまでずーっと話しっぱなしだったのになあ。

普段からムスツとしてるのに宇宙の話になると別人だからね、コッチからその話題振ってやろうかと思っただけど、この状況で話したら延々と話される気がするんだよね。

篠ノ之が生き生きしてるから別に聞く事自体は苦じゃないし、むしろ聞いている俺もワクワクしてくるからあの話好きなんだけど、長電話

してたら母さんにゲンコツ食らうからさ。

うーん仕方ないから宇宙の話題は諦めよう、となると……あの話題かな？

「なーさんぼー」

『なんだよ、またロボットの話でもすんのか？』

「違う違う、俺来週から三日間北海道旅行に行くんだよ」

『……………ふーん、で？』

「お土産なにがいい？ やっぱ木彫りの熊？ テナント？」

『それを言うならペナント、私は店子じゃないから』

「ほー違ったのかー、んでどっちがいいのよ？」

『貰っても困るんだけど』

呆れた声で俺にそう言う篠ノ之、木彫りの熊とかペナントって飾るとカツケーと思うんだけどなー。

仕方ない俺のチョイスで選ぶしかないんだけど、篠ノ之が気に入りそうなんもんって言われてもどうしようかねえ。

「まっ、考えたって仕方ねーからお前のお土産は向こうで選んで来るわ」

『三日と言わず、ずっと向こうに居たら？ 君の馬鹿に悩まされずに済むし清々するからね』

うーんキツツイお言葉、そっちがその気なら俺にも考えがあるぞ篠ノ之？

「んじや、お前のお土産は親父に勧められたジンギスカンキャラメルにするわじゃーなー」

『はあ!? ちょ、待てって!? そんな明らかな地雷商品——』

篠ノ之が何か喋ってたけど途中で電話をガチャ切り、実際どんなもんか知らねーけどキャラメルだし食えるだろ。

さーて問題は他の友達に何買ってくかだよなー、一杯買わなきゃいけないからなあ……。

そんな事を考えながら俺は鳴り響く電話を敢えて無視するのだっ
た。

幕間：兎から見た馬鹿 4

冬休みに入ったんだけど、この数日暇を持て余してる。

というのも、普段騒がしいあの馬鹿が北海道に行ったからちーちゃんくらいしか話し相手が居ないし、ちーちゃんもちーちゃんて剣術の稽古で忙しい。

居たら居たで鬱陶しいし、居なければ居ないで暇を持て余すあたり習慣つてのは恐ろしいんだね、東さん痛感しちゃった。

アイツ、ジンギスカンキャラメルとかいう訳の分からないお土産買って来るとか言つてたけど……冗談、だよな？

あの馬鹿ならやり兼ねないつてのが怖い、そんなゲテモノを買つて来るのを止めさせようとしたんだけど結局電話に出なかったし。

カレンダーを見れば今日帰つて来るはず、アイツは友達が多いつて言つてたから直ぐには来ないだろうけど、性格的に必ず家に来る。

別にアイツが来る事を待つてる訳じゃない、朝から何度も時計を確認してるけどあのアホの持つて来る物が不安で仕方ないだけなんだから。

ある意味パンドラの箱に近い、当たりかハズレか来てみるまでわからないんだからほんとタチが悪いね。

……この間のスノードームは少し良かったけど。

そんな事を考えると、軽い足音が部屋の外から私の部屋に向かってるのが聞こえて来た。

音の響きから私くらいの子供、ちーちゃんにしては音を立て過ぎてるしあの馬鹿なのは間違いない。

「よーさんぼー、二日振りだなー」

「あーあー、せっかく静かだったのに」

「ふっふっふ、このお土産を見てもそんな口利けるのかなあ？」

そう言って馬鹿は紙袋の中を漁り始めた、ジンギスカンキャラメル？ 木彫りの熊？ ペナント？

「てれれてってー、さっぽろみそらーめんきやらめる〜」

「あ、えっと、えう？」

思わず変な声が出た、えっ？ 味噌ラーメンキャラメル？ なんてそんな物売ってんの？ 味の想像が付かないんだけど？

けど一つだけ分かる、それはこのキャラメルがジンギスカンキャラメルと同じ方向性の物だと言う事だ。

「ほらさんぽー、あーん」

「だ、誰がするかそんな事!! というか食べさせようとしなくてよ!?!」

嬉々としてキャラメルを私の口に持って行こうとする馬鹿、見えてる地雷つてのもあるけどそれと同じくらいにあーんの体勢が気恥ずかしい。

いや、恥ずかしいじゃなくて鬱陶しいの間違いだ、気安く私に近づいて来るなよ!!

「いや、食ってみたら案外美味しいかもしれないじゃん？ てか俺が味噌ラーメンもキャラメルも好きだし、どっちも合体したらもつと美味いって!!」

「絶対それは無いってば、君のその好きな物全部乗つけたらもつと好きになるって理屈何とかしろよ!!」

「いや絶対美味いって!! なんなら俺が一つ食ってみて——」

「なら食って見ろよ!!」

私はそう言いながら馬鹿の手からキャラメルをひったくり、包装を剥がして中身を馬鹿の口へ突っ込んだ。

「むぐッ!?!」

「ほら美味しいんでしょ!?! 良く噛んだら?」

馬鹿はもぐもぐと咀嚼してたけど段々と口の動きが鈍って行き、途中で動きが止まってしまった。

しかも顔が青い、普段ポジティブなコイツが黙るなんてよっぽど不味いんだろう。

吐かれても仕方ないし、ティッシュを差し出したんだけど馬鹿は涙目のままで飲み込んだらしい、無言のまま膝をついてる。

「で？ 味は？」

「……濃いキャラメルかと思ったら、よく分かんない味」

「美味しい？」

「美味しくない……」

「そらそうでしょ」

少し考えれば分かりそうなのに、直感と感性だけで生きてるからそうなるんだよ、まったく……。

「はあ、ちよつと待ってるよ、何か飲み物でも持って来るから」

「……うん」

取り敢えず私は台所からジュースを取ってきて、馬鹿に手渡して口直しをさせる。

馬鹿は手渡されたジュースを飲みながら一息ついたのか、少し元気を取り戻したようだ。

「あ、ありがとう、さんぽー……」

「ふん、これに懲りたらもう少し考えて物を買って来るんだね」

「これでも考えて買ってきたんだぜ？ 予想と違った味だっただけで……」

「ぼーか、用が済んだならとつとと帰れ」

「い、いや、お前にや、もう一つ買って来てんだよ」

そう言ってコイツは紙袋の中からまりもを取り出して来た、なんでもまりも？ でもまだゲテモノキャラメルよりはマシかぁ……。

「……仕方ないから貰ってやるよ、キャラメルは持って帰れよ？」

「……おうそーする、悪りいけど今日はもう帰るな?」
「う、うん」

てつきり旅行の話でもされるのかと思ってたのに、馬鹿は案外あっさり引き下がってしまった。ゲテモノキャラメル恐るべし。

——とか考えてたら次の日に朝一で私の家に来たかと思っただらいつも以上のマシンガントークを炸裂して来た、一日置いたからその反動なんだろう。

……ゲテモノキャラメル、二度と食わせない。

小学二年生 1

——春になって新しいクラスになった。

今年も篠ノ之と一緒にクラスならいいなーとか考えてたんだけど、残念ながら別々のクラスで少し悲しい。

まーでも同じ学校の生徒だし休み時間にも会いに行けるからいいか、それよりも重要な事がある。

「よー織斑ー、今年はお前と一緒にかー」

「そうだな、私も知り合いが同じクラスに居てホツとしたよ」

——そう、あの篠ノ之が大好きな織斑が同じクラスだって事だ。

別に何が悪いって事じゃないんだけど、次に会いに行つた時にヘソ曲げられるかもしれねーんだよなあ。

……………まいつか、この機会にそれよりも織斑とも友達になろう、うん。

「つー訳で織斑や、友達になろーぜ？」

「別に構わないが……前にも言わなかったか？」

「んー覚えてねーから改めてなー、って良いの!？」

「あ、ああ、束と違って断る理由が無いからな」

思わず食い気味に織斑に迫っちゃったけど、織斑とはあつさりと友達になれた。

てつきり罵倒されたり、ボール蹴り付けられたりされると思ってたからすつごい肩透かし感がある。

「なー織斑ー」

「どうした？ 何か私に話でも——」

「ちよつと罵倒してくんない?」

「……………は?」

うっわ、織斑がすつごく困ってる、普段クールビューティなコイツ

が反応出来てないとか凄くレアな光景じゃね？

いや、俺も自分で訳わかんねー事言ってる気するんだけどさー、朝一の冷めた目とか一言多い嫌味とかが無いのが物足りねーんだよなあ。

篠ノ之に会いに行こうにもクラス一個一個見てくのは時間かかるし、それならいつそ織斑に頼んじまおうってすんぽーよ。

「待て待て、何故私がお前を罵倒しなきゃならないんだ!？」

「いやなんとなく物足りないんだよ、だから織斑頼む!! このとり!!」

「頭を下げるほどの事なのか!？」

「だって毎日毎日さんぽーと口喧嘩してたんだぜ? いきなり別のクラスになったからってハイソーですかってやめられないだろ!!」

つい身を乗り出しながら織斑の方に顔を近付いてたんだけど、その時背中の方からすっごい低い声が聞こえて来た。

「——おい、何ちーちゃんに迫ってたんだよ」

聞き馴染みのある声、つか最近まで毎朝聞いた篠ノ之の声だ、いつの間にも後ろに?

「ふっさんぽー、俺の背後を取るとは流石だな」

「お前に気付かれたら私はショックで寝込む自信があるね、んな事よりちーちゃんから離れるよ、ちーちゃんに馬鹿が移るだろ」

「くっ……なら織斑、俺と一緒に馬鹿しよーぜ!!」

篠ノ之の罵倒でエンジンが掛かった俺はそのまま織斑の肩に腕を回し、笑顔で親指を立てる。

その瞬間篠ノ之が『あー!!』とか叫びながら俺と織斑を引き離し、織斑に抱きつきながら倒れた俺を踏みやがった、じょーだんじゃんかよ。

「この馬鹿!! 変態!! 何ナチュラルにちーちゃんに触ってたんだよ!!」

「お、おい東？ 私は大丈夫だから踏みにじるのはやめてやれ」

「ちーちゃん!! この馬鹿にそんな優しさ要らないから!!」

「ひ、酷くね？ 俺はただ織斑と仲良くしたかっただけなのに……」

仲の良い奴って肩組んだりするし、そう考えるとアダ名と一緒にのレ
ベルで仲良しアピールになるんじゃない？

そう考えて肩組んだんだけど、篠ノ之の反応を見た感じだと全然違
うらしい、一個勉強になったわ。

何時も以上の罵倒を受けていた俺は予鈴のチャイムで解放されて
から、やつとこき椅子に座れた。

「うへー、篠ノ之の奴今日は一段ときつちいなあ」

「お前は何時も東とあんなやりとりをしてたのか？」

「おー、何時もどーりだぞー」

「……ある意味すごい奴だな、お前は」

おろ？ なんか織斑から感心されたけどなんかやつたか俺？ で
も織斑が俺を見る目がなんかこう……テレビで見た珍獣ハンターみ
たいな、変わった生物を見るような目な気がするんだけど気の所為だ
よね？

「前々から気になってたが、お前は良くあの東と付き合えるな……
私が言うのもなんだが変わった奴だな」

「よーく言われるよーそれ、でもほらふつーより変わってる方が
いーじゃん？」

「いや、まあ、それはそうかもしれないが……なあ？」

「気にしな〜い気にしな〜い」

俺の親父も『普通の人生よりも変わった人生を歩めよ』って良く
言ってるし、人とズレてるってのは俺にとっては褒め言葉よ!!

篠ノ之も毎日変人変人って褒めてくれたし、俺は親父の教えの通り
に生きてるぜ!!

………そんな事を織斑に言ったらすごい困った顔された、なん
でだろ？

小学二年生 2

ドッジボール、コートの中の人にボールをぶつけて先に全員を倒した方が勝つゲーム。

俺は体育の授業でそのドッジボールをしてるんだけど、相手に織斑が回ったので無理ゲーになってる、誰か助けてくれ。

いや違うんだよ、相手は残り織斑一人なんだよ、後織斑当てるだけで勝てるのになんでこれが倒せないんだよ!!

そんな事考えてたら俺の横に居た奴がアウトになった、顔の横を風船が弾けたような音と一緒に何かがすつとんでったからマジで何が通ったのか分からなかった。

あ、でも横に居た友達がすごすごコートから出てったから多分ボールが当たったんだね……。

「さて、後はお前だけだな？」

「……15人抜きって、15人抜きってお前」

「……大丈夫か？」

「お前スゲーな織斑!! ヒーローみてーな強さしてんじゃん!!」

やっぱカッケーな織斑、まさか16対1をタイマンに持ってかれるとは思わなかった。

しかも、奴は一つ大きな間違いを犯した!! それは俺のコートにボールを落としてる事、つまりこの勝負は俺の手の上!!

「お前は強かった、一気銭湯って奴だな!!」

「……一騎当千と言いたかったのか？」

「それぞれ、取り敢えずお前は強いけど俺の方がもつと強い!!」

だって俺には必殺技があるからな!! 去年から使い続けてる俺の持ち技!!

「くらえ大車輪シュート!!」

「いや、私の目にはただぐるぐる回ってるだけにしか……」

「はっはっは!! 分かってないな織斑!! 俺自身が駒の様にくるくる回る事で投げる瞬間をごまかしつつえんしんりよく?とか言うのでパワーを上げ……上げ……おえ」

気合いを入れて回り過ぎた、めっちゃ目回ってるし気分悪い、おえっぷ。

途中から頭がぐわんぐわんし始めたので膝をついたらボール落とした、待ってー俺のボール。

転々と転がってつたボールは織斑の足元にある、しかも拾った織斑が俺に当てようかどうか迷ってやがる。

「くっ、流石だ織斑……」

「いや、私は何もやってないんだが……」

「だが俺を倒したからって良い気になるなよ? 第二第三の俺が必ず現れ……ウツ!」

「……もう喋るな」

いっぺん言って見たかった悪役のセリフを言ったら余計に吐き気がヤベエ、呆れた織斑が俺にボールを当てるのやめてくれたからなんとか吐かずに済んだけど、もし当てられたかと思うと……想像したくねえ。

あ、吐き気が治ったらあつさりやられたよ、ボールの回転ヤバくて触った瞬間両手が弾かれたからキャッチ出来ねーよ。

体育の授業も本来より早く終わっちゃったから残りの10分くらいが自由時間になったからてきとーな木陰で少し休憩してたんだけど、そしたら織斑が俺の様子を見に来てくれた。

「まだ少し気分が悪そうだな、大丈夫か?」

「おー織斑かー? くっそー、後もう少しで勝ったのになあ次は絶対に負けねーぞ織斑!!」

「元気な奴だなお前は……」

「さんぼーにも言われたわそれ、『君は元気だけが取り柄な馬鹿だからね、元気だけがね!!』ってさー」

「本当に普段お前たちはどんな会話をしてるんだ？」

そんなに不思議な事かな？ 別に普通の会話だと思っただけだよ、話してるとちゃんと返事してくれるし、この前なんか唐揚げにレモン汁かけるかかけないかで口論になったしよ。

そーいや織斑つてどっち派なんだろう？

「てな訳でさ、織斑はかける派？ かけない派？」

「一体なんの話だ？」

「レモン汁？」

「すまない私の聞き方が悪かった、結論だけでなくその過程を話してくれ」

「ん？ からあげにレモン汁かける派かかけない派かって話」

「……東もこんな気分だったのか」

なんだろう、織斑が疲れてるみたいだけどなんかあったのかな？

うーん、次の休み時間にでも篠ノ之に聞いてみるか？ アイツは織斑の事良く知ってるし。

うんうんと次の休み時間の予定を立てた俺は、とりあえず今の疑問を解決する為に織斑に答えを聞いてみる。

「んでんで？ 結局どっちなのよ？」

「私は……かけない派だな」

「んだよ、お前もさんぼーと同じなのかよ」

「お前はかける派か？ まあ正直私はどちらでも——」

「おう、俺はレモンを半分に切って衣がふやけるくらい絞ってかけてるぞ」

「それはいくらなんでもかけすぎだろ!？」

「さんぼーと全く一緒の反応してやがらー、これだからかけない派は……」

「誰でも同じ反応だ!! お前は馬鹿か!？」

その後俺は織斑と食べ物に対する議論をおっぱじめ、一つ新しい事

を学べた。

——それは俺の唐揚げの食べ方が少数派だったと言う事だ、何故？

ある日の休み、俺は篠ノ之ん家の道場で織斑に竹刀を向けていた。というのも『剣を交えた相手とは分かり合える』ってアニメで言ってたからこうやって織斑と戦おうとしてる訳よ。

「前からいつペンやってみたかったんだよなー、剣術つての」

「いや、だからって……いきなり私か？」

「当たり前だろーだってお前と分かり合う為にやる訳だしさー」

子供用の竹刀を振り回してた俺は織斑に向けて構えたんだけど、なんだか織斑が迷ってる感じがするな。

「ちーちやーん、一回その馬鹿けちよんけちよんにしちやつてー!! 遠慮しないでいいよー!!」

「ふっ、バカめ織斑!! そんなで篠ノ之!! 俺の手を良く見てみる!!」

「竹刀を二本握ってるな」

「竹刀を二本握ってるね」

「そう、竹刀が二本!! 1+1は2だから俺は一刀流の織斑より二倍強いって事だ!!」

ふっ我ながら完璧な理論だ、1+1も分からないなんて篠ノ之もまだまだだな!!

「さーこい織斑!! けちよんけちよんにしてやるからな!!」

「酷くやり辛いんだが何とか出来ないか? 束」

「あ、あはは、流石の束さんもコイツの頭ん中までは分からないかなあ……というかどうかどうにもならない?」

「えーいごちやごちやと、織斑がこねーんなら俺から行くぞ!!」

二人で話してる間に織斑の側に走り寄った後、二本の竹刀を同時に織斑へ振り下ろしたんだけど、振り下ろした筈の竹刀が二本とも無かった、あれっ?

しかもめっちゃ手が痛い、つかじんじんしてて握る力が無くなったんだけど何が起きたのよ？

ぽかんとしていると後ろでカランと言う音が二回、ゆるくり振り返ったら子供用の竹刀が二本転がってた、アレ俺が握ってた奴だよな？

織斑の方を振り向いたら真剣な表情で竹刀を振り切った姿勢だった、ああなるほど、弾き飛ばされたのか……。

「ん、ん、ん」

「こ？　こがどうした？」

「さあ？　鶏にでもなったんじゃないかな、トリ頭だし？」

「こ、これで勝ったと思うなよッ!!」

完全に俺の負けだけど、負けだけだ!!　一回負けたただけだからセーフセーフ!!　いやむしろ？　一回負けても二回勝ったらお釣りが来るじゃん？　だから全然だいじょーぶ。

だから俺が篠ノ之ん家の道場から走って逃げたのは……あれだ、そう、えーつと、なんちゃらの撤退って奴!!　決して負けて悔しかったからじゃねーからな!!　今日は単純に作戦の立て直しをするだけだからな!!

——　んでまた一週間後の同じ日。

今日はアレから腕立てと腹筋をやって来たからこの間よりも俺は更にパワーアップしてる筈、今日こそ俺は織斑に勝てるぞ!!

「つー訳で織斑、先週の続きだ覚悟しろよ!!」

「また来たのかお前は……」

「とーぜん!!　しかも今回は更に背中に二つ付けてるからこの前みてーにはいかねーぞ!!」

「いや、それは……」

織斑がまた困惑した顔してるけどなんでだ？　篠ノ之なんかなんにも言わずに溜息吐いてめっちゃかわいそうな目してただけ？

初めて見る目してら。

けどまた織斑がどうしようか悩んでるけどこの前は斬りかかったら反応してたし、今回も遠慮なく斬りに行ってもいいだろ。

「隙あり!! 織斑敗れたり!!」

「——ハアッ!!」

棒立ち相手に両手で振り切ったんだけど、めっちゃやくちや早い一振りでもた両手の竹刀を吹っ飛ばされた、コイツ隙無くね？

だ、けどまだ俺の背中には二本竹刀が付いてる、甘かったな織斑!!

「あ、あれ？ し、竹刀に手が届かねー」

「……隙ありだ」

俺がまごまごしてる間にペシッと頭に振り下ろされた織斑の竹刀、まーた負けたのか俺……。

くつ、今回は俺の作戦が悪かったただだから負けはノーカン、握る所上にしてたから手が届かなかった訳だし？ 今度は逆さに付ければ問題無し!!

「もーいつかい!! もーいつかいだ織斑!!」

「それはいいんだが……二刀流やめたらどうだ？」

「嫌だ!! 二刀流ってかけーじゃん!!」

ごそごそと背中の中の竹刀を逆さまに付け直した俺は泣きの一回を頼んだ後、また二本竹刀を構える。

二回負けたから俺は学んだ、同時に竹刀を振り下ろしたから一発で弾かれる訳だから一回ずつバラバラに攻撃したらいいんだって。

なんて単純な事だったんだろう、早速実践してやるぞー。

とか思ってた斬りかかったら竹刀を別々に弾かれたぞちくしょう、織斑強すぎるだろ!?

「け、けどまだ二本残ってる、今度こそ俺の勝ちだな織斑!!」

「——甘い!!」

腰に手を回そうとしたら、織斑は弾き落とされた俺の竹刀を拾って切りかかってきた。

とーぜん避けられる訳も無く、見事に引っ叩かれた俺は三回の負けで勝てない事を悟る。

「く、くそッ、こうなったら……」

「ん？ 何をする気だ？」

「織斑!! 俺を弟子にしてくれ!!」

「……は？」

そう、勝てないのなら織斑に弟子入りする!! そーすれば俺も強くなれるし織斑の弱点も知れて一石二鳥ってすんぽーよ!!

はーっはっはっは、弟子入りしたらぜってー勝ってやるからな織斑

!!

小学二年生 4

「なー頼むよししよー、俺と稽古しよーぜ？」

「師匠はやめろ馬鹿!! 私はまだ弟子を持つには早いと何度言え分かるんだ!!」

「いーじゃんちよつとくらいさー!!」

俺が織斑に弟子入り（勝手に言ってるだけだケド）した日からほぼ毎朝こうやって付きまとってるのに中々コイツは俺に稽古を付けてくれない。

あんだけ強けりや別に弟子の一人や二人取ったっていーじゃん、なんで織斑はそれが分かんねーかなあ？

「大体、私はお前を弟子にした覚えは無いぞ!? なのに何故そんな話になるんだ!!」

「俺がお前の弟子になりたかったから弟子になったんだよ!! 悪いか!!」

「当たり前だこの馬鹿!! 私もまだまだ未熟者なんだぞ、お前の相手をする暇など無い!!」

「いやだ!! 俺はお前に勝つまで付きまとうのやめねーからな!!」

「あーもう、鬱陶しい!!」

途中から段々と織斑もイラついて来てたのか、机の中からノートを取り出して俺の頭をひっぱたいた。

スッパーンっとハリセンでも使った様な音が教室に響き叩かれた場所がヒリヒリする、ナニコレ快感。

「す、すまん、つい手が出て——」

「ししよー!! もう一発、もう一発!!」

「……どうすれば黙るんだこの馬鹿は」

頭を叩かれた瞬間に鳴ったあの良い音、そして頭の先から突き抜け

る衝撃、じんじんと痛むつむじ、その三つのコンビネーションが最高なんだ、篠ノ之に叩かれた時よりも気持ち良かったし、どーしたらもう一発叩いてくれるのかね？

いや待てよ？ さっき織斑に絡んでたら引つ叩かれたよな？ 篠ノ之と話す時のノリで話したら良いんじゃないやねーの？ やっぱ俺って天才じゃん!!

「ししよーししよー!! 今日一緒に飯食おーぜ!!」

「話の脈略が飛びすぎだ!! いきなりなんでそうなる!!」

「いーじゃん!! 新北海って言うだろー?」

「それを言うなら親睦会だ!!」

「それぞれ、それやろーぜ!!」

俺は織斑にへばり付きながらそんな風に付きまとしてたんだけど、織斑の手が震えてるのに気が付いた。

そーいや前に織斑はからかわれるのが嫌いだって篠ノ之が言ってたよーな……。

「なーたのむよちーちゃん!!」

「そーかそーか、そんなに叩かれないのか……どうやらお前には遠慮が要らないようだな?」

ぷるぷると震えていた織斑は、そのまま俺の頭をまたノートでひっぱたいてくれた、なるほどコイツに頭を叩かれるにはからかったら良いんだな?」

「ひゃっほう!! いい感じだぜししよー!!」

「……去年この男の事で束を散々からかったが、後で謝らないといけないか」

そう言って深い溜息を吐いた織斑はぐったりと机に突っ伏しちゃった。

多分疲れてるんだろう、なんで疲れてんのかしらねーけど俺は弟子だし、ししよーのマッサージくらいしなきゃいけねーな。

「つー訳で肩揉むぜししよー」

「しなくていい、揉まれるほど肩は凝ってない……」

「なら腰か？ 親父も腰揉んでくれて良く言ってるし」

「腰も要らん……」

「ならお尻か？ それともふともも？」

「……もう静かにしててくれ」

あれ？ 織斑の奴なんでそんな余計に疲れた声してんだろ？

しかも静かになって言われたし何がアレだったのかな？

うーん、でもこーいう時篠ノ之の奴はなんだかんだで構って欲しそうな事多いし、織斑も似たようなもんだろ。

とーなると……なんの話すつかなあ、こないだ唐揚げの話したから飯系は被ってるだろ？ きのこの山とたけのこの里どっちが好きかってのは聞くまでも無くたけのこだろーしなー、漫画か？

「てな訳でししよー、ししよーはどんな漫画が好きよ？」

「お前は常に何か話してないとダメなのか……」

「えっ？ 別に俺は黙れて言われたら黙れるよ？ まー確かに喋り出すととまんねー奴っているよなー、そーそー篠ノ之も好きな事話させると全然話止まんねーし、アイツもそのタイプじゃん？ その点俺は直ぐに黙れ——」

「分かったから少しの間何も話すな、な？」

織斑は気怠げにそう言いながら俺の頭にチョップを落とすと、そのまま俺の口を手で塞いだ。

もごもご口を動かしながらもとりあえず分かった事は、織斑は篠ノ之と同じ距離感じゃダメらしいと言う事。

コイツと仲良くなるにはもー少し会話して織斑の事を知らねーとなあ。

そんな事を考えながら、俺は織斑が口から手を離してくれるまで黙ったままになるのだった。

今日は昼休みに織斑達と昼メシを一緒してた。

すんげー露骨に篠ノ之が嫌な顔してたけど、いつだったかみたいにボコボコにされてゴミ箱inとか言うマネされなかつたから実はちよつとホツとしてる。

……ただ今回は織斑が明らかに疲れた顔してたのが気になるけど。

「……ちーちゃん、私の気持ち分かってくれた？」

「……ああ、痛いほどにな」

「なーなーなんの話ー？」

「君には関係無い話だよ馬鹿」

溜息を吐きながら弁当の蓋を開けた篠ノ之を見て、何時もの事かと納得した俺も同じ様に弁当を開ける。

今日は1段目に俺の好きなオムライスと2段目に俺の嫌いなピーマンの野菜炒めとミニトマトが敷き詰められてた、コレ昨日俺が意地でも食わねーって残した晩飯のおかずじゃねーか。

母さんの野郎!! 1段目でぬか喜びさせやがって……!! けど食わなかったらぜってー怒るだろーしなあ、てか余裕で指を鳴らしながら拳握ってる母さんの顔が思い浮かぶ。

「なーさんぼー、ピーマン美味しく食える裏技ってなんかねーの？」

「良く噛めば?」

「ししよー、さんぼーが冷てーんだけど？」

「平常運転だろう?」

「ふん、野菜つてのは噛んでれば甘くなるんだよ、どーせ良く噛まずに食べてるんでしょ」

「うっ、確かに……」

篠ノ之の言う通り噛まずに食ってるんだよなあ、けど苦いもんは苦いし……うーんでも篠ノ之が言ってる事だから間違いないな、うん。

アドバイスの通りにピーマンを食ったら案外いけたので、苦手克服
パワーでレベルアップした俺は前から二人を誘いたかった事がある
のを思い出した。

「そーいや二人とも、今度の土曜日暇？ 親父が遅咲きの桜見に行こ
うって言うてんだけど、良かったら一緒に行こうぜ？」

「は？ なんで私が君と一緒に花見しないといけないのさ」

「ふっ甘いなさんぼー、お前はどーせししよーが付いて来るなら付
いてくるだろ？ どーだししよー、花見一緒に行こうぜ？」

「花見……か」

意外に織斑の奴が乗り気なんだよなー、少しそわそわしてるっつー
か興味津々っつーか。

「なー行こーせししよー、親父も母さんも気にしねーし」

「いや、私は花見に行った事が無くてだな……」

「ならマジで行こう!! な？ な？ 良いだろししよー？」

俺は織斑の手を掴み、母さんが見てるドラマでよくやってた見たい
に目線を合わせながら顔を近づける。

そーいや織斑もきれいな顔してるよなあ、篠ノ之つて可愛いつて感
じだけど、コイツも篠ノ之と一緒に見てて飽きねーんだよな。

「近い近い!! もう少し離れろ!!」

「えっ？ 頼み事つてこーやってやるんじゃねーの？ 母さんの見て
たドラマじゃこーやってたぞ？」

「どんなドラマだ!？」

「おいこの馬鹿、ちーちゃんに迷惑かけんなつての」

「痛たたつ、耳引つ張んなつてさんぼー!!」

織斑を説得してたら耳引つ張られた、くっそこまでして行きたくな
いか篠ノ之!! だが織斑が行きたがってるからこのまま押し切つて
やる!!

えっと、こんな時ドラマの男の人つて何やってたつけ？ たしか

……ベッドの上で女の人を押し倒してたよな？

というわけで篠ノ之が耳から手を離れた後、俺は織斑を押し倒して馬乗りになって頼み込む。

「な？ 良いだろししょー？ 一回くらいさ？」

「ば、馬鹿!! 今自分がどんな体勢か分かってるのか!!」

「この変態!! 何ちーちゃんを押し倒してんだよ!!」

押し倒して織斑に迫ったらいつのまにか回り込んで来てたのかケツを篠ノ之に蹴り飛ばされて、今度は背中を踏まれた。

織斑も顔を赤くしてるし俺何か変なことしたのかな？ げしげしと篠ノ之に背中を蹴られながらそんなことを考えてたら、正面に回って来てた篠ノ之のあるものが俺の目に映る。

「このバカ!! アホ!! なんでもかんでも見たもの実践したらいいって訳じゃないんだよ!! ノータリンの君には理解出来ないかも知れないけどね!!」

「ぎ、さんぼー、一個いいか？」

「なんだよ!? くだらない事なら余計に蹴っ飛ばすぞ!!」

「パンツ見えてる、しましな奴」

「こ、こ、こんの変態!! スケベ!! えっち!! 見るなばか!!」

角度的に丸見えだったから素直にそう言ったら、篠ノ之はスカートを抑えながら顔真っ赤にして余計に蹴りを入れて来た、いや織斑を庇うように俺の頭の側に回ってきたのお前じゃん？ なんで蹴られなきゃなんねーのかな？ あっ、褒めりゃいいのか、女の方は褒められるの好きだって母さんも言ってたし。

「さんぼー!! そのパンツ似合ってるぜ!!」

蹴られながら親指を立てて笑顔を浮かべた瞬間、篠ノ之の蹴りが俺の顎先を掠めたんだけど、そこから記憶が無く目が覚めたら保健室だった。

…一つ分かったのは女の子は下着を褒めたらダメだって事、今日の教訓って奴？

幕間：戦乙女から見た馬鹿

——私はこの馬鹿の事が嫌いじゃない。

強引に花見に誘われた形になるが、私も始めての花見と言う事で満更でも無かったし、内心では誘ってくれた事に感謝している。

ただ、素直に礼を言おうにも花見の場所に行くまでの移動時間に持ち前のマシンガントークに負けてしまったのと、着いたら着いたで束とお菓子について熱く語り合っているので口を挟めない。

……こんな光景は滅多に見れる物じゃ無いはずだったがこの一年でそれもすっかり見慣れてしまったな。

彼の事を知ったのは一年程前、昼食の時に束が愚痴を漏らす事が多くなつた時の事だ。

珍しく他人について話す束に相槌をうつっていたんだが、次第に奴の口調から嫌悪感が消えて行つたので私もどんな男か気になつたのを覚えてる。

初めて会つたのは運動会の日、かなりハイテンションな男だと思つた。

常にマイペースで私達をその自分の雰囲気の中へ包み込む男、私は束ほど周囲からの孤立感を感じてないがそれでも自分の異常さは自覚している。

なので思わず他人とはある程度引いた位置に自分を置いているのに、この馬鹿はその線を気安く飛び越えて私達の元に来るのだ。

悪く言えば馴れ馴れしいんだろうが、この馬鹿と話しているとどうにもその悪印象を抱けない。

彼の両親が作ってくれたお弁当をつつきながらそんな事を思っていると、ヒートアップした二人が私の所へ来た。

「なあししよー!! ぜってーたけのこだよな!!」 きのことか邪道だよ

な!？」

「はあ?　ちーちゃんは君みたいな味覚音痴じゃないから絶対きのこに決まってるよ!!　ね?　ちーちゃん!!」

……このくだらない言い争いに巻き込まれて私はどうしたら良いんだろうか?　先程までの感慨が吹っ飛んだんだが。

そもそも私は別にそのどちらの派閥にも所属していない、だから私がやるべきなのは二人の仲裁だな。

「落ち着け二人とも、私はきりかぶ派だから中り——」

「えっ?　きりかぶ?　あのパチモン?　嘘だろししょー?」

「えっ?　きりかぶ?　あの模倣品?　嘘でしょちーちゃん?」

「おい、きりかぶの何が悪いんだ」

私がきりかぶ派だと知った瞬間、二人が『信じられない』と言った顔をして同時に身を引いた、束の奴口では嫌ってる様な風な事を言ってる癖に息ぴったりじゃないか。

というかだ、きりかぶ派と言っただけで何故こんなにアクションを取られないといけないんだ?

「そもそもだ、きりかぶだって発売元が違うだけで似たコンセプトのお菓子だろ?　なら別に——」

「出たよ自分だけは違うアピール!!　お前なんだよそれ、一線引いてんのがそんなにカッケーってか?」

「ちーちゃん、ちーちゃんはいつかそんな可哀想な人に……」

「……言い過ぎじゃないかお前ら?」

この馬鹿共、私がからかわれるのが嫌いだということのを忘れていないか?　自分で言うのもなんだが、口より先に手が出るタイプなんだがな。

「俺知ってるもんねー、お前こないだ本屋で少年漫画でサンドイッチしながら少女漫画買ってたるー?　大丈夫大丈夫、お前もじゅーぶん乙女だから!!」

「ちーちゃん……そんな事してたの……」

馬鹿の勝ち誇った顔と束バカの哀れみの目を見た瞬間、私の中の何かが弾けた。

そもそも少女漫画をどう買おうと私の勝手じゃないか、誰に迷惑を掛けた訳じゃないし、言ってみれば漫画を三冊購入してるからむしろ逆に本屋さんの売り上げに貢献してる!! なんだ? 私が少女漫画を読んだらおかしいのか!?

「キサマら……覚悟はイイな?」

「あ、あれ? ししよー怒ってる?」

「ち、ちーちゃん? ほら、桜きれーだよー、束さんもお腹減っちゃったなー、なーんて……」

「言いたい事はそれだけか?」

「あのっししよー? 目が、笑ってないんですけど……」

「ちーちゃん? なんで指鳴らしながら近寄って来るの? ほら、束さんのスマイルだよー?」

「それだけだな?」

「逃げるぞさんぼー!! あの目はガチだ!!」

「もーっ、君がからかうからこうなるんだよ!?!」

じりじりと間合いを詰めてやると馬鹿共は慌てて逃げて行った、まったく遅咲きの桜を見に来ている他の花見客に迷惑だろうに……。

そう思いながら捕まえに行こうと腰を上げた時、彼のお母さんから話しかけられた。

「千冬ちゃん、私の分まであのバカしばき倒して来て良いわよ?」

「あの、この場合普通止めるのでは……」

「私の説教には反抗的だもの、あの子」

ふん、と鼻を鳴らしながらお茶を飲む彼のお母さん、厳しい人だと思つた矢先に今度はお父さんの方がボソツと呟いた。

「ほら、千冬ちゃんがあの子を追いかけたら俺と二人き——
」

この発言の途中で彼のお父さんは高速のボデイブローを叩き込まれていた、なるほどあの馬鹿は父親譲りか……。

「分かりましたお母さん、お母さんの分まで躡けて来ます」

私はそう言っつて夫婦水入らずの状況にする為に馬鹿共の追跡に向かう、決して顔を真っ赤にして言い訳をしているお母さんに居た堪れなくなつた訳じゃないぞ？

ああ、ついでにもう一人の馬鹿も躡けないとな、人をからかう事が何を招くのかと言う事をな……。

小学二年生 6

夏、めつちや暑い季節になった。

ジメジメした梅雨の時期は外で遊べなかったし、身体にきのこでも生えそうなくらい嫌な感じだったけどもーそんな心配は無いね!!

耳に響く蝉の鳴き声、温度計の表記が40度を超えた道場、地面から湯気が出るぐれー燃えてる太陽、風も無いから余計に暑さをかんじるぞー。

……太陽なんか死んじまえ。

今日は休みの日を使って篠ノ之ん家の道場に來てるんだけど、人生で初めて友達ん家に行つて後悔したわ、暑すぎるだろ。

織斑の真似して道場の端っこで竹刀借りて振つてたけど、最初の一時間くらいで暑さに負けた、流石織斑だわ。

壁の方に寄りかかりながらシャツをパタパタしながら織斑の顔を見てると余裕そうに見えるんだけど、全然そんな事は無かった。

「なーさんぼー、なんかこう、暑くなくなる方法ってねーの?」

「知らないよそんなこと、暑いんだから話しかけてくんな」

おんなじ様にうちわ扇いでる篠ノ之に聞いてみたけど、返つて來た言葉がつれなかつた、と言うか篠ノ之の奴暑いって言ってる割には汗掻いてねーんだよなあ。

考えたら篠ノ之も織斑ぐらい強いし、強くなれば暑さにも勝てるのか……。

「なーさんぼー、お願いがあんだけどー」

「はあ? なんだよ……」

「ちよつと行つて、太陽倒して來てくんね? そしたら涼しくなるだろー?」

暑さに勝てるって事は太陽に勝てるって事、そして俺はこの通り暑

さに負けてへばってるから動ける篠ノ之に頼むのが良い筈。

「……そんなことしたら地球凍るよ?」

「大丈夫大丈夫、カイロもストーブあるし、いけるって」

「そんなので耐えられる訳ないじゃん」

呆れた様な目で俺を見る篠ノ之にマジでこの作戦はアウトだったのかと分かったので、とりあえず暑さを我慢する方向で行くしかなくなかった。

……暑さで頭の中がよく分からない事になってるだけなんだけどもね。

雨が長けりや嫌になるし降らないと降らないで暑すぎるし、なーんで年中春と秋じゃないのかなあ夏冬いらねーだろ。

そんな事を考えてると織斑が休憩時間になったのか、額に汗を浮かべながらこっちに來たので置いてあつたタオルとスポーツドリンクを投げ渡してあげた。

「ん? すまんな」

「おー、気にすんなって、つか俺が勝手に來て邪魔んならねーところでへばってるだけだし、こんくらいはなー」

「はーいちーちゃん、束さんのうちわ扇ぎだよーそこでへばってる馬鹿と違ってカツコいいいちーちゃんにはパタパタをプレゼントだよー」

「さんぼー、なんか何時もよりもアホっぽいぞー」

なんか若干のアホっぽさが出てるあたり篠ノ之も暑さにやられてたらしい、頭動かして室内温度計見たら41度になってた、恐るべし太陽。

「あ、一句出来た『まぶしいな、たいようなんか、きえちまえ』」

「いきなりなんだ?」

「ちーちゃん、コイツ今暑さで頭茹だつてるからいつも以上に意味のないことだと思おうよ? 多分思い付いた事を垂れ流しただけ」

反論したかったけど事実なので口を開こうとして止めた、今俺の頭

はでろんでろんになつてゐるだろうし。

家から持つて来た凍らせたペットボトルのお茶を頭に当てながら自分の頭の心配してると、篠ノ之と目が合った。

「どつたのー?」

「私的にはどーでもいいんだけど、冷やすなら首にしなよ」

「頭暑いから頭冷やしてんだけど、違った?」

「動脈と静脈が……つて言つても分かんないか、とにかく早く身体が冷えるんだよ」

「はえー、流石さんぼーだなー」

篠ノ之が言うなら間違いないだろう、そう思つて首筋にペットボトルを持つて行くと確かに気持ちいい。

「ありがとなーさんぼー、もー少ししたらまた竹刀振るわ」

「ふん、熱中症になられたら困るだけだよ」

ふいつと何時もの様にそっぽを向いた篠ノ之、何だかんだ言つて優しい奴だよなあ、弟か妹が出来たら絶対いいおねーさんになると思う。

そんな事を思つてる内に身体から熱が引いたので織斑に竹刀の握り方を教えて貰おつと。

「てな訳でししよー、竹刀の握り方と振り方教えてくれねー?」

「……まあ休憩の合間だしそれぐらいなら構わないぞ」

「やった、なら早速教えてくれよ!!」

普段から稽古付けてつて言つても中々やつてくんねーからなー、せめてこれぐらいは教えて貰いたい。

早速立ち上がつて竹刀を構えたら織斑が後ろからハグする様に俺の手を握つて握り方と振り方を教えてくれた、耳元で解説されるのが妙にこそばかったけど。

けどこれで俺は更にパーフェクトになった、はーっはっはっは!!

——とか言って気合を入れて全力で竹刀振り回してたら5分ちよつとでバテて篠ノ之に鼻で笑われた、ちくしょう。

今日は学校行事で町内清掃のボランティアをする事になった。

二人一組でクラスごとに分かれてのゴミ拾い、篠ノ之の奴が昨日の帰り道にブツブツ文句言ってたけど俺はこう言った活動は好きだったりする、だって授業受けなくていいし。

「あっちーけどやっぱ外はいいよなー」

「そうだな、それにこうやって町のゴミ拾いをしてると気分も良い」

「おー確かに、なんつーか町にこーけんしてる感じるよなー」

ゴミ拾いのトングで落ちてる吸い殻とかちり紙とかを拾いながら一緒に回ってる織斑と雑談していると、視線の先に篠ノ之が見えた。

思わず声をかけようとしたんだけど横に居た織斑が唇に指を当てて来たので思わず黙ってしまう。

よく見ると篠ノ之の横には同じクラスの人らしき子が居る、会話は無いけれど簡単な返事くらいは返してるので去年のアイツに比べたら大分変わったなあ。

「折角だ、このまま私達は私達のまま回ろう」

「えっ? なんで?」

「アイツがサボっていないのは珍しい事だからな、私達が接触するとやる気を無くすかもしれない」

「ふーん、そんなもんなのか?」

ま、確かに未だに俺達以外にまともな会話してるの見た事ねーしなあ、二年になってから余計に空を見てる事が多くなった気がするし、やる気出してるとなら水差すのもアレかな?

「……それに夏日のゴミ拾いで馬鹿二人の面倒は見たくない」

「ん? なんか言った?」

「いや何でもない」

「ふーん……おっ? 猫だぞししよー!!」

「フラフラと横道に行くんじゃない……さつきも注意しただろう」

「だって三毛猫の野良猫だぜ？　ちよつとくらい良いじゃん」

「ダメだ行くぞ!!」

「いてて、耳引っ張んなって!!」

息抜きのつもりで言ったのに織斑は真面目だからか全然通じなかった、篠ノ之なら止めなかっただろうに。

まあその真面目なところも織斑の魅力だし大人しく従つとこう、俺は学習する男だから!!

とか思ってたなら織斑に軽くチョップされた、なんでもアホな事考えたのが顔に浮かんでるとかなんとか。

もしかしたら織斑は前に断念した会話せずに意思疎通がやれるかもしれない……。

「残念ながら出来ないぞ、私は束とは違うからな」

「いやいや、考えてる事エスパーしてる時点で十分可能性があるって」

「勘だよ、特にお前は考えてる事が表情に出るだけさ」

「前にさんぼーにも言われたんだけど、そんなに顔に出る？」

「注視してればよく分かるよ」

がさがさと潰れた空き缶を入れながらそう言う織斑、注視って事は良く見れば分かる表情を俺はしてんのか……。

なら顔を引き締めてキリツとしてみるか？　ゲームに出て来る強キャラって大体織斑みてーにキリツとした顔してるし、そーすりやエスパーされる事ねーだろ。

………されても問題ねーけどさ。

「つー訳でししよー」

「なんだ？　そろそろ時間だろうし戻ろうと思うんだが……」

「キリツとした顔!!　キリツ!!」

「……………どう、コメントしたら良いんだ？　私は」

あれ？ 困られたぞ、何故に？

「いやほら、良く分かる表情してるっつーからキリツとクールな顔してみたんだけど？」

「……そ、そうか」

「ほら、こーゆーのってキャップ萌え？ って言うだろ、前にテレビで見たから知ってるんだぜ？」

「それを言うならギャップ萌えだ……」

頭を抑えながらため息を吐く織斑、頭でも痛いのかな？ するつてーと夏風邪か、辛いらしいし熱があるのかな？

もし本当に風邪なら一大事、俺は織斑の前に回り込んだ後に、顔を上げた織斑のおでこ俺のおでこをくっ付けて見たけど、織斑に熱は無かった。

けど、顔を真っ赤にした織斑に突き飛ばされた俺は背中をアスファルトのフライパンの上で焼かれてしまった、流石の俺もこの熱さは気持ち良くない。

「い、いきなり何をするんだ!? 反射的に突き飛ばしてしまっただぞ!」

「いやーははっ、頭押さえてたから風邪かなーっと思ってさあ」

「それなら手を使え手を!! 何故顔を近づけるんだ!? 羞恥心は無いのか貴様には!!」

「だって軍手外すの面倒くさいし……そもそもゴミ拾いの最中なんだから？ 手もきたねーだろ？」

トングも古い奴でちよつとサビが付いてるし、それ以外にも色々ゴミ拾ってるしちよつと女の子の顔に触るのは気がひけるんだよなあ。

大分顔が赤くなってるし、もしかしたら本当に風邪だったりしないだろうな？ うーん心配だ。

「なーししよー、もう一回熱計らせてくんね？」

「待て大丈夫だ、今から深呼吸するから顔をコッチに向けるな」

「深呼吸で風邪が治るのかよ？」

「……あれだ、病は気からという言葉があるだろう？ それと一緒だ、

呼吸を整える事で氣を練って体調を整えるんだ」

「な、なるほど、流石ししよー!!」

「……信じるとは思わなかった」

そっかそっか、病は氣功波だもんな!! 織斑なら自力で治すか!!

俺も将来氣が使える様にならねーかなあ、とそんな事を考えながら

俺達は学校に帰るのだった。

世の中には要らないもんが沢山あると思うんだ、ピーマンとかプチトマトとかさ。

いや、前に篠ノ之から裏技教わったけどやっぱ苦手なもんは苦手なんだよ。

大体無くたって生きていけるのになんで大人ってのは無理矢理にでも食わせようとするのかな？ この前もチンジャオロースのピーマンを『意地でも食わねー』って残したら母さんが『意地でも食わせろ』って言って一週間連続でチンジャオロース出してきたし、本当大人って卑怯だよな。

「だからさ、夏休み前のテストって要らないと思うんだよね？ さぼーもししよーも分かるだろ!？」

「束さんも今まで同じ意見だったけど君と意見が被ったからテスト必要派に寝返るね?」

「酷くね!? ししよーは俺の派閥だよな!？」

「私はお前のお母様に頼まれたからな、勉強を見てやってくれって」

そう、俺が自分の部屋で教科書を捲るハメになったのは母さんの所為なのだ。

偶々買い出しの手伝いに駆り出されていた俺は近所のスーパーでスポーツドリンクを買ってる織斑と会った、そこまではいい。

けど世間話の最中に織斑が『そう言えばテストは大丈夫か?』って口を滑らせたもんだから、そっから今まで全力で隠してたテストの存在がバレて……はあ。

母さんは花見の後もちよくちよく買い物とかで道場帰りの織斑とばったり会う事があったりして世間話をするらしく、話の流れで俺の勉強を見る事になったんだ。

んでどうせだからと歩く辞書の篠ノ之にヘルプの電話を入れて勉

強タイムがスタート、母さんの野郎何という卑劣な人なんだ!!

「鉛筆を握りしめてないで問題を解け」

「ぐぬぬ、ししょーの裏切り者め!!」

「仮にも私を師と呼んでいるのなら私が言った事には従え。東、問題を出してやってくれ」

「仕方ないなあ……問題、カナダのオンタリオ州とアメリカのニューヨーク州を分ける国境でもあり観光地としても有名な滝の名前は？」
「写真はこれだ」

頬杖を付きながら俺の勉強椅子に足を組んで座る篠ノ之と、地理の教科書を開き問題の答えになる部分を指で隠しながら写真を見せる織斑、なんとたつて家でまで授業を受けなきゃいけないんだ……。

けど、滝かあ……写真もテレビとかでよく見る滝だし、なんちゃらガラの滝とかじゃなかったかな？

「えっと、鶏ガラの滝？」

「違う、そんな出汁の出でそうな名前じゃない」

「海外の滝なんだから横文字に決まってるだろ馬鹿」

横文字？ 横文字かあ、ヒント貰ったし喉まで出かかってるんだけど中々出てこねーんだよなあ、いやでもそれっぽいのを思い出したわ。

「分かった!! バイアグラの滝だろ!」

そう俺が答えた瞬間篠ノ之の顔が真っ赤になり、座ってた椅子のクッションを顔面に投げ付けられた、何でだ？

織斑の方を見ても首を傾げてるし、何で顔真っ赤にしてんだろ？

「なーさんぼー、バイアグラじゃねーの？ バイアグラって横文字じゃない？ 意味知らねーけど」

「さ、さつきからそんな言葉を連呼すんなよ!! 私だって女の子なんだよ!」

「えっ？ 何言っちゃダメな奴なの？ 意味おせーてよ」

「そ、それは……その……あの……」

おろ？ 珍しく篠ノ之の目が泳いでやがる、顔も赤いしそれほど言
いにくい恥ずかしい意味なんだろうか？

見兼ねた織斑が篠ノ之のところに言っつて内緒話したと思っつたら、織
斑も顔を赤くしちまった。

しかもその後『こ、答えはナイアガラの滝だ』と少し上ずった声で
答えを教えてくれた、うーん惜しい。

その後もしばらくの間真面目に勉強してただけど、気が付いたら
もう大分遅くなってしまった。

「ん？ もうこんな時間か……」

「おーおー、夕飯の時間だぞー」

「ちーちゃん、今日はこのくらいにしとこうよ？ この馬鹿途中から
入って来た言葉が右から左に流れてたみたいだし」

「仕方ないな、続きは明日だな」

「明日も地獄が続くのかー、絶対母さんに仕返ししちやる」

ぱたぱたと勉強道具を片付ける二人だったが、途中で織斑のお腹
の音が鳴ってしまったので折角だし母さんに頼んで夕飯をご馳走し
てもらった。

最初は織斑も断ってただけど、勉強会のお礼と言う言葉と遠慮し
てる時にもお腹の音が鳴ったから結局食ってく事にしたらしい、篠ノ
之も織斑が居るからって理由で一緒にな。

「……………けどさ、俺一個言いたいんだよね。」

「……………なー母さん？ 今日で8日目だぞ？ いい加減チンジャオ
ロース以外のメシ作ってくれよ!!」

「アンタにはオムライス作ってやったでしょ？ 我慢して食いなさい
よ」

「俺の知ってるオムライスは中身の半分以上が微塵切りされたピーマ
ンとか言う謎料理じゃねーよ!?! 玉子の部分割つたら中緑色って俺
の目が腐ってんのかと思っつたわ!?!」

「はあお客さんが来てるのに意地はってんじやないわよ……いいから
食え」

「……………ハイ」

母さん、指鳴らしながら食う事強要すんのは反則だつて……。

織斑も笑い堪えてるし、篠ノ之なんかノーリアだし、お前らも覚え
てろよ……。

二人に復讐を誓いつつ、母さんの恐喝に負けた俺は仕方なくピーマ
ンを口にした。

……………甘くなるまでが苦いんだよなあ。

この前の勉強会から夏休み前までほとんど毎日織斑達と勉強する事になったんだけど、今日は篠ノ之が居なかった。

理由は単純、アイツに妹が生まれたんだよ……。

いやそら友達に姉妹が出来たんだから嬉しいよ？ 嬉しいんだけどさ、この間珍しく電話して来たと思つたら『あのね!! あのね!! 箒ちゃんがね!! 箒ちゃんがね!!』って言つて夕方から夜の12時くらいまでぶつ通しで自慢話されたもんだから俺は何も言えなかった。びつくりするくらいの妹大好き人間になつちまって正直驚いてる、前々から篠ノ之のお母さんのお腹がおつきくなつてたのは知つてるし、篠ノ之はその事にあんまり興味なさそうだったのになあ。

………後で聞いた事だけど俺の前に織斑も同じ目に合つてたらしい、朝の6時くらいから夕方ぐらいまでずっとマシンガントークだったとか。

あの妹に興味無いですよオーラは単純に我慢してただけみたいだね、うん。

あれ？ じゃあアイツ朝一で織斑に電話してその後直ぐ俺に電話して来たんだろ？ 半日ぶつ通しで話してたのか？ 前に自分の事一日を35時間生きる女つて言つてたよーな気が……アレ本気だったんだな。

「さんぼーの奴箒ちゃんだっけ？ 妹ちゃん産まれてからはつちやけたよなー」

「私もそれなりに付き合いが長いが、あそこまでテンションの上がつた束を見るのは初めてだ……」

「すっげーよなー、俺一切喋らせて貰えなかったもん、受話器置こうとしたら先読みされて釘刺されたし、アイツ妹好きすぎだろ」

「まあ少なくともこうやって勉強していれば妹に付きつ切りの束とは面と向かつて会う事は無いだろう」

「そーだよな、アイツ学校休むレベルで妹に付きつ切りだもんな、わ

「わざわざ来ねーよ……な？」

篠ノ之の中で大好きな織斑をぶち抜いた女の子だ、俺が年単位で仲良くなるうとしてるのに産まれた瞬間に俺より上にいるとかちよつと凹む。

けど妹かあ……俺一人っ子だし、箒ちゃんに何時か会わせて貰えなかな？ 『君を箒ちゃんに会わせたら馬鹿が移るだろ!』とかなんとか言われるのが目に浮かぶけど弟とか妹に憧れるんだよねー。

「気持ち分かるが今は勉強を優先しろ」

「まーたエスパーしてるな？ でもさんぼーが居ねーと静か過ぎてやる気がなあ」

「一言多い束の教えが良いのか、変わってるなお前は」

「静か過ぎるのが嫌なんだよ、身体動かしたくなつてさー」

どうも黙って座つてると身体がうずうずして来るんだ、織斑の教え方は丁寧なんだけど淡々として眠いしきー。

そんな事を考えながら背伸びしてたら玄関のチャイムが鳴ったのが聴こえて来た。

今日は母さんが居るし、出なくてもいいかーとか思ってたら階段を全力で走って来る音がする、親父や母さんとは音の大きさが違うし、織斑が溜息混じりに勉強道具を片付けてるから多分篠ノ之だな。

予想通り俺の部屋のドアを勢い良く開け放った篠ノ之は全力で走って来たらしく、髪の毛が乱れてたけど今まで見た事も無いくらい良い笑顔してるから興奮してるのがよく分かる。

「ちーちゃんちーちゃん!! それとそこの馬鹿!! さっきねさっきね!! 箒ちゃんが私の手を握ってくれたの!! それでね? 私の作ったミルクも飲んでくれたし、私の子守唄で寝てくれてね? もー可愛くって可愛くってね!! 今日『おねーちゃんだーいすき』って言うてくれてね?」

「な、なあさんぼー? いくら馬鹿な俺でも産まれたばっかの子が喋らないってのは知って——」

「そんな細かい事は良いでしょ!! とにかく箒ちゃんが可愛いくつて可愛いくつて、しかも今日の寝顔はスペシャルでスーパープリティーな寝顔だからちーちゃんに見せてあげようと思ったんだけどちーちゃん家に居なかったからこっち来たんだよー? ほらほらちーちゃん行こう行こう? あ、今日は特別に君にも箒ちゃんの寝顔見せてやるから着いて来なよ」

「いや、あの、俺達今勉強して……」

「は? 勉強して良くなる頭してると思ってたの? なんなら動物園の猿の方が君より賢いよ? 飼育されてる畜生以下の頭の癖にいちよまえに勉強に意欲だしてんじゃねーよ、私が見せてやるって言ってるんだから大人しく着いて来たらいいのになんで無駄な努力したがるかなあ? どうせアレだろ? 君はテスト当日になつて解答欄のズレに気が付かずに最後まで書いて0点になるオチなんだから早く着いて来いって」

わ、わーい、一年前に戻ったような気分だぞー。

おかしいなー、クローラー効いてんのに目から汗が流れてるぞー?

織斑が目元拭いてくれてるし、なんで汗がとまんねーのかなあ?

久々の本格的な罵倒に凹んでた俺は、篠ノ之に無理矢理引きずられる形で篠ノ之の家まで連れてかれた、横で手を引かれてる織斑も多分俺とおんなじ事考えてるんだろーなー。

……あ、箒ちゃんは可愛いかったよ。

篠ノ之の箒ちゃんファイバー（本人命名）を乗り越え、織斑と二人きりの勉強会でなんとかテストまで頑張った。

そのおかげで大分問題が解けたし、今回はちゃんと1問目から順番に解答欄を確認して答えを書いたから篠ノ之に馬鹿にされた様な事にはならない。

「ふっ、今日ほどテスト返しが待ち遠しい日はねーぜ」

「テストの日に全問解答できたとき張り切ってたものな、教えた側としても嬉しいよ」

「おう、ありがとなししよー!!」

この半月間、途中で箒ちゃんファイバーの所為で勉強会に来なくなった篠ノ之の代わりに宿題見てくれたり、教え方を工夫してくれたりと織斑には世話になりっぱなしだった。

なーんかいいお返し考えられねーかな？ 篠ノ之といい織斑といい、中々喜びそうなもんが思いつかねーんだもん、どーすつかね？

親父や母さんに聞くのもなんか違うだろうし、織斑の喜びそうなもんか……。

「つーわけでししよーや、なんか欲しいもんある？ 勉強会の御礼がしてーんだけど？」

「なに、礼を言われる様な事はしてないさ」

相変わらずクールな態度でそう言う織斑、本気でそう思ってるんだろうけどそれじゃ俺の気が済まないんだよなあ。

何とか俺のこの気持ちを受け取ってくれないものかと考えてたら予鈴のチャイムが鳴ったので雑談を切り上げる。

いやあそれにしても今回のテストは強敵だった、何せ問題が50問もあつたから時間ギリギリに終わったしなあ!!

けどその分手応えはあつた、これなら70点は行けるぞー!!

「——くん、早くテストを取りに来なさい」

「あつ、はい先生!!」

「はいどうぞ、今回は頑張りましたね?」

「ふふん、なんとたつてししよー……じゃなかった、織斑に勉強を教えて貰ったからな!!」

「ああ、先生も採点してて分かったよ、勉強したんだなあつて」

「そーでしよそーでしよ?」

「——解答用紙の裏表さえ間違えて無ければ平均点以上だったのに、残念だったな」

そう言つて、先生は俺にテストの解答用紙を渡してくれた。

右上にデカデカと赤ペンで書かれた0点の文字、そーいや名前書いた後に裏面確認してそのまんま解答したよーな気が……。

あれ? そんなバカな、こんな事がある訳が無い、きつと夢に違いない。

「な、なーししよー? ちよつと俺のほつぺたつねつてくれねー?」

「……普通、そんなポカはやらんぞ」

溜息混じりで織斑はそう言いながら俺のほつぺたを掴つてくれた、痛いから現実なんだネ。

ちきしよーマジかよ!! 俺散々母さんに全問記入出来たとか、70点はいけるとか自慢しまくつたんだぞ? あの母さんに0点だつてバレたら……考えたくねー。

「あの、ししよー? この事黙つててくれる気は……」

「……すまん、私はその手の嘘が嫌いだな」

「デスヨネー」

思わずカタコトになつてしまうほどどうしようもない、いつその前に10を付け足して100点満点に偽造して……ダメだこの先生採点が丁寧な人だから赤ペンでちゃんと間違い箇所を赤文字で記入してくれてる。

……50問全部に書き込まれてるから偽造もクソもねーや。

「なーなーししよー放課後俺ん家来てくれよ、俺多分母さんにど叱られるから形見分けを……」

「縁起でもない事を言うな、誠心誠意謝るしかあるまい」

「母さん説教の時の目付き怖えんだよ……足組んで座りながら説教だし、なんかこう、アレなんだ」

「はあ……仕方ない、私も一緒に謝ってやる」

「ほんとか!! ししよーマジ天使!!」

俺は織斑の手を握りながらお礼を言ったんだけど、何故か目を逸らされてしまった。

最近思うんだけど織斑の奴ってなんか目を逸らす事多いよなあ、人の目を見て話せて言うし俺の目を見て話してくんないかなあ。

「なんで目を逸らすんだよししよー、俺は単にお礼を言ってるだけだぞ?」

「れ、礼を言うだけなら手を握りながら顔を近づける必要なんてないだろう!」

「いやだってししよーの顔ってきれーだからさあ」

「お、お世辞はやめろ!!」

「えー? 俺単に思った事言ってるだけなんだけど……」

顔を赤くして横を向いてしまった織斑、篠ノ之に同じ事やっても『はいはい』くらいのリアクションだからなあ、ほんとなんでだろう?

——その後、織斑は約束通り放課後に母さんにテストを見せた時のお説教にフォローを入れてくれたので、軽いお説教で済んだ。

なので勉強会とフォローのお礼に、俺のお気に入りだったおもちゃのコルトパイソンって銃をプレゼントした。

まあ子供向けのプラモデルだからそんなに質の良い奴じゃないんだけどさ、漫画のキャラが持ってた奴だから今年のお年玉で買ったんだよねー。

織斑も確か読んでた漫画だった筈だし、俺の誠意は伝わったはず。でもまた断られるんだろーなと思っただけ、意外な事に『良いのか?』って言って受け取ってくれた。

……今年はこんな結果だったけど、来年は絶対満点とちややるぞ。

幕間：戦乙女から見た馬鹿 2

「……ふう、偶にはこんな日もいいだろう」

私は自分の部屋で最近買ったばかりの漫画を手にしながらいそ
う呟いてしまった。

今日は剣術の稽古も無ければ彼の友人達と遊んでるし、束は箒
ちゃんファイバーが再発して突撃してくる事も無い。

つまり誰にも邪魔される事なく思う存分好きな漫画を読み、好きな
アニメのDVDを見る事が出来ると言う訳だ。

以前彼に剣客系の漫画を借りて以来、私も息抜き程度には漫画を
買っている。

無論小遣いの範囲でなのであまり種類は多くないんだがそれでも
息抜きには十分、定期的に彼の持つてる漫画やDVDも借りてる事だ
しな。

さて今回も彼からDVDボックスを借りたんだ、原作を片手に映像
で動く都会のスイーパーを一日中見て過ごしてもバチは当たらない
だろう。

「ふふっ、さあてDVDも一巻から見直すとするか」

「えー、束さん的にはそっちのTVSP版の方が見たいかなー」

「む？ そうか、ならそっちに——」

『そっちにするか』と口にしかけたところで聞き覚えのある声が私
の後ろにある窓の外から聞こえて来たことに気付いた。

振り向いてみたら窓枠に肘を付きながら私の方を見つめる束が居
た。窓を開けていた私の不注意とは言え用があるならせめて玄関か
ら入って来たら良いものを……。

「何の用だ束、お前は箒ちゃんファイバーで忙しかったんじゃない
のか？」

「よいしょっと、箒ちゃんが寝ちやったからねー、寝顔ずっと見ても良かったんだけどこの前それで起こしちゃったから遊びに来たんだよ?。」

束がナチュラルに靴を脱いで部屋に上がって来たので多分今日は此処に居座る気なんだろう、休みの日まで疲れたく無かったんだがなあ。

溜息を吐きそうになるのを堪えながらも私はTVSPのDVDを再生したんだが、それと同時に束が思い出したかの様に服の中から圧縮された袋に入った何かを取り出した。

「あ、そうだちーちゃんにプレゼント持って来たんだった」

「プレゼント? 一体何を——」

「はい100tハンマー。頑張ってスポンジで作ったんだよー?。」

そう言っ束は袋の端を切り、中からスポンジで出来た100tと書かれたハンマーを私に手渡して来たが、何故こんな物を態々?

そんな疑問が顔にでも浮かんでいたのだろう、束は私の顔を見ると笑顔でサムズアップして寄越した。

「だってちーちゃんこの前一人でごっこ遊びしてたから必要かなーって」

「なっ!? 何処で見てたんだ!?!」

「窓の外からかなあ? 箒ちゃんフィーバー中に町の中走り回ってたら銃のプラモ構えて遊んでるちーちゃんが見えたからつい、ね?。」

「……………違う、違うんだ束、アレは違うんだ」

「エンディングソングもノリノリで歌ってたでしょ? 口の動きで分かったよ、良かったね窓閉めてて」

普段ならアイアンクローでも食らわせていただろう。しかし今の私はエンディングソングを歌いながらの一人ごっこ遊びを見られた羞恥心でとてもじゃないがそんな真似が出来なかった。

むしろ羞恥に染まった顔を見られたくないからと頭から布団を

被ってバタバタと悶えてしまう始末、仕方ないだろ!? 見られてると思わなかったんだから!!

いや待て織斑千冬!! まだ東にバレただけだ、口止めさえすればまだコイツは黙ってくれる。

そんな風に考えながら布団から顔を出したら窓の外に彼が居るのが見えた。

……友達と遊んでるんじゃないのか? 思わず顔を引っ込めてしまったぞ。

「あーつと、さんぼー? この状況なに?」

「ちーちゃんに聞いたら? てか君は別の友達と遊んでるんじゃないのかよ」

「昼飯の時間になったから解散したんだよ、そしたらなんかさんぼーがししよーの部屋に居るし、なんか布団に丸まっているし、気になったから声かけたんだけど」

……そういえば私もお昼ご飯を食べたばかりだ、時間的に一旦解散しててもおかしくないか。

しかしそれなら尚更顔を出せん。いや出したところで問題は無いかもしれないがああ馬鹿は私の赤面した顔を見て風邪か何かかと絶対に勘違いする、そうだったらまた何かされるに決まっている。

ここは居留守だ!! 彼が帰るまで布団の中に籠城してやる!!

「よつと、ししよーなのかあれ?」

「入るなら玄関から入れよ、ちーちゃんが困るだろ?」

「直ぐに帰るからいーつていーつて」

(良くない!! 早く帰れ!!)

「おーいししよー? 大丈夫かー?」

私のささやかな帰れコールは届かず、籠城していた布団を捲られた。

「よつ!! 大丈夫か? ししよ……う?」

「な、なんだ? 何故言い澀んだんだ?」

「いや、シャツ捲れてんぞ?」

慌てて布団に入って悶えたからか、シャツが思いつきり捲れて背中が丸出しになっていたようだ。

幸い前の方は大丈夫だったが、それでも捲り上がった背中を見られた事には変わりない。

「ししよーってやっぱきれいな肌してるよなあ」

そしてそんなタイミングで投げかけられたこの言葉で私の羞恥心は限界を越えた、というか顔が更に赤くなるのが自覚できたから早くどうにかしたい。

なので私は束が持つて来たスポンジのハンマーで彼の顔を叩き、それに彼が怯んだ瞬間に布団から飛び出すと一足先に逃げようとした束ごとまとめて外へ投げ捨ててやった。

……はあ、彼にもう少しデリカシーがあればなあ。

焼き芋を食べながら俺は思った、サツマイモって最強じゃね？

母さんがスーパーで買って来たんだけどこのほくほく感とねつとり感、んでバターと合体した甘みがその最強感を倍増する。

しかもサツマイモには焼き芋だけじゃなくてスイートポテトやきんとんみたいな仲間もいるし、やっぱ最強じゃん。

アイスに乗っけてもうまいし、やっぱり美味しいものと美味しいものは組み合わせたら美味しい。

秋は栗もあるし林檎も梨もある、母さんが作ったフルーツケーキも焼き芋と一緒につまみ食いしながら食べ物の秋をしみじみと感じてた。

——のはこの前までの話、そのつまみ食いたケーキは母さんが親父の誕生日だからと手作りした奴だったらしく、当分の間オヤツ禁止令が……ちくしょう。

取り敢えず今は家の中の雰囲気がヤバかったから織斑ん家に避難して愚痴をこぼしてる。

「酷くね？ 知らなかったんだしちよっとくらいは大目に見てくれたって良いと思うんだけど」

「その前に何故窓越しに話しかけるんだ、玄関に回れ玄関に」

「いや、だってししよーの顔が見えたし」

話するだけなら別に窓から顔出しても出来るし、そもそも家から真っ直ぐ来たら丁度織斑の部屋の前出るから玄関に回るのがめんどい。

そんな考えが顔に出たのか、織斑はやれやれと言った仕草をしながら椅子をこっちに向け、勉強机に頬杖をついて目を合わせて来た。

「それで？ 話はそれだけか？」

「うーん、特に用事があった訳じゃねーからなー」

「行き当たりバッタリな奴だ……」

「よっこいしょ、とりまゲーム機カバンに入れて持って来たしゲームやろーぜ?」

「結局入ってくるのか……?というか入って来るなら玄関に行け!! 靴も窓の外に脱ぎっぱなしにするな!!」

「だってこっちの方が楽し……?てかもう入っちゃったんだからいーじゃん」

「……はあ、今回だけだぞまったく」

仕方ないと言うような雰囲気だけど、一応ししよーが許してくれたのでそのままゲームをセットする。

……前に来た時にも思ったけど、織斑の部屋って片付いてるっちゃ片付いてるけど細かい所がアレなんだよな。

テレビの配線が絡まっていたり、本棚の漫画もよく見たら巻数が不揃いで並んでたり、自分の家だとズボラなのかな? 意外な一面を見た気がする。

「何か言ったか?」

「い、いやあ? 何も?」

思わず声がうわずつちまった、すっげージトツてした目されてる、やっべえ風邪でもひいたのかな? 背中がぞくぞくする。

ま、まあいいや、取り敢えず今日持って来たのはコントローラーを振ったりするスポーツ系のゲーム、野球とかテニスとかが部屋の中でできるんだー。

普段のスポーツ勝負とかなら絶対勝てねーけど、ゲームなら能力が一緒だからたまーに勝てるんだよなあ。

「ほいコントローラー、今日はテニスでもやろうぜ?」

「テニスか……本気を出して良いのか?」

「新しいソフトだからOK、必殺技とかある奴だし」

「テニスに必殺技?」

「ま、やれば分かるって」

ふつ織斑よ、このゲームは単なるテニスゲーじゃない、コートの中で分身したり相手の五感を無くしたりするよーなそもそもテニスの枠から吹っ飛んだテニスだ、勝たせて貰うぜ!!

そんな内心の悪巧みを顔に出さない様にキリッとした顔をしながら試合開始、織斑のリアクションが見たかったのでラリーの途中で唐突に必殺技を発動。

すると相手キャラクターの五感が消滅し、織斑側の画面が真っ暗になった、あまりの事に織斑は反応出来なかったのかポカンとした顔してる。

「は？ テニス……だよな？ 私がやってるゲームはテニス、で良いんだよな？」

「テニスだよテニス、コートの上でブラックホール作るキャラとか居るし全然ふつーだって」

「テニスボールでブラックホール？ どうやって作るんだ？ そもそもスポーツで五感を奪うってなんなんだ？」

多分織斑は必殺技といってもバトル漫画みたいな必殺技を想像してたんだろう、このゲームもある意味ではバトル漫画なテニス漫画が原作だからな。

その後も織斑が必殺技を見る度にツツコミを入れたり、このゲームに原作漫画がある事を知って若干興味を示してたりしてたけど、持ち前の反射神経で何時も通りボコられた。

……五感を奪った筈なのに打球の位置と勢いを勘で予測して撃ち返してきたら誰も勝てねーよ。

小学二年生 12

今日は篠ノ之神社で織斑と一緒に境内の掃除を手伝ってた。

「目当ては落ち葉を使つての焼き芋、篠ノ之のお父さんから『焼き芋出すから掃除手伝つてくれないかな?』つて言われたから織斑と一緒に落葉を集めてたんだけど、さつきから篠ノ之が集めた落ち葉を掬い上げて紙吹雪みたいにして遊んでんだよ、どーしょ?」

「ほーら箒ちゃーん!! 落ち葉だよー? いっぱいだよー? ひらひらしてるねー? すごいすごーい!!」

こんな事言いながらキャツキヤと笑う箒ちゃんに構ってるから邪魔すんのも可愛そうだし……。

「なーししよー、集めた端から散らかされてんだけど?」

「諦めろ、アレはもうすつかり妹大好き人間だ」

溜息を吐きながら織斑はそう言つて掃除に戻つちまった、多分篠ノ之が別の事で遊び出すまで黙々とやる気なんだろう。

うーん、けどもう一時間くらい掃除してつからなあ……いーかげん飽きてんだよねー。

だから俺は竹箒を置いて、ベビーカーの中で笑ってる箒ちゃんの顔を覗き込んだ。

「はろはろー、元気かなほーきちちゃん? 今日も会いに来たよー?」

「おいコラ私の箒ちゃんに近寄るなよ、馬鹿が移るじゃないか」

「今の束に近寄るな、良いからこっちに来い」

すつげえ低い声で言われたから大人しく手招きしてる織斑んとこに逃げた。なんだろう、秋だからかな? びっくりするくらいの悪寒が……。

ぽんぽんと肩を叩いてくれた織斑が今は女神に見える、なんだろうんなに織斑つてキラキラしてたっけ?

「ししよー、ししよーってまるで女神様だな」

「なっ!? 何を言うんだいきなり!!」

「だって優しいんだもん、千冬様って呼んだ方がいい?」

「やめる気持ち悪い!!」

「みてみて箒ちゃん? 今日もちーちゃんが顔を赤くしたり青くしたりしてるよ? 可愛いねー」

「束ツ!!」

「きやーちーちゃんが怒ったー、あっちに逃げるよ箒ちゃん!!」

ベビーカーを押しながらテンションとは裏腹に箒ちゃんを気遣いながら走って行く篠ノ之、今の織斑の怒鳴り声でキラキラが消えたしとりあえず一件落着、かな?

静かになったし掃除を……:と思ったら集めた落ち葉が全部散らかされた後だったから一から掃除をし直す事になっちゃった。

急に静かになったからか、なんとなく真面目に掃除しなくちゃいけない気がして俺と織斑は大人しく竹箒を使つて落ち葉の掃除を終わらせる。

「ふいー、やっと終わったー」

「束が大人しくしてくれてくれればここまで時間はかからなかったんだがな」

「まーまー、もう終わったんだしいじやんか、それより早く篠ノ之のとーちゃん呼んで来ようぜ!! 焼き芋タイムだ!!」

俺はそう言いながら織斑の手を握ると、篠ノ之のお父さんところに行つて掃除が終わった事を伝える。

別に俺一人でも良かったんじゃない? とは思ったけど、やっこさおやつが食べられると思つたらついつい織斑の手を握っちゃったんだから仕方ない。

相変わらず織斑の顔が若干赤い様な気もするけど、親父さんが落ち葉に火を付け始めたのでそんな疑問は吹っ飛んだ。

まだかなまだかなと火の回りをうろちよろする事数分、パチパチと

小枝なんか弾ける音につられて来たのか逃げた篠ノ之がベビーカーを押しながら戻ってきた。

「あ、見て箒ちゃん!! 焚き火だよ? ほーらあつたかーい火がメラメラうってなって……ベビーカーの角度からじゃ見えないね、んーお父さん箒ちゃん抱っこしてあげて?」

そうやって篠ノ之はベビーカーを押してお父さんのところまで行った、そーいや初めて見るなあコイツが家族と普通に話してるとこ。

ぼーっとそんな事を思ってたけど、よく思い出してみたら少し前くらいに『私は箒ちゃんに色んな初めてをいーっぱい見せてあげたいんだー』って言ってた気がする、目の下の隈っての? 何日かずと寝顔見てたとかで、アレがなんかすげー半端なくて微妙に怖かったから何となく覚えてる。

とりあえず俺は篠ノ之が普段から言ってる『箒ちゃんラブトーク』に巻き込まれないように、マシンガントークをされてるお父さんから離れて織斑んとこに逃げた。

「ししよー、篠ノ之のとーちゃんもついに『箒ちゃんラブトーク』を食らったな」

「そう、だな」

「どつたのししよー?」

「……………いや、なんでもないさ」

ジツと篠ノ之とお父さんを見つめる織斑、なんつーかよく分からなけれど少し悲しそーな目をしてる気がすんのは俺の勘違い…………だよな?

そんな疑問を頭に思い浮かべてはいたけれど、直ぐに出来上がった焼き芋と篠ノ之のお母さんが持って来てくれたバターとかに気が行ってる内に俺の頭からそんな事はすっかり抜け落ちてしまうのだった。

最近織斑に弟が出来たらしい。

ちよつと前からなんとなく浮かれた様子だったから、朝のSHRが始まる前に気になって聞いてみたら『家族が増えたんだ』と言つてたのよ。

また篠ノ之の時みたく弟自慢の嵐かと思つて覚悟したんだけど、アイツみたいに一方向的に話す事はなかった。

ただ……な？ 織斑つて多分不器用なねーちゃんになるわ、うん。

「弟、弟かあ……」

「ししよー、嬉しそうだねー？」

「な、なあ？ その、私の顔は怖くないか？ 弟を抱っこした時に泣かれないかな？」

「いや全然怖くねーつて、きれーな顔してるしむしろ喜んでくれると思つて」

「そうか？ほんとにそう思うか？ そうかそうか、一夏は喜んでくれるかあ……ふふふっ」

こんな風にちよくちよく不安そうな顔で聞いてくるんだよ、んで素直に答えると嬉しそうにするんだからある意味篠ノ之と似たもん同士って奴だよな。

てか織斑はアイツと違つて友達も多いと思うんだけど、なんで俺に聞くのかな？ いや別に嫌だつて言つてるんじゃないだけだよ。

「ん？ どうした、私の顔を見つめて？」

「なんでもねーよー？ ただ朝からずっと俺に弟くん……イチカ君だったっけ？ その話ばっかしてんなーつて思うなーつてさ」

「そうだな……お前は気安いからついな？」

バツの悪そうな顔で織斑はそう言ったんだけど、しばらくしたらまた服の裾を摘まれた。

織斑の奴、しつかりしてる様に見えて案外不安症つて奴なんだな。

「どつたのよししょー？」

「その……今日の放課後、暇か？」

「んー、特に用事はねーけど？」

「なら私の家に来ないか？ 一応ベビーシッターは雇ってるんだが、父さんも母さんも帰りが遅くて一人じゃ不安でな……」

珍しくそんな弱音を吐く織斑、そーいや俺結構コイツン家に遊びに行ってるのに一回も両親見たことねーんだよなあ。

篠ノ之ん家の両親はちよくちよくメシとか食わせてくれるし、お父さんの方は竹刀の握り方とかも教えてくれたから直ぐに打ち解けたんだけど……。

ま、会えればどんな人かわかんだろ、もし今日会えなくてもその内会えるだろーしな。

——その後、放課後になってから織斑ん家に遊びに行ったんだけど、珍しく篠ノ之は着いてこなかった。

昼に誘ったんだけど『箒ちゃんがちよつとだけ声出せるようになったから行けない』って言ってたからなあ……アイツ妹の事好きすぎる。

「しっかし、初めて玄関から入った気がするなー」

「毎回毎回窓から入ってくるからだ馬鹿、今日からちゃんと玄関から入れよ？」

「えーっ、だって窓から入った方が俺ん家からちけーしさあ」

「将来一夏が真似をしたらどうするんだ!!」

……織斑もすっかり弟大好き人間になったらしい、やっぱコイツら似たもん同士だわ。

うっかり『真似するくらい元気なら良いじゃん』とか言っちゃまいそうになったけど、そんな事言ったら多分なにかされるんだろうなあ、流石の俺も学ぶ時は学ぶ。

「だいじよぶだいじよぶ、一夏くんが居ない間に入るから」

「玄関から入れ玄関から!! 大体お前は何時も何時も——」

一夏くんの事になると何時もより真面目になるのか普段よりキツツイ、今まで何も言われなかったんだけどなあ。

玄関先での説教を受けてると丁度ベビーシッターさんがリビングから出てきたんだけど、俺に説教してる織斑を見て笑いながらリビングに戻ってった。

「ほ、ほらししよー? あっちの方からクッキーの焼けた匂いするしこの辺でさあ?」

「……ふう、すまんつい熱くなってしまった」

よかったなあ、織斑の説教って母さんみたいになげーし、話聞いてねーと同じ話がずっと続くからなあ……。

ほっと一息吐きながらリビングに上がった俺は、ベビーシッターさんが用意してくれたクッキーを食って落ち着いた後、肝心の一夏くんを覗きに行った。

「はろはろー、初めまして一夏くん、君のおねーちゃんのお友達だよー?」

前に始めて箒ちゃんに勢いよく挨拶したら泣かれちゃって、篠ノ之にめちやくちやられたから控えめにいったんだけど、なんだろ凄く大人しい。

全然泣く気配が無いしジツと俺の目を見て来てる、不思議な目をしてるなあ。

そわそわと一夏くんの様子を見てる織斑を見ながら、俺は彼にそんな事を思うのだった。

——2Bの鉛筆を握りながら俺は画用紙に線を書き込んで行く。

5限目の授業が図工の授業で二人組を作って相手の顔を書くって奴だったから、俺は織斑と向かい合いながら絵を描いて居た。

普段なら俺も色々喋ってるんだけど、絵を描くのは好きだし織斑の顔はきれーだから見てて嫌にならないんだよなあ。

織斑も真面目に描いてるし、チラチラと俺の顔を見ては描いてるからこつちも集中して絵を描く事にしたんだけど、ちよくちよく目が合うからやり辛い。

けど授業だし織斑も気にしてないみたいだし、俺ももつと真剣に考えて絵を描こう。

そんな訳で今日は自分でも珍しく無駄口を叩かなかつただけど、なんか途中から織斑が目を合わせてくれなくなった、何故に？

「なーししょー？」

「な、なんだ？」

「さつきから目が合うたんびに逸らされてんのは俺の気のせいかな？」

「き、気のせいじゃないか？ 現に私はこうしてお前と話してるだろ？」

「うーん、それもそーか」

若干織斑の顔が赤い気がしないでも無いけど、気のせいならそれだけいーや。

その後も目が合う度に若干目が泳いでたりしてる様な気がしたんだけど、とりあえず時間内には描き終わった。

「……はあ、普段べらべら喋る男が真面目に作業をするところも印象が変わるのか」

「んー？ なんか言った？」

「いや、何でもない。それよりもお前は思いの外絵が上手なんだな、少し意外だ」

「ふふん、そーだろそーだろ!! なんならもつと褒めてもいいんだぜ？」

勉強には自信ねーけど絵とか楽器にやちよつと自信があるんだよねー、去年は篠ノ之にそれ言っても信じて貰えなかったし、織斑なら褒めてくれるだろ。

踏ん反り返りながら織斑の褒め言葉を受け取ってたけど、そーいや肝心の織斑の絵ってどーなんだろ？ せつかくだし見せて貰おうかな？

「なーししよー、お前も俺を描いてくれたんだろー？ ちよつと見せてくれよ」

「ん？ ああ良いぞ、是非見てくれ」

「どれどれ……………？」

「どうだ自信作だぞ？ 褒めても構わない」

「……………これが、俺、なのか？」

なんだろ、言葉に出来ないくらいショッキングな絵なんだけど？あれ、織斑って勉強もスポーツもできるのに不器用なのか？ いやでも小豆を箸で摘める程度には手先器用だったよな？ ならなんでこんな表現できねえ絵になってんの？ 絵が下手ってレベルじゃねーぞ!?

前に篠ノ之とロボットの話して盛り上がった時にアイツすつげえ絵が上手だったから、てつきりコイツも上手なんだろか思ってたけど全然そんな事無かったわ、やった初めて織斑に勝てた。

……………けどなんだろ、全然嬉しくねえ。

「どうだ？ 中々の出来だろう？ 今日は何時よりも上手く描けたんだ」

どーしよ、織斑がやりきった笑顔してるからなんにも言えねーぞ？

俺なんて言えばいいんだよ、篠ノ之と無駄話してる時よりコメントに困るぞ。

「なあししよー？ クマの絵って描いてみてくんね？ 時間もまだ15分くらいあるし」

「それは……構わないが？」

取り敢えず俺の絵のコメントは後回しにしよう、篠ノ之が居たら絶対『都合の悪い事を先延ばしにする典型的日本人の発想だね』とか言われてる気がするけど、先延ばし最高じゃん？ もしかしたら人の似顔絵が苦手なだけかもしれないし。

一人で頷きながら織斑の絵が完成するのを待ってたんだけど、俺のそんな淡い希望は見事に打ち砕かれた。

『出来たぞ』と満足気に差し出して来た絵にはクマを描いてくれて言ったのに、薬屋さんの前に置いてあるようなカエルが描かれてた。

いや、多分クマなんだろう。 少なくとも俺はクマを注文した筈だし、織斑もそれに納得してたからこれはクマなんだな？ 単純に耳の塗り潰しが目に見えるだけでクマでいい筈。

……………輪郭がぐっちゃぐちゃだけど。

「どうだ？ 耳の辺りなんか良く出来てるだろう？ 目も特徴的に描けたからな、今日はなんだか調子が良い」

「そ、ソウダネ」

耳？ 何処が？ てかどれが？ 目ってこの鼻の穴みたいな点？ どの、どうしよう、褒められる所が一個も無いぞ。

織斑は俺の顔を『褒め言葉を期待してるぞ!!』的な顔で見てるし、なんとか褒めねーと……。

「えっと……そう!! この絵はししよーにしか書けないオレンジティーがあるから最高じゃん!! 俺の絵なんか誰にでも描けるし？」

「それを言うならオリジナリティーじゃないのか？」

「それぞれ!! そのオリなんたら!!」

良し何とか褒められたぞ!! とりあえずこれで誤魔化せたかな?
俺の褒め言葉に満足そうな顔をする織斑を眺めながらほっとしつ
つ、無駄にどっと疲れた5限目だった。

……今日は帰ったら部屋でアニメ見て漫画読んでよつと。

その日の俺は珍しく家でゴロゴロしながら再放送の『衝撃!! 日本と世界のUMA達!!』とかいう番組を見ていた。

多分篠ノ之が一緒にいたらボロクソに言われるんだろなーとは思うけど、こーいうのもロマンの一つだって親父が言ってたし、実際ツチノコだとか河童だとかは居そうな気がしてワクワクする。

家の裏にツチノコとか居ねーかなあ? 蛇みたいなもんらしいしテキトーな罟とかで案外捕まえられたりしてな。

河童も河童できゅうりが好きって言うし、俺の持つてる子供用の釣竿にきゅうり付けて糸たらしや釣れるんじゃないやね? そしたら俺有名な人になれちゃったりするのかな?

よーしそうと決まれば早速釣りに行くぞー!!

「てな訳でししよーや、釣りに行こーぜ釣りに」

「……態々道場に来てまで何を言ってるんだお前は?」

小さい釣竿を引っさげて稽古してる織斑ん所に行ったらちようど休憩中、だからそのまま話しかけたんだけど困った顔をされちまつた。

しかも丁度そのタイミングで篠ノ之が箒ちゃんを抱っこして織斑の様子を見に来たもんだから……。

「ほーら箒ちゃん? あの馬鹿がまーた馬鹿な事言ってまちゆよー?

頭の中に蟹味噌でも詰まってるんでちゆかねー? ほーきちや

んは、あんな馬鹿になっちゃダメでちゆよー?」

「さんぼー、聞こえてるだけど……?」

「当たり前だろ? 聞こえる様に言っただから、大体こんなところまで来てそんな馬鹿みたいな思い付きにちーちゃんを付き合わせんなよ、てかなんでちーちゃんなんだよ? 私を誘うならともかく、ちーちゃんが剣術の稽古で忙しいのは知ってたんだろ? 私を誘うならと・も・か・く!!」

「えっ？ だってお前箒ちゃんに構ってばっかじゃん？ それにツチノコだとか河童だとか嫌いじゃん？ そんなら一応は付き合ってくれるししよーを誘うに決まってるじゃん」

ブツブツ文句言われるよりもなんだかんだで付き合ってくれ方が楽だからなあ。

まあでも確かに言われてみればそーか、ししよーはししよーで忙しいし誘うなら篠ノ之だよなあ、何だかんだ言って最近あんま篠ノ之と遊んでなかったし。

……てかなんで最後ちよつと強調したんだ？

「まあいいや、んじやさんぼー？ ししよーの代わりに一緒に行く？」

「……ちーちゃんの代わりってのが引つかかるけど、偶には君に付き合ってるよ」

おー珍しい、前に幽霊探そーぜって言ったら『は？ んなもんどーやって探すんだよ、てか仮に出るとしても夜中だろ？ 態々そんな時間に出歩くななんて面倒だろ』とか言ってるめっちゃ馬鹿にされたのになあ。

まあ細けえ事はいいや、取り敢えず篠ノ之が来るなら話し相手には困らないわな。

「なら行こーぜさんぼー？ 虫除けも持って来てるし二人で——」

「——丁度今日の分の稽古が終わった所だから私も行こう」

「あれ？ ちーちゃん何時も居残り稽古してるよね？ ——なんでまた」

「ふっ、私も偶には馬鹿に付き合おうと思ってるな？」

「……ふーん」

なんだろ、背中が一瞬ぞくつとしたんだけど秋だし風邪引いたかな？ それに織斑もなんか食い気味に行くって言つたよーな………

気のせい、だよな？

二人の顔を見比べてみたけど何時もの感じに思えるし、きっと俺の勘違いだろう。

あんまり深く考えないようにしながら近所の池にまで来た後、家の冷蔵庫から持って来たきゅうりを何本かまとめて吊るして池の中へ投げる。

「ふっふっふ!! 母さんが張り切って買ってきた採れたて新鮮のきゅうりだぞー? 出て来いよー?」

「……勝手に持って来て大丈夫なのか?」

「……ちーちゃん、大丈夫だと思う? あのお母さんだよ?」

「……それもそうだな」

俺の末路を悟ったのか、コイツらはヒソヒソと不吉な会話をしながら俺に同情の視線を向けて来た。

ハハッ!! そんな未来俺が想定してないけども? 大丈夫大丈夫

!! 特に何も対策してねーから絶対叱られる。

そもそも俺の頭じゃ言い訳とか思い浮かばないし、言い訳をした瞬間母さんの説教が長くなるから何もしないのが一番!!

俺の両脇にしゃがみ込んで水面を眺める二人の呆れた視線を受けながら、そんな事を考えるのだった。

……そうそう、河童もツチノコも見つからなかったし、帰ったら母さんにめちやくちや叱られたよ? ちくしよう、素直に堂々ときゅうり持ってた事言ったのにお説教に容赦がなかった。

幕間：戦乙女から見た馬鹿 3

昼休みに屋上で束と昼食を食べていた私は話の流れから校庭でドッジボールをしている彼を上から眺めていた。

昼休みになった途端に弁当を素早く食べ切ってしまったから元々そういう約束をしていたんだろう、今日は一緒に食べようと思っていたんだがな……。

そんな小さな落胆を感じては居たがこうして眺めていると彼の友達の数を実感する。

私もそれなりに話す友人は居るが……腹を割って話せるかと言えば疑問だ。

まあ横で少しつまらなさそうに彼を見ている束よりはマシな人付き合いをしている自信はあるが。

「ねえちーちゃん、なんであの馬鹿は落ち着きが無いのかな？ 三限目体育の授業だったよね？ 馬鹿は疲れないんだね」

「今日の体育はサッカーだったからな、アイツは忙しく動き回ってたよ」

「……これだから馬鹿は」

そう言うつため息を吐く束を横目で見ていたが、呆れてはいるものの視線を外そうとしない。

口ではキツイ事を言っているが結局束の中では線引きの内側に居るんだろう、本人は認めたがらないが。

彼は明るい馬鹿だ、頭の中では道筋を立てて考える事が出来ているのにその過程を省略して話す癖があったり、どんな人とも仲良くなれると信じてるから基本的に人見知りをしない、その心の広さを少しは分けて欲しい。

「ちえっ、あの馬鹿もう当てられてるよ」

「どうせ変な魔球を開発して失敗したんだろう？」

「ピンポン、腕をぐるぐる回して真上に投げちやつて自分の頭にボール落としてたかな？ あっフィールドに戻った、そもそも変な事しなかったら当てられなかったんだよ」

「馬鹿な奴だな……まあそんな馬鹿だからだろうな、側にいても苦じやないのは」

「……ふんだ」

あの馬鹿が側に居ると良い意味で肩の力が抜ける、色々な不安や不満が溶ける様に消えるから私もつい側に居て欲しくなる時がある。

特に彼が家に遊びに来た時だとかはそうだ、時々別れ際にもう少し遊んで欲しいと言う寂しさを感じるんだ。

それは束も同じなんだろう、彼が道場に顔を出すと分かりづらいがほんの少し嬉しそうな顔をする。

今だつてブツブツと文句を言いつつも彼の活躍を眺めてる、彼がボールに当てられたらイライラしているし逆に誰かへボールを当てた時は余計な一言を言いつつもホツとしたりと色々忙しい。

……あつ、また当てられたなああの馬鹿。

「まったく、馬鹿みたいに高笑いをしながら胸を張ってるからだ、あれぐらいアイツでも避けられただろうに」

「ほんとだよ……直ぐに調子に乗るんだから」

「むっ、またフィールドに戻ったが……残り二人になってるな」

つい束と一緒に身を乗り出しながら見てたが、最終的には彼が当てられてゲームセット、最後の一人になって外野と内野のキャッチボールに挟まれた状態だったから仕方ないか。

「ふん、なにさなにさ楽しそうな顔をしちゃってさ……」

「いいじゃないか、彼は友達が多いんだ。私達が特別仲良しな訳じゃない」

「……でもあれだけちよっかい掛けてきてたんだよ？　なのに最近は全然だし、偶には私に会いに来いよ」

ムスツとした顔で文句を言う束、私はその言葉に何かを言おうとしたのに掛ける言葉が見つからず、口を開けなかった。

……何となく彼が私の事よりも束を優先するのが気に入らず、不愉快なモヤモヤを感じてしまったのだ。

親友に対して暗い気持ちを抱いた自分が情けなく、またその原因も分からない。

こんな時ほどあの馬鹿と話していたいんだがなあ……。

頭を振ってそんな嫌な気持ちに区切りをつけると、それと同時に昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

「はあ、またつまらない時間が始まるよちーちゃん……」

「放課後まで我慢しろ」

「ちえ、どーせちーちゃんはあの馬鹿が話しかけてくるから暇じゃないんでしょ？」

「さっきも言ったが、彼にとって私達は特別な友達と言う訳じゃないんだ、良く話すが彼は私以外の人も会話してるよ」

「ふーん、相変わらずいろんな奴と話してるって事はあの馬鹿には話の引き出しが多いんだねえ……まっ大半が身にならない話なんだろうけど」

弁当箱とシートを片付けた私達は、そんな事を言いつつ自分達の教室へと戻って行った。

……特別な友人ではない、か。

特に変わった事も無く冬休みになったある日の事、母さんが商店街のくじ引きで高級なお肉を当ててきたらしく夕飯に鍋をやる事になった。

んで偶々俺の宿題を手伝ってくれてた篠ノ之と織斑も一緒に食べる事になったんだけどさ、今俺は横に座った織斑に箸の持ち方が悪いって怒られてる。

「ほら、箸はこうやって持つんだ」

「……なんか母さんが二人になった気分」

「何か言ったか？」

「なんでもないです」

前から母さんにも箸の持ち方が違うって言われてたんだけど、まさか織斑にも指摘されるとは思わなかった。

しかも手を握られながら持ち方を教えられてるから適当に流す事もできねー、ちくしょうメシくらい好きに食わせろよ。

「あっさんぼー!! お前その肉俺が食おうと思つてたのに!!」

「は? 早い者勝ちだろ? つかそもそも私お客様だし? 箸の持ち方が悪い君が悪いんじゃないの?」

「むーっ、俺さつきから全然肉食えてねーんだぞ!!」

「ふーん、なら食べさせてやろうか? ほらあーん」

そう言つて篠ノ之は掴んでたお肉を俺の前に差し出して来た、やった食わせてくれるんだな?

俺はあーんと口を開けたまま肉が来ることを待つてたんだけど、篠ノ之の奴俺の口には入れずに自分の口に入れてドヤ顔しながら肉食いやがった。

「——なーんて、すると思う? 残念でしたくお肉は東さんが美味しくいただきました」

「おまつ!? ずりーぞさんぼー!! 期待させるだけ期待させやがって!!」

「お前ら食事くらい静かに出来ないのか……」

箸の持ち方を教えてくれていた織斑がそんなため息を吐いてたけど、俺の様子を見かねたのか自分の器によそって肉を俺にくれた。

ああ、織斑ってやっぱいい奴だなあ。

そんな事を考えながら貰ったお肉を食いつつ、つみれとか肉団子とか好きな具ばかり取ってたら途中から織斑に野菜を器に入れられた。

「あれ? ししよー? これ俺の器だよ?」

「肉ばかりじゃなく野菜も食べろ」

「えー、せつかくのお鍋なの?」

「せつかくの鍋だからこそだ、偏食は身体に悪い」

ジトツと俺の方を睨む織斑、一瞬口答えしようと思ったけど目が本気だったから仕方なく野菜も口に入れたんだけど、そしたら今度は篠ノ之に熱々の豆腐を器によそわれた。

「……なあさんぼー、豆腐ってさ? 超あつついじゃん? なんでもりもり盛ってるの?」

「肉ばつか食ってるから私もよそってやったんだよ、嬉しいでしょ?」
「うれしくねーよ!」

鍋の豆腐って熱すぎて飲み込むのが辛いんだよ、味も熱さでわかんねーし?

けど器の中の具を戻すのはダメだしなあ、しゃーねーけど食うしかねーか……。

俺は仕方なく豆腐をふーふーしながら食べてたんだけど、食べきったと思ったら織斑と篠ノ之が次々と色んな具を入れてくるもんで結局好きなように食えなかったし、食わされ過ぎた。

……これが飯テロって奴か?

「おばさん、ごちそーさま」

「ご馳走さまです、お母さん」

「お、おまえら、覚えてるよ？ ……うつぷ」

俺は腹一杯食わされた二人に恨み言を言いながらソファーに横たわり、テレビのリモコンを操作してチャンネルを変えて気分を紛らわせた。

篠ノ之はすっかり我が物顔で家の冷蔵庫から例のコーラもどきを取り出してコップに注いでるし、織斑なんか母さんと話しながら洗い物の手伝いしてるから微妙に暇なんだよ。

「本当に良かったんですか？ 私達だけ先に夕飯を頂いてしまつて」

「別にいいわよ、あの人が帰って来てないし」

「そーそー、母さんは親父と一緒にメシ食いてーだけだから別に気にしないでいいーって」

俺がそう言った瞬間、母さんが無言で俺のところまで来て口を引っぱりやがった。

「いひゃいひゃい!! ほーりよふはんはい!!」

「アンタは何時も何時も人を茶化して!! おかげで私が保護者会でどんな目で見られてるのか分かってんの!？」

「いつつつ、アレだろー？ 良く友達ん家に遊びに行くとそのお母さんとかに言われるアレだろー？ 確か――」

「言わんでいい!!」

答えようとしたら拳骨食らつた、母さんの中じや会話って暴力って読むらしい、親父に言いつけてやる。

てか篠ノ之も織斑も笑ってねーで助けてくれよ、まったく。

今日は天気が良かったので朝から町を散歩してぶらぶらしてた。冬休みだから近場の友達もスキーとか旅行で居ねーし、道場もこの前行ったしなあ。

連続して行っても良いんだけど、遊びに行ったり見学してるだけだからあんまり顔を出すのも邪魔になるし、今日はやめところ。

そんな事考えながら誰か居ないかなと思つて公園に行ったら、知り合いの大学生がベンチに座つて絵を描いてた。

この人は絵の学校に行つてる人で、時々会つた時に絵の描き方とかを教えて貰つたりしてる。

今日は宿題の絵を描いてる途中だったらしく、今日は風景の描き方だとか、色の使い方を教えて貰えたんだけど宿題の途中だしちよつとだけ教えて貰つてから別の所に行った。

少し足を伸ばして河川敷、近所のじいさんが犬を連れて散歩してたから挨拶して犬を撫でさせて貰おう、このじいさんの犬つてなんかめっちゃもふもふの柴犬だから触つてて気持ちいいんだよなあ。

撫でたついでにじいさんの昔話を聞きながら一緒に散歩してたんだけど、コースを一周しちやつたのか直ぐにじいさんの家に着いちやつた。

少し残念に思つたけど、近くの自動販売機でココアを買つてくれたのでそれを飲みながら次はどこに行こうか考える。

雲が一個も無いくらいだし家でゲームすんのも気分じゃないし、外で遊びたかつたんだけど中々上手く行かないなあ……せつかくだし自転車で隣町まで行つて見ようかな？

丁度爺さんの散歩に付き合つたから家の近くに居るし、隣町なら野球できる広場があつたはずだから中々妙案つて奴じゃね？

よし、そうと決まればちやっちやと行こう。

——思い付いたがなんちゃら、補助輪付いたまんまだけど全力で自転車を漕いで隣町まで行くと、狙い通りに知ってる子が野球やっていた。

「おーい、暇だから入れてくれねー?」

「いーよー」

やった、あつさり仲間に入れたぞ? ふっふっふ、これなら初めからコツチ来てりや良かったじゃん。

『マジ助かったー、なんか相手のチームにすんげー強いピッチャーが居て全然勝てなかったんだ』とか言われて直ぐに代打に出されたけど、俺のバットで逆転してやるぜ!!

「よっしやこ——って、あれ? ピッチャーってししよー?」

「私の友達が急に熱を出してな、その代わりと言ったところだ」

「ほえー、今日は稽古無かったのかー」

……あれ? 織斑がピッチャーって事は俺打てなくね? 体育の授業でいっぺんも勝った事ねーよ?

ちらつとスコア代わりのちっちゃいホワイトボード見たら4回裏で3対0、ホームランが二本入ってるけどソレって多分織斑が打ったんだろなあ。

「し、ししよー? 俺はお前の弟子だし勿論手加減——」

「安心しろ、私は知り合いだからと言って手を抜く事はしない、正々堂々全力を出してやろう」

そう言いながら織斑は本当に全力で投げて来た、しかも近くのバッティングセンターのボールなんか目じゃないほど速え、キャッチャー取れんのかよ。

あんまり速いもんだから全く反応出来なかったんだけど、それはキャッチャーの子も同じだったらしく咄嗟に避けてた。

……てかキャッチャーが避けるってか、バッターの俺でも割と怖い
速さだし多分座って受け止めようとしたらもっと怖いんだろな。

さーて打てるかどうか怪しくなったぞー？ 寧ろ打つの諦めて振
り逃げつての狙ってみようかなー？

そんな事考えてたら二投目がど真ん中を通つてつた、あつまた反応
出来なかつたや。

んで三投目、とにかく見逃し三振はカツコ悪いから織斑の性格を考
えて、投げてくるだろうコースを予測しながらバットを振つた。

やっぱボールの速さに反応できなかったけど、俺のその作戦はドン
ピシャだったらしくバットはボールを捉えられた。

……うん、一応はね？

いや、当たるには当たつたんだよ？ でもボーリングの球でもブツ
叩いたみたいな重さで全然前に飛ばなかつた。

しかも手がゾーンとして力が入らない、グーパーしてもマジで感覚
がねえ、凄えな織斑。

結局その後も俺達は逆転する事が出来なかつたし、完全試合も食
らつちやつた、あんまりにも織斑の奴が強すぎたんだよ……。

「ちくしよー、次は絶対に勝つからなー!!」
「……ふっ、それは楽しみだ」

帰り道に自転車の後ろに乗せた織斑に向かって俺はそんなリベン
ジを誓うのだった。

俺は今日釣りの気分だったから堤防に座つてのんびり糸を垂らしてただけど、今回は珍しい連れが居た。

「なんつーか、珍しいなさんぼー？ お前が俺の遊びに着いて来るなんてさ」

「箒ちゃんに話すネタが無くなったから仕方なく着いて来たただけだから変な勘違いしないでよ」

そう言つてふいつと顔を背けた篠ノ之、丁度釣りに行こうと思つて色々準備してたところに遊びに来たから誘つただけど、今日は思つたよりあっさり着いて来てくれた。

何時もなら何か言われてるんだけど、今日はそれも無かつたし機嫌が良かったんだろう、多分。

ただ今回は釣り道具もあつたから歩きで行こうとしたんだけど、『歩きとかヤダ、自転車あるなら乗ってけば良いじゃん』とか言い出したんだよなあ。

……いや、別にいいんだけどさ？ 道具があるからちよつと危ないつて話したら『ちーちゃんは乗せて私は乗せてくれないんだ、ふーん？』とか言つて拗ね始めたから俺の方が大人しく折れた。

まあそんな訳で、朝は普通だった篠ノ之の機嫌もちよつと斜めになつちやつたし、微妙に居心地が悪いんだよねー。

「おつ？ 釣れた釣れた、さつきよりも大つきなぶぐが釣れたぞー」
「……ちえつ、なんだよさつきから自分ばつか釣つちやつてさ」

「ん？ なんだよさんぼー、まだ釣れてねーの？」

空気吸つてどんどん膨らむフグを見ながら思わず篠ノ之の方を見ただけど、釣り針に付けた餌がまた食われてた。

さつきから一匹も釣れてねーから余計にむすつとしてて、余計に話し辛い。

「えつとき、ぽ、ポイント変える?」

「イヤ、君が釣れてるのに私が釣れないとかあり得ないから」

「でもさ、もう一時間くらい釣れてねーだろ? だからポイント変えて浅いところで魚見ながら釣りゃいいんじゃない?」

「ヤダ!! 絶対ここで釣るもん!! 魚如きにこの束さんが舐められるとかぜつつつっつたい認めないから!!」

むっすーつとしながら両手で竿を握る篠ノ之、漫画とかアニメとかで言うプレッシャー見たいなのが出てる気がして俺は何も言えなかった。

……そのプレッシャーが魚逃してんじやね?

うーん、もしそうならその空気をなんとかしたら釣れる様になるんじゃないかな?

てことは篠ノ之の肩の力を抜けばいい訳だ、そーなると……よし。

俺は手袋を外してバケツの水に手をつ込み、手の平を冷えっ冷えにした後に篠ノ之の背中にその冷えた手をつ込んだ。

「ひゃん!」

「おーあつたけー」

「やつ、ばか、へんたい!!」

篠ノ之がふくれっ面から元には戻ったけど、その代わりビンタを食らったから俺のほっぺたがジンジンしてて痛い。

自分の身体を抱きしめながら涙目でぶるぶる震える篠ノ之、珍しい表情だけどひっぱたかれた痛みで俺も涙目でお揃いだね……。

「つつつ、いくらなんでも叩くことねーだろ……」

「お、おま、いきなり、へんたいへんたい!!」

「悪かったってば、機嫌悪そうだったし楽になつてくれりゃいいかなあつて——おっ? さんぼー引いてるぞ!!」

「へっ? あつ、待つて!! 私が釣る、釣るから!!」

ちよつとした言い争いになりかけたけど、運良く当たりが来たのか

篠ノ之の竿が大きくしなる。

さつきまで怒ってた篠ノ之も思わず慌てたのか、立ち上がりながらオロオロとしてリールを反対側に巻いてる、そっちじゃ釣れないってば。

仕方ないから篠ノ之の後ろに回って、篠ノ之の手を握りながらリールをちゃんとした方向に巻く。

それでようやく変な方向に巻いてた事に気が付いたらしく、落ち着いた篠ノ之になんてか肘打ちでぶっ飛ばされた。

「おまつ、なんで肘打ち？ クツソいてえんだけど？」

「それで済んだだけでマシでしょ!! って、やった釣れた!!」

お腹を抑えながら転がってた俺の顔の前に篠ノ之の釣った魚が叩きつけられる、良かったなやつと初当たりだ。

……けどさ、なんかこの魚小さいけど平べったくて縦になげーんだけど？ 顔も厳ついし、よく見ると篠ノ之の釣った小魚に食い付いてるから凶暴な奴じゃね？

「って、子供のウツボじゃねーかよ!! びびった、なんちゅーもん釣ってたんだ!!」

「釣れる魚まで分かる訳ないでしょ馬鹿!! つかせっかく初当たりだし、余韻に浸りたいから黙ってて」

「お前なあ……まーいいや、機嫌直ったみてーだしそれでよしだな」

喜んでる篠ノ之への文句を飲み込みふぐとか小魚は海に返してるんだけど、釣ったウツボはあぶねーしなあ。

仕方ねーからちよつと先で船から荷物下ろしてるおっちゃんに海に返して貰うか。

そんな訳で俺がウツボを海に返して貰おうとオツチャンに話しかけたら漁師の人だったらしく、話してる内に仲良くなったから近くの店でウツボを捌いて料理してくれた。

味はそこそこ美味しかったよ？ 篠ノ之は『なんか磯臭い……』っ

て言つて微妙な表情だつたけどね。

あと三日でクリスマス、サンタさんがプレゼントを配ってくれる最高の一日だ。

でも俺は知ってるんだよなー、前に母さんが『サンタさんは世界中回って忙しいから、普通は家の人を代理でプレゼントを用意してるの、だから普段から私達に感謝しなさいよ?』って言ってたからプレゼントを置いてるのは親父か母さんだって。

ま、プレゼント自体はサンタさんが用意してくれてるらしいし問題は無いよな、うん。

去年は自転車だったし今年は何頼もうかなあ? ゲーム機つてもありきたりだし、漫画はお小遣いで買えるからわざわざサンタさんに頼まなくてもいいし……。

「てな訳でししよー、何頼んだらいいかな?」

「だから窓越しに話しかけるなど言ってるだろう……」

「何時もの事だからいーじゃん、そもそも宿題してんだろ? ピンポン鳴らしたら気が散るだろ?」

「はあ……まあいい、で? 何がどんな訳なんだ? 過程を話せ過程を」

意見を聞きに近くの織斑ん家に行ったんだけど、そんな事を言われたからちやんと一から順番に説明をする。

んで話を聞き終わった織斑は『うーん』と珍しく悩んじまった、プレゼントの話なのになんでそんな悩むんだろ?

「そーいやさー、織斑は去年のクリスマスに何貰ったんだ? やっぱ竹刀とか木刀か?」

「……………何も」

「ん? 何もってどーゆー事よ?」

「私は……クリスマスプレゼントと言う物を一度も貰った事がないんだ」

「あーっと……その、えっと、なんかゴメンな？」

家庭の事情って奴なのか？ でも織斑のお父さんもお母さんも織斑へのプレゼント預かってんだろ？ ならなんで渡してやんねーんだろ？ 寂しそうな織斑の表情がせつかくのクリスマスなのに、見てて凄く悲しい気分になる。

でも俺が解決出来る問題じゃないしこんな日も仕事に出てるから凄く忙しい人達なんだろうし、そんでつい渡し忘れちゃうとかかな？ でもだからってプレゼント貰えないって……。

俺のプレゼントをそのまま織斑に渡す？ いやいや、それはサンタさんに失礼だし織斑にも失礼だよなあ。

「———そんな訳だから私では力になれない、すまん」

「……へっ？ ごめん考え事してたから聞いてなかった」

「他を当たってくれと言ったんだ、私は別に……プレゼントなど貰わなくても平気だからな」

そう言つて織斑は宿題に戻った、俺も変な気まずさがあったからそのまま織斑の家から帰る事にしてただけどなんだか凄くもやもやする。

おせっかいな事かもしれないけど篠ノ之にでも相談してみようかな？ 俺馬鹿だからとんだだけ考えても良い案が思いつかないし、アイツで無理なら……うんそんな時はそんな時だ!!

「つー訳なんだよさんぼー、ちゃっちゃとなんとか出来ねー？」

『いきなり電話して来たと思つたら……過程を省略すんなんて何時も言つてんだろ!!』

「いや通じるかなあつてさ、お前ニュータイプだし？」

『だ・か・ら!! そんな妙ちきりんなカテゴリーにすんなつての!!』

「良いじゃんべつにさ、てか俺電話ボックスからかけてるんであんま時間ねーんだけど？」

『話を脱線させたのは君じゃないのさ!! はあ……で？ なんの相談

？』

俺は普段のやりとりをしながらとりあえず織斑の事を説明したんだけど、返って来たのは『君じゃ何も出来ないよ』って答えた。『ちーちゃんの両親って私も直接の面識が無いんだよね、朝早くから仕事に行って日付が変わった後に帰って来る事くらいしか知らないし。まあ私が本気で調べたら直ぐに分かると思うけど、ちーちゃんの両親には興味無いからねえ』

「ふーん……よくわかんねーけどとりあえず分かったわ」

『どっちだよ……ま、どーせ無い頭で考えるくらいなら自分の貰うプレゼントでも決めたら？ ちーちゃんの事はどうしようも無いし』

「そう、だよなあ……あんがとな」

受話器を置いて電話を終わらせた後、俺はとぼとぼと電話ボックスの中から外へ出ただけで、下を向いて出たからかあるモノが目に入る。

それを見た瞬間、俺はいい事を思い付いたのでそのまま街を走ってそれを探し回るのだった。

——んで、クリスマス当日。

「よっ織斑!! メリークリスマス!!」

「……窓越しに話しかけるな馬鹿、で？ 何の用なんだ？ 今日は隣の友達の家でパーティーなんだから？」

「まーなー、けどその前にお前に渡すもんがあつてよー」

「渡すもの？ 何の話だ？」

「ほいクリスマスプレゼント、サンタさんじゃなくて俺からだし、すっげー微妙かもしれねーけど」

そうやって俺はこの間見つけたモノ、クローバーで作った葉を織斑に手渡した。

冬なのに咲いてたから必死こいて四つ葉のクローバー探して押し

花の葉にしたんだよねー、ほら幸運のクローバーって言うじゃん？

今年はプレゼント貰えるといいなって気持ち込めて作った自信作だ、ちやんと厚紙とかも拘ったんだぜ？

「んじゃ!! そんだけだから俺は行くなー?」

「ま、待て!! あの、その、あ、ありがとう……」

「おう!! じゃーな?」

俺のプレゼントを受け取ってくれた織斑は少し嬉しそうだったし、うん満足!!

そんな達成感を味わいながら自転車を漕いでたんだけど、肝心の自分のプレゼントの事をすっかり忘れてたから今年はプレゼントを貰えなかった。

……サンタさんや、靴下無くてもエスパ―してプレゼント用意してくれよ。

小学二年生 20

12月31日、一年の最後の日になる今日は俺ん家も朝から大掃除で大忙し。

こっそり逃げ出そうとしたら母さんに頭鷲掴みにされて部屋に放り込まれたんで、仕方なく片付けをしてるんだけど色々出て来るもんだね。

「えーっと、コレは前に隣町の友達と遊びに行つた時に拾つた松ぼっくりだろ？ んでコツチが海で拾つた枝で作つたパチンコだろ？ でコレが……コレが……なんだコレ？ 何処で拾つたつけ？ 忘れたしいらねーかな？」

おもちゃ箱を漁りながら要るものと要らないものを選んでたんだけど、自分でも訳の分からないもんがめっちゃ出て来た。

自作したパチンコとかはともかく、何を作つたのか分からない木の人形とか何が描かれてるかわからん絵とか、なんでこんな所に突っ込んであるんだろ？

「おろ？ このゲーム失くしてた奴じゃん」

織斑達と遊ぼうと思つた時にソフト丸ごと失くしたから誰かに貸して忘れちゃつたのかと思つてただけどなあ、パーティーゲームだし今度二人と一緒にやろう。

そんな事思つてたらまた無くしてた漫画が出て来た、しかも丁度読み返してる部分だったから俺は運がいいね、掃除の途中だけどちよつとだけならいいよね？

休憩も兼ねて漫画を読んでたらこつちに向かつてくる足音が聞こえてきた、まさか母さんが見張りに来たのか？

もしそうなら絶対怒られる、俺は慌てて本棚に漫画をしまおうとしたら足元に置いてた木の人形で転けて棚の本をいくつか落とす

ちやった。

「何をやってるんだお前は……」

「あ、あはは、ちよっと片付けをね？ てかししょー、なんで居んの？」

「私だけじゃなくて束も来てるがな」

「私もちーちゃんも掃除手伝いに来てやったんだよ、案の定散らかってるじゃん」

足の踏み場の無いくらい色んなものが散らかった部屋を見て二人は溜息を吐く、いやーその……なんだろう？ 苦笑いが出て来るんだけど。

散らかった部屋を見られた気恥ずかしさを感じてると、堂々と部屋に入って来た篠ノ之が足元の人形を拾った。

「何これ？」

「んー、幼稚園の時だったかに拾った枝とボンドで作った人形？ 確かに人形のアニメ見て動かないかなーって思ってたさー」

どんなアニメだったかは覚えてねーけど同じ様な木の人形を七個作ったよーな、多分最初に見つけたのと合わせて後五個あるんじゃないかな？

昔の事を思い出しながら、単純な子供だったなーと思ってるとうわっ!』と織斑の驚いた声が聞こえた。

「どーしたのちーちゃん？」

「いや、何気無く拾った箱の中に……ほら」

「どれどれ……っておい馬鹿、お前誰か呪う気だったのかよ？」

「なんの話よ？ 俺そんな事できねーぞ？」

「……悪いが私も束と同じ意見だ、というかお前の友達の誰が見ても同じ感想を言うと思うぞ？」

そう言っつて織斑は箱の中を見せてくれたんだけど、中には見事な藁人形が入ってた。

コレあれだわ、確か人形作った時に材料足りなかったから適当な枯

れ草集めて作った奴だ、うん。

ん？ でも確かそんな時に別のなんかを拾ってたよーな……。

幼稚園の時の事だから中々思い出せなかったけど、篠ノ之の『きやあ!』という悲鳴とその手に持ったクツキーの缶を見て思い出した。

「おまつ、お前、何だよコレ!? なんてもん見せるんだよ!」

「あー、それ藁人形作る時に拾ったカマキリの卵だわ、かわいそうな事しちやっただなあ、ちよつと埋めて来る」

「拾って忘れてたのか……」

「……ねえちーちゃん、中国にね？ 似たような事する呪いがあるんだよ?」

「そうか……」

篠ノ之と織斑が缶の中身から目を逸らしてるから片付けより先にカマキリを埋めに行く、うわあ……中めちやくちや産まれてるし共食いの残骸が凄く散らばってる、ごめんよカマキリさん。

とりあえずカマキリを埋めに行った後、部屋に戻ると俺も忘れてた物が二人の手で次々と発見されてた、なんだろ？ ちよつとしたトレジャーハンターごっこしてる気分だ。

「この袋に入ってるビンの王冠は捨てないのか?」

「それ頑張つて集めたんだからダメ、今まで忘れてたけど」

「じゃあコッチのペットボトルのキャップもコレクションしてるの?」

東さんには理解できないけど」

「えっ？ あーそれは去年の夏休みの自由研究に使った材料のあまりだから捨てていーよ」

「……あのよく分からないロボットの?」

「捨てて良い物とそうじゃない物の判定が分からん……」

こうして俺の大掃除は織斑と篠ノ之のおかげで思った以上に早く終わり、余った時間で見つけたパーティーゲームをプレイするのだった。

幕間：戦乙女から見た馬鹿 4

年が明け、私は東に連れられて初詣に来ていた。

吐く息が白くなるほど寒いはずなのに、篠ノ之神社への参拝客の熱気で不思議とそう感じない。

しかし私の目には仲睦まじい親子が映る、肩車をして貰っていたり、両親と手を繋いでいたり、羨ましくないとさえ言えれば嘘になる。

本当なら私も正月くらいは父と母と一緒に居たかったんだが、今日も起きたら二人とも出勤した後だったので大人しく諦めた、毎年の事だから今更と言うのもあるが。

……そういえば、最後に家族揃って食事をしたのは何時だったっけ？

そんな私の考えを知ってか知らずか東の奴は私の手を引いて出店を見て回り始めた、あまりこの手の物に興味が無かった筈なのに東の奴も変わったな。

親友の変化を嬉しく思う反面、自分の知らないところで成長した東に少し複雑な感情もあった。

東の成長には少なからず彼が関わっている、たった一年であの東に顔と名前を覚えさせ、その線引きの内側へと入った男。

彼の顔を思い浮かべた私は、思わずそつとポケットの中へと手を伸ばしてクリスマスに貰ったあの葉を優しく握っていた。

彼と初めて出会ったのは一年生の時の運動会、何故か一方的に目の敵にされていたので困惑したが、話して見れば悪い奴では無く、むしろいくらでも話せそうな印象だったのを覚えている。

本格的に関わる様になったのは去年からだだったが、彼との付き合いは東が気を許すのが分かるほど楽だった。

彼は私が経験した事の無い事を教えてくれる、剣術と勉強くらいしか知らなかった私の手を引くように。

——だからだろうか？ 時々私は窓越しに話しかけてくる彼

を心待ちにする時がある。

毎回、と言うほどでは無いがそんな日は大抵両親との距離感をなんとかしたくて空振りに終わった日が多い、例えば今日のような。

……正直窓越しに話しかけてきた束にがっかりしたのは内緒だな。そんな事を考えていると人混みに紛れた誰かに肩を叩かれた、少々気を抜いていたらしい。

まだまだ未熟だなと思いつながら振り向くと、出店のお面を斜めにかけた彼がニコニコと笑顔を浮かべながら立っていた。

「よっ!! あけおめーことよろー、いやーさつきししよーん家寄ろうかって考えたんだけど丁度会えて良かったわ」

「丁度束が私を誘ってくれたからな、せっかくだから私も来たんだよ」
こんな事ならもう少し家でゆっくりとしていれば良かったか？

気を使ってくれた束に悪いからと直ぐに出たんだが、そうすればまた窓から彼は顔を出してただろうし。

待てよ? そういえばどうせ今日は外出しないからと寝癖がそのままじゃなかったか? 束が来てもどうせ彼は他の友達か御両親と一緒にいるだろうと思つて何もしてなかった様な……。

その事を思い出した瞬間、私は思わず彼の目元を手で塞いでしまった。

「おーつと? ししよー? 前見えねーんだけど?」

「い、今は見るな、少し待ってくれ」

「あー、ちーちゃん今日は髪型が——」

「余計なことを言うな、束」

私は束を睨んで黙らせた後、手で軽く髪を梳きながら出来るだけ寝癖を目立たない様に直して行く、手遅れな気もしないでもないがやらないよりはマシだ。

「なーなー、いい加減手離してくんね?」

「あ、ああ、悪かった」

「ちーちゃんちーちゃん、今更髪型セットしても手遅れなんじゃないかな?」

「束、余計なことを言うなと言った筈だが？」

「待ってちーちゃん、握り拳作るのやめて束さんと話し合おうよ!!」

地味に隠してたズボラな部分が露呈したただだから大丈夫大丈夫!!」

「なーさんぼー、そんな事言いながら俺を盾にすんのやめてくんね？」

てか寝癪に関しちやお前も人の事言えなかつたろ」

「うっさい馬鹿!! 朝一で家の手伝いやつてたらそんな時もあるんだ

よ!! てかお前今日三回目だろ!? 何回お参りするんだよ!!」

「えーつと、1回目は親父と母さんだつたらー? 2回目はお前らに

話した事ない友達と入り口で会つたからついでに一緒してただろー

? んで3回目はお前らだな、丁度今度こそ帰ろうかなあつて思った

ところだつたから三往復目だわ」

その発言に私と束は呆れてしまつて何も言えなかつた、今も新年の挨拶を道行く友人にしているのかしよっちゅう手を振ってるし、彼の交友関係はどこまで広いんだ?

というか三回もお参りして大丈夫なのか? いや、彼の調子から考えるに三回じや済まなさそうだが。

私も束も彼を間に挟みながらそんなツツコミを入れつつ出店を含めた初詣を堪能し、最後に賽銭を入れて神様へお願いをする。

——— 次の学年でも彼と一緒にのクラスになれます様に。

小学三年生 1

今年は篠ノ之と織斑の両方と同じクラスになった。

しかも前の席に織斑、左に篠ノ之とまるで狙った様な形でなんだか少し面白い。

織斑は相変わらずクールな感じだけど、何となく見た篠ノ之の顔はどことなく得意げな表情だった、なんでだろう？

「なーさんぼー、なんでそんな顔してんの？」

「……別に？ 私は何時もと同じだけど」

気になって聞いたらそんな風に言われてぷいっと顔を背けられた、絶対そんな事ねーはずなのに相変わらずコイツは気難しい奴だなあ。

うーんけどどーすっかなあ、去年と一昨年と遊んでてなんとなく分かったんだけど、篠ノ之って案外寂しがりやさんなんだよ。

んでこうやってつっけんどんな態度してても話しかけるとちやんと返してくれる、そもそもコイツは人と話すのが好きみたいだしな。

そうそう、最近篠ノ之は俺の貸したゲームとかもやってるんだよね。

特に良く貸してるのがロボゲーとか親父が買ってきたゲーム屋の福袋の中にあつた戦略ゲー、ロボゲーは単純に俺が好きなんだけど、戦略ゲーは単純に俺の頭じゃクリア出来ないんだわ。

だから篠ノ之にプレイしてもらったんだけど、そしたらあつさりクリアして『この程度で詰んだの？ なっさけな』とか何とか言われたんだよなあ、その後は『なんなら縛りプレイって奴もやれるよ？』

なんか言ってみなよ』って言って凄く自慢気な顔してたし、得意なんだろなこの手のゲーム。

織斑にもゲームを貸す事があるんだけど、スポーツ物とか対戦格闘ゲームが中心だからジャンルが違う、三人で遊ぶ時はパーティー系だけどさ。

「そーいやさんぼー、この前新しいゲームいくつか買って貰ったん

だよ、一緒にやんね？」

「……ジャンルは？」

「買ってもらったばっかだからしらね、なんかc mが超怖い奴となんとか（仮）とかいう奴だった気がする」

「……私は誘ってくれないのか？」

どんなゲームだったか思い出してたら、今までずっと静かだった織斑が若干不満そうな目でそう言ってきた。

「んー、でも多分織斑の好きそうな奴じゃねーと思うぞ？」

「別にいいさ、お前達を眺めてるだけでも十分楽しいし、まだ読んでない漫画もある」

「ふーん、なら今日家に来るか？」

「そうさせてもらおう、今日はベビーシッターさんも長く居てくれるらしいしな」

「……ちーちゃんが行くなら私も行く」

「ん、じゃあ今日は三人で遊ぶか」

取り敢えず今日は二人が遊びに来る事に決まった、最近は割と二人も遊びに来る様になったからいつもの事かな、他の友達と同じくらいの頻度だし。

たまりに二人と他の友達が鉢合わせになる時があるけど、そんな時はそんな時で全員一緒に遊んだりどっちかに帰って貰ったりしてる、今日はその心配は無いっぽいけど。

んで、他の友達とかと遊んだり二人に宿題を見てもらったりして放課後。

家に帰った俺は部屋に行く前に冷蔵庫の中のコーラもどきと、先に部屋に行った二人の分も含めてアイス三つを持って部屋に戻る。

「おまたー、バニラ・チョコ・チョコミントの中から好きなを選んでいいよー」

「なら私はバニラを貰おう、東はどうする？」

「私はチョコミント一択、バニラでも良かったんだけどねー」
「くっ、今まで誰に勧めてもチョコミントだけは残ってたの!!」

毎回毎回微妙な顔されるから実質二択な選択肢にして俺は確実に好きな味を食べるって言う最強の戦法だったのに、くっ流石篠ノ之だな!!

かと言ってわざわざ取りに戻るのも面倒だからなあ、しゃーねーしチョコ味食うか、嫌いじゃないし。

「好きなのか？ チョコミントアイス」

「ん？ まーなー、あんまり理解されねーけど」

バニラアイスを食べながら織斑がそんな風に聞いてきた、ほんとはチョコの入ってないミント味のアイスの方が好きなんだけど中々売ってねーからなあ。

そもそも母さんがミント味のアイスが好きなんだよ、んで俺も勝手に母さんのアイス食ってたらいつの間にか好きになってたって訳。

「ま、俺の話はこの辺で切り上げて、ゲームしようぜゲーム!!」

本題は新しく買った、『よんはち(仮)』って読むのかこれ？ 読み方が分かんねーや。

名前の読み方が分からなかったからあんまり気にせずにプレイをしたんだけど……うん、まあ、アレだ、篠ノ之と織斑の困った顔が見ただけマシだな、うん。

小学三年生 2

新学期になってから初めての音楽の授業、今日は色々な楽器を使ってみよう的な内容で、先生から使い方を教わった後に好きに使うって感じた。

面倒くさいってのが顔に出てる篠ノ之はカスタネット、真面目な織斑はトライアングルを鳴らしてたんだけど、俺は敢えてピアノの前に座る。

何を隠そう俺の母さんはピアノが弾ける、んでたまーに家にあるキーボードとかで弾き方を教えてくれる、本当は二つは別もんらしいけど。

「……ピアノ弾けんの？」

「ふっ、まー見てろよさんぼー、俺の腕って奴をさ!!」

俺は篠ノ之の疑問にそう答えつつ、自信満々になんちやらの為にを弾いてみせる、母さんのキーボードで練習した奴だから余裕だ。

「ふふん、どーよ!!」

「……五箇所」

「へっ?」

「音外してたのが五箇所あった、自信満々な顔してた癖に音外し過ぎ、しかも演奏も微妙にたどたどしい話にならないね、代われよ私が手本を見せてあげる」

そうやって篠ノ之は俺を押し退けると、俺とは比べ物にならない手付きで俺と同じ曲を弾き始めた、しかも超上手。

コイツあれだな、勉強だけじゃなくて楽器も余裕なんだな、今度何か教えて貰おうかな?

「ま、ざっとこんなもんかな? 君よりは上手だと思っけど?」

「すげーなさんぼー、マジで俺より上手じゃん!!」

「東、次は私が弾こう」

「えっ？　ちーちゃんも？」

「私だつてやれない事は無いさ」

フツとクールな笑いを浮かべた織斑は、篠ノ之と交代するとほんとに篠ノ之と同じ様にピアノを弾いてくれたんだけど、こうぽんぽん簡単に弾かれるとちよつと自信無くしそう。

「どうだ？　私も束の様に弾けただろ？」

「いやまあ、すげーにはすげーんだけど、褒め言葉がそれ以外見つからぬーんだわ、てか篠ノ之も織斑もピアノ弾けたんだな」

「えっ？　音楽室に置いてあつた説明書読んだだけだけど……誰でも弾けるでしょ？」

「私はお前と束の指の動きを見て覚えたな」

……俺弾き方覚えるまで結構かかったんだけど、コイツらマジですげーな。

そんな風に単純に考えてたんだけど、『じゃあ次は私の番だねちーちゃん』つて言つて今度は篠ノ之がピアノの前に座る。

先に弾いてたのに取られちゃつたから他の楽器でも探しに行こうと思つてると、いきなり篠ノ之に肩を掴まれた。

「おい、なんで聴いてかないんだよ？」

「えっ!?　だつてほら、お前らがピアノ占領してつからさあ」

「お手本見せてるだけだつて言つてるでしょ？　だから君はここで聴いてないとダメなの、分かった？」

「お、おう」

なんだかよく分からないけど移動しちやダメらしい、なんか弦楽器が向こうにあつたから弾いて見たかつたんだけど、まあいいや。

とりあえず領いたら篠ノ之はまたピアノを弾き始めたんだけど、その時に横に来てた織斑が『次は私の演奏だからな？』つて言つて来たから多分俺はこの授業中ずっと聞き役になる、いい加減コイツらとの付き合いも長くなつてきたからなんとなく分かるんだ。

「さあ私の番だが……そうだな、私の横に座って指の動きでも見たらどうだ？」

「んー、立ってるのも疲れるしそーするわ」

俺は教室の椅子を持って来て織斑の横に座ると、織斑の指の動きを見ながら自分の弾き方との違いを探してただけど、気が付いたら演奏が終わってた。集中し過ぎてたんだな、多分。

四回もお手本を見せてくれたしそろそろ弾かせてくれるだろうと思つて織斑と交代したんだけど、したら今度は何故か篠ノ之が俺の左側に座った。

「なーさんぼーさんや、なんで俺の横に座ってんの？」

「何？ 私が座つちやいけないわけ？」

「いやそーじゃねーけど、ちよつと緊張してさ」

人に聴かれるとかなら平気なんだけど、篠ノ之のダメ出しは採点みてーなもんだからなあ、あんまり下手だとまた色々言われるし。

そんな風に思つてたら早く弾けよ的な視線になり始めたから大人しく演奏をする、なんだろこのプレッシャー……はっ!? まさか俺も遂にニュータイプに覚醒したのか!?

「おい馬鹿、変な事考えてたろ？ また音外したぞ」

「くっ、流石は本物のニュータイプだな……」

「だーかーらー!! そんな妙なカテゴリーに入れるなつてば!!」

その後、俺は何回も同じ曲を弾かされたんだけど中々篠ノ之が合格点をくれなかった。

しかも途中からそんな俺を見かねたのか、椅子を持って来た織斑が右側に座つて音が外れたり弾き間違えたりした時に指示する様になったから授業が終わった後は真っ白に燃え尽きたよ……。

……母さん、今なら母さんが女神に見えるや、だって二人のスパルタ加減が母さんの比じゃねーもん。

今更だけど俺は趣味が多い。

基本的に友達とか知り合いがやってる事に興味が湧いて俺もやるって感じなんだけど、今日は母さんからお菓子作りを教わってる。

母さんは割と定期的に簡単な料理を教えてくれるんだけど、前にもその理由を聞いたら『……アンタがお父さん似だからよ』と凄いため息を吐かれながら言われたんだ。

……親父は料理下手だからなあ、結婚する前の頃に自分で作った料理で腹壊したとか言う話を聞いた事があるし、母さんは俺の将来を考えてくれてるんだろーな。

「んで？ 今日は何作るんだよ母さん」

「そうね、時間的にも少し早いしおやつに間に合うように簡単なケーキでも作ろうかしら？ 電子レンジでやれるような奴」

「材料いっぱいあるけど、今日はどんだけ作るのさ？ お菓子の家でも建てるの？」

「そんなメルヘンな物作んないわよ、千冬ちゃん達に作ってあげるだけだから後で持ってってあげなさい」

「へーい」

そんな気のない返事をしながら母さんと一緒にシフォンケーキって奴を作った俺は、先に織斑ん家に来てた。

「ちゅー訳でケーキ持って来たぞししよー、おっ？ 一夏君も一緒か？ はろろーん一夏君、元気してるー？」

「相変わらずお前は……一夏の教育に悪いから偶には玄関から入って来い」

「へーいへい、んじやお邪魔しまーす」

「窓から入るな窓から!!」

「じよ、冗談だつてば……」

織斑の奴一夏君の前だと普段より割り増しで厳しいんだよなあ、篠ノ之並みに弟大好き人間だし？

取り敢えず俺は玄関に回って中に入り、織斑の部屋にお邪魔してケーキを渡す。

んで、用事が終わったから次は篠ノ之ん家に行こうかなって考えてたら織斑に呼び止められた。

「まあ待て、折角だからお茶ぐらい飲んで行け」

「んー、ほらこの後さんぼーん家にも寄らねーとダメなんだわ」

「時間はまだあるだろう？ それに私は今それほどお腹が空いてなくてな、一緒に食べてくれないか？」

「えっ！ーの？ なら食べる食べる」

超ふわふわで危うく二人の分も食いそうになつたくらいに上手に焼けたからなあ、行き道に俺の中で天使と悪魔が現れたほどだし。

あつさりと踵を返した俺は、お茶を淹れに行った織斑に代わって一夏君と遊んでただけけど、この子中々大人しいんだよなあ。

膝の上に乗っけながら目を合わせてただけけど、中々顔を逸らさないしそもそもこの子が泣いてる所を見た事がないよーな？

「へい、一夏君!! 今日冷んやりクールだね!!」

「あうー？」

「うーん首を傾げられちゃったかー、よしなら俺も赤ちゃん言葉で話してやる」

「だうー!!」

「だうだー!!」

「……何をやってるんだ？」

一夏君の声に合わせて適当に喋ったら後ろに織斑が居た、なんかこう……反応に困る顔をされて俺も反応に困る。

「いやほら、赤ちゃん言葉なら通じるかなーって思ってたさ」

「そもそもお前は赤ちゃん言葉が分かるのか？」

「うんにや全然、何言ってるのかさっぱりだ」

一夏君の話してる言葉をそのまんま返せばなんか反応が返ってくるだろってノリだしね、篠ノ之でも多分赤ちゃん言葉は——。『あのね!! 箒ちゃんが今お姉ちゃん大好きって言うってたんだー!! うふふー、箒ちゃんが私の事大好きだって!! 私も箒ちゃんが大好きだよー!!』

……うん、篠ノ之なら多分理解出来てそうだな、今度赤ちゃん言葉でも教えて貰おう。

「てかき、一個いいかししょー?」

「……なんだ?」

「お茶を淹れに行つたのに何で水なんだ? 別にいいけどさ」

「……………お、お茶の場所が分からなかったんだ」

顔を赤くして顔を逸らした織斑から目を離し、チラツと部屋の隅に出来てたタコ足配線を見たら妙に納得してしまった。よく見たら本棚も適当に本が突っ込んであるし、前に来た時はあんまり気にしなかったけど俺と一緒に自分の部屋の掃除は苦手なんだな。

そんな事を考えながらケーキを食べ終わった俺は、織斑ん家を出て篠ノ之ん家に行った。

丁度篠ノ之は自分の部屋に居るみたいだから、そのまま部屋に行つてケーキを渡す。

「てな訳でほい、俺と母さんの手作りケーキを食べなされ」

「ふーん、相変わらず趣味の幅が広いね……」

「俺の事はーじゃん、ほらほら冷めても美味しいぜ?」

そうやって俺は持ってきたプラスチックのフォークにケーキを刺して篠ノ之の目を見つめながらコイツに向かってケーキを差し出した。

「こうしないとどうせ『君の作った物なんてどーせ大した事無いだろ

？』とか言って食ってくんねーからな。

「ほれ、食べてみ？」

「……あ、あーん」

俺の視線に負けたのかパクつと篠ノ之はケーキを食ってくれた、んでしばらくもぐもぐしてたんだけど『まあ、悪くないんじゃないの？君にしてはさ』と言って顔を逸らしてしまった。

その割には完食してるんだよなあ、篠ノ之の奴はやっぱ素直じゃねーな。

まあとりあえず用事は済んだし、箒ちゃんに挨拶だけして帰るか？
ついでに篠ノ之に赤ちゃん言葉も教えて貰えれば万々歳だし。

……そう思っつて篠ノ之に赤ちゃん言葉を教えてつて聞いたたら『熱でもあんの？』と割と本気で心配された、なんかごめん？

——突然だけど篠ノ之は可愛い、んで織斑は綺麗だ。

良く二人と遊んでるけど、俺はその事で年上の知り合いとかに羨ましいって言われる事が多い。

『俺もお前くらい頃から可愛い子と知り合ったりやなあ〜』とかその人に言われるんだけど、それなら別にそんな人と仲良くなればいいんじゃないかなって思う。

「んな訳でさ、今日の朝もその人に羨ましがられたんだけど、どー答えたら良かったのかなあ」

「だから、話の過程を省くなつてば……」

「おーごめんごめん、要は人と仲良くなる方法を教えるのってどーやりやいいのかなーってさ」

「休みの日に態々家に来た癖に、イヤミ言いに来てんの?」

「いや、だつてさんぼーは頭いいしきー」

俺が考えるより篠ノ之に話を聞く方が早いしその方が上手に解決出来るんだよなー、俺は自分一人で出来ない事は出来る人に手伝って貰う派の人だからね!! ってなわけで土曜日に篠ノ之ん家に来たわけだ。

けど良く考えたら篠ノ之つて俺と織斑以外に友達居る……のか?

コイツの口から織斑以外の友達の話聞いた事ねーんだけど……。

「な、なんだよその目」

「いや、さんぼーつてもしかして俺と織斑以外に友達いねーの?」

「……べ、別にいいだろ、他に友達なんか要らないし?」

「えー、絶対友達が多い方が良いつて!!」

友達が多けりゃ自分の知らない事を知れるし、色んな趣味も出来る、話のタネだつていくらでも作れるんだから箒ちゃんが大きくなつた時にも話してて飽きられないんじゃないかね?

つか、箒ちゃんが大きくなったら友達が少ないお姉ちゃんになるんじゃない……。

「よし!! 外行くぞさんぼー!!」

「は? いや待って? 何でそうなるの!？」

「お前を箒ちゃんにがっかりされないお姉ちゃんにする為にも友達作りに行くぞー!!」

「ちよっ!？」

思い立つたらなんとやら、俺は篠ノ之の手を握るとそのまま外に連れ出したんだけど、商店街に出た辺りで良く考えたらなんも解決してねー事を思い出した。

結局篠ノ之からアドバイスも聞けなかったし、うーんどーしよ。

「あれ? 結局友達作りの方法教えるのってどうやったらいいのよ?」

「……そんな事いいから早く手を離せよ」

「えっ? せっかくだしこのままてきとーに町を回ろうぜ? 手繋いで歩いてたら仲良しに見えるし、誰かしら話しかけてくれるだろ?」

そしたら友達の一人や二人簡単に出来るって、さーレッツツゴー!!」

「勝手なんだから……」

多少文句を言われたけど、何だかんだ言って篠ノ之は手を離さなかったからそのまま商店街を歩く。

今日はあんまりお小遣いを持ってこなかったけど、オヤツくらいならここで買えるし、肉屋のオツチャンとか駄菓子屋のおばあちゃんとかオマケしてくれる。

今日も『おっ? 坊主、デートかい? ははは、今時の子は進んでんなあ、よーし今日はコロッケ半額にしといてやるよ』って言って一個分のお金で二人分くれたし、偶には二人で遊ぶのも良いな。

「ん? どったのさんぼー? ここのコロッケ美味しいよ?」

「か、勘違いすんなよ!? デートじゃないから、君が勝手に連れ回してるだけだからね!？」

「そんな顔を赤くしながら言わんでも……」

デートって結局あれだろ？ 仲のいい人が二人で遊びに行くだけだろ？ なんでそんな恥ずかしがるのかなあ。

んな事を考えながら二人で並びながら食っていると、今度は駄菓子屋の前に着いた。

丁度喉が渴いてたから冷やしてあったラムネを二人分買ったんだけど、お金渡す時に店のおばあちゃんが余ってたおもちやのカチューシャをプレゼントしてくれた、なんで今日は色々オマケが付くんだろ？

「はいこっちがボウヤの分、それでこっちがお嬢ちゃんの分ね？」

「ありがとーばーちゃん!!」

「……あ、ありがと」

「いえいえ、どういたしまして、また来てちようだいね？」

駄菓子屋で貰ったカチューシャは動物の耳が付いた奴だったんで、俺は篠ノ之の頭にうさぎの耳と自分の頭に狼の耳を付けて門限まで商店街を回るのがあった。

小学三年生 5

久々に部屋の掃除をしてたら何故か本棚の裏から昔親父が買った将棋の駒と折りたたまれた板が出て来た。

親父の実家に帰った時にじーさんから将棋と囲碁の打ち方を教えて貰ったし、幼稚園の頃は親父としょっちゅう指してたんだよなあ。

やらなくなったのは俺が熱中し過ぎてご飯時も親父を立たせなかったから母さんに禁止されたんだっけか。

勝つまでもう一局を繰り返してたら段々ご飯が冷めてった挙句、お腹も減ってなくて残すつてのを繰り返してたから母さんが怒るのも無理ねーよな。

うーんせつかく見つけたんだし誰かと打ちたいんだけど、親父は帰って来てねーし近所に将棋とか囲碁をやる様な人いねーからなあ。

隣町まで行けば高校生の知り合いに将棋部の人が居たはずなんだけど、そこまでする気分じゃないし……。

いや待てよ？ 篠ノ之なら将棋くらい……つてアイツと将棋したらエライ事になるつて。

……あー思い出したなんでこんなところにしまったのか、小1の時に『これなら勝てるだろ、年季の違いを教えてやるぜー』つてな感じで篠ノ之ん家に自信満々に持つつてボコボコにされたんだっただわ、飛車角金銀落ちで。

今考えても何で負けたのか分からん、けどあまりにもショックだったから封印してたやっだこれ、苦い思い出も一緒に出て来るとは思わなかった。

け、けど今の俺の気分は将棋一択、どーしても打ちたいんだ!!

「てな訳でししよーん家に来たんだけど、一緒に将棋しよーぜ?」

「珍しく玄関から来たと思つたら……また唐突だな」

今回は横着せずに正面から行つた、頼み事する立場だし偶にはコツチから行かなきゃね？

そんな事を考えつつ織斑の部屋に通して貰つた俺は、早速将棋の話をしたんだけど織斑は打ち方を知らないらしい。

けどこの辺は想定内、俺は初めから織斑にやり方を教えるつもりで遊びに来たんだからのーぷろぶれむって奴だな!!

そもそも織斑って趣味がすくねーからなあ、漫画とかゲームを貸しちゃいるけど俺はそれくらいしかコイツの趣味知らねーのよ。

だから俺の趣味を教えながら一緒にやれたらお互いハッピー、どーよこの完璧な計画!!

「じゃあ先ずは駒の種類と動きからだなー」

「……普段教える側だからか？ 妙に違和感が」

「おっと、忘れてたわ」

人に物を教える時は賢く見える様に玩具の眼鏡を掛けて頭いい人アピールを忘れちゃダメだ、親父も伊達眼鏡？ ってのを装着しながら『説明しよう!!』とか言つて雑学喋ってるし、俺も良く真似してる。

「どう？ 似合ってる？」

「あ、ああ、良いんじゃないか？ 利発そうに見えるぞ？」

「おーい、ならなんで目を逸らすんだよー」

眼鏡をかけて目線合わせたら織斑にそっぽ向かれた、まあこの反応は初めてじゃないからいいんだけどさあ……最近女の子の友達にコレやると全然話聞いてくれなくなるんだけど、似合ってるねーのかな？

まーいいや、大丈夫なのは俺のノリだし？ そもそも男友達は態度変わんねーし、気にするほどのもんでもねーか。

気を取り直した俺はじーさんから教わつた事を思い出しながら一通りルールとか指し方を教えていざ実践!!

初戦と二戦目は余裕の勝利だった、初めて織斑の口から『……参りました』って言葉が聞けたからすつごい気分良かったんだけど、三戦目からいい感じに粘られ始めて四戦目で負けた。

「……つ、詰みです」

「ありがとうございます」

あれ？ おかしいな？ 俺少なくとも三年は将棋やってたのになんで今日始めたばっかの織斑に負けたの？ やっぱ剣術やってると先読み力が鍛えられるとかか？ ……本格的に篠ノ之道場に入門しようかな？

いや、でもトータルじゃ勝ってるからへーきへーき、気を取り直して五戦目行くぞー。

「これで詰みだな？」

「し、ししよー？ 待ったは……」

「さつき使わなかったか？」

「参りました……」

アレ？ さつきより早く詰んだんだけど……俺の手見透かされてね？

んで六戦目、コレに勝てばまだ俺は巻き返せると思ってました……。

「……ししよー、知ってる？ 微妙に形がちげーけどその陣形穴熊囲いって言うんだぜ？ 田舎のじーちゃんが好きな奴だから俺それだけは知ってたんだー」

「そうなのか？ 何戦かやる内にこうした方が良いんじゃないかと思ってる組んだんだが……」

「うん、でね？ 俺じーちゃんにそれやられていっぺんも勝った事ねーんだー」

……この後、当然ながら俺は勝ち星を拾えなかった。

けどその犠牲もあつて織斑の趣味に将棋が追加されたらしい、帰り際に『打ちたくなったら家に来い、私ならいつでも相手になつてやる』って言われたから気に入ってくれたらしい。

次行く時までには穴熊の崩し方調べねーとな……。

幕間：兎から見たアイツ

——ある日の事、私は彼の家にお邪魔していた。

というのも、雲一つ無い晴れた休みの日に珍しく電話がかかって来たかと思つたら『てな訳でさんぼー、ちよつと遊びに来いよ』と何時もの様に過程を省略した遊びの誘いを受けたんだよ。

今日はいい天気だからお母さんと一緒に箒ちゃんとお散歩したかったんだけど、アイツがどーしてもつて言うから仕方なく私は遊びに行つてあげる事にした訳、別に私が行きたかつたからとかちよつとしよんぼりしたアイツが気になったとかじゃないからね？

そんな訳だから渋々しようがなく、アイツの家に行つただけで庭のところに大きな天体望遠鏡が組み立てられてた。

口径の大きいオーソドックスな屈折式の物、作りもしっかりしてるし見るからに高級品だ、多分値段は五万以上すると思う。

「おつ？ 来たかささんぼー、庭の物置掃除してたらコレが出てきてさー、せつかくだし月見ようと思つて呼んだんだー。早速使つて見ようぜ？」

「はあ？ 今お昼前じゃん、星なんて——」

「おや東ちゃん、来てたのかい？」

「あ、おじさん……その、こ、こんにちわ」

何時もの口調で彼に返事をしようとしたら彼のお父さんが物置の中からひよつこりと顔を出して来た、この人も彼と同じで割とふわふわしてて調子が狂うんだよね。

彼のお父さんは肩に掛けたタオルで汗を拭いながら私のところまで来ると、しゃがんで目線を合わせながら彼の浮かべる笑顔と似た笑みを浮かべながら望遠鏡を指差した。

「ところで東ちゃん、実は朝からでもお星様は見えるんだよ？」

「えっ？」

「えっ？ マジで？ 親父マジで星見えんの？ 俺割とツツコミ待ち

だったんだけど!」

「はっはっはー、天体観測は夜ばかりじゃないんだよー? 今日くらい晴れ渡ってたら月くらいなら見れるんじゃないかな?」

そう言っただけのお父さんは携帯を取り出すと、月の位置を検索したのか天体望遠鏡を弄り始めた。

彼は横で子犬みたいに忙しく動いて凄く待ち遠しそうだったけど、調整が終わったのか彼のお父さんは『太陽を見ないようにね?』と言いながらちよいちよいとレンズを指差す。

先に見せてくれるっぽいからレンズを覗いたんだけど、——私はこの時に見た光景を一生忘れないと思う。

月の模様が鮮明に見える、晴れ渡った空と高性能な天体望遠鏡だからこそその光景。夜に見ればもっともっとはつきりと見えるんだろうけどお昼からでも宇宙が見えた事に感動したんだ。

本やネットを探せば知識として知る事は出来ただろう、しかしそれは知ってるだけで実際に見たときの感動までは手に入らない。

本やネットでの知識しかなかった宇宙が急に身近な物に感じて、言葉に表せない程の感動が私の胸に広がった。

「なー親父、こんなもんなんで家にあんの?」

「これはお父さんが大学生の頃に天体観測が趣味の知り合いから譲って貰ったんだよ、もっと高性能な奴に買い換えるからってね?」

ああそうだ、二人ともちよつと待っててね?」

私が昼間の天体観測と言う新しい体験に心を奪われていた間に後ろで彼とお父さんがそんな話をしていたらしく、気が付いたらおじさんが古いアルバムを持って来ていた。

「コレはその人が撮影した写真でね、お父さんもコレを見て天体観測に興味が出たんだよ? 学生の頃は良く母さんを誘って星を見てたなあ」

「親父、んなどーでもいい話なくていいから早く写真ぶりーず」

「まったく……はいどうぞ、ちゃんと縁側に座って束ちゃんと一緒に見るんだよ？ お父さんはジュース持つてくるから」

そう言ってアルバムを私達に手渡した彼のお父さんは、そのまま台所に向かつて行った。

彼は私の手を引いて縁側に座るとアルバムを開きながら、相変わらず語彙力の無い褒め言葉を言つて一枚一枚を眺めてる。

私も興奮の覚めない内だったからアルバムの写真を見つつ、星座や星の名前を一つ一つ彼に説明したり由来の話をしたりしてしまつた……その、友達だからね。

小学三年生 6

蝉の鳴き声が聞こえる夏、流石の俺も暑さに負けて外で遊ぶのを控える時がある季節なんだけど、そのかわり夏にしか出来ない遊びもあるから嫌いになれない。

そう、今日は夏にしかやらないプールの授業の日!!

そんなにしょっちゅうやる授業じゃないから毎年の楽しみなんだよなあ、準備体操がめんどつちいけど。

「てな訳でひゃっほう!! プールだプールだ!! 水つめてー!!」

「テンション高いな、そんなにプールの授業が嬉しいのか?」

「私プールきらい、だって人がゴミゴミしてて鬱陶しいし」

「お前らテンションひっくいなー、夏にしかねー授業なんだぜ? もーすこし楽しもうぜ?」

プールサイドで俺の事を眺める織斑と篠ノ之の二人、せっかくの特別授業なのにもう少しはしゃいでもいいと思うんだけどな。

まあコイツらのローテンションは毎年の事だし気にしても仕方ねーんだけどさあ……。

そんな風に二人を眺めてたんだけど、気を取り直して授業内容の背泳ぎをしながら冷たい水を堪能する。

うーん気持ちいい、けどこの気持ち良さも休憩の時間だからそろそろ終わりなんだよなあ。

もつと浸かってたかったけど先生に怒られるし、渋々プールサイドに上がって身体をタイルの上に大の字で仰向けになる。

男女に分かれて泳いでるから次は女子のターンなんだけど、その前に二人に言いたい事が出来た。

「なあ二人共、ちよつと言いたい事があるんだ」

「ん? どうしたんだ?」

「どーせ下らない事でしょ？ 次は東さん達の番だから早く言つてよ」

「……こうやって横たわつてると、フライパンで焼かれる食べ物の気分にならね？」

「さ、行こうちーちゃん、予想通り何の意味も無い話だったからね」

「そう言つて篠ノ之はジトつとした視線を俺に向け、織斑の背中を押してプールへと入つて言つた、出来るなら織斑のツツコミも欲しかつたんだけどなあ。」

「そんな事を思いながら仰向けの状態で頭を動かしながら二人の泳ぎを見る。」

「体育とかの授業で毎度毎度思うんだけど、織斑つて綺麗な動きしてるんだよなあ。」

「本人だけの時だとあんま気にならねーんだけど、こうやって誰かと並んで体動かしているとそれがよく分かる、良くバトル系の漫画で言うじゃん？ 身体の軸がうんたらかんたらつて、あんまり詳しくねーけど多分それなんだろうな、見るからに動きがちげーもん。」

「そうそう、動きが違うつて言つたら篠ノ之もなんだよ、アイツの場合は何んつーの？ 織斑よりも動きが綺麗なんだよ、うまく違いが説明できねーけど。」

「なんかこう……織斑より自然っぽい？ うーん違うか、何処がどうつてのが説明できねーけど二人が並んで同じ事やつてると何となく篠ノ之の方がちよつとだけ上手に見えるんだよな。」

「このなんとも言えない気分の説明を付けたくて、同じようにプールのタイルに寝転がってる奴に聞いてみたんだけど『んな細けー違いなんてわかんねーよ』つて言われて結局分かんなかった。」

「そうやって考え事してたら二人が折り返し地点から来たんで、声が届く距離になった時にうつ伏せになって話しかけて考えるのを辞める、そもそも人と人を比べちゃダメだしね。」

「てな訳で二人ともー、両面焼きー」

「……いや、そんな『どうよ?』みたいな顔をされてもリアクションに困るんだが」

「むー、ししよーには理解出来ない高度なギャグだったか……さんぼーなら理解出来るだろ?」

「そんなド低脳なギャグ理解出来ると思う? 理解できるとしても私がそんな低レベルな事を理解すると思う?」

水面から顔を覗かせる二人のコメントに満足した俺は、そのまま両面焼きの状態で偶々目が合った織斑を見つめながら、次の番がこねーかなーってぼーっとしてた。

「な、なんだ? まだ私に何か用があるのか?」

「えっ? 何が?」

「いや、その、さつきからずっと私を見つめてるじゃないか」

「そーだけど……ダメなの? 織斑って綺麗だし別にいいじゃん」

「だ、ダメって事は無いが、その……」

何時も言ってるけど、織斑って綺麗だから眺めてても全然平気なんだよなー、まあ俺は普段からあんま人から目逸らさねーんだけど、そんななかでも特別目を合わせてて疲れない。

「……:……ちーちゃん、この馬鹿は猫と一緒にだからコツチが目を逸らさない」と

「あ、ああ、そうだったな」

そう言っつて織斑は俺から目を逸らしてそっぽを向く、何となくその横顔を見ているとちよつとだけ勝った気分になるんだよなあ。

……とか思っつたら篠ノ之に水を掛けられた、何故に?

「さんぼーさんや、なんで俺は水かけられたんだ?」

「ふんだ、しーらない」

篠ノ之はそう言っつと舌を出してべーっつてした後、織斑と一緒に二往復目を泳いで行っつた。

……なんで俺、
べーつてされたのよ？

今日は昼休み前に身体測定の授業なんだけど朝から超カンカン照りで体育館が異様な雰囲気を出しててヤバイ、例えるならゲームのラストステージみたいな感じ？

「くっ、俺のレベルだどこの暑さの結界は超えられない……」

「何を言ってるんだお前は……」

「さあ？ 暑さで頭やられちゃったんじゃないかな？ てかとつと中に入ってるよ、ちーちゃんも私も中に入れないでしょ？」

俺がそんな風に軽くボケてたら後ろから篠ノ之に背中を蹴られてよろけてるところを置いて行かれた、最近ツツコミに手が出る様になってねーか？

いや逆に考えるんだ、コイツ的にはそれぐらいしても問題ない相手だっと思われてるって、つまり俺と篠ノ之は最早大親友!!

てな訳で後ろから篠ノ之にハグしたら背負い投げられた、床板超痛え。

「おい、ちよつと気を許してやったら勘違いしやがって、私だっ暑さでイラついてんだから気安く触るなよ」

あ、俺知ってる、この超見下した目した篠ノ之って真面目に機嫌が悪いつて、多分本人の言う通り暑さでイライラしてんだろーな。

それに昨日は大分雨も降ってたし、必要以上にジメジメしてて余計に汗が出るもんな、体育館の窓とか扉とか全部空いてるけど暑さが上回ってるし。

取り敢えず立ち上がった俺は篠ノ之に謝りながら織斑の横に行く、道場通いだしこの手の暑さには慣れてるだろーしな。

「ふう、ちよつとふざけすぎたかなあ？」

「いや、束にはアレくらいやっても大丈夫だろう、そもそも構わなかったら構わなかったで拗ねる女だぞ？」

「それならいいんだけどねー」

まあ俺より付き合いの長い織斑が言うんだから間違いない筈、こんな事で嘘付いてもしやーねーしな。

そんな事を思ってたら授業が始まったので、順番に体力測定をやつて行く。

昔は自信満々に織斑に勝負吹っかけてたけど、今の俺はちゃんと学んでるからそんな事はしない。

そう、さり気なく自然体で織斑に近付いて自分の記録を自慢する、そーすれば織斑も『なんだ、今年は張り合わないのか』ってなつて手を抜く筈!!

ふはははは!! 全力を出さない織斑なんて俺の敵じゃないね!!
今年こそ俺の天才的作戦が炸裂する!!

「——訳無いよねー、そもそもしよーってば真面目だし」

「いきなりどうしたんだ?」

「いや、今年も完敗だなーってさ」

「……その内勝てる様になるさ」

俺が織斑の記録と自分の記録を見比べながらそう言うと、なんだかちよつとだけ織斑が悲しそうな顔をした様な気がする、なんでだろ?

まー勝ち負けの事は別にいいや、運動以外なら織斑にや勝て……勝てるのも多分あるはず、絵とかなら俺の方が上だからなうん。

篠ノ之の記録も見たかったんだけど、直ぐに風通しの良い場所に座つて涼んでるからなあ、見る感じ暑さで不機嫌だからあんまちよつかいかけると本気で張つ倒されるし、今はそつとところ、記録自体は昼休みにでも聞けばいいしね。

「あつそーいやしよー、今度の土曜日暇?」

「土曜日は空いてるが……何か用か?」

「用つてほどでもねーんだけど、親父が映画のDVD借りて来たから一緒に見ようかなってさ」

「私でいいのか？　そう言うのは東の方が良いと思うんだが」
「んー、今回は織斑と見たいんだよ、ダメなら諦めるけど」

単純に織斑と見たいからってのもあるけど、篠ノ之と見たら100%キレそうなパツケージだったんだよなあ、俺そーいう訳の分からない映画とか好きだから何も思わねーんだけど、アイツは『ツツコミとところが多過ぎるよ!?!』って言って二時間くらい矛盾やら作品の粗やらを語られたからね。

終いにや帰り際に『C級通り越してZ級の映画を楽しめるとか、人生明るそうだね……』って言って疲れてたからなあ、流石に興味に合わないもんに付き合わせるのもな？

てな訳で織斑を誘ったら少し嬉しそうな顔をしながらOKしてくれた、よーし今度の土曜日は一緒に映画見るぞー。

篠ノ之の妹、箒ちゃんは若干人見知りな子なのか昔は割と良く俺の顔を見て泣いていた。

最近は慣れてくれたからかそんなことは無くなったんだけど、今度はまた別の問題が起きてるんだよね。

「なあさんぼー？ 一つ聞いて良い？」

「ん？ 何が聞きたいの？」

「その前に箒ちゃん？ さんぼーが居るね？ さんぼーの事はなんて呼んでるのかなー？」

「ねーね？」

「うんうん、じゃあ俺は？」

「びゃきや？」

「オイコラさんぼー、お前ほんつと普段マジで俺の事なんて呼んでんだよ!! 舌つたらずの小さい子にまで馬鹿呼ばわりは流石に傷つくぞ!!」

箒ちゃんは完全に言ってる事理解してないだろうけどつぶらな瞳と上目遣いの馬鹿呼ばわりは思わず泣けた、俺の顔見ても泣かなくなつて喜んでたらこの仕打ち……明らかに篠ノ之の影響じゃねーか!!

しかも篠ノ之の奴悪びれもしねーできよとんとした顔してるしよ、やろーぜつてー『えっ？ 何かおかしいところでもあるの？』とか考えてるだろ、それぐらい分かる。

「えっ？ でも実際君ってバカでしょ？」

「いやだからさ!! だからってさ!!」

「変なこと言ってるねー箒ちゃん？」

「ねー」

「箒ちゃんにちよいちよい返事させんの止めてくんね？ さつきから俺のハートにグサグサ刺さってんだけど？」

遊びに来た筈なのに遊ばれてる、なんだろう？ このままだと将来箒ちゃんも篠ノ之並みに癖のある女の子になる予感が……。

いやいや落ち着け俺、篠ノ之も昔と今じゃ大分当たりが違うし人は変わる!! つまり今から正しい道に導けば問題無し!!

そう思ったが大吉……だっけ？ とにかく正座して箒ちゃんと目を合わせて話し合おう、そーすりやまだ何とかなる。

「てな訳で箒ちゃん？ 俺の事バカって呼ばないでおにーちゃんって呼んで見ようか？ はいどーぞ？」

「うゆ？」

「箒ちゃん、このバカとお話するとバカが移るからおねーちゃんのとこおいでー？」

「ひゃーい」

とてとてと篠ノ之へ向かって歩いて行く箒ちゃん、そーいや篠ノ之が言うには若干他の子に比べて歩ける様になるのが早いらしい、その事でまた箒ちゃんフィーバーが再発してるんだけどね。

……脈略のねー事思い出して流しかけてたけどさりげなく俺って箒ちゃんに無視された？ ってまあ当たり前か、篠ノ之はお姉ちゃんだもんな。

ぎゅつとハグしながら『偉いよー箒ちゃん!!』とか言つて箒ちゃんに頬ずりしながら惚けてる篠ノ之を眺めつつ、俺は偶々目に入った本棚に手を伸ばし、なんとなくその中から一冊本を抜いたんだけど、ページをめくっても文字ばっかでちんぷんかんぷんだった。

「さんぼーコレなにー？」

「ん？ ああ、それは今年新しく出た天文学の参考書、その横は海外の宇宙開発の歴史が書かれた本だよ」

「タイトル日本語じゃねーんだけど……」

「中も英語だよそれ、翻訳だと翻訳者の意識が入っちゃうから原文の

方がいいし」

そう言つて篠ノ之はまた箒ちゃんと遊び始めた、俺も混ざりたいんだけどそれよりもこの部屋が色々物が増えてる事に気が付いてちよつぴり感動してる。

一年生の頃に来た時は必要最低限のものだけって感じで寂しい感じだったけど最近は色々置かれてるんだよな、今手に取った本とかもそうだし、アルバムとかも実はこっそり並んでる。

……まあ中身は箒ちゃんオンリーだけどね、しかも開いた瞬間に写真一枚一枚に映った箒ちゃんの解説が入るもんだからある意味最強のトラップだ。

「つて、あれ？ コレって確か……プリクラ？ 昔撮った奴か？」

「……………なんだよ、取つておいたら悪いのかよ？」

「いや別にんな事は言つてねーけどさ、ふーん大事にしてくれてたのか……ちよつと嬉しいな」

「ふ、ふん!! 単に捨てる気にならなかつただけだからね!! 勘違いすんなよ!!」

そう言つて篠ノ之はぷいっと顔を背けてしまった、まあ多分口にした事以外の意味はねーんだろうし気にする必要はねーか。

それよりも気になるのが棚に置かれたカメラ、あの旅行とかで使うような小ちゃい奴なんだけど、何となく手にとって遊ぶ二人を写真に撮つてみた。

カシャって音で写真を撮られた事に気が付いたのか、篠ノ之と箒ちゃんがこつちに振り向いたんだけど、その隙に俺も箒ちゃんの横に行つて三人で写る様にまた写真を撮る、ちゃんとピース付きで。

「ほい、箒ちゃんアルバムに二枚追加出来るぜ？」

「それ、箒ちゃんの撮影用カメラで後二枚しか撮影出来ない奴なんだけど？ 今の二枚でフィルム埋まっちゃったじゃんか」

「えっマジ？ あー勝手に撮つて悪い、母さんからお小遣い前借り

して買って返すよ」

「別にいいって、そこまでケチケチしてないし」

——この後、何事も無く色々箒ちゃんと遊んでから帰ったんだけど、何日かした後篠ノ之から三人が写った写真をくれた、なんでも『せっかく写ってるんだし君にもあげるよ』って事らしい。

俺も自分のアルバムに挟んどこうつと。

箒ちゃんにバカ呼ばわりされたあの日から一週間ちよつと、俺はクレヨンとスケッチブックを持って織斑ん家に遊びに来ていた。

一夏くんにまでバカ呼ばわりをされない為にももつと仲良くなる必要がある、てか織斑も家で俺の事を馬鹿呼ばわりしてたら当分は凹む自信がある。

「フー訳でししよー、遊びに来たぞー」

「今日は珍しく玄関から……なんだその画板とスケッチブックは？」

「ほら、一夏くんってあんまりお絵描きとかやった事ねーだろ？」

「だから一緒に遊ぶにはちようどいいんじゃねーかなってさ」

他にも小麦粉ねんども持って来てるからお絵描きに飽きたらこつちで遊ぶ事もできるし、スケッチブックとかなら置いてつても使ってくれるだろ。

そもそも織斑ん家ってあんまりおもちゃがねーんだよなあ、織斑自身があんま部屋に物置かねーし昔使ってたおもちゃとかも無いらしい、家の事情って奴なのかな？

あんまり気にするのは失礼だと思うからそんなには考えない様にしてるけど……ちよつと寂しいよなあ。

らしくない事を考えてたけど、織斑の部屋に入った俺を見つけたのかよちよち歩きしながら近づいてくる一夏くんを見てたらどうでもよくなった、そもそも俺は考えるのが苦手だしね。

「にーに!! にーに!!」

「はろろーん一夏くん!! 元気してたかーい? 今日はお兄さんがいいもの持って来たよーん!!」

「なんだそのテンションは……」

あり? なんか一夏くんがきよとんとしてるぞ? 箒ちゃんだと喜んでくれるのになあ? まあいーや、取り敢えずお絵描きだお絵か

き!!

「ほらほらークレヨンあるよー? スケッチブックもあるよー? お絵かきしよーねー? ほら、ぼーつとしてねーで織斑も一緒に描こうぜ?」

「あ、ああ、そうだな」

どうしたらいいのかわからないって感じでぼーつとしてた織斑の手にクレヨンを握らせた後、俺たちは一緒になってお絵描きをしたんだけど……まあ織斑は相変わらずのあれだ、うん。

「つて、一夏くんそこ床だよ!? 描くのはこっちの紙だつて!!」

「ん? 一夏がどうし……まて一夏、それは態々お前に読み聞かせる為に持って来てくれた絵本だ!! 画用紙じゃない!! それとそこはカーペットだ!!」

「ゆ、床に描いたり、絵本に落書きしたり……すっかりやんちゃになったなあ」

「そんな事言ってる場合か!! と、取り敢えずティッシュ!! ティッシュでだな!!」

「まてししよー!! 水拭きが先だろ!? 常識的に考えて!!」

「なるほど確かにそうだな、よし水を汲んでくる!!」

これでなんとかなった、そう思ってた時期が俺にもありました、ハイ。

クレヨンつてさ……確か油だったよね? 水じゃ全然落ちねーんだけど、どーしよ?

「……ししよー、どーするよ?」

「……水の量が少ないのかと思ってバケツ一杯汲んできたんだがな、全然落ちないな寧ろ部屋がびちゃびちゃになっただけだ」

「……いやいや、ちよつとは落ちてるつて、拭き方が悪いからか伸びて広がってる気がするけど」

「……束に聞くか」

「……そーだね、さんぼーならきつと解決してくれるはずだ、あいつ頭

いいし」

考えたら俺は掃除が苦手だし、織斑はクレヨンの汚れなんて落とした事がないから下手な事せず初めからこうすりゃ良かった。

てな訳で電話を借りて篠ノ之ん家に掛ける、時間的にまだ出るだろうし。

織斑には一夏くんを見てもらってる、自分で持って来といてなんだけど彼を野放しにしたら被害が増える、織斑はお姉さんだしビシッと止めてくれるだろ。

「てな訳でさんぼー、クレヨンの汚れてどーやったら落ちんの？」

『……背景が見えないけどとりあえずクレヨンから色々察したよ、まあ場所によって使う物が違うからねえ』

「床とカーペットとー、あと壁？」

『フルコンボじゃん、どーせ自分もお絵描きに夢中になってたんでしょ？ 馬鹿だね』

何も言い返せないから取り敢えずちくちくとした篠ノ之の言葉の棘を堪能した後、なんとかクレヨンの落とし方を聞き出した俺は織斑の部屋に戻るのだった。

……其処には弟のやんちやを止められずわたわたと慌てる織斑が居るとも知らずに。

「あぢーなー、今日は何処にも行く気がしねーぞー」

その日、俺は縁側で扇風機の風を受けながらスイカ片手に何度目か分からない文句を呟いていた。

昨日から降り続いた雨が朝に止んだんだけど、かんかん照りで太陽の暑さと湿気のダブルパンチで不愉快感がマックス……ってそうだが、庭に蛇口があるから水でも被ろう!! お風呂場まで行くのが怠いし別にいいよね!!

てな訳でパンツ一丁になって頭から水を被ってたんだけど、良い感じに涼んでたら誰かに小石をぶつけられた。

「いてっ、誰だよ!?……って、さんぼー? 何してんの?」

「それは私のセリフだよこの馬鹿、なんで庭で裸になってんだよ」

振り向いた先に居た篠ノ之は顔を逸らしながらそんな事を言っていた、偶々通り掛かったって感じじゃ無さそうだったから『まー入れよ』と手招きしたけど、また小石を投げられて『さっさと服着ろ』と怒られちゃった、そーいやパンツ一丁だったわ。

取り敢えず着替えた後に篠ノ之を部屋に通したんだけど、なんだかちよつと様子がおかしいような気がする、そわそわしてるって言うか、緊張してるっつーかなんっつーかそんな感じ?」

「んで? 遊びに来たのか? なんか落ち着きねーけどさ」

「じ、実はその、ちよつと頼みがあつて……」

「さんぼーが? 俺に? ……………うん、夢だな!!」

取り敢えず有り得ない事が起こったから篠ノ之のほっぺたを抓って見た、夢なら触ってる感覚なんてないだろうと思っただけ、篠ノ之のほっぺたは俺のと違ってなんだか柔らかい。

……とか思ってたら思っ切り手をはたかれた、しかも結構痛いから夢じゃねーのが分かった。

後『何気安く触ってんだよ』的な目が凄い、相変わらず猫みたいな女の子だよなあ。

「んで？ 頼みって何よ？ 俺に出来る事なら手伝うけどさ」

「君って奴は……はあ、まあいいや正確には君にとってよりは君のお父さんになんだけどね」

「親父に頼み？ まあ親父は色々やれるからなあ」

「その、ほら、前に天体望遠鏡使わせてくれたでしょ？ 土星の輪っかが見たくてさ、だからあれを借りたい……かな？」

そーいや前に望遠鏡覗いた時、篠ノ之の奴すげー機嫌良かったからなあまた使いたくなっただろーな。

にしても天体望遠鏡かー、多分親父なら勝手に貸しても怒らねーとは思うんだけど……持つてく途中で何かあると困るよなあ、やっぱ親父に頼むか。

「ん、おーけー。 親父が帰って来たら頼んで見るわ」

「その、あ、ありがとう……」

「別にいーって、それより俺もお前に頼みがあつてさー」

そう言つて俺はランドセルを漁り始めたんだけど、その時点で大方俺のお願いを察したんだろう、篠ノ之は盛大な溜息を吐いてジトつとした目で俺を見ていた。

「さんぼーさんや、宿題手伝つてくんね？」

「たまには自分一人でやつたら？ 簡単でしょ？」

「いやほら、だつて家で勉強すんのつてなんかヤだからさー」

「はあ、どーでもいい雑学とか趣味の知識は喜んで覚えるくせに、なんで学校の勉強はダメなんだよ」

そんな風に呆れた小言を貰いつつも、友達が来た時用の小さいテー

ブルを出したら横に来て宿題を見てくれる辺り、やっぱりコイツは良い奴だわ。

そんな事を考えながら問題を解いてたんだけど、他の事を考えながらやってたからか気が付いたら宿題が終わってた。

「……はい終わり、途中から考え事してたでしょ？」

「えっ、あーうん、まーな」

「ふん、どーせ何時も通りアホな事だろ、まったく……この束さんに宿題手伝って貰ってる癖に上の空とか何考えてんのさ」

「いやーほら、さんぼーと友達になれて良かったなってさ？」

「……ふ、ふーん、束さんと友達になれて良かったんだ、まあ当然だね、ほら君の馬鹿な頭を私の頭脳が補ってる訳だし？ 君はもつとこの束さんに感謝すべきだよ」

なんだか急に機嫌が良くなった篠ノ之は胸を張りながら立ち上がってそんな事を言ってきた、昔は速攻で否定されてた事を考えるとコイツも俺の事に友情を感じてくれてるらしい。

「んじゃあちーけど散歩でもしに行こうぜー？ やる事もうねーし」

「ふふん、今日は機嫌が良いから特別に付き合ってやるよ」

そんな風にやる事が無くなった俺は二人分の麦わら帽子を取り出し、鼻歌交じりの篠ノ之と一緒に親父が帰ってくるまで散歩して時間を潰すのだった。

幕間：戦乙女から見たアイツ

——自分で言うのもなんだが彼と関わる様になってから、正直に言つて私は変わったと思う。

それまで余り趣味と言う物に興味を持たなかった自分が、漫画やゲームの類いに手を出す様になったし、スポーツも楽しむ様になった。

我ながら良い変化だと思ふのだが、その反動か最近家に帰るとやけに静かな我が家に居心地の悪さを感じる様になってしまった、以前は気にならなかつたのに。

………まあそれも一夏が産まれるまでの話だったが。

最近は一夏が居るから寂しくは無いんだが、彼に影響されつつあるのか段々とやんちゃをする様になって困る、正直私一人では手に負えない事が時々ある。

かと言つて彼が一緒に居れば手が足りるのかと言つと………そんな事はない、彼は彼で問題児なのだからそちらの対応も必要になってくる。

そんな事を考えていた私は一夏と一緒に積み木をして遊びながらも思わず部屋の窓を見てしまう、彼自身時々分かつて怒られている節があるから余計にタチが悪い。

後あの過程を省略した話し方もそうだ、なんの脈絡も無く話を始める癖も矯正しておかないと一夏に悪影響だろう、将来私の可愛い一夏が話の噛み合わない男になられても困る。

そんな内心が顔に出ていたのかきよとんとした顔で私の顔を見つめる一夏と目が合う。

「ああすまない一夏、少し考え事をな？ さあお城を作るぞ」

そう私が言うると一夏は笑顔になってまた積み木を再開する、まだ今より小さい頃は人形の様に見える大人しい子だったが、一夏も彼に大分影響

されている。

彼が一夏と遊ぶ様になつてからと言うもの、まるで好奇心と言う物を理解したかの如く部屋の中を歩き回ったり、色んなものを噛んだり口にしたりとやりたい放題。

筆記用具や銃のプラモなどは机の引き出しに入れてあるから大丈夫だが、それでも部屋が散らかってしまふ。

……元々散らかってるのに更に散らかるのかと言う点は置いておいてだ。

話が逸れた気がするが、とにかく彼は関わった人に少なからず影響を与える人でしかも朗らかだ、一緒に居ると暖かい気持ちになる。

少女漫画とかだとコレが恋という物だろうがあまりピンと来ない、彼が誰か私以外の女の子と一緒に居てもそれほどムツとしないしもやもやした気持ちにもならないから恋愛漫画に書かれているような恋ではない……と思う。

断言出来ないのは自分の感情が分からないからだ、情けない話だが彼が居ると不安や悩みが溶けて行く感覚は自覚して居るし、側にいて他愛の無い話をするのが楽になるのは分かっている。

しかし、何故そのように感じるのかが分からない、恋だとしてもどうして彼に惹かれるのか分からないからそれが腑に落ちないのだ。

「なあ一夏、私は彼の事をどう思っているんだろうな？　少なくとも嫌いでは無い事だけは確実なんだが、好きと言う気持ちそのものが全く分からない」

無論答えは返って来ない、話しかけられた一夏は首を傾げるだけだったが、私は構わず一夏を抱き寄せるとその頭を撫でながら彼の事を振り返る。

私は運動方面なら束と互角に渡り合える自信がある、しかしそれだけだ、それ以外が私には無い。

——しかし彼は逆、束の様な頭脳も無いし私達の様な身体能力も無いが、それ以外を多く持っている。

例えば楽器の演奏や絵画、最近だと一夏と小麦粘土で遊んだ時に上手な象を作っていたか……とにかく彼は持ち前の広い人脈で色々教えているらしく、私や束が興味の湧かなかった物をそつなくこなせるのだ。

と言っても束曰く『あの馬鹿の趣味は浅く広くって感じだから下手の横好きとかそんなレベル』らしい、だがそれでも私達よりも沢山の事を経験しているし、それを元に良く私達を連れ出しては手を引いて色々な事を一緒にやってくれる。

「一夏、お前も大きくなったら彼のように色々な事を経験して、沢山の事を知るんだぞ？ そうすれば必ず良い男になれるさ」

——彼は私の知らない事、出来ない事を体験させてくれる男の子、ただそれだけ、きつとその筈。

そんな事を思いながら私は一夏を寝かしつける為の絵本に手を伸ばすのだった。

秋になって通学路の落ち葉を見ながらたまーに思うんだけど、もみじ饅頭って形以外に紅葉要素無いよね？ もみじおろしも色だけだし、たい焼きに鯛が入ってないレベルで嘘つき商品だと思うんだ。でもテレビで紅葉のてんぷらつての紹介してたし、食べるのか食べねーのかよく分からん葉っぱだよなあ。

そんな事を考えながらちよつと遠回りして道端に落ちてた紅葉の葉っぱを拾った後、俺は学校で二人に聞いてみる事にした。

「んでどう思うよ？ 紅葉」

「……あのさ、そこまで話の内容を圧縮されると流石の束さんも何の事かさっぱりなだけど？」

「時々思うんだがな、お前は分かかって会話の内容を省略してるだろう？」

「あつはつはつは、バレた？」

普段は別に意識してる訳じゃないんだけど、最近は何談の通じる相手には敢えて言葉を省いて会話する時がある、まあ理由はアレだ、人によってツツコミとか表情とかの反応が違うからその反応を見るのが楽しいんだよね。

例えば篠ノ之ならジトツとした目で睨みながら呆れるし、織斑なら意味が分からないと言った様なきよとんとした顔をする。

他にも男友達の多くは口に出して『どーゆー意味？』とか聞き返したり、軽いチョップでツツコミを入れてきたりと人によってちがうからなー。

とそんな事を考えながらも、ランドセルの中に入った紅葉を取り出して二人に見せる。

「で、紅葉」

「おい馬鹿、お前人の話聞いてたの？ 圧縮言語で話されても理解できないうって言うてんの!!」

「まあ落ち着け束、この主語を省略した話し方も今に始まった事じゃ無いだろう?」

「流石に程度って物があるよ!? ちーちゃんはコイツに優し過ぎるんだって!! 一年以上コイツと会話してるけどここ最近の圧縮言語が半端ないんだってば!!」

そんな言うほどかなあ? とか思っただけ最近の会話を振り返って見たけど特に変わった事は無いはず、少なくとも俺は違和感無く会話してたからなー。

ま、取り敢えず脱線しかけてる話を元に戻そう、俺は紅葉についての話をしたい訳だからさ。

「要はアレだよあれ、紅葉って食べるのかって話だよ」

「……何をどう察したら食用紅葉の話に繋がるんだよ」

そう言っただけ溜息を吐いて机に突っ伏す篠ノ之、普段何でもやれる奴だからこんな姿を見せるのは中々にレアなんだよなあ、けどその姿を見れるのが俺との会話ってのがアレだけど。

まあそんな訳で、俺はもみじ饅頭とかもみじおろしの話をしながら適当な雑談をしてたんだけど、気怠げな篠ノ之や割と真面目に話を聞いてくれる織斑との話の中でメープルシロップがまさかのもみじから作られる物だと知ってびっくりした、てっきり蜂蜜の仲間か何かだと思っただけで違ったんだな。

そんな新しい知識でまじまじともみじの葉っぱを眺めてただけで、二人の視線が俺に集まってる事に気が付いた。

「えっ? 何その目?」

「どっからそれ拾ってきたのか知らないけど、食べんなよ?」

「街路樹などには農薬が撒かれてるらしいからな、食べて身体を壊すかもしれないから食べるのはオススメ出来ないな」

「……お前ら、俺が何でもかんでも口にする奴とか思っただけ?」

「違うの? 前に『イナゴの佃煮』ってあるし、イナゴって食べるんだろ?』とか言っただけそこら辺で捕まえたイナゴ食べようとした事あったよ」

ね？」

「違うのか？ 以前『つくしつて食えるらしいぜ？』と言ってその辺に生えていたつくしをそのまま口にしていただろう？」

「……俺、知ってる、コレ、身から出た鯖って奴だ」

「それを言うなら身から出た鯖でしょ？」

「偏が違うだけで随分と生臭くなったな」

言い訳するなら単純に気になったからってだけだから、そこら辺で虫とか雑草雀つて食ってる雑食の生き物だと思われたら困る。

てな事を言ったんだけど『結局好奇心優先じゃん』と篠ノ之に小馬鹿にされてしまった。

そんな訳で、特に何の為にもならない雑談をしながら朝のHRが始まるまで俺たちは時間を過ごすのだった。

小学三年生 12

今日は家庭科の授業で調理実習が有ったんだけど、俺の班は織斑と篠ノ之が一緒だった。

正直織斑はともかく篠ノ之は頼りになるだろーなって思ってた、はい。

てのもさ、分量とかはきっちり測ってるんだけどとにかく材料の切り方とか混ぜ方とかが雑、明らかにやる気がねー。

今日は栗きんとんとスイートポテトを作るから最終的には潰すけどさあ……。

しかも包丁の握り方も危ない感じだし、意外とコイツもハラハラする。

「なあさんぼー、包丁使う時は猫の手だつて」

「はあ？ 別にいいじゃん、指切らないようにするだけでしょ？」

「指切ったら痛いんだぞ!! だいたいそーやって気を抜いてる時に怪我すんだからさ!!」

「はいはい、分かったから……」

俺の説得に仕方ないと言った顔で包丁の握り方を直す篠ノ之を見てほっとしていると、横でさつまいもを切ってた織斑が『あっ』という声を上げた。

「えっどーかしたかししょー?」

「いや大した事じゃない、切りにくいから猫の手をやめたら指を切っただけだ」

「大した事だろ!! お前なんでそんな冷静なの!! だから猫の手で切れて言ったんだよ!! せんせーばんそーこー!!」

てかなんで指切った本人じゃなくて俺がこんな焦ってるの!? 普通織斑が焦るもんだろ、少なくともスパッと切れてて血が出てるんだからさ!!

とりあえず貰った消毒液使ってから織斑の指に絆創膏巻いたんだけど、その間も全然織斑は泣かなかったしあまり痛がりもしてなかった。

「ほいおっけー、しっかしよく泣かなかったなあ」

「ん？ 痛いには痛いけど泣くほどでも無いだろう？」

「つえーなー、俺なんか指切ったらいつつも泣いてんのに」

そんな事を言いながらも一応織斑が平気そうだったから料理を再開しようとしたんだけど、俺たちが騒いでいる間にある程度篠ノ之が下拵えをやっちゃったらしい。

今は切ったさつまいもをそれぞれ用に茹でたりレンチンしてるらしくてやる事が無かった。

「まったくもう、後は君がやってよね」

「いやーわりーわりー、ほら織斑が指切っちゃったから……」

「ちーちゃんが？ 鬼の霍乱……じゃないよね？ 弘法も筆の誤り？」

「東、私だっこのういう時もあるさ」

「ふーん、まあちーちゃんって料理しない系女子っぽいしね？」

「……東、私はからかわれるのが嫌いだ」

「待ってちーちゃん!! 包丁が側にあるからアイアンクローはやめよ？ ね？ ね？ ね？」

「安心しろ東、他にもアームロックやチョークスリーパーなども最近覚えたからレパートリーは豊富だぞ？」

「ぜんぜん嬉しくないよ!!」

ジリジリと距離を詰める織斑にビビったのか、そう言った篠ノ之は俺の事を盾にするような感じで間に挟んで来た、ハハツこのやろう人の事巻き込みやがって、織斑からガン飛ばされる身にもなってみるよコラ。

取り敢えず俺は織斑からの『後ろに隠れてる馬鹿をこっちに渡せ』的な視線が怖かったので、人の事を盾にしながら織斑をからかい続け

てる篠ノ之の肩に手を回すと、そのまま抱き寄せる様にホールドする。

「へっ!? な、何すんのさこの馬鹿!! 気安く触んなって何時も言ってるでしょ!？」

「なあさんぼー、よく考えてみ? コレでお前は逃げらんねーよな?」

「……………ま、まさか友達を売るなんて事しない、よね?」

「何言ってるんださんぼー、ししよーも俺の友達だから問題ねーだろ?」

てな訳でそのまま身体を捻る様にして織斑にパス、んでこめかみをぐりぐりされてる篠ノ之に満足した後、火が通ったさつまいもを織斑と一緒に潰してたんだけど、途中からやっぱ暇になったのか篠ノ之も加わって何事も無く無事に二品とも上手に出来た。

初めての料理だったからか、織斑は若干嬉しそうな顔でスイートポテトと栗きんとんを眺めてる、割と織斑って家事苦手だからなあ。

篠ノ之の方は食べ合わせについてぶつぶつ言ってる、『さつまいもとさつまいもでダブってんじやん』とかなんとかね。

味はまあ普通だった、個人的にはもーすこし砂糖を多くしても良かったかな? でも材料入れる時にレシピ通りの分量きっちり篠ノ之が入れちゃったからなあ。

そんな事を思いながら俺は出来上がった料理を平らげるのだった。

膝枕ってあるじゃん？ ちっちゃい時に良く母さんにやって貰った記憶があるんだけど、それを親父が母さんにやってたのを見かけた。

その時は特に何も考えて無かったんだけど、母さんの表情が結構緩んでたからやっぱり気持ちいいのかな？ 母さんに感想を聞いてみたかったんだけど、顔真っ赤にして飛び起きちゃったから聞けなかった、てか聞けるような感じじゃ無かった。

「だからほら、膝枕したいんだよなー」

「何時もの事だがお前は本当に唐突だな……」

道場に顔を出した俺はそんな風に膝をペしペし叩きながら休憩中の織斑を誘ったんだけど、首を傾げられるだけだった。

うーん、今篠ノ之は箒ちゃんと遊んでるから多分暇じゃねーし、一夏くんは織斑ん家だから此処には居ないしなあ、やっぱ織斑に協力してもらおうしかねーな。

「ほらししょー、丁度休憩だろー？ ちよつとだけ横になって見たくね？ 良い膝枕あるよー？」

「今度は何に影響されたんだ？ チラチラこつちを見なくても話は聞いてやる」

そうやって織斑はタオルで汗を軽く拭きながら俺の横に座った、一応話は聞いてくれるっぽいから昨日見た膝枕の話をしたんだけど、織斑はあんまりピンと来てない感じだった。

「膝枕か、私はして貰った事が無いな」

「ふーん、だったらやっぱ膝枕どーよ？ 俺も膝枕できるしししょーも初体験、俺もおまえも両方ハッピーじゃん？」

「……そんなもの、か？」

「そうそう、なんでもかんでもやってみるのが一番だって」

「まあ、そこまで言うなら……」

俺の熱意が通じたのか、織斑は少し遠慮がちに俺の膝の上に頭を乗せてくれた。

んで、親父が母さんにやってたように織斑の頭を撫でてただけどさ、なんかよく分からないけど不思議な気分だねこれ。

あったかい気持ちになるって言うか、寝てる織斑が物珍しく見えるって言うか、うーん表現し辛いな。

と、そんな風に初膝枕の感想を頭の中で纏めてただけど、やけに織斑が静かな事に気が付いた。

良く見てみると織斑はうとうととして気持ち良さそうにしてる、何時もクールな表情のコイツが緩んだ顔をしてるのが意外だった、やっぱされてる側は気持ちいいのかな？

取り敢えず織斑が気持ちいいならと調子に乗って頭撫でてたら、途中からすーすーという寝息が聞こえて来た、どうにも寝ちゃったらしい。

正直、足が痺れて来たからそろそろ起こしたかったんだけどなあ、どーしよ？

「……何やってんの？」

「おつ、さんぼーか？ この状況どーしたらいいかな？」

完全に寝ちやった織斑に困ってたらちようどいいタイミングで篠ノ之が道場に来たから経緯を話したんだけど、時計をチラッと見たと思ったら今度は篠ノ之が俺の側に座った。

んで、『ま、ちーちゃんだし嫌でも後五分したら目覚ますと思うよ？

ちようど休憩が終わるタイミングだし』と言って俺の背中にもたれかかって来た、何故に？

「さあ？ 私もしーらない、なんだか無性に背中にもたれたくなっただけだし？ 別にいいでしょ減るもんじゃないんだからさ」

「まーそうだな、さんぼーは軽いし別に良いか」

そんな感じで五分くらい篠ノ之と話してたら本当に織斑が起きたんだけど、ぐっすり寝てたのが恥ずかしかったのか顔を赤くしながらそのまま鍛錬の続きに行っちゃった、感想聞きたかったんだけどなあ。

とかなんとか思ってたら背中にもたれかかってた篠ノ之が俺の左側に来て、しれっと俺の膝を枕にして寝転がった。

「あれ？　さんぼー？　何してんの？」

「んー？　ちーちゃん感想言わずに行っちゃったから、この私が仕方なく協力してあげるんだよ？」

「……俺さ、足痺れてきてただけど？」

「あーあー、聞こえなーい、全然聞こえなーい」

ちよつとした抗議を試してみたんだけど、結局両耳を抑えた篠ノ之は俺の膝の上から動かなかったから織斑とおんなじように頭を撫でてただけど、篠ノ之が満足するまでだいぶ長時間膝枕やってた。

………うん、あれだ、膝枕は一時間とか二時間とか連続してやるもんじゃねーわ。

俺は何時も思うんだけどさ、ちびっこ二人と割と仲良くやってるはずなんだよ？ ちよくちよく遊びに行ってるし、折り紙とかお絵描きとかも一緒にやってる筈なんだ。

「なーのになんで未だに箒ちゃん俺の事を馬鹿呼ばわりするんですかねー」

「ばーか、ばーか!!」

「箒ちゃんあのね？ 俺は馬鹿って名前じゃないんだよ？ せめておにーちゃんって呼んでくれないかな？」

「は？ お前箒ちゃんにお兄ちゃん呼びしてもらおう気かよ？ そんな仲良しさんの事私が許すわけ無いだろ、箒ちゃんに馬鹿が移ったらどうするんだよ」

「お前俺が箒ちゃんに会いに来ると毎回それ言ってるよな？ 人の事ばい菌扱いしてね？」

面と向かって便所コオロギ呼ばわりされてた事に比べたらまだマシ……うん、まだマシだけども、絶対に箒ちゃんがそれを見て真似っこするでしょ？ そしたら俺は二倍なじられる訳じゃん？ 確かに篠ノ之とかにボロクソ言われてる時にたまーに変なゾクゾク感があつて良い感じになる時あるよ？ でも俺だって限度つてのがあるんだ。

今日だって俺の顔見た箒ちゃんが笑顔でこっちに來たから段々仲良くなれてるんだなーって思ってたんだよ？ これなら馬鹿呼ばわりも無くなるかなーとか考えてたらさ、そのまんま笑顔で『ばーか』って言われた瞬間のなんとも言えない感覚ときたら……。

しかも悪気が無いから余計に効く、どう考えても篠ノ之の影響だろ？ このまんま大きくなったら篠ノ之二号になるんじゃないか？

「話をしよう、話をしようぜさんぼー!! このまんまだと絶対箒ちゃんはお前みてーになるって!!」

「えっ？ それって最高でしょ？ 私みたいに頭が良くって可愛い子になつたら将来安泰じゃん？」

「いや、そうだけどき!! そうなんだけどき!! そこじゃねーんだよ!! 人を便所コオロギ呼ばわりするような子になつたらどーすんのさ!!」

「いや、あれは、ほら、ね？ 君があんまりにもしつこかったからで、別に今はその……」

俺がそんな風に篠ノ之に言つたらなんか目を逸らしてごによごによ言つてたから、ほっぺたに手を添えてこつちを向かせてから目を合わせる。

「おいコラ、目逸らすなつてば」

「いやだつて、ほら、君は一回目合わせるとこつちが目を逸らさないはずと目合わせてくるし……なんかその、ね？」

「えっ？ 何？ 目合わせちゃ駄目なの？ 俺母さんから目逸らしたら負けだつて言われてんだけど？ あ、後目を逸らす奴は嘘つきだー悪い事考えてるんだーつて」

親父がその癖を持つてるから実際その通りだと思う、嘘ついてる時にじーつと見てるとサツと目逸らすからね。

だから俺は正直者アピールも含めて相手の目を見る様にしてるんだけど、ダメなのかな？ うーん、まあいいか、考えても仕方ないしとりあえず逸れた話を元に戻そう……つてまーた篠ノ之の奴目を逸らしやがった。

「だから話してる時に顔逸らすなつてば、箒ちゃんも真似するかもしないだろう？」

「わ、わかつたから、てかさつきから顔近いの!! 少し離れてよ!!」
「お、おう、分かつた」

気が付けば確かにかなり顔を近づけてた、息が当たるほどつて距離じゃないけどそれでも十分近い距離、女の子にあんまり近寄りすぎる

と嫌がられる事があるしそれとおんなじ感じなんだろうな。

そんな感じで納得した俺は一旦距離を離してから改めて座り直して篠ノ之の顔を見たんだけど、俺と篠ノ之の間に箒ちゃんがちょこんと座ってこっちを見てる、若干怒った感じで。

ぷくーつとふくれっ面してるから多分俺が篠ノ之をいじめてる様に見えたのかも shouldn't, いじめられてるの俺なんだけどね？

「えっとね、さんぼーさんや」

「ごほん、一体なんだい？」

「このままだとね？ その内俺が泣いちやうから、普段箒ちゃんとは話してるか知らないけど、もーすこし俺をバカにすんのやめてほしいなーって」

「う、うん、善処はするね？」

「本当だな？ 約束だぞ？ なんなら指切りもセットにするぞ？」

「指切りって……まあいいよ、それで良いならさ」

そう言つて篠ノ之はぷいっつと顔を背けちゃったけど、一応指切りをする事は出来たし多分これから箒ちゃんにバカ呼ばわりされる事は無い……と思う。

……さーと、後はまだ少し警戒してる箒ちゃんのご機嫌とりのターンだぞー。

せっかく仲良くなったのになあ、はあ。

今日は10月31日、カボチャランタンのハロウィンだ。

むかし親父にハロウィンの豆知識を聞いた様な気がするんだけど、ちっちゃい頃だったから覚えてねーんだよなあ。

篠ノ之辺りに聞けば色々教えてくれるとは思うけど、今日は仮装を見せる日だし別にいいや。

「つてな訳でししよー、トリックオアトリートメント!!」

「……………何かおかしくないか?」

厚紙で作ったなんとかランタンのお面を付けてピンポン鳴らしたら、出てきた織斑に困った顔でそう言われた。

まーいつもの事だから気にしない気にしない、それより俺は真面目な織斑にも偶にはこういう日を楽しんで貰おうと

ある物を持って来てる。

「ほいプレゼント、紙袋の中見てみ?」

「動物の耳と……………尻尾か?」

「うん、狼の耳と尻尾のオモチャだね、この前親父と買い物に行ったら売っててさー、ハロウィンと言ったらオオカミ男、折角だからプレゼントトって訳よ」

「ほう、オオカミ男なあ? それはつまり私が男に見えると、そう言いたい訳か? ん?」

おおつと? 織斑の目がすげえ怖えぞ? なんか誤解させたかな

? 織斑に凄まれた事無かったから若干背中に汗が…………と、とりあえず誤解を解こう。

「いやいや、お前が男だったら世の中から女の子居なくなるって、それぐらい美人さん」

「……………そ、そうか」

素直にそんな事言ったらそっぽ向かれた、照れてんのかな？

ま、そんな訳で俺は持つてきた狼の耳が付いたカチューシャを織斑の頭に付けて、尻尾のクリップを織斑の腰のあたりに付けようとしたんだけど、硬くて上手く付けられなかった。

だからお尻を抑えてクリップを付けようとしたら腹に蹴りを食らった、痛いとか通り越して吐き気がする。

「ば、馬鹿!! ひ、人のお尻を鷲掴みにする奴があるか!!」

「お、俺の腹に穴空けてない？ ねえ大丈夫？ めっちゃ痛くて泣きそうなんだけど？」

「わ、悪い、つい反射的に足が出たんだ」

「う、うん、分かっているから、次からは触るときは言うな？」

「ああ、是非そうしてくれ………ん？ 何かおかしくないか？」

そんな事を織斑は言いながらも織斑はわたわたしながら俺に膝枕してくれた、玄関の床硬かったから有り難かったけど、立つのにちよつと時間が掛かったからちよつと織斑に悪かったなあ。

とにかく復活した俺は今度はちゃんと『織斑に触るぞ?』と言って四つん這いになった織斑のお尻を抑えようとしたら、急にハツとした顔をしながら膝立ちになって手首を掴まれた。

「待て待ておかしい、危うく流される所だったが違うそうじゃない!!」

「何が？ ちゃんと触るよーって言ったじゃん？」

「そうなんだが違うんだ、私が言っているのはそう言う意味じゃない、と言うよりもそもそも私はお尻を触る事を許可していない!!」

「えっ？ 触っちゃダメなの？ でも尻尾つけられないよ？」

「自分で付ける!! だから大丈夫だ!!」

織斑は顔を赤くしながら俺の手から尻尾をひたたくるとそのまま奥の部屋に走って行った。

うーん、篠ノ之もそうだし他の女友達もそうだけど、最近手とか握ると恥ずかしがられる事が多いんだよなあ。

男友達の何人かも同じ様な体験してるらしいし、あんまりこういうのやらない方が良いのかな？

けど今まで似たような事してもあんまり気にしてなかったし、うーんなんでだろ？

珍しくそんな風に考え込んでたけど、よくよく自分のやった事を振り返っておなじ事を篠ノ之にやったらどうなるかを考えてみたら、想像の中の俺がサンドバッグになったんで次からは気をつけようと思っ、うん。

「付けて来たぞ、これで良いんだろう？」

「なあししよー、ししよーは俺の顔を風船みたいになるまで殴ったりしないから優しいな」

「いきなり何の話だ!？」

「いや、さんぼーは俺の事をボコボコにするだろーなつてさ……」

「何かしたのか？」

「えっ？ 俺さんぼーには何にもしてないよ？」

「さつき束にボコボコにされると言ってただろう？」

「なんで俺がさんぼーにボコボコにされるんだよ？」

「……なあ、私はエスパージャーじゃないんだ、頼むからもう少し会話の余地をくれ」

そう言った織斑は深いため息を吐きながらがつくりと肩を落とした、なんとなく頭と腰につけた耳と尻尾にも元気が無いように見える、なんでだろ？

まあいいや、織斑にも流れで仮装させたしこのまま外に連れ出して行こう、今日はシッターさんも居るんだし。

思い立ったがなんちゃらかんちゃら、俺は織斑の手を掴んでそのまま外へ遊びに行くのだった。

幕間：兎から見たアイツ 2

——彼の行動範囲はとても広い。

遊びに誘われたら山だろうと隣町だろうと足を延ばすから最近はGPS携帯電話を持たされてる、もちろん私もちーちゃんもその番号を教えて貰った。

けどあの野郎、この束さんが遊んであげようかなーって思って電話してもぜんっぜん予定が合わないんだよ!!

この前だつて『うーん、今俺隣のクラスの奴とバスケットしてるからまた今度なー』とか言つてあっさり切りやがったしき!!

その前だつて『今? 今は知り合いのお兄さんと一緒に釣りしてっからなー』とかだよ? 毎度毎度私が電話する度に遊んでるから軽い嫌がらせなんじゃ無いかって思うんだよね?

「酷いと思わない? アイツ自分から番号教えて来た癖にコッチから掛けてもしよっちゆう誰かしらと遊んでんだよ? それで私が諦めたら次の休みの日とかにしれーつと『なー暇だから遊びに行つて良い?』とか言つて来るんだよ? しかも来たたら来たで私よりも箒ちゃんばっかり構つてるし」

思わずそんな愚痴をちーちゃんにしてしまうほどにはイラツとしてる、てか今日も『んー、今いところが来ててその子と遊んでんだわ、だからまた今度なー』とか言つてた。

………アイツの他人称が『あの子』とか『その子』の時は基本的に遊んでる相手が女の子の時だから思わずコッチから切つてやった、どうしてそんな事をしたのか自分でも不思議だけど。

箒ちゃんを膝の上に乗つけて後ろから抱きしめながら竹刀を振るちーちゃんに話しかけてただけ、話を聞き終わったちーちゃんは何故か納得したような顔をしていた。

「そうか、だからか」

「どうしたのちーちゃん？ 何を納得したの？」

「いやなに、お前が朝から不貞腐れてたから何事かと思ってたんだが、なるほどアイツが中々構ってくれないからか」

「へっ？ い、いや違うよちーちゃん!! 別に私はそんな事思っただけから!! ただほら、最近あんまり遊んで無いなーって感じがするっただけで……」

学校でも最近はお上級生とか下級生に混ざって色々してるから朝のHRとか休み時間くらいしか話してないし、それがムカつくだけだからうん。

「てか、ちーちゃんだってそうじゃん、最近アイツがあんま遊びに来てないんでしょ？」

「最近といっても二週間遊びに来てないだけだろう？ 学校では話をしてるし十分じゃないか」

「それは……そうなんだけどね」

頭じゃ分かっているんだけどなんとなくそれが気に入らないんだよね、一年の頃にはあんなに毎日話しかけて来たりなんなりして来た癖に。

まあそんな事を考えてはいるもののは口で言うほど怒ってない、だって彼の友達の多さは何時もの事だし、私もちーちゃんも彼にとっでは大勢の友達の中の一人、彼からしたら特別扱いをする理由が無いのは理解してるからさ。

そんな事考えてたら汗を拭いたちーちゃんが稽古の続きに戻っちゃった、もう少し話してたかったけど変にかかわれる気がして引き止める気にならなかったし、諦めて箒ちゃんの頬つぺたに頬ずりしてたんだけど、涼しい秋風と道場の窓から差し込む日差しで箒ちゃんも眠かったみたいでいつのまにか眠っちゃってたんだよね。

無理に起こすのは可哀想だから自重するとして……どうしよう、本

当にやる事が無い。

以前の私ならパソコンでも弄って暇つぶしでもしてたんだろうけど、アイツと本格的に遊ぶ様になってからは調べ物がある時くらいにしか触らなくなった。

……いやちよつとまつて?これだとまるで私があ馬鹿に影響されて変わったみたいじゃないか、それは無い、断じてない、あり得ない、答えはノーだ、この稀代の超天才の篠ノ之束があんなのほほんとしたノータリンに影響されるとか無い、絶対無い。

だから私が前みたいにパソコン弄って興味の無い知識でも無駄に頭に詰め込まなくなったのは暇を持って余す事がそこまで嫌じゃなくなったからであつて、それはつまり知識の世界に籠る必要がなくなつたつて事だからえつと、そう!! 箒ちゃんのお陰つて事だからアイツは無関係!!

無関係だから最近遊んで無い事とか全ツ然気にならないし? 別に他の女の子とかと遊んでても私には関係無いし? そもそもアイツが遊びに誘つて来なくて清々するくらいだし? そう、私の中ではアイツはその程度の奴つて事で!!

「んで、考え事終わったのかさんぼー?」

「うえ!!? ちよつ、お前他の奴と遊んでるんじや無かつたのかよ!!?」

「塾があつたんだつてさー、だから昼食つてから遊びに来ただけど……ダメだった?」

考え事をしてる間に何時の間にか馬鹿がチューペットを啜えながら横に座つてた。

「お、お前ごときの接近に気が付かないなんて……てか来るなら来るで電話しろよ!!電話!!」

「あー、あれさ、遊んでる時に塀の上から落つこちて画面割れちゃつたんだよね」

「絶対叱られるよねそれ!?!」

「渡された時に超念押されたからなー、家に帰るのが怖い」

そうやって彼は私にチューペットの片割れを差し出しながら手を合わせて『てな訳でさんぽー!! 怒られない言い訳を一緒に考えてくれ!!』と言って来た。

——はあ、全くもう、このバカは何時もこうなんだから。

今日は篠ノ之と織斑の二人と遊んでただけど、久々に二人と遊んだからか思ったより遅い時間まで遊んじゃった。

「あちやー雪まで降ってんなあ、なんか悪いな二人とも」

「別に、傘借りてくから良いよ」

「私も気にしてないさ、むしろ今日はコツチが羽目を外し過ぎた」

確かに二人と遊んだのは先月ぶりだったしなあ、そんなことを思いながら玄関先で二人で見送ろうとしてただけど、丁度ご飯が出来たのか帰って来てた親父が俺たちを呼びに来た。

「夕飯が出来たよ、ついでだし二人とも食べていきなさいな、帰りは僕が車で送って行くからさ」

「おやじー、今日の晩御飯ってなにー?」

「お鍋だよ、みんなで囲んで食べるのにはうってつけの料理だ」

「よっしゃ、んじや二人とも一緒に食おうぜ!!」

「……ま、まあ、おじさんが誘ってくれたんだし、せつかくだから食べようかな? ね? ちーちゃん?」

「ありがとうございますお父さん、一度家のベビーシッターさんに連絡を入れたいのでお電話をお借りしてもいいでしょうか?」

「うん、どうぞ」

「じゃあさんぽー、俺らは先に行こうぜー」

そう言っただけは篠ノ之の手を引いてダイニングに行って、早速椅子に座ろうとしたんだけど母さんの拳骨が降って来た、超痛い。

涙目で横を見たらおんなじ様に座ろうとして拳骨くらった篠ノ之が頭をさすりながら『なんで私まで……』とぶつぶつ文句言ってるのが見えた。

「なにすんだよ母さん!!」

「最近風邪が流行ってるからご飯の前にもちゃんと手洗いうがいしなさいって言ってるでしようが、あんたら全員ウチに着いてからもやって来てないし、早く済ませて来なさい」

「別に一回くらいしなくても平気だろ?」

「なんか言った?」

「な、なんでもないです、じゃ、じゃあさんぼー、手洗いしに行こうぜ?」

「……もの見事に暴力に屈したね」

ジトつとした目で篠ノ之が俺を見てくるけど、母さんは容赦なく手あげる人だから口答えしたら問答無用でしばかれるんだぞ? 今だって指鳴らしてヤクザみたいな目付きで俺たちを睨んでるし、大人しく手洗いしに行った方がいいに決まってるだろ。

取り敢えず二人で並んで洗面台に向かってたら、ハンカチで手を拭きながらダイニングに向かう織斑と入れ違いになった。

すれ違いざまに『やはり手洗いをしてなかったか、行きで会わなかったからそんなことだろうと思っただよ。 どうせそれで怒られたんだろう?』と笑われちまった、その通り過ぎて何も言えねえ。

横で篠ノ之が『ちーちゃんに笑われた……お前の所為だぞコラ』って言いながら脇腹を掴ってくるし、手洗いつて重要なんだな。

んで、やる事終わらせてから改めてダイニングに行ってみんなでお鍋、今日はしゃぶしゃぶも出来る様に普通の水炊きらしい。

織斑はバランス良く鍋の具を食べてるし、篠ノ之も若干野菜を多めに食べてるけど大人しい。

問題は俺だ、肉と鶏団子を連続して取ろうとしたら母さんに睨まれて白菜に箸を伸ばさなさいといけなくなる、好きに食わせてくれよなー。

そんな不満を感じてたら、父さんが刺身の乗った皿を俺たちに差し

出して来た。

「寒ブリのお刺身だよ、そのままでも美味しいししゃぶしゃぶにしてもいいから食べてごらん」

「あんがとー、んじや早速……」

俺が箸を伸ばした瞬間左に座ってた篠ノ之が一切れとって早速実行して食べてた、ちらちら見てたってほどじゃないけど少し興味あった感じだったからなあ、口には出さねーけど。

織斑も織斑で勧められた瞬間に箸を伸ばしてる、割とクールな表情をしてるけど案外好奇心のある子だからずっと気になってたんだろ
うねー。

しっかし、初めて会った時の事を考えるとこの二人とこうやって夕飯一緒に食えるなんて思わなかったなあ。

「つてあれ？ 俺の分は？」

「ぼーつとしてたのが悪いんですよ、東さんしーらない」

「むむむ、まあしよーがねーか」

確かにぼーつとしてたし、今回は諦めるかーと思ってたら織斑がちよんちよんと俺の肩を叩いて来た。

「ん？ どつたのししよー？」

「その、なんだ、私は最後の一切れをまだ口にしていないから……だな、あ、あーん、だ」

「えっ？ 良いの？ じゃああーん」

俺は差し出された切り身を遠慮なく食べたんだけど、味わってる最中に今度は篠ノ之に肩を叩かれる。

「んー？ どうし——」

どうしたの？と聞こうと口を開いた瞬間、超あつつあつの豆腐をれ

んげで口の中に突っ込まれた、超絶妙なタイミングでしかも自然に入れたから口の中に入ってから全く反応できなかつた、つてか熱いなんてレベルじゃない熱さなんだけどコレ!?

「あつつ!?!」

「ふうんだ、この束さんもあーんしてやったんだから感謝したら?」

「お、おう、ありがとう」

「……本当に言うとは思わなかつたんだけど」

「えっ? ダメだったの?」

「いや、ダメってことは無いけどさあ……」

その後も篠ノ之の表情がなんとも言えない感じだったり、なんでか織斑が箸を咥えてハツとした顔で固まっていたり、似たような感じで雑炊を食べてた篠ノ之がレンジを見つめて何か悩んだりしてたけど、その日の夕飯は楽しく過ぎて行った。

——冬と言ったら雪、雪と言ったらスキー、ってな訳で3日前に二泊三日のスキー旅行に行っただけ、いやースキーって楽しいな!! いっぱい転けたけどスノーボーもやれたし、冬限定のスポーツってのも楽しさを増やす隠し味だしまた行きたいなあ。

「って訳で、お土産だよししよー!! ほーら一夏くんもお土産ー!!」

そんな事を考えながら俺は織斑ん家にお土産を渡しに来てた、篠ノ之ん家は温泉旅行に行くって言ってたし後でいいからな。

今回のお土産はご当地ぬいぐるみとか言うゆるキャラ? のぬいぐるみ、織斑が一夏くんと遊ぶにはちようど良さげな雪だるまみたいな奴を二種類買ってきたんだけど、ぼーっと見ながらぺたぺた触ってるあたり割と気に入ってくれたみたい。

一夏くんには男の子の雪だるま、織斑には女の子の雪だるまを渡しながらホットカーペットの上に座ってスキーの話をしてただけ、その最中に一夏くんがぬいぐるみを投げよった。

——織斑に向けて。

けど流石織斑、ニュータイプ的直感か何かで真後ろから投げられたぬいぐるみを横に避けた。

ただ一つ問題なのはさ、織斑が避けるって事はつまりその真ん前で話してる俺の顔に向けてぬいぐるみが飛んでくるって訳じゃん? もちろん俺は避けらんない。

顔にぼすつと当たるぬいぐるみ、避けた織斑がしまったって顔をしてるから多分無意識に避けたんだと思う、別に怒ってないし織斑のレアな顔が見れたからいいんだけど。

「一夏くん? ぬいぐるみは投げるものじゃないよー?」

「うっ。」

「いや首を傾げられても俺困るんだけど……」

「その、すまなかった」

「別に気にしてないから大丈夫大丈夫、あーっ!! 一夏くん腕持って振り回すのダメだってば!!」

ちっちゃいぬいぐるみだからか凄く楽しそうにぬいぐるみを振り回す一夏くん、勢いあまってぽーんと投げられたぬいぐるみは織斑の勉強机の上にダイブ、鉛筆やらなんやらに突っ込み大っきな音を立てた。

その音にきやつきやと嬉しそうに一夏くんは笑ってるけど、その所為で織斑が若干おろおろしてる、多分叱りたいけど一夏くんが楽しそうにしているから怒れないんじゃないかな？

取り敢えず俺は一夏くんの前に座り、目をジーツと見つめながら出来るだけ優しくダメだよって言った、だって織斑がてんでダメっぽいし。

「ね? 一夏くん、ぬいぐるみでもこんな風に使ったら痛い痛いつて言ってるよ?」

「うう?」

「うーん一夏くんにはまだ早かったかなあ? でもほら、こっちの女の子の雪だるまちゃんもお友達を投げられて悲しいって言ってるし、ごめんなさいしようね?」

そう言っただけ俺は一夏くんの前に女の子の方のぬいぐるみを差し出すと、素直に一夏くんは頭を下げてごめんなさいをした。

「うんうん、素直にごめんなさいできるのはえらいよ一夏くん」

「……すまん」

「ん? どったのししよ?」

「いや、私が一夏を叱るべきなのに……すまん」

しゅんとした織斑はそう言っただけ顔を上げて顔をしてるんだけど、なんでそんな顔してんだろう? そんな風に織斑の顔を眺めてたらつつと頬つぺたを涙が伝い始めた。

……織斑が泣いたところなんて初めて見たぞ!? ど、ど、ど、どうしよう!？」

「私は……ダメな姉だな」

「えっ? えっ? ししょー、マジでどうしたんだ!？」

「私は、お前のように優しく諭すことも出来ない、束のように色々な知識がある訳でもない、一夏のやんちゃにもどう接して良いのか分からない事の方が多い……私は姉失格だ」

「いやいや、今回偶々でしょ? だから別に——」

そう言いかけて、壁や本棚に前まで無かったクレヨンの落書きやページがくしやくしやになった様な漫画がある事に気が付いた。

多分俺が居ない時に一夏くんがやんちゃしたんだろうな、一緒に遊んでる時は今日みたいにやんわり叱ってるんだけど、織斑は一夏くん大好きだからなあ……。

「でもほら、俺も良くこんなふうに関父に叱られてたからそれを真似しただけだから、織斑もお父さんやお母さんにしてもらった様に接したら良いんじゃない? ——」

「……んだ」

「わ、悪い聞こえなかったからもう一回お願い」

「わ、私は、今まで一度も、一度も叱られた事なんかないんだ」

絞り出した様な声でそう言った織斑は、そのまま俺の胸に顔を押し当てながら静かに泣き始めたんだけど、この時の俺は予想外のことでどうしたらいいかわからなかったから、情けない事にただただ落ち着くまで固まってる事しか出来なかった。

——俺がどう慰めたら良いのか分からないまままでいたらいつの間にか織斑は泣き止んでた。

泣いてる子を慰める事自体は何回か経験があるんだけど、相手が織斑だったから驚きの方が勝っちゃって、全然なにも出来なかったのが悔しい。

そんな事を思ってたけど、なんでか泣き止んだ筈の織斑が中々俺の胸から顔を離さない、一夏くんも不思議そうな顔してるしどうしたんだろ？

「えつとさ……ししよー？ 泣き止んだならそろそろ離れてくんない？ 一夏くんも不思議がってるしさ」

「……私もそれは分かってるんだ、分かってるんだが」

「どつたの？ まだ泣き足りねーの？」

「いや、その、今お前の顔を見るのが恥ずかしいんだ……」

恥ずかしそうに俺の服に顔を押し当てながら若干上目遣いでそう言う織斑に、何故か俺も恥ずかしくなっちゃって思いつきりそつぽを向いちゃった、普段良く顔見て話してるのになんでだろ？

あ、でもそつぽ向いたまま話するのも失礼だよなあ、けどなんか俺の方も織斑の顔見るの恥ずかしいしちよつとチラ見して慣れよう、うん。

そんな風にチラツと見たら織斑は若干まだ涙目だったから、取り敢えず指先で涙を拭ってから肩を掴んで俺から引き離れたんだけど、何話したら良いのかわかんねーけどなんとか励まさねーとな!!

「あーえーつと、その……さ？ なんて言ったらいいのかわかんねーけど、うん俺が居るから大丈夫だって!!」

とか言ってから思った、俺そんなに言うほど何か出来たっけ？ 確かに釣りとか楽器とか色々やってるけど、下手の……横綱？ だっけ？ 篠ノ之に良く『上中下で表すなら中に毛が生えたレベル』って言われる程度だし、思ったより頼りにならねーじゃん。

「いや、悪りい!! 今の無し!! 俺あんま頼りになんねーからさ、えーっとさんぼーとか親父とかいっぱい居るから大丈夫だってば!!」

慌ててそんな風に言い直したんだけど、織斑は静かに顔を横に振って『それは違うぞ』って言った。

「お前は自分で思っている以上に頼りにはなる、確かに勉強や運動はアレだがな？」

「いやその二つがダメならダメじゃん!!」

「そう思うかもしれないが、お前には不思議な雰囲気があるんだ、それだけで十分頼りになる男だよ」

……どーしよ？ 俺褒められ慣れてねーからさつき以上に恥ずかしい、てか織斑も言った後そっぽ向いて黙っちゃったしどーしたらのかなこの雰囲気。

何か別の話でもするか？ うーんでも、色々頭がこんがらがって何にも思い浮かばない、スキーの話とかはもうしちやったし、泊まった旅館の話？ 無理だって俺旅館で話膨らませらんないってば!!

俺も織斑もだまーったままだった時、ふと視界の端に一夏くんの姿が映った——クレヨンを入れようとしてる姿が。

「ストップ!! ストップ!! 一夏くんそれは食べちゃダメな奴!!」

「はっ!? ま、待て待て慌てるな、それはえっと、あれだ!! 食べても大丈夫なクレヨンだったはずだから一夏が口にしてもだな!!」

「いやいやいや!! アウトだってば!! 食べても大丈夫なのは食べ

られるって意味じゃねーからな!? 俺しつてっから!」

「そ、そうだな!! 冷静になれ私……よし、一夏クレヨンを一旦床に置こう、それかぼいするんだ」

「そうだよ一夏くん? ね? お兄ちゃんに渡してくれるかなー?」

俺たち二人はさっきの居心地の悪さなんか吹っ飛ばして一夏くんに近寄ったんだけど、一夏くんは何を勘違いしたのかにへらと笑った後『あい!!』って言いながら俺たちに黒と青のクレヨンを渡して来た。

………違う、そうじゃないって!!

ハッ!? 待てよ、このまま紙かなんかにお絵かきに移れば一夏くんが口にクレヨン入れる事も無いし話題も出来てみんなハッピー、よしこれだ!!

「ししよー!! スケッチブックか自由帳を持って来て一夏くんとお絵かき——待って一夏くん、それはカーペットだから落書きしちやダメだってば!! お絵かきはもうちよつとまってえ!」

「と、取り敢えず何か紙を持って来るから待っててくれ、………後は掃除道具もな」

「……なーししよー、俺たちが何にも出来ないんじゃないよ一夏くんが特別やんちやなだけなんじゃね?」

「………そうかも知れないな」

結局この後、俺たちは散々一夏くんに振り回されたんだけど、一緒に遊んだり後片付けをしたりしてる間に織斑も何時もの調子に戻って安心したよ、ほんと。

織斑ん家での出来事から暫くして、俺は篠ノ之ん家に遊びに来た。

ても親父が今日は雲もないし、空気も澄んでるから夜空が綺麗らしくてよく星が見えるって言ってる、折角だし天体観測でもやろうかって話になったし、星の写真も撮るから篠ノ之も誘おうかなって思ったんだよね。

「つー訳で、俺ん家に行こうぜ？」

「だからちゃんと主語を入れろってば、何年注意させる気なんだよ……」

「いやーほら、いい加減長い付き合いだし通じるかなーってさ？ それにさんぼーはニュータイプだろ？」

「だから私をそんな変なカテゴリーに入れるなってば!!」

そんな何時ものやりとりをしながら、俺は出して貰った何とかペツパーを飲みつつ、ベッドに腰掛けながらジトつとした目で睨む篠ノ之に事情を説明した。

「ふーん、今日はあの望遠鏡で天体観測するんだ……ふーん」

「んで？ 特に用事なけりや一緒に見ようぜ？ 親父の解説は昔話とか雑学とか入ってるから飽きねーからさ」

「……………おじさんの話が聞けるなら行く」

篠ノ之はふいっと横を向きながらそんな事言ってたけど、コイツは親父を引き合いに出したら結構素直に付いてくるんだよねー。

……俺、仲良くなるのに一年は掛かったよな？ 親父はちよこつとしか会ってないのに直ぐに仲良くなってただけど？

ま、まあいいや、俺も将来親父とおんなじぐらいいろんな人と仲良くなれるようになりやいいんだから、うん。

「じゃー決まりだな、着替えとか持って来いよ？」

「言われなくてもわかっ……ふえっ？ 着替え？」

着替えって言葉を聞いた瞬間、篠ノ之はきよとんとした顔で俺の方を見た。

何でそんな顔すんだろ？ だって夜の天体観測って事は俺ん家の庭で夜空を見るってことだし、それってつまり泊まりって事でしょ？ どころも変じゃねーじゃん。

「へっ？ はっ？ 着替え？ ほえっ？ だって、えっ？ 泊まりって……こと？」

「だって泊まりじゃん、夜に天体観測して撮影もするって言ってるしさー」

「そ、そうだよねー!! 泊まりだよねー!! あはははっ!!」

「変なさんぼーだなあ。 あっそうそう、今ちよつと客間が物置になっつから泊まるのは俺の部屋になるからよろしく」

「あはは、はえっ!?!」

「じゃ、部屋の片付けしてくるから今日はこのまま帰るなー、夕方になる前に来いよー」

そう言っつて俺は篠ノ之の部屋から帰って片付けをしたんだけど、なーんであんなに篠ノ之はおろおろしてたんだろう？

気になっつて帰ってから親父に聞いたたら『多分友達の家にお泊りするのが初めてだったからじゃ無いかな?』って言われて納得、あいつちよつとはマシになったけどまーだ友達以外の連中にや厳しいし俺と織斑以外近寄らねーからなあ、相変わらず友達がいねーのな。

ただ母さんが俺らの会話を聞いてすっごいため息を吐いてたのが気になる、何故に？ 親父も首傾げてるし、母さんには……怖いけど

聞いてみようかな？

「てー訳で母さん、何でため息吐いたのよ？」

「……………私はね？ この人と結婚するのにすつつつごく苦勞したの、アンタも将来好きになつてくれた人にそんな苦勞させるんだろくなつて思っただけよ」

「母さん、俺意味わかんないんだけど？」

「良くも悪くもアンタがお父さん似だつて事よ」

「えつとつまり、俺は褒められてるんだな!!」

そう言つたら母さんに無言のげんこつを食らつた、それで『夕飯の支度するから手伝いなさい』つて言つて台所へ連れて行かれちやつたから結局あやふやなままだった。

まーいや、今日は篠ノ之に部屋を貸すから久しぶりに親父と母さんと一緒に寝れるし、そんな時に聞きやいや。

そんな事を思いながら鼻歌混じりに下拵えを手伝つてたんだけど、その途中で玄関のチャイムが鳴った。

野菜を切つてた途中だったから一旦包丁を置こうとしたんだけど、親父が出てくれたらしく玄関からとたとたと軽い足音が聞こえて来たし、多分篠ノ之が来たんだろうなー。

母さんもそう感じたようで、『こっちはもういいから束ちゃんのことに行つてなさい』つて言つてたんでそのまんま篠ノ之に会いに行つた。

……………ただ、なんでだろ？ 俺は親父と母さんの部屋で一緒に寝るつて言つたら『そう言う事は最初に言え!!』つて怒られた、言い忘れただけなのになあ？

篠ノ之と一緒に天体観測をやった後、俺は寝る前に篠ノ之と少しだけお喋りをしていた。

そのせいで普段寝る時間から大分過ぎちゃって結構眠いけど、せつかくのお泊りだし早く寝るのは勿体ない気がしてさー。

「けどあれだな、まさかさんぼーがお泊りする日が来るとは思わなかったなあ」

「誘ったのは君でしょ……まったく」

パジャマに着替えた篠ノ之に下で作ってきたホットミルクを渡しながらその顔を眺めてみる。

割と個性的なパジャマを着てるけど、篠ノ之はクラスどころか学校の中でも特に可愛いと思う、織斑は綺麗の方だからまた別だけど篠ノ之の顔もずっと見てられるんだよねー。

そもそもコイツは口が悪いだけで別に悪い奴じゃねーし、頭も良いから俺の知らねー事とか勉強の事とか色々教えてくれるし、普通にいい奴なのになんでクラスのみんなは相変わらずよそよそしいのかなあ。

じーっと両手でマグカップを持ちながらミルクを飲む篠ノ之の顔を見てると、ほんとに普通の女の子なのにみんなビビり過ぎだって。そんな事を思いながら俺もミルクを飲んでただけど、ずーっと目を合わせてた篠ノ之の顔がだんだんと赤くなって来た気がする、めっちゃ目が泳いでるし風邪でもひいたのかな？

「さんぼー、風邪ひいたの?」

「ひいてない、てか人の顔まじまじ見ないだよ」

「えー、なんでさ、織斑もそうだけど篠ノ之も可愛いから見てて飽きないし、別にいいじゃん」

「ずっと目見つめられたら流石の私でも恥ずかしいの!!」

「いやお前も俺の目見てるしおあいこじゃん、てか俺たち仲良しだし別にへーきだろ?」

「何その理屈!?!」

こんな風にテキトーな事言ってもちゃんと返事してくれるし、ちよつとだけ人見知りなだけなんだよな篠ノ之は。

んな事考えてたら『今妙な事考えたる』って睨まれた、コイツのニュータイプは何時もの事だから置いといて、けどそつかももう三年になるのか、コイツとの付き合い。

「なあさんぼー、ちよつと聞きたいんだけどよー」

「何? どーせ身にならない話だろうけど一応聞いてあげる」

「さんぼーの事下の名前で呼んで良い?」

「……………好きにしたら?」

「マジで? じゃあ今度から束って呼ぶなー」

いやあ、付き合い長くなって来たし他の友達も結構名前呼びするようになって来たから前々から束達も名前前で呼びたかったんだよねー、今まであだ名呼びだったからちよつと照れくさかったけど束はおっけーしてくれたし今度織斑も千冬って呼ぼつと。

「んじゃ、そろそろめっちゃ眠いから俺もう寝るなー」

「はいはい、じゃ私も寝るからおやすみ」

束は手でしっしっしてしながらそう言ったけど、俺は笑顔で手を振り返して親父達の部屋で寝たんだ。

んで、朝になったら母さんに起こされて材料の下ごしらえとかを手伝った後、朝ごはんが出来た辺りで束を起こしに来た訳なんだけど……なんか丸まってみのむしみたいになってる、なんで?

「おい東さんや、あつさですよー」

「……あとごふん」

「それ、言われる側になるって思わなかったわ……」

うーん、布団ひっぺはがして起こしても良いんだけど……つか母さんはそうやって起こして来るけど、東はお客さんだし五分くらいならいっか。

とりあえず部屋を往復すんのが面倒だから椅子に座りながら東のみのむしを眺めつつ、五分くらい待ってからもう一回声をかける。

「ほーら、五分経ったぞ、起きた起きた」

「……おきる」

「カーテン開けるぞー」

そう言っただけ俺はカーテンを開けつつ、ベッドの方を振り向いたんだけど『一回起きたからいいでしょ？』的なオーラ出しながら二度寝しようとしてやがった。

これ以上待たせたら母さんに怒られるから、ぺちぺちと頬つぺたを叩いて束を起こしてみる。

「ちゃんと五分待ったんだから着替えて顔洗いに行くぞ？」

「……うん」

一応半分起きてるのか、ごそごそと着替えをカバンから取り出し始めたから一旦部屋の外に出て束が着替え終わるのを待つ。

……にしても束って朝弱かったんだな、寝起きのコイツ超別人だわ。

そんな新発見をボーっと考えてる間に着替え終わったのか、目をこすりながら束が出て来たのでそのまま洗面所まで連れて行くのだった。

幕間：戦乙女から見たアイツ 2

……………つい買ってしまっただが、どうしたものか。

私の手には綺麗にラッピングされたチョコレートが握られている、元々は買うつもりじゃ無かったんだが買い物の会計前にレジ近くの棚でセール中だったからつい、な？

今日は二月十四日、世間ではバレンタインデーと言うらしいが、彼に連れ回される様になるまであまりこの様な催しには興味が無かった。

確かに何時も束が私にチョコをくれる日なので日付自体は覚えている、そして女性が男性に向けてチョコを贈る日と言うのも知っている。

だから今年は彼にプレゼントしてみようと思い、普段は気にも止めていなかったチョコレートを買った訳だ。

取り敢えずランドセルに入れて来たから登校途中にでも渡せばいいかと呑気に構えて居た私は、普段よりも十分ほど早く家を出て彼の家前で待つていたんだが、彼が出てくる事がやけに待ち遠しい。

少し早かったか？ などと考えていたら、玄関のドアが開いて背伸びしながら彼が出て来た。

「あれ千冬じゃん、どったの？ とりあえずおはよー」

「あ、ああ、おはよう、実はお前に渡す物がだな——」

先月から急に下の名前と呼ばれる様になってまだ少し慣れてないのか若干返事が遅れたが、私は挨拶もそこそこに本題に入ろうと鞆の中に入れていたチョコに手を伸ばしたのだが、何故かラッピングされたそれをランドセルの中から出せない、まるで鉛の塊にでもすり替

わったかのようにチョコレートが重い。

いや、単なる錯覚なのは理解しているが、何故チョコレートだけを渡すだけの事なのに私は躊躇しているんだろうか？

「千冬？ 何くれんの？ もったいぶってねーでぷりーず」

手を入れたままで固まる私に首を傾げた彼がそう言いながら近寄って来たがもう少し待つて欲しい、何とか心の準備が出来てない。

「……いや、やっぱり学校帰りに渡そう、うん」

「お、おう、てかそれなら別に朝一番にウチ来なくても良かったんじや……」

もつとも過ぎる言葉だが、朝一で渡すつもりで渡せなかったただけだから意味はある、はずだ。

気を取り直した私は二人で並んで歩きながら話をしつつ登校していたんだが、後ろから全力で駆け寄ってくる忙しない足音が聞こえてため息を吐きながら、歩調や足音の質から束だと判断した私は一旦立ち止まって束の襲撃に備える。

「ちいいちやああん!! バレンタインデーだよバレンタイン!!」

ハッピーバレンタインデー!! というわ・け・で!! はい、チョコレート!!」

「あ、ああ、ありがとう」

後ろからランドセルごと私に飛びつく束を適当にあしらいながら、束から差し出された綺麗にラッピングされたチョコを受け取ったのだが、その時に彼女のもう片方の手にその辺のコンビニかどこかで買った板チョコが握られている事に私は気が付いた。

「ほら、お前にもこの優しい優しい束さんがチョコレートを恵んでやるよ、ちーちゃんのと違って手作りでも無いしラッピングにもまーつつたくこだわってないけど、一応友達だし？ 友チョコ未満の義理チョコくらいならプレゼントしてやらないことも無いからありがたく食べなよ、というかよくよく考えたら君がチョコを持ってたら誰から貰ったの？ って話題になりそうだから今すぐこの場で食べる、そして私からチョコを貰ったって事はこの場の三人だけの秘密にしる、いい？ くれぐれも勘違いしないでね!! あくまで私は友達だからチョコレートを恵んでやったんだからね!! その辺のコンビニで買った百円くらいの板チョコをお買い上げシール付いたまま渡す程度の相手なんだからね!!」

「おー、ありがとーな、んじやいただきまーす」

まくし立てる様に一方的に用件を言った束は買ってきたチョコで彼の胸をペチペチ叩きながら、念を押してチョコを手渡した。

彼は特に気にする事無くチョコを受け取っていたが、なんだかその光景を見ていると緊張していた私も肩の力が抜けたのが分かる、だからそう、私も普通に渡せばいいのだ、あくまで普通に。

ランドセルからチョコレートを取り出した私は、板チョコを食べている彼の胸にラッピングされたソレを突き付ける。

「まあ、なんだ、せつかくのバレンタインだ、私からもチョコをやるう」

「マジで？ やっぱ無しってのはダメだぞ？ 貰っちゃうよっ」

「ああ、お前以外に渡す相手は居ないから安心しろ、それに束の奴よりは高級なチョコだからな、元の値段から100円以上値引きされてるとはいえ214円もしたんだ、味もその板チョコよりはマシだろう」
「あれ？ ちーちゃん？ なんで束さんに張り合ったの？ 私ちーちゃんに何もしてないよ!？」

—— さあ何故だろうな？ ただ一つ言えるのは、来年こそは一

番にチョコを渡そうと思ったただけだ。

そんな風に思いつつも、口には出さずに笑みを浮かべるだけに留めた私はそのまま騒ぐ束をあしらいながら三人で登校するのだった。

小学四年生 1

俺は今割とピンチだ、どのぐらいピンチかってーとトイレで紙が無い時くらいピンチだ。

と言うのも、友達とサッカーした帰りに木の上に登って降りられない子猫を見つけたんだわ、んでそれを助ける為に木に登ったら俺も下見ちゃって降りれなくなった、マジでどーしよ？

「しかも助けようとした子猫はあつさり降りちゃったし、俺何のために登ったんだよ……」

みーみー言って震えてた子猫も、登った矢先に俺の頭を踏み台にしてするする降りちまったし、中途半端に登ってるから飛び降りるのも怖い。

通りかかった誰かに声掛けてもいいんだけど、あんまり知らない人に迷惑かけるのもなあ。

とりあえず太めの枝に跨りながら色々考えてたけど、ちようどいとところに束が歩いてるのが見えたので声を掛ける事にした、アイツなら頭いいし何とかする方法分かるだろ。

「おーいたばねー!! たーばーねー!! ちよつと助けてくれよー」

ちよつと距離が離れてたからそんな風に大声で呼んだんだけど、束は一瞬ビクツとしたと思ったたらキョロキョロと周りを見渡して俺を探し始める。

多分不意打ちで、しかも大声で名前を呼ばれたからなんだろうなーとか思った俺はちよつとだけ反省してただけど、丁度束の方も俺を見つけたみたいで割と怒った感じでコツチに来た。

あれ? ヤバくね?

案の定、俺が登った木の下に来た束はゲシゲシと幹を蹴って思いつきり木を揺らし始めた。

揺れ自体はそんなんだけど、揺れる事自体が怖い事には変わりないの
で必死になって幹に捕まりながら落ちない様にその場に踏ん張る。

「ちよ、タンマタンマ!? 揺らさないで!」

「お前は馬鹿なの!? アホなの!? 人通りのあるところで大声で叫ぶなって教わらなかつた!? お腹に力入れて人の名前呼ぶとか何考えでんのさ!! 少しは周りの迷惑考えろよ!! ほらあそのオツさんとかさっきので缶コーヒー落としてるだろ!!」

「ゴメン、ゴメンってば!!」

謝りながら周りを見ると結構な注目を集めたらしく、割といろんな人に見られてる事に気が付いた、やだ俺って有名人?

「……今アホな事考えてたろ」

「お前やっぱニュータイプだわ、うん」

「変な納得して私を妙ちきりんなカテゴライズすんのやめろよ、てかさんな無駄話する為に私呼んだのなら張り倒すよ?」

「いやいや、俺は割と真面目に今困ってる、だから助けて?」

「……何に困ってるのさ、まずそこを話しなよいつも言ってる事だけどさ」

溜息を吐きながら肩を落とした束は木を蹴るのをやめて俺の話を聞いてくれた、聞いてくれたけど聴き終わった瞬間の呆れた目が久々に突き刺さった。

「じゃ、私はコレから用事があるから」

「アレ? 俺の話聞いてた? めっちゃ困ってるって言ったよね? 助けてくれると嬉しいなあって」

「そ、頑張つてね」

「うおーい!? お願い、何でもすっからさ!!」

俺の頼みも虚しく、束はそのまんまどっか行っちゃまった。えっ?

マジで? 俺たちの友情ってそんな脆いモンだったの? 流石

の俺も割りかしショックだよ？

見捨てられた衝撃にしょぼくれながらしばらく拗ねると、ガチャガチャと煩い音が下の方から聞こえて来たから少し疑問に思っ下を見ると、どこからか脚立を借りてきた束が幹の近くに立てかけてくれている。

「何拗ねてんのさ、わざわざこの私が近くのお店から脚立借りて持ってきてあげたのに、お礼の言葉も無いのかよ」

やっぱコイツ良い奴だわ、一瞬でも見捨てられたとか考えた自分が恥ずかしい。

不機嫌そうにそっぽ向いてそんなことを言う束にお礼を言った後、下に降りた俺は脚立を借りたお店に二人でお礼を言ってからバイバイしようとしたんだけど、後ろ向いた瞬間に襟を掴まれた。

「待てよ、さっき何でもするって言ったでしょ？ だから少し私の用事に付き合えよ」

「へっ？ そら別にいいけどさ、俺がお前の用事手伝えるの？」

言つちやなんだけど俺が手伝える事なんて少ないと思う、束ほど頭良くねーし、やれる事って荷物運びとかそんなくらいじゃね？

そんな風に束に言って見たら『別にお前が居なくてもいいけどさ、居ても問題無いんだから着いて来いよ、てかそもそも何でもするって言ったのは君でしょ？ それにそんな複雑な事はしないし』とか言っ俺を引きずってちよつと行った先のパソコンとか売ってる店に俺を連れて行った。

「んで？ ここに何しに来たのさ？」

「私の使ってるPCがもう古くてさ、お父さんが新しいの買ってくれるって言うんだけど、センス悪いからわざわざメーカー直営店舗に来て選んでるの、本当はパーツから何から自作したいんだけど、あん

まり迷惑かけられないからさあ」

「それって、俺要らなくね？」

「一人で選ぶのって暇でしょ、ちーちゃん付き合わせるのは気が引けるから、全然全くこれっぽっちもそんな気が微塵にも起きない君を候補に選んであげたんだよ、嬉しいでしょ？　嬉しいって言えばよ」

「いや、まあ、嬉しいけどさ、それなら最初からウチに来て誘ってくりゃいいじゃん」

「……だって、朝行ったらもう居なかったし」

そう言った束は明らかに不機嫌なオーラを出しながら俺をジトつとした目で睨み付けている、いやなんでそんな目で俺を睨むのよ？

「俺、何かした？　なんでそんな目すんの？」

「は？　何もしてないよ？　たださ、お前何時も何時も私が暇で暇でしようがないから仕方なしに遊びに行つてやったら遊びに行つて家にいらないとかザラじゃん？　別に君は悪くないよ？　ゼーんぜん悪くないよ？　責めてる訳でも無いよ？　だけどさ、勝手に遊びに来る癖にいざコツチから遊びに行くと居ないって不公平って思わないかな？　かな？　かなあ!？」

そんな風に俺に詰め寄った束に俺は一日中連れ回されるのだった。

……その最中に俺は一つ学ぶのだった、コレが藪蛇って奴なんだなあって。

小学四年生 2

今日は春らしいぽかぽかした日だったから遊びに行くつもりだったんだけど、その前に母さんにとつ捕まって家事の手伝いをさせられてた。

『そろそろアンタも洗濯物の取り込みとか掃除くらい自分でやれるようになさいな』って言われたから一応真面目にやってた筈だったのに、気が付いたら縁側で畳んでたバスタオルに倒れ込むようにして爆睡してたみたい。

んで目が覚めたら何故か千冬が俺の寝顔覗いてた、流石に寝顔マジで見られるのは恥ずかしいんだけど……。

母さんが掃除機をかける音が聞こえてるから多分母さんが家の上げただろう、偶々家の前通りかかったとかで声でも掛けたのかな？

「ちゅー訳で千冬さんや、何して遊ぶよ？」

「寝起きの第一声がそれでいいの……？」

「んー？ でもそれしか無くてね？ 他に何かある？」

俺としては答えが出てるからなあ、だから何するか聞いたんだけど千冬はその返事が割と予想外だったらしい、なんとも表現しづらい顔で俺の事を見てちよつと考える素振りを見せた。

「例えば私がここに居る理由とかだ、むしろ真つ先に聞く事じゃないのか？」

「母さんだろ？」

「……頼むからもう少し言葉を足してくれ、頭の中の過程をすつ飛ばして会話するんじゃない、私は束の様に脳内補完なんぞ出来ん」

「あはは、悪い悪い」

頭を掻きながらそんな風に謝ったけど、特に否定も訂正もされ無

かったから多分正解だったんだろう、付け加えるなら千冬の服が私服だったのと稽古道具を持って来た様子が無かったから一夏くんの散歩中だったのかな？

そう思っただけで周りをざっと見回すとリビングの方でジュースを飲んでる一夏くんを見つけたのでとりあえず手を振って挨拶してみる。

「へーいいつくん!!」

「へーい!!」

「お散歩ー?」

「うん!!」

「あつたかいねー」

「ねー!!」

ぴっと手を挙げながらそう返事する一夏くん、最近は何々と好奇心が出始めたのか良く千冬を連れ回してる姿を見かけるんだよなあ、あの千冬が振り回される姿はなかなか新鮮だ。

お姉ちゃんは大変だなあと思ったけど、今までの事を考えると変な同情してるみたいであんまり言う事も言いにくい、友達に言う様な言葉じゃない様に感じるからとりあえず親指を立てて笑つとこう。

「いや、いきなり親指立てられても分からないんだが」

「ん? まあなんでもいいじゃん、それより外行こうぜ外!! 散歩の途中だったんだろ? 公園でブランコ乗ろう、ジュース飲み終わった一夏くんも暇そうだしゴーだ!!」

見れば椅子に座った足がブラブラしてるし暇な合図っぽいからね、洗濯物も寝てる間に千冬が畳んでくれたのか片付いてるし遊びに行ってもオツケーな筈。

てな訳で二人を連れて外へ出た俺は公園に行ったんだけど、良い天気で風も強くないからか沢山人が居た。

コレが公園デビューって奴か……。

「てことは俺がお父さんで千冬がお母さんなのか？」

「なんの話だ？」

「ほら、一夏くんの公園デビューじゃん」

「私は姉だからむしろお前は兄なんじゃないか？　少なくとも親……では無いだろう」

「うーん、じゃあどっちが上なんだ？　俺たち」

「お前が兄？　ふわふわし過ぎで似合わん、寧ろ弟だな」

「えーっ、俺が兄だろ？　誕生日は俺の方が先だし？　ちよつとだけお兄ちゃんだからな!!」

『はっはっは!!さあ甘えてごらん?』とか言つて高笑いしてたら一夏くんに袖を引かれて砂場の滑り台まで連れてかれた。

今日の主役をほつたらかしにするのは悪かったなあと思つて一緒に滑ろうと思つただけど、よく見たら周りに知り合いが何人かいるし、その連中も漫画を貸したり借りたりする様な子達だったからある事が出来るのを思い出した。

だから俺と一緒に滑る役を千冬に交代してその子達に話しかけて、ちよつとしたお願いをした後滑り台の下で一夏くんを待ち構える。

んで、千冬が背後から抱き抱える様にして一夏くんと一緒に滑り降りた段階である漫画に出てくる特戦隊のポーズを全員で取った。

四人が隊員のポーズ、俺が隊長のポーズ、そして俺たちの後ろにいる一人がBGM担当という完璧な作戦で俺は大満足。

………凄く嬉しそうな顔をしてる一夏くんとは正反対になんとも言え無い顔をした千冬とか、調子乗って他の漫画の必殺ポーズとか変身シーンとかの真似をしまくってヘトヘトになったりとかは予想外だったけどね。

小学四年生 3

——ジツと相手の目を見ながら、俺はその切っ先が動くのを待った。

長年道場に通ってるけど、俺は基本的に受けの剣なので相手が動かないとどうする事も出来ない。

幸いって言うていいのか今回の相手は気の短い奴なので既にぶるぶると剣先が揺れ始めてる、表情からも攻めっ気が読み取れるので相手の動きに対応できるように肩の力を抜く。

それと同時に向こうは飛び込みながら斬りかかって来たので、半歩後ろに下がってその斬撃を見極めつつ左手に握った扇子で竹刀を撫でる様にいなして空振りさせる。

流石に何年もこの道場に通ってればコレぐらい俺でも出来る、出来るんだけど……こっから相手の切り返しに毎回対応が出来ないんだよなあ。

その証拠に受け流した瞬間、相手はびっくりするぐらいの速度で竹刀を逆手に握ると、腕を引くようにして切り返しの一閃を放つ。

左の扇子で受け流そうにも、こっちの体勢が整う前に一撃が来たから反射的に右手の竹刀で受けてしまった。

途端、俺の手に伝わる強烈な衝撃、しかも半端に身体も引いてたので握力を持ってかれるわ、一撃で薙ぎ倒されるわで完敗だった。

「うばあ〜!! 負けたー!!」

「当たり前でしょ? こう見えても私は篠ノ之家の長女なんだから」

俺を打ちのめした相手——東はそんな風に言いながら大の字になって横たわる俺の左横に座ってタオルで汗を拭いて居た。

普段は東のお父さんや千冬、後は他の門下生の人達とかに相手して

貰ってるんだけど、今日千冬は休みで他の人達も忙しいのでお預け食らったのよ。

そしたら道場覗きに来た束が『……相手探してるんなら私がやったげる』とか言って相手してくれたんだけど……千冬とは別の方向でスゲエな。

「で？　なんで君は今更家の門下生になったの？　割と私しよつちゆう言ってたよね？　ちよくちよく顔出すくらいなら入門しなつて」

身体を起こして汗を拭いてる俺にジトツとした目でいきなりそんな事を言い出した束、確かに結構長い間ここに通ってたけど今まで俺は入門してなかった。

だから簡単な剣の振り方とかしか教えてもらわなかったんだけど、去年のお盆で見た神楽舞が綺麗だったのと束から聞いた『一刀一扇の構え』という守りの型を学びたくなったから、それが改めて入門した理由かなあ？

「それに扇子なら何かがきつかけで誰かと喧嘩してもどっちも痛くないでしょ？　つまりそう言う事だよ」

「君らしいと言うかなんと言うか……そもそもその型だって左手で相手を捌いて右手で斬る訳だから護身術にしては過ぎた物なんだけど？」

「うーん、まあそうなんだろうけどさ、俺今日右手は使わなかったろ？」

一応型を学ぶ稽古じゃ剣を振ったりするけど実際の打ち合いで人に向けて竹刀を振った事は一度も無い、使ったとしても相手の剣を受け止めたり流したりするくらい。

今までは千冬に勝つ事に躍起になってたけど、最近になって人を叩いたりする事が苦手になっちゃって結局こんな半端な感じになった。

「ただ東のお父さん——師範はそんな俺の型を笑って許してくれたし、他の門下生の人も『一刀一扇ってよりは無刀二扇だなあ』って感じで嫌がるどころかむしろ色々アドバースをくれるので開き直ってこのスタイルでやらせて貰ってる。」

「そんな風に色々考えてたら東からの視線を感じたので振り向くと、何か言いたそうな顔をしていた。」

「どつたのよ?」

「ううん、別に大したことないんだけどさ」

「うんうん、何聞きたいのよ?」

「君って、誰かと取っ組み合いの喧嘩するの? てかむしろした事あるの? 私ぜんっぜん想像できないんだけど?」

「あー、ない、かなあ?」

「扇子を顎先に当てて考えて見たけど喧嘩した事なんか殆ど無い、あつたとしても親父や母さんとかに文句を言うレベルだし、そもそも俺は相手の嫌なところよりも良いところを見る様にしてるから他人と口喧嘩すらした事ない。」

「そもそも私は君が怒ったところ見た事無いんだけど? 何言っても笑ってるしへこたれないし……もしかして何言われても何にも感じないとか?」

「いやいや、んな事ねーよ? 俺だって人並みに怒る事あるよ?」

「ふーん、例えば?」

「例えば? そうだなあ、東の事とかかな?」

「……………私?」

「うん、東の事で勝手な事言われるとカチンと来る」

「東は少し人付き合いが苦手な部分があるしキツイ事も言うけれど、それは単純に人との付き合い方が分からないだけで悪い奴じゃないし、根っこは優しい奴だから東の事を上部だけしか知らない奴らに悪

く言われると嫌な気分になるんだよなあ。

束だけじゃ無くて他の友達も同じなんだけど、束は色々誤解を与えるような言い回しをする事が多いから良くそんな陰口とか言われている姿を見るし、その度に悲しい気分になった。

でも最近束もクラスの人もある程度話せる様にはなつて来たと、三年の時に一緒にクラスだった子達はみんな束の事を分かってくれたので少しずつそう言った事も少なくなつて来てる。

「が、柄になくそんな真面目な顔で恥ずかしい事言うなよ!!」

束はそう言つて照れてるのか、顔を赤くしながらそつぽを向いてしまつた。

俺も少し柄に無い事を言つた自覚はあるのでそれ以上は何も言わず、扇子を広げてゆつくりと仰ぐ。

——ちりん、と扇子に付けられた鈴の音だけが無言の俺たちの間に響くのだった。

小学四年生 4

篠ノ之道場に入門して暫く経ったある日の土曜日、俺は一人公園で水の入った空き缶を扇子に乗せてふらふらと歩いてた。

その理由は一刀一扇の構えは本当に扇子を使う訳じゃ無いってのは教えて貰ったから知ってるんだけど、コレを使うって決めたのは俺だから扱い方を練習しないとダメだと思ったからだ。

相手の一撃を流すのなら力よりもそれを利用するような感覚が必要で、その為には扇子を自分の手足の様に使わないといけないのだとか。

俺はそれが出来てないから一太刀目を受け流せてもその返しで慌ててすっ転んだりするらしい、確かに束と稽古した時なんか丸っ切り反応出来なかったし、他の人との稽古でも一撃目を敢えて流させられて一発食らった事もある、それに千冬には全く通じなかったんだよねあ、面白いくらいフエイントに引つかかって全く見せ場が無かった。

うーん、これでも結構な頻度で通ってたと思うんだけど、やつぱちちゃんと習ってる千冬に比べたら俺はまだまだ雑魚レベルだよなあ。と、そんな事を考えたのが悪かったのか乗せてた空き缶をまた落とすしてしまう。

もう何度目かも分からないくらい結構落としてるんだけど全然良くならない、師範にアドバイス貰いたいんだけど今日は家族で動物園に行くって束が言ってたしなあ。

手の平で扇子をぽんぽんと弾ませながら少し悩みながらベンチに座っていると、遠くの方で一夏くんを連れた千冬を見つけた。

「あれ？　　おい、ちーふーゆー!!」

見つけたからつい声掛けちゃったけど、結構遠いし一夏くんと
の散歩は日課になってるから気が付かないかな？ と考えてたけど、俺
の声に気付いたのか千冬がこっちに来るのが分かる。

ちよつと前に大声で名前を呼んで束に怒られた俺は『またやつ
ちやった？』とか思いながら冷や汗流して千冬を待ってたんだけど、
意外な事に怒られなかった。

「千冬は優しいなあ」

「脈絡の無い発言はやめろと毎回言ってるだろう……はあ、で？ 私
を呼んだ理由は？」

呆れたようにそう言った千冬は俺の右に座ると、膝の上に一夏くん
を座らせながらこっちを見た。

「おつとその前にいっくんに挨拶だ、ぐーてんたーく!!」

「たーく!!」

「グーテンターク、ドイツ語で『こんにちわ』だったか？ 確か仕事で
お父さんが海外に行ってたんだったか」

「そそ、昨日帰って来たんだけどなー、ドイツ語の挨拶をちよつとだけ
教えて貰ったんだよ」

「なるほどな、ん？ そういえばあの人の仕事はなんなんだ？ 私も
束もそれなりの頻度で遊びに行ってるが、一度も聞いた事がないんだ
が」

「あー、うん、なんだろう？ 俺もよくわかんねー、変な仕事って訳で
も無いし悪い事してる訳じゃねーんだけど、色々やり過ぎてて元が
なんなのか分からないんだよ、むかーしに元が古本屋だったような気
がするって親父が言ってた様な気はするけど」

「なんなんだそれは……」

千冬の呆れに俺も頷く、前に店に行ったら本以外に絵やら壺やら
色々置かれてて本当に何屋なんだよって感じの店だったし。

「なんつーの？ 元々は親父のじーさんが持ってた店らしくて大学卒業した時に継いだんだってさ、んで友達からのあれ欲しいこれ欲しいって頼み事聞いてたら店が訳わかんなくなっただとか、まあでもそれなりに儲かってるらしいよ？」

「何となく頼み事をされてる様子が目に浮かぶな」

その後も俺と千冬は一夏くんを混ぜて色々喋ってたんだけど、一夏くんが俺の扇子を触りだしたあたりでようやく千冬を呼んだ理由を思い出した。

「あ、そーだそーだ!! 俺千冬に扇子の使い方教えて貰うんだっ
た!!」

「そうなのか？ 私はてつきり雑談したかったのかと思ってたんだ
が……」

「それだったら俺が会いに行ってるって」

「それもそうか」

千冬の納得に合わせて俺は立ち上がり、二つ持って来てた扇子の一本を一夏くんに渡して千冬に動きやら何やらを見てもらう事にしたんだけど……師範並みに厳しかったのと焦りは禁物って事を教えられた。

「大体お前は長々と遊びには来ていたが正式に入門したのは最近なんだ、出来なくて当たり前前、むしろそう軽々と人を捌いて流してされたらこっちの立場が無い」

「むむむ、相変わらず厳しいししょーだ」

「それにだ、お前が真面目に修練するのは似合わん」

「ええ……そりやねーよ」

流石にグサリと来た、俺結構真剣なんだけどなあ。

「お前は、にこにこ笑いながら楽しむ様に練習するのが一番似合ってる、断言してやろう」

「ふーん、そんなもんなのかなあ」

そんな事話してたら日が暮れてるし、汗だくだったから扇子で仰ぎながらそんな事を不満げに言ってたんだけど、涼しい顔してその不満を聞き流してた千冬が扇子に書かれた文字に気が付いたのか、フツと優しく笑いながら『お前らしい一文だな』と言って一夏くんの手を引いてベンチから立たせる、公園の時計を見たら夕飯時だしそろそろ帰るんだろう。

無刀二扇、俺の扇子に書かれた文字は道場で茶化す様に言われたその四文字、難しいけどこれ以上にないくらい俺にぴったりだと個人的にもこっさり思ってる訳で、何気に気に入ってたりする。

「つー訳で、今日は一夏くんと一緒に俺ん家で夕飯食ってけよ、帰りは親父が送ってくれるしさ!!」

だから、それを笑って俺らしいと褒めてくれた千冬の後を追った俺は、その肩を叩いて二人を夕飯に誘うのだった。

「な、なあ束？ 俺さ、一個聞きたい事があんだけどさ？」

「何？ 早く言つてよ、私は雲の数数えるのに忙しいんだから」

「じゃ、じゃあ、聞くけど、はあ、なんで俺お前をおんぶしながら砂浜ダツシユさせられてんの？」

最近の稽古は足腰を鍛える系の奴なんだけど、今日は背中に束が乗った状態で走らされた。

というか俺が走る前に靴紐結んでるところに束がてこてこ歩いて来て、あれこれ言われておんぶさせられたつてのが正解かもしれない。

「は？ 私はお前の師範の娘だよ？ 口答えする権利があると思つてんの？」

「はあ、はあ、いや、いくら束でも、いい加減重い」

「あつはつはこのバカは面白い事言うねえ、私が重いって？ ——
—絞め落とすぞ？」

そう束が言った瞬間マジで首に回されてた腕が締めり始めた。
えっマジで俺絞め落とす気？

疲れてるところで首を絞められて息が苦しくなった俺は、束の腕をタップしながら謝り倒して何とか許して貰い、へとへとになりながら休憩まで耐えきつた。

束が持つて来てくれたスポーツドリンクを飲みながら、責めるような目で俺を睨む束をチラツと見る。

入門してから束はちょこちょこ俺の練習に付き合ってくれるんだけど、内容が結構キツイのが多いんだよなあ。

この前なんか、腕立てしてる時に背中に座つて来て『ほら、続きやれよ』とかいつて急かされたし、室内プールで泳いでた時も計数器つ

て名前だっけ？ アレで往復回数カチカチ数えながら延々と『後一往復ねー』とか言つて疲れるまで泳がされた。

でもちゃんと飲み物とかタオルを用意してくれてるから何時もと一緒で加減が分からないだけなんだろうなあ、束つて手先は器用だけど不器用だし。

だからまあ、今のところは束に色々やらされるのは別に気にしてない、もう少し優しい稽古にして欲しいくらいかなあ。

そんな風に考えてたら、汗を拭きながら千冬がコツチに歩いて来た、軽い汗だけで済んでる辺りやつぱ慣れてんのな。

近くまで来た千冬が俺たちの様子に首を傾げながらも何時もの様に横に座つて一息ついた。

「で？ 束に何言つたんだ？ ん？」

「重いつて言つたら怒られた」

「束は軽いと思うんだが……」

「軽いけど重かった」

「どう言う意味なんだ？」

「ねえちーちゃん、そいつの馬鹿が移ってない？」

「……かもな」

「お前ら酷くね？」

何時もの様なやりとりをしながら俺達は休憩時間を過ごしてたんだけど、途中からふと思ひ出したような顔で千冬が俺の顔を見始めた。

「俺の顔がどうかした？」

「いやなに、大したことじゃないんだが……背が伸びたなと思つてな」

「差にして2センチ程度かなあ、こうやってぴったり引つ付くと分かるね」

千冬が真っ直ぐに俺の顔を見てる間に束が肩を寄せる様にピツタ

りと寄り添い、それを見た千冬も同じようにしながら身長を比べ始めた。

俺からしたらそんなに変わった様な気はしないんだけど、束はその2センチの差が気になるのかもぞもぞと背伸びしたり背筋を伸ばしたりしてその差を埋めようとしててちよつとこそばゆい。

千冬は千冬で俺の頭の上に手を置いて身長差を確かめながら、満足そうな顔してるしちよつと不思議な気分だ。

試しに俺も千冬の頭に手を置いてみたけど、キョトンとされただけでなんだかよく分からなかった、髪がサラサラだったから触つてて気持ち良かったけどね。

ついでに束の頭を触ろうとしたら手をパシッと叩かれた、無言だけど『触んな』つてのがめちやくちや伝わってくる、けど手を離れたら離れたで不満そうな顔をしてるのが分かる。

どうしようか悩んだけど、なんとなく後髪を触ったら特に何も言われなかった。髪はセーフなのか？

束の髪は長いし結構触り心地が良くて、気が付いたらずつとさらさらと触ってたんだけど、そしたら急に脇腹を千冬に抓られた。えっなんで？

「あの、千冬？　なんで抓ったのよ？」

「さあな、そんな事よりもお前は髪の長い女と短い女、どっちがいいんだ？」

「うん？　うーん、長い髪の女の子の方、かなあ？」

「……そうか」

千冬は少ししよんぼりした様子で自分の短い髪を弄りながら妙に肩を落としてる、別に髪が短くても千冬の事は好きなんだけどなあ。

俺がどう声を掛けるか悩んでる間に束が千冬の所に近寄って行き『ちーちゃんもこれから髪伸ばそうよー、絶対に似合うからさあ』とか言って絡み出したので、俺はそれを聞きながら扇子を取り出して涼む事にするのだった。

どーせ直ぐに束が千冬にやられるんだろうからなあ。

幕間：戦乙女から見た彼

今更の事だが、彼は多芸かつ多趣味な男だ。

簡単な手品は勿論、大概の楽器は扱えるし歌も上手で束ほどでは無いにせよ雑学も豊富。

それに目立ちたがり屋で人の中心にいる事を好む、だから学校では常に委員長職に率先してなりに行くので人望も厚い、あだ名も委員長で定着するほどに。

彼と一緒に居ると会話に困る事がない、それどころか私の知らない事や経験した事の無い様な事も教えてくれる、束は色々と彼の事を貶しているが私は頼りになる男の子だと思う。

そう、私はそう思ってるのだが、そんな思いを彼に抱いているのは私だけで無い事も今更ながらに知った。

チラツと彼に目を向けて見れば隣のクラスの女子が彼に会いに来ている、もう見慣れた光景だ。

会話の内容は私には分からない分野だったが、彼にはそうでもない物らしくスラスラと詰まる事無く会話を返して盛り上がってる。

いつまでも眺めてるのも悪い気がして束の方を見たが、酷く面白く無さそうな顔をして彼の様子を眺めていた。

「どうした束？　彼が人に囲まれているのは今に始まったことじゃないだろう？」

「べっつにいい？　ちーちゃんが何を勘違いしてるのか知らないけど束さんは全然そんなこと思ってるでもないもーん」

拗ねたように口を尖らせる束、普段彼にキツイ事を言ってる割には発言と行動が噛み合っていないな。

「そんなに羨ましいなら彼の所へ行って会話に混ざればいいだろう

？ お前は私と違って物知りだしな」

「あんな凡人達と混ざるのは疲れるから嫌かなあ、それよりちーちゃん？　なんかニューアンスに棘が無い？」

「それならそんな顔をするな、以前も言ったが私達は彼からしたら大勢居る友達の一人ではないんだ、特定の人を特別扱いをするような人じゃない、私はお前と違って会話に混ざると言う選択肢すらないからな、お前と違って」

「あの、ちーちゃん？　もしかして機嫌悪い？」

「何故私が無機嫌になるんだ？　彼が他の誰かと一緒に居るのは何時もの事で、去年もそうだったじゃないか」

何時もの光景だ、彼の人柄に惹かれて一緒に遊んだり、趣味について話したりする人が多くなにかと人の輪が尽きない。

だから今更束のように思う所がある訳でも無い、ただ少し髪の毛の長い女に囲まれてるなど思っただけだ。

別に他意はない、そう、彼がどこの誰と話そうがどんな話をしていようが私には関係が無いし、彼に当たる理由にはならない。

「ね、ねえちーちゃん？　私の髪がどうかした、かな？」

「いや？　特に何も、羨ましいなどとは微塵も思っていない」

「ふ、ふーん、ちーちゃんも嫉妬するようになったんだね？　わ、わーい、初嫉妬記念日だー!!　……………だからね？　切り落とさんばかりの目で私の髪を見るのは止めて欲しいかなあって」

「嫉妬？」

なるほど、この胸がザラつくような不快な感覚が嫉妬なのか、あまり気持ちの良いものではないがそれでも初めて知った。

しかし私は何故彼の周りの子や束に対して嫉妬をしているのだろうか？　何度も言ってる通り彼の事は何時もの通り、髪の毛の長さだって別にそれで彼が人をえり好みする訳でもないのに。

今までを振り返って見ても確かに細かな部分で嫉妬をしているだ

ろう場面がある、その内容もごく些細な内容で自分でも不可解な事だ。

東に聞けば分かるだろうか？　そう思いはしたが、何故かそんな気が起きない。

確実な答えが返ってくる筈だがこの嫉妬の理由を教えて貰いたいのは東では無く彼の方、自然とそんな風に考えてしまう。

そう思うのは新しい事、新しい知識、その手の物を彼が私に率先して教えてくれる、側に居て手を引かれるだけなのに妙にそれが嬉しく、それがとても落ち着くからだろう。

……少々強引な部分もあるが。

そんな風に考えて居たら急に誰かに顔を覗き込まれた、自分が人の接近に気付かなかつたのには我ながら驚いたが、相手を見たら納得がいった。

「よっ！　どーしたんだよ千冬、さつきから難しい顔してきー、折角の美人が台無しだぞ？」

「君はそんな言葉を恥ずかしげも無くよく言えるよね、しよっちゆう誰かしらに言ってるんだろ？　軽い奴だよねー？　ねっちーちやん？」

「ん？　そうだな、言い慣れる程度には口にしてるんだろう」

東の憎まれ口に釣られてつい私も思っても無い嫌味を言ってしまう。

しかしそんな私の言葉をどこ吹く風と言わんばかりに涼しい顔で流した彼は、最近持ち歩きはじめた扇子の一つを鈴の音と共に広げながら笑った。

「いやいや、別に俺は誰にもは言わねーよ？　褒め言葉だつて人によつては嫌味になるしき、お前らは本音で言っても大丈夫だから言ってるんだつてば」

「その理屈だとき、君の場合大概の人が『本音で言っても大丈夫』な相手だと思っただけど？」

「あ、バレた？」

束の指摘にいたずらっぽいや笑顔でそう返す彼、そんな態度をすれば沸点の低い束を怒らせるだけなのは分かりきってる筈なのだが、意図してやってるのかそうでないのか敢えて彼は束を怒らせてる節がある。

案の定反論させないと言わんばかりの勢いで捲し立てる束、その様子に狼狽えるでも謝るでも無く扇子片手にその罵倒を笑顔で聞き続ける彼。

最終的に言いたい事を言い切って疲れた束に別の話題を振って雑談に持つて行った、以前束が『アイツの頭を割って見てみたい』と言っていた事があつたが、その理由が分かつた気がする。

しかし、私のそんな関心は彼の発言の所為で正直どうでもよかつた。

(本音で言つて大丈夫な相手……か)

頭の中でその言葉を反芻した私はそれまで抱いていた嫉妬が解けて行くのを感じる、まったく彼は本当に色々な事を教えてくれる物だな。

そんな事を思いながら私は自然と笑つていたのだつた。

小学四年生 6

……夏ってなんで暑いんだろーなー。

ジリジリと太陽から遠火で焼かれてる様な真夏日、今日は熱中症だか日射病の危険があるとかで稽古が休みになった。

流石の俺も外で遊ぶ気にならない暑さだから縁側で寝そべって部屋に置いてある扇風機の風を浴びてただけど、実を言うと今日ももう二人ここに居る。

「なー、なんでわざわざこんな日に遊びに来たんだー？」

「うっさいなあ、こんな暑いになるとか思わなかったのー、知ってたら来なかったってのー」

だらんと俺と同じ様にうつ伏せで扇風機に当たる束、携帯番号教えただけなのに家まで来て稽古が休みなのを教えてくれたんだけど、そのまま遊ぶ気だったのか箒ちゃんも連れて来てる。

んでその肝心の箒ちゃんも扇風機のと真ん前という特等席でカツプアイスを食べてる、口元がべたべたなのはご愛嬌って奴だね。

「たばねー、あの太陽暑過ぎるから何とかしてくれよー」

「えー？ めんどいからヤダー」

「じゃあこのままこんがりウエルダン？」

「日焼け止め塗ってるからへーき」

「ずっこいぞー」

なんだろう、暑過ぎて俺も束も会話がだらだらしてていつも以上になんにも考えずに口が動いてる。

「なーたばねー、服脱いだら涼しくなるんじゃない？」

「何？ 私を脱がしたいの？ へんたい」

「ごめん、なんかテキトー言ってたわ」

「普段からテキトー言ってるよ、君」

ジトつとした目付きで俺を睨み出す東、まずい事言つたなあとは思ったけど、東はあんまり気にしてないのかコロコロと横に転がって行つて部屋に置いてた本を拾つたらしく、ペラペラとページを捲る音が聞こえる。

「何コレ、伝記？」

「おー、学校の図書館から借りた奴、何だっけか……確かフアンブル昆虫記だっけ？」

「……どんな昆虫記だよそれ？ フアンブルでしょフアンブル、フアンブルだと探し回るとか下手くそだとかハマするとかって意味だよ」

「ほえー、流石東ちゃん、勉強になったなー」

「ちゃん付けすんなブン殴るぞ」

そんなこと言いながらもこつちを見る事無く東は俺の借りて来た本を読み始める、暇だから流し読みしてるって感じだけどそうなる俺が暇になるんだよなあ。

そんな風に思いながらうつ伏せになってたら、母さんが来た。

「ほら二人とも冷やしたスイカあげるからダラダラしないの」

「ありがとーおばさん」

「ありがとー母さん」

二人揃つてダラダラ立ち上がりながら縁側に並んでスイカを食べる。

正直暑さに参つてたけど、母さんが庭に水撒いたり俺らの足元に水と氷を入れたタライを置いてくれたので大分涼しくなってきた、背中に扇風機も当たるしね。

「ほい束」

「ん」

俺はスイカに何もかけないんだけど束は塩をかけて食べる、母さんもちやんとそれを分かって用意してくれてるので束に塩を手渡しながらスイカの種を庭に飛ばす。

適当に飛ばしたんだけど、それなりに飛んだから中々良い記録なんじゃないだろうか？とか考えてたら視界の左からスイカの種が飛んで来た。

しかもその種は俺の飛ばした奴のちようど真上に落ちてて、ちらつと束を見ると勝ち誇ったような顔で俺を見ている。

俺はその顔に反応しないようにしながら二発目を飛ばして束の種よりも先に落として勝ち誇った顔を仕返してやったけど、鼻で笑った束にあっさりとは抜き返される。

……なるへそなるへそ。 とーぜんの話、これは戦争だ。

その後当たり前前の様に俺と束の種飛ばし勝負が始まったんだけど、後一步のところで箒ちゃんがえらく不満そうな顔をしてる事に俺も束も気が付き、一旦種飛ばしをやめる。

「あ、あれ？ どーしたのかなほーきちちゃん？ ほ、ほら束お姉ちゃんだよー？」

「……………ねーさんきらい」

「き、きゃら、い？」

プイツと横を向いた箒ちゃんの態度にショックを受けたのか、束はふらつと後ろに倒れそうになった。

慌てて手を伸ばして背中を支えたんだけど小声でぶつぶつと『箒ちゃんに嫌われた箒ちゃんに嫌われた箒ちゃんに嫌われた——』
と言つてて揺さぶつても話しかけても反応が無い。

とりあえず箒ちゃんが何をそんなに怒ってるのか気になって見てみたら、俺たちのスイカと自分のスイカをチラチラと見比べてるのが

分かる。

あー、うん、あれだ、箒ちゃんのスイカは束が全力で種取つちやつてるんだった、それなのに横で種飛ばして遊んでたら機嫌悪くなるよね。

それならと、俺は束のスイカを箒ちゃんに渡して種入りの果肉を食べさせてあげただけど、もぐもぐと口を動かしていた箒ちゃんは最初こそ嬉しそうな顔をしたのに途中からどのタイミングで種を飛ばせばいいのか分からなくなったのか、涙目で口を押さえながらおろおろし始めた。

んで困った箒ちゃんは口を押さえながら束のところに行つたんだけど、その瞬間束はぶつぶつモードから復活した後、箒ちゃんを落ちてかせながらゆっくりと果肉だけを飲み込ませて姉の威厳？を取り戻したっぽい。

箒ちゃんを落ち着かせながらゆっくりと果肉だけを飲み込ませて姉の威厳？を取り戻したっぽい。

その後、無事仲直りした二人と一緒に俺はまた種飛ばし大会を始めたんだけど、束が目線だけで『箒ちゃんの奴より遠くに飛ばすなよ？』って睨むもんだから実質箒ちゃんの一人勝ちだった。

小学四年生 7

セミがミンミン鳴きまくってる中、二枚重ねにした扇子で自分を扇ぎながら親父の店へ忘れ物を届けに行っていた。

なんか親父の話だと大学の時の友達に宇宙開発に燃えてる人が居て、その人に頼まれてフランスだったかドイツだったかに落ちた隕石を貰って来たとか言ってたんだけど、肝心な物忘れるとかおつちよこちよいだなあ。

そんな事を思いながら俺は鞆を開けて、ついできて言ってる母さんが態々作り直した出来たてほかほか弁当の横に入れた透明なプラスチックの容器に入った隕石を取り出して眺めてみる。

蜂の巣みtainな表現の難しい黄色の隕石の欠片、太陽に透かすと金色に光るそれは容器に入る程度の大きさだけどズシリと手にくる重さが隕石らしくてかっこいい、確か……何だっけ？名前があつたんだけど思い出せねー。

丁度親父がコレを持って来たのが昨日の三時ぐらいだったんだよなあ、んで種飛ばしで遊んでた束がビツクリするぐらいの速さで親父に近寄ったかと思うと、自慢するみたいに持って来た隕石を見ながら『おじさん!! おじさん!! これってパラサイトだよね!! 地球に落ちて来た奴の中でも1%しか存在しない奴だよね!! 凄い、凄い!! 実物なんて初めて見た!! うくんこの感じだとフカン隕石? この地球外物質って感じが良いよね!! ね?! おじさんもそう思うでしょ!?! ほらほら君もスイカ置いといてコツチに来なよ私がコレ説明してあげるから!! ほら早く早く!! 箒ちゃんもおいで〜』とか言ってる俺と箒ちゃんを引っ張った後、一時間近く喋りっぱなしだった。

もちろん俺も箒ちゃんも二人揃って話してる内容がちんぷんかんぷんで、楽しそうに隕石や宇宙の星の事を語る束を見てる事しか出来なかつたんだよなあ。

隕石を見てた俺は束の超早口の解説を思い出しながら歩いてたん

だけど、よそ見をしてたからか誰かとぶつかってしまった。

「おっと、ごめんなさい怪我はないですか?——つて千冬と一夏くんか、大丈夫?」

「ん? 大丈夫だ、軽くぶつかっただけだからな。それよりもお前がよそ見して歩くのは珍しいな? 何か気になるものでもあるのか?」

そう言つて一夏くんとお揃いの麦わら帽子を被った千冬は俺の手に視線を向ける、隠す事でも無いし教えようと思つただけ、服の裾を引かれたの先に一夏くんの方を見る。

するとそこには冷えピタで暑さ対策してる一夏くんが『よっ!!』と言いながら手をビシツと挙げていた。

「よっ!! 一夏くん今日もカツコいいねー」

「えへへー」

「あ、そうそう千冬さんや、俺が眺めてたコレ隕石ね」

「……………束のあのマシンガントークはコレが原因か」

ぼそりと疲れ切つた様な声でそう呟く千冬、束だし絶対語りに行つてるとは思つたけどやっぱりな。

多分師範も奥さんも同じ目に遭つてるんじゃないかな? 今日朝一で家に来なかつたし、多分まだ家で喋り倒してるはず。

そんな事を考えながらそのままバイバイしようと思つただけ、折角会つたんだし話し相手も欲しいなあと思つた俺は二人を誘つて一緒に親父の店まで行く事にした。

「ここがお前のお父さんの店か」

「おう、すげーだろー?」

「確かに等身大の木彫りの熊が店先に飾ってあったらインパクトはあるな、というか値札が付いてるぞ? アレは売り物なのか?」

首からぶら下げられたパネルには『大特価!! 10000円500
0円2500円!!』って書かれてる、よっぽど売れないんだねこれ、前
来た時からまた半額になってる。

ぺちぺちと珍しそうに熊を叩く一夏くと、値段の下がり方に何度
も『大丈夫なのか?』と聞いてくる千冬を連れて中に入った俺はまず
レジの人のところに行った。

「いらっしやーい、って坊ちゃんじゃないか! 何? また店長の
忘れもん?」

「うん、隕石と弁当」

「……隕石忘れるとか言うパワーワードよ」

微妙な笑い方のレジの人に鞆ごと渡した俺は珍しそうに店の中を
キョロキョロと見回る千冬達の案内をする事にした、もう用事は済ん
だしね?」

「ちゅー訳でかもんべいべー?」

「何故疑問系なんだ? それよりこの店は何なんだ? 古本屋と聞い
ていたが、本以外が多くて肝心の古本が見当たらないぞ?」

「だよなあ、俺もこの店で本なんか見た事無いんだよ」

「……本当に本屋なのか、ここは?」

そうため息を吐いた千冬が何気なく手に取ったのは風鈴、ただ普通
の丸い風鈴じゃなくて火箸風鈴って言うらしいけどね?

俺も何かないかと適当なものを手に取ったんだけど、昔の戦隊ヒー
ローの合体ロボットのおもちゃが出て来た、値札に5万とか書いてあ
るけどぼったくりすぎねえ?

そんな風には色々見て回りながら三人で歩きまわってたんだけど、一
夏くんが本を見つけて俺に持ってきてくれた。

嬉しそうな顔でててつと近寄って来て『あい!!』と渡してくれた
ので、千冬と一緒に一夏くんの頭を撫でつつその本を開く。

適当にページを開いたんだけど、中は男の人が女の人の服を脱がしながらちゅーをする絵が描かれていた。

「漫画かなあ？ でも巻数が書いてないし、ざっと見ても色んな漫画が纏まつてるからどつちかってーと週刊誌っぽい？」

「それにしてもはえらく薄いな、コンビニで見かける様なのだと分厚いのにコレはその逆だ、その上表面がつるつるしてる」

「うーん、どこ捲つても女の人の肌とかばっかだし、もういいや」

そう言つて、俺は適当なところにその本を置いて千冬の顔を見たんだけど、何故だかさっきの裸の絵が頭にチラついて思わず目を逸らしてしまった。あれ？ なんでだろ？

「む？ 私はどうかしたか？」

「い、いや？ なんでもねーよ？」

普通にそう返したつもりが妙に声が上ずって恥ずかしかつたから扇子を広げて顔を隠したんだけど、千冬はそれが不満だったのか俺を壁に押し付けながら扇子を取った。

「普段人の目を見て話すくせにどうしたんだ一体？ 何かあったのか？」

「えっと、なんつーか、その、さ？ さっきの裸の絵、あるじゃん？」

「あつたな、それがどうかしたか？」

「その、めっちゃ言い辛いんだけどさ？ お前の裸、想像しちやつて……」

……多分、俺の顔は今超赤いと思う。

友達で変な想像するのは良くないけど、千冬の横顔を見た時に思わずそんな風に考えちやつたのは本当だし、ど、どうしよう？

怒られるのかなと思つてチラッと千冬を見たら普通に首を傾げら

れた。

「見たいのか？ 私は別に構わないが——」

「だ、大丈夫!! 大丈夫だから!! うん!!」

見たいなら見せてやると言わんばかり服を脱ごうとする千冬を止める為の説得は、一夏くんが親父を連れてくるまで続くのだった。

その日の俺は稽古が終わった後に箒ちゃんと言おうと思っただけ、その日は珍しく千冬が一夏くんを連れて来てたらしく、二人とも千冬と束の後ろに隠れながらお互いの様子を観察していた。

緊張してるっぽいから間に入ってあげたいんだけど、今の俺はゾンビ・オブ・ゾンビ状態で動けないんだよなあ、束も千冬も竹刀持ったら容赦ねえんだもんよ。

暑さと疲労となんやなんやでぐったりしてる俺に気が付いたのに目を逸らす千冬と束、次からは加減してくれると嬉しいんだけどなあ。

そんな思いを込めた目で二人を見ながら扇子で体を扇いでたんだけど、しばらくしたらちびっこ二人が庭の水道から小さなバケツに水を入れて持ってきてくれた。

「にーさん、はい!!」

「にーちゃん、水!!」

「ありがとう二人とも!! うーん、すーずしー!!」

実際は二人が持って来てくれた水はそんなに量が無かったんだけど、庭に出て水を被る分には気持ち良いし、お互いが打ち解けてるのにそんな事を言うのはね？

「ちゅーわけで、束も千冬もコツチコツチ」

「……なんか、悪い顔してない？」

「してないしてない」

「そうか？ 私は特に何も思わないんだが、束の気のせいだろ？」

「そーそー、気のせいだって」

そう言いながら俺は二人を手招きしつつ道場の側に作られた井戸までさりげなく移動して水を汲む。

「えっと、何してるの?」

「えっ? あーほら、井戸水って冷たいじゃん?」

「まあそうだな」

「今夏で暑いじゃん? 稽古で汗もかいてるだろ?」

「ま、まあね? ほ、ほら、ちーちゃん、いっくんと箒ちゃんのところに行こっ?」

「束? 何をそんなに急いで——」

「だからさあ、冷や水でも食らいやがれ!!」

そんな風に叫びながら二人に向けて井戸から汲んだ桶の水をぶっ掛けた。

いや俺は別に怒ってない、けど二人とも稽古の時は遊びが無いから偶にはこんな風に遊んでもバチは当たらないんじゃないかな?

束は妥協しないから加減が効かないし、千冬は頑固で真面目だから束と同じで手加減とかあんまりしてくれないし、息抜きって絶対要ると思う。

だから水浴びでもと思ったんだけど、ぶっかけた後で束がやられたらやり返す女の子だって事を思い出した、ヤベエよ後ろ姿なのにヤル気なの分かる。

「ねえ? めっちゃくちや冷たいんだけど?」

「そーか? 夏の暑さ引く井戸水なら暑さの方がお釣りが来るだろ? な、千冬?」

「そうだな、ああ確かにお前の言う通り暑さの方が勝っているな。それはそうとだ」

「ん? どったの?」

「お前も、暑くないか?」

千冬はそう言って初めて見る様な良い笑顔を向けてくれたけど口元がヒクついているから多分怒ってるんだなあ、その素敵な笑顔はもつと別の時に見たかったかなあ？

とか思ってるうちに顔面に思いつきり桶の水をぶっかけ——
——つて冷たッ!? えっ? 井戸の中に氷でも入れてんの!?

ぷるぷると頭を振って冷たさに驚いてると、東の方から凄い勢いで水汲み用の桶が巻き上げられる音がしている事に気が付いた。

これは東の反撃が来る、けど甘いな東!! 俺は逃げるぞ!!

「ふっふっふー、音を立てながら水を汲むなんて東にしては珍しいなあ? これが前に教えて貰った『弘法の川流れ』って奴か? んじゃそーゆー事で!!」

「逃げられると思ってるの? それとそれは『弘法も筆の誤り』と『河童の川流れ』が混ざってる、お前の意味だとただの土左衛門だ」

そう言った東は逃げ出そうとする俺に足払いして転かした後頭に思いつきり水をぶっかけやがった、俺は一回しかやってないのに二回食らったんだけど!?

「涼しくなって良かったね、正に水も滴るいい男って奴? まあ君には過ぎた言葉だろうけど」

「ふう、すまんな私もつい手が出てしまった、結果として打ち水した様な状態になったし良かったんじゃ……」

「ふっふっふ、お前らは遂に俺に本気を出させたな?」

そう言って俺は泥だらけで立ち上がり、一夏くと箒ちゃんのところまで走って行って二人からホースを借りた。

もちろん狙いは東と千冬、文明の利器の力を見せてやる!!

「さあ一夏くん!! 箒ちゃん!! 水遊びするぞー!! 蛇口を捻れー!!」

「はーい!!」

「ういー!!」

「ほ、箒ちゃんがあゝの馬鹿の手下に!」

「そんな……一夏まで!」

「二対三だぞー!! 俺たちの勝ちだな!!」

そう言つて俺はホースの口を潰す様にしながら勢いよく二人に水を掛ける。

キラキラとした水とそれのおかげで出来た小さな虹にちびっこ二人は喜んだり、途中で本気になった束が家の中からどデカイ水鉄砲を二つ持つて来て千冬と一緒に反撃されたり、千冬の説得で一夏くんに裏切られたり、束の説得であつさり向こう側に箒ちゃんが行つちやつたりして、俺たちはその後も沢山遊んで最後は師範の車で千冬と疲れ寝ちやつた一夏くんと一緒に帰つた。

……ただ、俺はこの時知らなかつた。

デロデロのぐちゃぐちゃになつた道着を見て、家の中に鬼が生まれる事を。

小学四年生 9

水遊びで仲良くみんなで遊んでから一夏くと箒ちゃんも仲良しになったみたいで、ちよくちよく道場に顔を出す様になった。

今まで千冬は稽古中に一夏くんが側に来たりして怪我をしないか心配だったから連れて来なかったらしいんだけど、庭で楽しく二人で遊んでるのを見てほっとしてる。

俺も知ってる子同士が仲良ししていると嬉しいから千冬と一緒にその光景を眺めてたんだけど、涼もうと思って扇子を取り出したらちびっ子二人と目が合った。

「ん？ どったの二人とも？」

「にーちゃん、それなにー？」

「これはねー？ 扇子って言うんだよー？」

「せんすー？」

「せんすー!!」

「持ってみるかい？ 二つあるからはい、どーぞ」

俺はそう言って持ってた扇子を二人に渡した。

片方の扇子は無刀二扇の文字を彩る様に控えめに雪の結晶が描かれた白い扇子、もう片方は同じように赤い椿の花が描かれた紅い扇子、縁起が良いって言うから紅白で揃えてたんだけど、気に入ってくれたのか『おおー』と言いながら開いたり閉じたりしてる。

根元に鈴も付いてるから動かす度に音が鳴る、それも二人は気に入ったみたいでそのまま扇子持って庭まで走って行った。

「二人とも仲良しで良かったねー、千冬はちよっと心配性だからさー」

「心配性とは随分な言い草だな」

「えー？ でもほら、俺と話しててもちらちら外見てんじやん、心配な

んでしょ一夏くんがさ？」

「違う、私はただ一夏が転けたりしないか考えてるだけだ」

ぶいっと束みたいな仕草で顔を逸らした千冬、凶星って奴なんだろうな、顔もちよつと赤いし照れてるんだろう。

別に隠す事ねーのにな？ 俺も親父や母さんの事大好きだし、家族なんだから弟の事が大好きでも普通だろ？

とかなんとか思ってたらジュースを取りに行ってた束が戻って来た、スポーツドリンクと子供用のりんごジュース、後は俺ん家の定番になってるコーラもどき。

「あれ？ ちーちゃん、いつくんと箒ちゃんは？ てか君も扇子どうしたのさ？」

「二人とも外だ、扇子はせがまれて渡してしまったところだな」

「そーそー、鈴も付いてるし二人とも珍しがってさー」

「ふーん、でも良かったの？ あれおじさんから貰ったんでしょ？」

結構素材も良かったし、それなりに高いと思うんだけど」

「へーきへーき、ちよつと貸したくらいじゃどうにもならないって」

あの扇子は俺が道場に通って少しした頃に親父が用意してくれた奴で、師範と一緒に酒飲みに行った時に俺の目指してる型を教える貰ったんだって。

んで、だつたら折角だしそれ用の扇子作って貰おうって話になったみたいで、職人さんの所に行つて材料から選んで出来たのがあれらしい。

だから多少荒い使い方してもいい様に頑丈で硬いからちびっこが振り回しても大丈夫。

——とか思つてゆつくりとジュースを飲んでたらわんわん泣きながら一夏くんと箒ちゃんが帰ってきた。

「一夏!!」

「箒ちゃん!!」

その声を聞いた瞬間、二人ともめちやくちや慌てて飲んでたジュースをほっぽり出して庭の方まですっ飛んでった、俺も早く行きたかったけどとりあえず普段からポケットの中に入れてる絆創膏の確認をしてから、ハンカチを庭の水道で濡らしてから一夏くん達の所に行った。

先に行った二人がわたわたしながら一夏くんと箒ちゃんにあれこれ話しかけてるけど、ちびっこ二人は泣いてるから上手く話せないのかずつとどもってる。

ぱつと見て目に付いたのは汚れた二人の服、転けたのかな? んで次に気になったのは持ってた扇子が二つとも見当たらない事、開いた状態で走ってたから泣いてる理由は多分……。

俺は何となくそれが分かったので、ゆつくりと二人のところに行つてしゃがんで目を合わせた。

「一夏くん、箒ちゃん」

「に、にいちゃ、せん、せんす……」

「ごめ、ごめんなき、ごめ……」

「二人とも大丈夫そうで良かった、痛いところは無い?」

そう言つて泣いてる二人の顔を濡らしたハンカチで拭いてあげながら頭を撫でる、そんな俺の様子に束も千冬も少し落ち着いたのか、ちびっこ達の服の汚れを落とし始めた。

少しして二人が泣き止んだ後、話を聞いたら二人で色々な所を走り回ってる内に一夏くんがうっかり持ってた扇子を何処かに置きっぱなしにしてしまい、何処で無くしたのか分からなくなつたらしい。

その後箒ちゃんと一緒に頑張つて探してたら、今度は箒ちゃんが一夏くんを巻き込むような感じで転けちゃったらしく、赤い方の扇子に大きな穴が開いてたんだって。

それで怒られるのが怖いけど二人で謝りに来たつて訳だ。

箒ちゃんが服の中に隠してた扇子を広げると確かに穴が開いている、多分転けた拍子に石か何かが当たったんだと思う。

その話を聞いた俺は、顎に閉じた扇子を当てながらどう言ったら良いのかをちよつと考えてた。

別に俺は全然怒ってない、寧ろ二人が擦り傷も無かった事にホツとしてるくらいだから怒る気なんて全然無いのにビクビクと二人並んで俺を見てるのがなあ、束の罵倒や悪口より心が痛い、しかも束も千冬も気まずそうな顔してるしなあ……。

チラツと二人を見たらちびつこたちと同じ様にしゅんとしてた、なんでそうなるんだよ。

……うーん、こうなったら何か一つ手を打たなきやだ。

「てな訳で、箒ちゃん？ 一夏くん？ 目を瞑って手を出しなさい」

そう言つて扇子の先を二人に突きつけ、おずおずと差し出された手の平の上を痛くしないようにペしペししながら、束と千冬にこつそり俺の鞆を持って来て貰うように小声で頼む。

んで、二人が持つて来てくれた鞆から元々二人にあげる予定だった棒付きの飴をプレゼントする。

「もういいよー」

「あめ？」

「そうそう、二人とも正直にごめんなさい出来たからご褒美です、今日は怪我が無かったから良かったけど次からは気をつけるんだよ？」

そう言つて俺はちびつこ達の頭を撫でながら束と千冬に軽くウインクしてこつちの緊張も解くのだった。

自由研究、普通の宿題と違って色々好きな様に調べた事や作ったものを発表する宿題なんだけど、毎年毎年何をやるか悩むんだよなあ。

部屋のベッドで仰向けになりながらうーん考える、読書感想文はもう終わったんだけど自由研究は何やってもいいからなあ、去年なんかやりたい事全部やろうとしたら全部中途半端で終わっちゃったし……。

他の奴の作品を参考にしようと思っても、人と被るのはあんまり良くないよなあ、そもそも去年の作品って束が紙パックで作った変形合体ロボットがインパクト強過ぎて他の作品を覚えてない。

ぼーっとそんな事を考えながら天井に貼ったポスターを眺めてたんだけど、そこに貼られた北斗七星を見てピーンと来た。

夏と言ったら七夕、七夕と言ったら天の川、天の川と言ったら星座!! よーし星座の写真取るぞー!!

「てな訳で親父と一緒に撮った写真持ってきたぞー!!」
「だからどんな訳なんだよ……はあ、もう私一生コレ言ってる気がしてきた」

撮った写真の出来を見てもらう為に束のところを持ってきたんだけど、何時もの様にため息を吐いて呆れた様にそんなこと言われた、まあ何時もの事だね。

一応気をつける様にしてるんだけど、束や千冬と話してるといつも忘れるんだよなあ、気安いつて言うのかな? こーいうの。

けど、束はため息を一つ吐いた後に俺の持って来た写真を見始めた。

俺は静かにその写真に集中してる束の邪魔をしないように少し控えめな声で箒ちゃんと手遊び歌を歌って遊んでただけど、何となく

束の顔が気になった。

ちらつと覗き見ると真剣に写真を眺めてる、星の位置とか写ってる星座を確認してるんだろうけど、こうして真面目な束の顔を見てるとやっぱり可愛いと思う。

千冬はなんつーか、凜としてるって言う感じで落ち着いてるんだけど、束はよく怒ったり笑ったり忙しいからコロコロ表情が変わる、昔は話しかける時も露骨に嫌な顔してたけど最近じゃそれも無いし、本当の束が知れたような気がして少し嬉しい。

そもそも好きな事や好きな物について喋ってる人は絶対に一番良い顔をしてると俺は思う、だから束が宇宙について好きなだけ喋ってる時の顔が一番好きだし、千冬も竹刀を構えて向かい合ってる時の真剣な顔が一番好きなんだよな。

そんなことを考えながら束を見てたんだけど、どうも集中しきってるのか俺の視線に気付いてない、珍しいなあと思いつつそのまんま眺めてたら何故だか段々恥ずかしくなってきた。

しかもそのタイミングで気が付いたのか、写真から目を離して俺と目を合わせて『どうしたの?』って優しい声で首を傾げながら聞いてきたもんだから思わず目を逸らしてしまった。

あれ? 何で今更? 俺今までずっと平気だったのに何でだろ? この前千冬と一緒に親父のところに行った時からなーんかこう、変なんだよなあ。

ぼりぼりとほっぺたを掻きながら恥ずかしさを誤魔化す為に今度の縁日の話題に変える、こういう時は別の事を話すに限る、うん。

「と、ところでさ、今度の縁日一緒に回ろうぜ? 千冬や一夏くんも誘ってみんなでさ」

「ん? ー、別にいいけど少し遅くなるよ?」

あれ? 普段なら『ちーちゃんやいっくんだけならまだしも何で私がお前と一緒に縁日回らなきゃならないんだよ、そもそもお前には私達以外にも数えきれないくらい友達居るだろ、毎年そいつらと一緒に

行ってるんだから今年もそうしろよ』とか言われるところなのに、珍しいいな？

「遅くなるのは別にいいけどよ、なんか用事でもあんの？ それなら別に他の奴と一緒に回るけど」

「今年は私も神楽舞やるんだよ、だから終わるまでは無理、てかせっかく私が踊ってやるんだから君も当然見に来るよね？ てか来なかったらしばき倒す」

「お、おう、分かったとりあえず見に行くわ」

「取り敢えず？ と・り・あ・え・ず？ 絶対来いよ!! いいね？ 約束だからね!! ほら指切り!!」

「ぜ、絶対見に行くから、な？ な？ だからその、ちよつと、な？」
「なんだよさつきから、君今日ちよつとおかしいよ？ 熱でもあんの？」

そう言つて束は目を瞑りながら俺のおでこに自分のおでこをくっつけた、その時ふわつと束の髪からシャンプーのいい匂いがして来て、胸が痛いくらいドキドキとして来た。

「なんだよ熱ないじゃん、じゃあ何でさつきから落ち着きが無いのさ」
「いや、その、さ？ 顔が……近くて」

妙にどもりながらそう呟くと、俺も束も一瞬無言になって気まずい空気が流れる。

そして、次の瞬間俺は顔を赤くした束に突き飛ばされて絨毯の上で大の字でぶっ倒れた。 あ、箒ちゃん俺は大丈夫だから心配しないでいいよー？

「ふ、ふんだ、お前が変な事言うからだよ、謝らないからね!!」

「あ、あはは、ごめんごめん。 んじゃ、指切り」

「……ん、指切り」

こうして俺は束と指切りをした後、箒ちゃんを挟んで一緒に束と星座の話をして時間を過ごすのだった。

幕間：兎から見た彼

——毎年お盆に篠ノ之神社で行われる神楽舞、それに私は少し無理を言つて参加させて貰つていた。

今まで全く興味が無かつたのに今年は興味が湧いたのか、その理由は彼が昨年見た神楽舞に見惚れてた事が気に入らなかつたのだろう、熱心に舞の感想を語る彼が無性に嫌だつた事を今でも覚えてる、ただ何故その程度の事が気に入らないのかは考えないようにしているけれど。

考えてしまつたら自覚する、それはなんだか癩に触るから意地でも私は考えない。

そもそもあんな馬鹿のどこがいいと言うんだろうか？ 私の話を一個も理解出来てない癖に何が楽しいのかニコニコ笑つて聞いてちやつてさ、剣術の腕前だつてちーちゃんに遠く及ばないのに飽きずにやつてるし？ 私が色々ちよつかい出してもへこたれないし、諦めが悪いって言うの？ 無理な事を無理つて思えない人種なんだろうねアイツ。

やつぱ馬鹿だ馬鹿大馬鹿野郎だ、そんな奴の何に魅力を感じろつて？ じよーだんキツイよ、ちーちゃんほどカッコよくないし？ 箒ちゃんやいつくんほど可愛くないし？ 私ほど頭も良くないじゃん、微塵もこれっぽっちも一ナノミクロンたりともゼーんゼーん意識してませーん、良し理論武装完了。

だいたい、クラスの女子の何人がアイツの事好きだつて話してたの聞いた事あるけど、どいつもこいつもやれ顔がいいとか運動できるのがいいとか話していると楽しいからとか、そんな上っ面だけしか見えない連中に彼が靡くと思つてるんだろうか？ 私がどれだけ罵倒しても嫌がらせしても真っ直ぐ目を見ながら話しかけてくる男の子だぞ？ 人の表面しか見てない連中と違つて彼は人の内側を見るんだぞ？ 連中は自分が釣り合ふと思つてんのか？ 彼の一側面しか知らない癖に好きだのなんだのつて……負けず嫌いな性格だとか、ああ

見えて努力家だとか、話の引き出しの多さは好奇心旺盛なところから来てるのか、そんな彼の顔を全然知らない癖にそんなこと言うなつての。

そんな事を考えていたからか、化粧をしていていた雪子叔母さんの手が止まってしまった。

「東ちゃん？ お化粧出来ないからできれば百面相はやめてほしいかなあ」

「うっ、ごめんなさい……」

「ふふっ、東ちゃんは可愛いんだから気になるあの子もきつと釘付けよ？ だから難しく考えないの」

そう言つて雪子叔母さんは私の髪をセットし始めたけど、私は叔母さんの一言のせいでそれどころじゃ無かった。

「ねえ叔母さん？ 私が誰を気にしてるって？ もしかしてあの馬鹿の事？ いやいやそんなまさか今回の神楽舞だつて別にあの馬鹿に見せるためとかじゃ無くつて将来私もやらなくちゃいけないからその予行練習的な意味合いのアレで別にそんな——」

「はいはい、ならそう言う事しておくわね？」

私の必死な弁明も虚しく叔母さんは誤解したまま私の支度を終えて退出して行つた。

色々納得いかなかったけれど、本番の時間になつたから深呼吸で気持ちを落ち着かせた後、私は扇子を持って舞台へと向かう。

本当なら先祖代々からの宝刀も使うんだけど、身長の問題で逆に危ないから二つ扇子を使う事になつた、誰かさんと一緒だけど私は全然気にしてない、気にしてないつたら気にしてない。

舞台の上に登ると舞を見に来た人が沢山居て正直煩わしく感じたけど、前の方にちーちゃん達とあの馬鹿が居るのが分かつたから我慢だ我慢。

四方八方から刺さる視線は我慢しても不愉快な事になり、なんなら今からでも全部ほっぽり出してやろうかとも考えたけれど、いざ舞が始まったら不思議と集中してそんな考えは消えて行った。

一種のトランス状態なんだろうと思うけど、嫌な気持ちはいしなかった。その感覚に身を任せて舞台上で踊って行き、途中で彼と目があつた。

そわそわと落ち着かない様子で私を真っ直ぐ見る彼は今私だけを見ている、私の舞を見てきつと綺麗だと思っっている筈だと考えたら何故か笑いが溢れた。

別に意識した訳じゃないのに何となく頬が緩んだような感じで、せつかく目が合つてたのに彼はサツと顔を逸らしてしまう。

別に何もしてないのに何故顔逸らしたんだろ？ まあいいや、後で合流した時にでも聞きゃいいや。

そんなこんなで、私の神楽舞は無事大成功を収めるのだった。

お風呂に入つて化粧や汗を洗い流した後、私は御守り販売とかをパスして浴衣に着替えてから待ち合わせ場所の鳥居下に向かっていた。

本当ならちーちゃん達も一緒に居る筈だったんだけど、箒ちゃんとつくくんが早く出店を見て回りたくて落ち着かなかつたからちーちゃんが先に連れて行って来るらしい、そんなメールが彼から来た。

視線の先に居る同じ様に着物を着た彼は妙に様になってたけど、さつき顔を逸らした事を問いたただしたかった私は気配と足音を消して背後を取り、お財布とかが入った巾着を彼の頭に乗せる。

「コラ、さつきなんで私から顔逸らしたんだよ」

「うおっ!? いつの間に!?!」

「君は隙だらけだから簡単に背後取れるんだよ、んなことより私の質問に答えろよ」

「いや、その、あはは、なんつーか普通に綺麗だったからつい、さき?」

ほりほりと頬を掻きながらそんな事を言う彼を見て胸が暖かくなった私は、それ以上意地悪な事をせず、彼に向かって右手を差し出す。

「ん」

「ん? どつたの束?」

「はぐれたら大変でしょ? だから手、握らせてやるって言うてんの」

そう言ったは良いものの、流石に私も恥ずかしかつたのでそのまま顔を横に逸らして彼からの返事を待つ。

少しの間、彼は『あー』だの『うー』だの言って悩んでたけど、『よし!!』と気合いを入れたかと思うと、ぎゅつと強く私の手を握る。

その後ちーちゃん達に合流しに行く間に横目で彼を見たら、私と同じ様に顔を赤くしてそっぽを向いててなんだかおかしかつた。

私は彼を意識していない、今のままで十分——だから。

「やっぱ落ち葉掃除の後って焚き火だよなー」

気持ちいい秋晴れの日、俺と千冬は稽古終わりに篠ノ之神社の落ち葉掃除を手伝ってた。

目的は師範が用意してくれたさつまいもと栗なんだけど、落ち葉の中に紅葉が妙に気になる、広島とかだともみじ饅頭つてのがあるし、紅葉の天ぷらなんてのも聞いた事がある。

つーことは紅葉って食えるのかな？ この神社は銀杏もあるし、銀杏そのものが食えるんだから葉っぱも食えなくはないだろうし……。どうにも気になった俺は近くに落ちてた綺麗な紅葉を拾って食ってみただけど、口に入れた瞬間にカランと何か落ちる音がしてふっと振り返ったら、今まで見た事無いくらいぽかーんとした顔と一緒に掃除してた千冬と目が合った。

「な、何してるんだ？」

「ん？ 紅葉食ってる」

「それは見れば分かる、分かるんだが私が聞いているのはだな……」

「もしかして味？ 普通に青臭くてマズイ、全然飲み込めない」

「それは……そうだろうな」

「ところで千冬、一個いい？」

「な、なんだ？」

「……水かなんか無い？ あのね？ 口の中がね？ とつても地獄なの」

「ふふっ」

口を押さえながら千冬に助けを求めたんだけど、俺の顔を見た千冬は口元を押さえてクスクス笑い始めた。

多分あれだ、俺めっちゃ頑張ってポーカーフェイスしてるつもりな

んだけど、それが全然出来てないんだな。

「す、すまない、だが痩せ我慢してる割には随分可愛らしい口調だったものだからつい……」

「口の中が超イガイガする、イガイガのイガちゃん」

「ぷつ、くくつ、あはははは!! そんな表現、まるで、まるで一夏じゃないか、ぷつあはは、ダメだ笑えて来た!!」

ついイタズラ心が出てそんな風に千冬に言ったらどうもツボに入った見たいで、遂に大笑いしてしまった。

目に涙まで浮かべて笑う千冬は初めて見たから少し新鮮に思えたけど、口の中が地獄なのは変わらないから何とかして欲しいなあ。

そんな風に思っていると、千冬は笑いながらも自分の持ってた水を俺にくれた。

んで有り難くその水で口を濯いで地獄を何とかしたんだけど、ペットボトルのキャップを閉めたところである事に気付いてしまう。

……このペットボトル、口空いてたからもしかして千冬の飲みかけ？

チラツと千冬の方を見たら、こてんと可愛らしく首を傾げるだけで特に気にした様子が無い、もしかして気にしてるのは俺だけ？

「あ、ありがとう千冬、これ返すね?」

「いや、私の方こそ笑って悪かった」

そう言って申し訳なさそうに謝った千冬は、喉が渴いてたのかそのまま受け取ったペットボトルの水に口を付ける。

なんだろう、別に直接ちゅーした訳じゃないのに凄くドキドキするんだけど、やっぱ千冬が美人だからかな?

「ん? 私の顔がどうかしたか?」

「いやー、その、千冬ってあんまり気にしないんだなーって思ってたさ」

「気にする？ 何を？」

「だって、俺もそれ口付けたろ？これってアレじゃね？」

思わず間接キスと言わず言葉で言葉を濁しちゃったけど、千冬にはそれが伝わったのか、無言でペットボトルの口を眺め始めた。

流石の千冬も照れてるのか、顔を赤くして黙ってしまったので妙な沈黙が俺たちの間に出来てしまう。

………どーしよ、普段なら色々話題が出て来るんだけど俺も恥ずかしくて全く話が出て来ない。

「………なあ？ その、なんだ」

「お、おう、どーした？」

「ファーストキスはレモンの味というが………実際はどうなんだろうな？」

千冬は自分の唇を抑えながらそんな風に呟いて俺の方に振り返る。

普段から言ってるけど千冬はとびきりの美人さんだ、そんな美人さんにジツと見つめられた俺は思わず視線を逸らしてしまった。

………最近束とか千冬の顔を見てて目を逸らす事が多い様な気がする、というか二人とも俺の知り合いの誰よりも美少女だからなあ、長いこと顔見るとドキドキする様になって困る。

そんな時別のところから境内を歩く音がしたから、俺達はハツとなつて竹箒を握り直す。

んで慌てて集めた落ち葉を二人掛かりで一箇所を集めると、他の場所の掃除をしていた師範と、ちびっこ達の相手をしてた束が歩いて来たのが分かった。

「ほーら箒ちやーん？ いつくーん？ ちーちゃん達が落ち葉集めてくれてる筈だから焼き芋タイムだよー？ 焼き栗もあるよー？」

………束、俺今お前の事が超天使に見えるわ。

ちらつと千冬を見ると少し残念そうな顔をしている様な気がしたけ

ど、束の運んでるさつまいもが入った段ボールを見たらそれを手伝いに行ったから多分気のせい……だよな？

その後は特に何も起きずに焼き芋と焼き栗をみんなで食べたんだけど、俺も千冬みたいに自分の唇が気になって良く味が分からなかった。

最近思うんだけど、束も千冬も女の子らしくなった様な気がする。別に今までが女の子らしく無かったって訳じゃないんだけど、身体の柔らかさとかが俺とは違って来てるんだよなあ、道場稽古を始めてから体が鍛えられてるからかな？

身長も千冬や束が言うには伸びてるらしいし、男女の違いって奴が出始めたんだらうか？

「てな訳で、俺の背中に乗ってる束さんやその辺どうなのよ？」

「んな事聞いている余裕があるなら神社の階段もう二往復する？」

「あっはっはっは、ムリです許してください」

何時もの束の追加特訓を誤魔化す為にそんな事を考えてたんだけど、情け容赦ない宣言が俺に飛んで来たのでとりあえず謝りながら黙々と階段を登る。

束のヤロー、俺がなんで色々考えてたのか知らねー癖にキツイ事言いやがって……。

大体、お前が押し付ける様に抱き付いて来なけりや背中 of 感覚を意識しなくて良かったし、そもそもおんぶって体勢が色々恥ずかしいんだよなあ。

やんわりと束にそれを言っても、『私は恥ずかしくないから大丈夫、そもそも君におんぶして貰っても私はなーんにも思わないから』だからね。

いや、俺も束をおんぶする事が嫌だつて訳じゃないんだよ？ 束は可愛いし、学校でも割と人気があるから個人的にも嬉しいって気持ちはあるんだけど、それ以上にドキドキするんだ。

今までそんな事無かったのに最近になって二人を妙に意識する様になったんだよなあ、なんでだろう？

かと言ってこの疑問を二人に聞くのは違う気がする、というか誰に

聞いても納得出来ない気がするんだよなあ。

「てか束？ 前々から聞いたかったんだけど、俺の特訓って毎回毎回キツくね？」

「は？ これぐらい普通だろ？ 出来ない訳ないでしょ？ 君のギリギリを狙ってるんだから大丈夫だったの」

……俺、そこまで出来る子じゃないんだけどなあ、期待されても困るっつーかなんっつーか。

「……足が止まってるぞ、早く階段登れって」

「わーっただわーっただ、登りやいいんだろ？ けどちよつとだけ離れてくんね？」

「何でさ？ そんな面倒な事したくないんだけど？」

「だ、だって当たってるからさ……」

「何が？ つかさつきから様子がおかしいのはそれが理由かこのやろー」

「その、背中に柔らかいのが二つ……」

思わずそんなことを零してしまっただけど、言った後から急に恥ずかしくなって何も言えなくなった。

「……別に減るもんじゃないだろ？ というか一々そんな事気にしてんのかよ、スケベ」

「し、しようがないだろ!! つい気になっちゃうんだから!!」

「だ、だったらコレも気にするなよ!! これも鍛錬、そう!! 鍛錬だから!!」

「んな無茶苦茶な……」

束はそんな風に言いながら更にキツく俺に抱きついてくるんだけど慣れないから正直やめて欲しい。

……いや、これも束の言う通り稽古の一環かもしれない、心頭滅却すりやなんとやらつていうし、なるほどコレも精神訓練なんだな!!

「よし分かった、束がそのつもりなら俺もそれに甘えるぞ!!」

「……へっ?」

「足腰もそうだけど腕力も必要だよな? 相手の力を受け流すだけなら力要らないけど、男としてはあつた方がいいに決まってる」

「う、うん、まあ、そうだろうね」

「てな訳で束、お姫様だっこだっけ? アレやるから一旦降りてね?」

「……いやいや、えっ?」

そう言つて俺は束を降ろして腰と膝裏に腕を入れる様にして抱き上げたんだけど確かにコレは腕に来る、というか女の子とはいえやっぱり重いな。

口に出したら絶対ブン殴られるから意地でも黙つてるけど一段一段と階段登るのがキツイ、しかも抱っこした束が急に黙り込んだもんだから会話で辛いのを誤魔化す事も出来ない、あれー? もう少し束は怒ると思つたんだけど?

結局登りきるまで束は借りて来た猫見たいに大人しくなつてた、やっぱ女の子だからこーいうの懂れるのかな。

「はあ、はあ、の、登り終わったぞ束……」

「……うん」

「追加の往復は……はあ、無しで、はあ、いいよな?」

「……うん」

「えっと、束?」

腕の中の束はぼけーとした顔で惚けてる、何回か呼びかけても返事が曖昧だし、よっぽど気に入ったのかな? 今度千冬にも試して――

「ちーちゃんはほら、あんまりこういうのは柄じゃないから多分気に入らないんじゃないかな?」

「そうかなあ? 案外気に入りそうだけど……」

「ああ見えてちーちゃんは古風だからね、やるのは私だけにしとけよ?」

「うーん、まあ束がそう言うなら……」

「じゃあ次からコレでやるからヨロシク」

「へっ?」

その言葉に俺がぽかーんとしてしまい、束を降ろし忘れたのを箒ちゃんに見つかってしまう。

んで、悲しい事に箒ちゃんは俺と束がお姫様ごっこして遊んでると勘違いして俺に抱っこをせがんで泣き始めた。

………こうなったら俺がやれるのはただ一つ、諦めて箒ちゃんを抱っこして階段を往復する事だけ。

結局、俺は箒ちゃんが満足するまで階段の往復を繰り返すのだった。

今日は学校で男友達とロボットの話で盛り上がったんだけど、途中から変形する機体か合体する機体のどっちがカッコいいかとか、格闘オンリーの機体か射撃重視の機体のどっちがいいかとか、超火力ゴリ押しと超弾幕ゴリ押しのとっちが好きかとかで話が割れて決着が付かなかった。

んで、その話を帰り道で千冬と束にしたら思った以上にこっちでも話が割れた、主に俺と束が。

「だーかーら!! そんなに武装もりもり積んでも使い物にならないだろ!! 究極的にライフル一つと近接武器、後は軽くて運動性の高い機体の方が絶対に強いんだって!!」

「はあ? なーに言ってるんの束さん? 両手にガトリング、全身にミサイルで画面埋め尽くすレベルでどんぱちやる機体の方がカッコいいっての!!」

「そんなの流れ弾一発で大爆発起こすだろ!? そもそも弾薬の重さで機動性も運動性も死ぬし、装甲も薄くなってたただの的になるって!!」
「お前はなんでそう現実的に考えるんだよ!! ロマンが大事なロマンが!! なあ千冬?」

「現実で乗りたい機体はどんな機体かって聞いたのは君でしょ!? ロマンだけの機体は観賞用にしかないっての!! ねえちーちゃん?」

「……いや、そもそも射撃兵器は必要なのか? 近接武器一つで充分だと思うんだが」

俺と束がお互いの意見に対する同意を求めただけど、静かに話を聞いていた千冬は少し考えながら格闘一本宣言をして来た。

まさかの第三意見、いや確かにそれは俺もロマンを感じるよ? けどどっちかってーとバカバカ撃ちまくって敵を倒す様な機体の方が

好きなんだよなあ。

けど千冬の見解は束側かあ、考えたら対戦ゲームでも千冬は格闘機しか使わないし、当然っちゃ当然か？

「ぐぬぬ、二対一じゃ分が悪いか？」

「ふっふーん、やっぱちーちゃんは分かっているねえ、無駄な武装を付けるよりも最低限の装備で確実に相手を倒す事が重要だよなー」

「千冬の裏切り者め……」

「そこまで言う事か？ 別に私はお前の気持ちも分からなくはないが……まあ射撃兵器の好みなら一撃で何もかも決着を付けられる火力がある方が良いな」

「えつとサテライトキャノンとかバスターライフルとかか？」

「そうだな、付け加えるならビームサーベルも高出力の物がいい、加速性能も直線だけで構わないから可能な限り高速な方が好みだな」

「ち、ちーちゃん？ どんな機体に乗りたいかって話だよ？ そんなエネルギー管理ガン無視な機体は堅実性通り越してロマン機体だよ!？」

「可変機構を持っていればなお良いな、飛行形態から高速で接近して変形からの斬撃、その後再変形して離脱、私が現実で乗ってみたい機体としてはそんなところか」

「なんつーロマン機体、千冬も案外拘りがあるんだなあ」

「ああ、誰かさんが遊びに来る度にその手のゲームやアニメを置いて行くからな、すっかり私もお前好みに染められてしまったよ」

そう言つて千冬は何時もの様にクールな笑みを浮かべたけど、最後の一言が照れくさかったのか少ししてから早足で俺たちの間を抜けて行った。

いや、でも流石の俺もそんな癖のあり過ぎる機体に乗りたいとは思わないんだけどなあ。

「ねえ、お前もしかしてちーちゃんを自分好みの女の子にして将来

自分のお嫁さんにしようとか考えてんじやないだろうね?」

「はえ? うーん、千冬がお嫁さんかあ……」

束から予想外の事を言われて想像してみたけれど、結婚生活そのものが思い浮かばないからイマイチ良い返事が出来なかった。

「ま、君はそんな事が出来る様な人じゃないのは分かってるよ、多分ちーちゃんが純粹過ぎるだけだね」

「千冬って割と俺の冗談鵜呑みにする時あるしなあ」

たまーになんも考えずに口にした言葉を信じるし、意外に千冬は天然なところあるんだよな。

そんな事を考えながら俺は途中の交差点で束と別れた後、早足で歩く千冬を追いかけて肩を叩いて横に並ぶ。

「珍しく早足じゃんか、さっきの一言がそんな恥ずかしかつたのか?」

「わ、分かっているならわざわざ口にしなくても良いだろう!」 まったく、お前という奴は!!」

「ええ……俺別になんもしてなくね?」

千冬は束の様にふいつと顔を背けたけど、俺が横に来たら早足をやめてちやんと歩調を合わせてくれた。この辺りはやっぱ束とそっくりだなあ。

その後は特に変わった事も無く、何時もの様に俺が好きのように好きな事を喋って千冬がそれを聞くって感じで普段通りの帰り道だった。

けど千冬と結婚かあ……別に嫌って訳じゃないし、寧ろ気恥ずかしいのと嬉しいのが入り混じったような感じだけど、束でも同じ気持ちになるからなあ、自分の感情なのによく分かんねーや。

そんな風に色々考えながら俺は家に帰るのだった。

ある日の昼休みに俺は東と千冬に向かって親父に教えてもらったトランプマジックを披露してただけど、何一つ成功しなかった。とうかこの二人相手だと種も仕掛けも丸裸にされてカードを捲る前にオチと手順を言われるからどうしようも無い。

そんな落ち込む俺を見かねたのか、バツの悪そうな顔をした千冬が俺にトランプを差し出した。

「……一度カードをシャッフルしてくれないか？」

「えっ？ まあ別にいいけど……」

言われるままシャッフルをしてただけど、混ぜり方が甘い気がして覚えたてのショットガンシャッフルで混ぜて行く。本当は別の名前らしいけどカツコイイよな、ショットガンシャッフルって。

「やはり使ったか……」

「ん？ どーかした？」

「何でもない、上から何番目でもいいから捲ってみろ」

「じゃあ取り敢えず真ん中で」

「当てるやろう、それはハートの6だ」

俺がカードを確認する前に千冬はそう宣言し、実際に見てみたら確かにカードはハートの6だった。これもマジックか何かなのかな？

「私も当てるやろうか？ カードの上からスペードの5ダイヤのQ
スペードのJ——」

頬杖をついて暇そうにしてた東が付け加えるようにシャッフルされたトランプを次々と当てて行く、すっげえな二人共。

最後の一枚までキツチリ当てた東は『私とちーちゃんクラスだと、

カードの絵柄が見えるシャツフルじや順番丸暗記できるから何の意味も無いんだよ』と不機嫌そうに俺から目を逸らして言った。

その声の感じから若干の不安を感じた俺は束が何を考えてるのかをちよつと考えてみたけど、多分俺の見る目が変わるのが怖いとかそんなありきたりな事しか思い浮かばない。

千冬も千冬で気まずそうな顔してるし、俺ってコイツらにそんな薄情な人間に見られてんのかな？ ちよつとシヨック。

取り敢えずそのシヨックの腹いせに、新しく買って貰った扇子で二人の頭を一発づつ叩こうとしたんだけど、完全に視線切ってたはずなのに普通に避けられた、コレが気配を察知するって奴か……。

「すげーな二人とも、不意打ちだったと思うんだけど……」

「す、すまん、つい避けてしまった」

「なに？ 私たちに対する腹いせ？」

「ええ、俺ってそんな奴に見える？」

これ見よがしに肩を落として二人にそう言いながら、俺は扇子を閉じたり広げたりして空振りを誤魔化しつつどう言ったら良いのかを頭の中で纏めて行く。

束や千冬を知ってる年上の友達とかと遊んでると、偶に二人に嫉妬しないのかと聞かれる時がある。

その人はスポーツ少年団に入っていて剣道を習ってたらしいんだけど、年下の千冬に手も足も出なかった事がきっかけで剣道を辞めてしまったそうだ。

随分仲良くなつてからそんな風に話してくれたんだけど、俺は特に二人に対して……というよりも他人に対してあんまりそんな感情を感じた事がないんだよなあ。

自分に出来る事と出来ない事、それがあってはきつと誰にとっても当たり前の事で色んな人が居るんだからその数だけ嫉妬をしても辛いだけだと思う。

確かに俺も束や千冬に勉強と剣術を教えて貰ったりしてるし、二人

には簡単に出来る事が自分には出来ないなんて事もしよっちゅうある、今のこのマジックみたいに。

けど、だからってそれが原因でその人を嫌ったり避けたりするのは間違ってるんじゃないだろうか？ 自分への情け無さを向けて良いのはやっぱり自分だけだ、少なくとも俺はそう考えてる。

じゃないと友達の中に上下関係を作って溝が出来るんじゃないかな、この人は俺よりアレが出来ないとかこの人は俺よりコレが上手だとか、そんなのを一々気にしてたら最後は絶対ひとりぼっちじゃないか。

それは嫌だ、一人は寂しいし悲しい、誰かと一緒に居て騒いだり笑ったりしてる方がずっとずっと幸せだ、親父だつて似たような考えだから沢山友達が居るし、そのおかげでよく分からない仕事だけど繁盛はしてる。

だから俺は友達に嫉妬しない、天才でも馬鹿でも相手を真っ直ぐに見て友達になつてる、束に言ったらきつと『綺麗事並べるなよ』とか言つて怒らせるだろうけどこれは俺の中で決めた絶対だ。

でもそれは俺の中で決めてるルールだから他人に押し付ける物じゃない、俺には俺の考えがあるし束や千冬、それにそれ以外の人にも人を好きになる理由嫌いになる理由がある訳だから、年上の先輩の様に束や千冬の才能に嫉妬してるから嫌うつても分かる。

人となりを知らないで勝手な事ばかり言ってる人には腹が立つけど、それを知つてもダメって人に無理に理解しろつても無理だ。

でも少なくとも俺は何があつても二人の友達でいたいし、友達でいづづけるつもりなんだけど、難しい事考え過ぎてなんて言やいいか分かなくなつちまった。

まあいいや、素直に言つとけば一番!! 複雑な事より単純な方が分かりやすいしね!!

「てな訳で、俺は二人が好きだからお前らが俺を嫌いにならない内は何があつても友達だし、何やつても友達だからな？ 今更これくらいで嫌いにならないって」

そんな風に二人に笑いかけながら言ったんだけど、二人ともだんまり決め込んで返事がなかった、何故に？

秋の長雨って言葉がある様に今日は朝から曇り空、道場に行く時も冷たい秋風が吹いて一足早く冬が来たような気分だ。

まあそれも稽古が始まるまでで、一回体を動かし始めたら丁度良い感じに暖かくなるし、道場に着いたら胴着に着替えるんで寒さにも慣れる。

……だけどねお空さん？ 曇りだからって雨降らさなくてもいいと思うんだ、俺。

「うへえ、土砂降りってほどじゃないけど結構降ってんなあ」

「天気予報では夜まではもつと言ってたんだがな……」

「あれ？もしかして千冬傘忘れた？」

「丁度先週普段使ってた折り畳み傘がダメになってな、仕方ないから師範から傘を借りよう」

「んーでもそれだと返すの面倒だろ？ 稽古の時に持つてくるとしても手荷物だと思うぞ？ それなら俺の傘と一緒に入るか？ 丁度折り畳み傘持ってきてるし」

俺の傘は結構広めだから千冬と二人で入る分には問題無い、それに傘を借りるにしたって俺達以外にも傘を忘れた奴はいる訳だから足りるか分かんないしね。

それなら帰り道が一緒の俺と帰った方が早いと思う、多少は濡れるかもしれないけど千冬側に傘を傾けたら俺はともかく千冬が風邪引いたら大変だ。

俺はその時何も考えずにそんな事を言ったし、千冬も何も考えずに頷いたんだけど、いぎ二人で並んで傘に入っていると妙に会話が弾まない。

いや、別に話す事がない訳じゃないんだけどさ、女の子と一緒にの傘に入って歩幅合わせながら歩くってした事なかったから変に緊張する。

「な、なあ千冬?」

「ん? どうした?」

「その、今日はちよつと寒いよなあつて」

わーい俺の馬鹿!! これは会話が続かない話題じゃんか、無言でとこと歩くのも嫌いじゃないけど今は別、何か色々喋つて気を紛らわしたい。

「……寒いのか?」

「えっ? ああ、うん。雨まで降つて来たしな、今日も冬並みの気温だつてテレビで言つてたし、寒いよ寒いよ?」

「そうか、ならこうすればどうだ?」

そう言つて千冬は俺の腕に抱き付いて来た。

「さりげないつもりだろうが、私の方に傘を傾けてるのは分かつてる、それでお前が風邪をひいたらどうするんだ?」

「いやまあそれはその……」

「だからこうやつて密着すれば良い、そうすればお互いギリギリ傘の内側には入れる」

「お、俺は良いんだけどさ? 千冬はこれ、恥ずかしく無いのか?」

「……………恥ずかしいに、決まつてるだろう?」

ぎゅつと腕に抱き付く力を強くした千冬は流石に照れ臭いのか、顔を赤くしながら俺から目を逸らしてそう漏らした。

それに対する上手い返しが出てこなかった俺はそのまま暫く歩き続けてたんだけど、一緒に歩幅で歩いてるから常に隣には千冬が居るし、出来るだけ身体を近くに寄せたいのか俺の肩に頭も預けてるから耳元で微かに息使いが聞こえたり、いい匂いがしたりで心臓がバクバクして痛い、こんな時どうしたらいいんだろう?」

暫く無言のまま二人並んで歩いてたんだけど、横断歩道の信号待ちをしてる時に俺の表情から色々考えてる事を察したのか、千冬の方から話しかけてくれた。

「無理に話さなくてもいい」

「えっ？ でも帰り道は色々話した方が楽しいだろ？」

「確かにお前と話していると楽しいが、今日はこのままの方がいい」
「……この状態？ それともこの状況？」

「両方、だな。少なくとも私は今のこの現状で満足している、何故だか分からないがこうしていると不思議と心が温かくなるんだ」

「そっか、じゃあ少し静かにするよ」

ちよつと恥ずかしいけど千冬がそう言うならと、俺はその提案に乗って黙ったまま千冬の家に向かう。

雨音と足元のちゃぷちゃぷする音の二つしか聞こえなくなったけど、落ち着いてしまったら不思議と心臓のバクバクが収まった。

時々千冬から俺の顔を伺うような感じでチラチラ見られるけれど、特に気にする事無く歩き続けてたらいつの間にか千冬の家だった。

こつからは自分家も近いからダッシュで帰ってあったまるつもりだったけど、『せっかくだから暖かい物でも飲んでいけ』と千冬に誘われたから有り難く家に上げて貰う。

「お邪魔しまーす」

「にーちゃん？」

「ぼんじゅーる一夏くん!! 元気かい？」

「うん!!」

出迎えてくれた一夏くんに挨拶をしつつ、俺は千冬の部屋でこの間貸したアニメのDVDを再生してちよつと待ってたんだけど、OPが終わった辺りで千冬がココアを持って来た。

流石に何回か作ってるから今回は大丈夫、前は味が妙に薄かった

り、逆に底に残るくらい濃かったりしたからなあ、ちよつとだけホツとしてる。

不思議と一夏くんが増えると帰り道みたいな緊張感のある沈黙は引っ込み、普段の通り色々な話やおもちゃのピアノを使った簡単な演奏をしたりして三人で楽しく遊ぶ事が出来た。

……でも、偶にはこんな日もいいかな？

幕間：戦乙女から見た彼 2

——彼とは定期的に実践的な打ち合いを行なっている、稽古のついでに竹刀の振り方を教えるつもりで始めた試合なのだが、最近も真剣にやらなければ危うくなってきた。

竹刀を正眼に構えてすり足で対峙している彼へにじり寄る、攻めっ気を見せるとそれを急かす様にぬるりと間合いに入つて来る男だから、下手に動くとリズムと呼吸を乱される。

私の警戒するようなその動きに彼は微動だにせず、腕を伸ばすように真っ直ぐ右手の竹刀を私に向けてこちらの出方を伺っているようだ。

彼の剣は一応は完全な受けの型、こちらから攻めなければ手を出しては来ないんだが、それでは既にその術中に入っている。

対峙している双方が傷付かなければ百点満点だと言いつ切る男だ、このまま攻めっ気を出さずに攻めあぐねているとリズムを読まれた挙句に反応出来ないタイミングで距離を詰められ、手元から竹刀を取り上げられてしまう。

あまりに自然に、かつ最適なタイミングで接近してくるものだから以前危うく懐に踏み込まれて竹刀を奪われるところだった。

彼の相手の懐へ飛び込む技術は実のところ一級品だ、束すらその技術に関しては何も出していない。

隠れた才能と言うほど大袈裟な物では無いが、アレは彼自身の人を見る目による技術なので私や束では逆立ちをしたところで不可能だろう、いや彼ほど人の表情や仕草を見てきている人は他にはいないだろうから、彼だけが使える技術なのかもしれない。

つまり彼と剣を交えるのなら下手な待ちよりも踏み込んで行った方が楽なんだが……それも最近では難しくなってきた。

そんな風に考えていると床の軋む音が耳に入ってくる、それは彼の

足元から聞こえた音であり、今まさにこちらに踏み込んで来ようとするところだったらしい。

タイミングを見誤ったかと思ひ私は突きを放ったのだが、彼の踏み込みはフリだったらしく、私の刺突はギリギリで空振りさせられる。

だがまだ二の太刀で斬りかかれれば届く範囲、その為に突き出した竹刀を引こうとしたのだが、私の竹刀の切っ先を彼は弾き上げて来た。

そのまま彼は扇子で私の頭を叩こうとしたが、私としてもそう簡単にやられてやる訳にいかないので、竹刀に釣られて両手を上げた状態ながらも、足に力を入れて彼の頭の上を跳び越える。

くるりと弧を描く様にその頭上を越えると、片手で着地すると同時に倒立前転の要領で転がりながら立ち上がると、振り返りざまに一閃、首筋に切っ先を当てる事で彼に両手を挙げさせた。

「まいったこーさんこーさん、千冬って実は忍者か何かなんじゃないか?」

「なに、あんなものは所詮曲芸だ、練習すればお前でも出来る」

「そうかあ? 俺ただ練習しても一生無理だと思っただけだ……」

「現に私がやってるじゃないか」

「えっ? 千冬ってあんな動き練習してたの?」

「いや? 今さっき思い付いて実行したのが初めてだな、お前の場合あそこで横や後ろに引いたら足元に竹刀を差し込まれて転ばされるだろう?」

「あ、あはは、そんなことしないヨ?」

「私の目を見て言え、露骨に目を逸らせばそうですと言ってるようなものだ」

はあとため息を吐きながら私はタオルで汗を拭いている途中ふと、彼は私に汗をかかせる程度には成長したのだなと思ひなんだか嬉しくなってしまうた。

かつてに私を師匠と呼びながら道場まで上がり込んで来たあの素

人が随分強くなった、正直まだ本気を出せば彼が何かする前に打ちのめす事は出来るが、それでも手抜きで打ち合うには手強い。

本人は自分の成長にあまり頓着していないのか、先程までの真剣味は何処へやら、呑気にパタパタと扇子を扇いで涼んでるのがなんとも言えないギャップだろう。

「ん？ 俺の顔になんか付いてる？」

「何も付いてはいない、単に顔が見たかっただけだ」

「……照れるからあんまそんな事言わないで欲しいかなあ」

「それはそのままお前に返してやろう、普段から私や東に言ってるのはお前の方だぞ？」

「ならしゃーないな、うん」

彼は柔らかな笑顔を浮かべながらそんな風に身を竦める、茶目つ気のある奴だと私も釣られて笑い、それがなんだかおかしくて意味も無く二人で笑いあってしまった。

そしてひとしきり笑った後、ふと思いついたように私は以前から感じていた彼の剣に対する疑問を口にする。

「お前の剣は不思議だな」

「えっどこが？」

「完全な受けの剣かと思えば懐に跳び込む技術は一級品、更に敢えて攻め込む姿勢を見せて相手の呼吸やリズムを崩し、自分のペースに巻き込む事も得意としてる、タイプとしては攻めの剣の方が得意だろうか？ そちらも学べばもつと強くなれるんじゃないか？」

「あはは、それはそうかもだけど俺はパスかなあ」

「そうか……残念だな」

「そもそも人に手をあげるのは苦手だからなあ、相手の隙を作って斬るんじゃ無くて抑える為に隙を作ってる訳だから、目的が違うんだよねー」

「いや、お前はそれでいい」

そう、実の所私は疑問を口にしたが、彼がそう答えるだろうと何となく予想していた。

予想していて尚聞いたのは彼の優しさに触れたかったのかもしれない、この綺麗な理想を大真面目に追う男の優しさは心地良いからな。

「さてそろそろ休憩は終わりだ、二試合目に行くぞ？」

「よし来た!! 次こそ一本取ってやる!!」

「ああ、是非取ってくれよ？」

——いつの日か、本当に取ってくれるといいな。

そんな風に私は思いながら、再び彼と竹刀を交えるのだった。

——冬と言えば寒い、寒いと言えば雪、雪と言えばもちろん雪合戦だ。

「てな訳で暇か束？」

『……昨日の雪が積もってるからどーせ掛けてくると思ってた用意してる、君の事だから雪合戦でもする気なんですよ？』

思い付いたら即実行、取り敢えず電話したら大体出てくれる束に連絡したんだけど、正解だったみたい。こう言うのってアレだっけ、以心伝心？

「当然だろー？　じゃあ10時に公園集合な？　他の奴らにも声掛けとくから」

『はいはい、わかっ……今他の奴らって言った？』

「えっ？　ダメなの？」

『ちーちゃんといっくんだけでいいじゃん』

「んー、それでもいいんだけどさあ。お前と千冬の二人だけだと雪合戦が俺を雪達磨にする作業になるじゃん、去年の冬の事忘れてねーからな？」

去年にも雪が積もったから雪合戦したんだけど、千冬と束が俺しか狙わなかったから実質4対1になって散々な目に遭った。

まあちびっ子二人に雪玉当てるのはかわいそうだから別にいいんだけど、千冬と束に関しては投げて当てるはかえりねえしあの二人は的確に俺に雪玉ぶち当てて来るからなあ。

『あ、あの時は……ほら、箒ちゃんの前だったし？　ちよーつとカツコつけようとか考えてただけだから』

「別に怒ってないって、それよりやっぱ他の奴居るとイヤか？」

東は人付き合いが苦手だから予想してたことだけど、俺的にはこう言ったワイワイ騒ぐ遊びは大人数でやった方が楽しいんだよなあ。

かと言って他人に苦手意識のある東を無理に引つ張り出すのも俺の考えを押し付けてる見たいであんまり好きじゃない、だから別に東が嫌だつて言うなら別の遊びも考えるんだけど、今日はちよつと予想外な返事が帰って来た。

『……君と一緒にのチームなら、別に他の奴と一緒にでもいい、君がどーしても私と遊びたいって言うならだけど』

「マジで!? やった!! じゃあ10時に公園集合だからな!!」

正直断られると思ってたから予想外に嬉しかった、遊びの誘いをしてもしらない奴と一緒にだとすぐに断られるし、遊びに来ててもそのまま帰っちゃうからまさかの展開過ぎて正直居ても立っても居られない。

勿論千冬にも電話を掛けて雪合戦に誘う、折角東がOKしてくれたのだからせめて知ってる人も誘つとかないと可哀想だし。

てな訳で都合の付く人全員に連絡して面子を集めた俺は、真っ先に公園に行つて地面に線引きをしながら陣地分けをして皆んなを待つてたら意外にも一番先に来たのは東と箒ちゃんだった。

「よー東!! マジで来てくれたんだ、あんがとな!! 箒ちゃんもおはろー」

「べつにつにー? 私はただ気が向いたから君の誘いに乗ってあげただけだし? そもそも君がどーしてもって言うから仕方なく来ただけだから、後箒ちゃんに変な挨拶教えんなよ」

「おう!! 俺はどーしても東と遊びたかった!!」

そう言つて俺は東の手を掴み、ブンブンと振りながら勢いあまつてそんな風に詰め寄つた。

「ふ、ふーん？ それじゃあしようがないから我慢してあげる、君はどーしても私と遊びたいんだもんね!! どーしてもこの束さんと!! だから渋々付き合っただけ、感謝しろよ」

ふいつと顔を反らしながらそんな事を言う束、腰に手を当てながら俺の額に指を突き付けるおまけ付きだったけど、口元が緩むのが抑えられなかった。

束と一緒に他の友達と遊ぶのはちよつとした俺の夢だったからさ、憎まれ口叩きながらも付き合ってくれるのは本当に嬉しい。

そんな風にニヤついた顔を束につっこまれながらも、他の友達が来たところで雪合戦が始まった。

結果？ バランス考えて相手チームに入って貰った千冬が束と投げ合ってる内にお互いノツて来たのか、俺含むその他勢が全滅する事になったよ？

危ないからって応援役に回ってた一夏くんと箒ちゃんの前だから二人とも頑張ったんだろーな、張り合うような感じだったもん。

因みに俺は二人のえらくアクロバットな勝負に挟まれて、前後から雪玉当てられたおかげで去年の様に雪達磨状態だった。

「はあはあ、流石、束だな……」

「それは……はあ、こっちの、セリフだよ、ちーちゃん」

勝負が終わったのは雪合戦が始まって半時間くらい経った時だった。

かなり熱中してみたので二人は肩で息をしてるけれど、何処と無く嬉しそうな顔をしてるから満足してるんだろーな。

取り敢えず俺は喉が渴いてるだろうと思ひ、近くの自販機から温かいお茶を買って二人に渡す。

「ほい二人とも、お疲れ様」

「ああ、すまない」

「ん、あんがと」

お茶を飲みながら休憩する二人を横目に見ながら、俺は早々にやられてちびっこ組と遊んでる連中の所に行き、二回戦の組み分けを相談しに行くのだった。

雪合戦から一週間くらいしたある日、俺は母さんからお使いを頼まれて買い出しに出てただけど、その行き道で少し困った様子の千冬と不安そうに顔を見上げる一夏くんを見つけた。財布でも落としたのかな？

「おーい二人共、どったのー？」

「ああちようどいいところに来てくれた」

声を掛けると駆け足でこっちに来る千冬、何事？と思いつつよくよく見てみると、両手で抱き抱える様にして仔猫を抱いていた。

ぱつと見でわかるほど毛並みは悪くて何より痩せてて元気が無い、今年は今までより寒いって話だから親から逸れた野良猫が弱ってても不思議じゃないけど……。

取り敢えず俺はジャンバーを脱いで仔猫を包みながら、不安そうに一夏くんを落ち着かせて千冬に話を聞くと、どうも散歩してる最中に一夏くんが路地裏で弱ってたこの子を見つけたらしく、取り敢えず抱き上げたものそこからどうしたらいいか分からなくて途方に暮れていたところだったらしい。

「その、この仔猫を助けたくても私には頼れる相手がお前ぐらいしか居ないから正直どうしたらいいか分からなかったんだ……」

「そっか……取り敢えず今から母さんに連絡して動物病院に連れて行って貰うよ」

「にーちゃん、このねこさんだいじよーぶ？」

「うんきつと大丈夫だよ一夏くん」

ジャンバーの上から仔猫を撫でながら携帯から母さんに電話してなんとか動物病院に連れて行く事が出来た。

心配そうだった千冬と一夏くんも一緒に病院へ行ったけれど、暫くお医者さんが診断と治療をしてくれたおかげで仔猫は何とかなったらしい。

「はあ、良かったわね三人共」

「すみませんおばさん……」

「別にいいわよ、それよりこの子の名前を考えなさいな」

「えっ？ ウチで飼うの母さん？」

「何？ 不満なわけ？ 一夏くんが気に入ってる見たいだし、ウチに置いてあげようと思ったただけだけど？ なんならお父さんに言っ
て里親探す？ 一発で里親見つかるわよ、あの人なら」

そう言つて母さんはお医者さんから薬やら何やらの説明を聞きに行っ
ちまった。

確かに親父なら一発だよなあ、俺が思ってる以上に知り合い多いし
世界中に友達居るし。

けど名前……名前かあ……猫に相応しい名前つてなんじやる？
冬に拾ったし雪太郎？ 汚れてて分からなかったけど三毛猫だし、ミ
ケ？ ーでもオスらしいしカッコいい名前の方がいいよなあ。

「よし、今日からコイツはアレキサンドロス大王ニヤン世だ!!」

「待て待て、なんだそのネーミングセンスは!？」

「えっ？ オスだからカツコイイ名前付けただけなだけど？」

横文字だし大王付いてるし、中々立派な猫になりそうな名前だと思
うんだけどなあ、千冬はどーも不満っぽい。

じゃあいい名前あんのかよ的な視線を当ててやると、一瞬きよとん
とした顔をした後、眉間にしわを寄せながら『むむむ……』と悩み始
めてしまった。

「マタタビというのはどうだろうっ？」

「その名前は世界一快樂におぼれやすい猫になると思うんだけど……」

「ならカツオブシはどうだ？ 猫と言えばかつお節だろう？」

「ぜってえ俺より酷えだろそれ!？」

猫の様子が落ち着いた事もあつてか、そんな風にあーでもないこーでもない二人でやんやん騒ぎながら名前決めをしてると、ケージの中でタオルに包まる仔猫を見ていた一夏くんがジーツと寝顔を見ている事に気が付いた。

「どつたの一夏くん？」

「一夏も名前を決めたいのか？」

「このこはねー、みーくんだよー」

そう言つて一夏くんはケージの中を指差したんだけど、どうやらそのタイミングで目が覚めたのか少しだけ猫が顔を上げると、そのまま一夏くんの指先を舐めた。

「ほら!! みーくんはみーくん!!」

「待つんだ一夏くん、その名前にすると今度は料理も改造もOKなトンデモ猫ちゃんになるよ!？」 や、マタタビも大概トンデモだけどき!？」

「同じトンデモなら私のマタタビも問題無いだろう!？」

「いやいや、ダメだつて!! 名前つては重要なんだぞ？ やっぱりここは俺の考えたアレキサンダー大王ニヤン世でだな」

ワイワイと名前を呼んでいた俺と千冬だったが、どうもこの猫は一夏くんの付けたみーくんと言う名前が気に入ったらしく、俺や千冬の名前には全く反応しなかった。

多分何となくでも助けてくれた人つてのが分かるんだろう、雰囲気や警戒心の感じから一夏くんには信頼を置いてるのが見て取れる。

コレは負けたなあ、そんな風に優しい子に成長した一夏くんにはっ
こりしながら、俺は千冬と顔を見合わせて笑うのだった。

——親父の店は一応本屋だ、頼まれ物とか輸入雑貨なんかも色々置いてたりする所為で何屋か分からない事になってっけど。

んで、そんな訳の分からない何でも屋も年に何回かは大掃除をするらしく、今回は俺も掃除を手伝う事になった。

本屋の癖に本が置いてねーなー、とか考えながら片付けしてたらティーカップとか外国の食器とか色々気になる物があったんだけど、そんな中で一個特に気になるのが家庭用プラネタリウムって書かれた箱。

説明書きには星座とかが観れるって書いてあるから束に見せたら喜びそうだなあ、とか考えてただけど値段を見たら三万円くらいしてるので勝手に持ち出せそうに無い。

結局その日は諦めて店の片付けを手伝ったんだけど、別の日に親父がボトルシップを作ってるのを見てたらピーンときた。

——勝手に持ってけないなら作りやいいじゃん!!

「てな訳で!! 手作りのプラネタリウム持って来たぞ束!!」

「急に遊びに来たと思ったら……懐中電灯を厚紙で囲っただけじゃん、どんな訳で作る事になったのさ」

「ん? ボトルシップ」

「違う、もう一個前の段階。それと付き合いが長い私だから理解出来てるけど、その圧縮言語が誰にでも通じると思うなよ?」

「あはは悪りい悪りい、実はこの前親父の店の片付けしてたら家庭用プラネタリウムがあったんだけど、高かったからさー」

「持ってくる訳にもいかないから自作したの? 相変わらず単純てか安直ってか……」

はあ、と束は盛大に溜息を吐きながら部屋の明かりを消すと、手招きしながらカーペットに横たわって俺の持って来た手作りプラネ

タリウムの灯りを付ける。

「なあにこれ？　ただそれっぽく穴空けただけじゃん、実際の星の並びと全然違うし、もーちよつとクオリティ何とかならなかったのかよ」

「えー？　ちゃんと図鑑の上で透かしながら下書き作ったんだけどなあ」

「あそことあそこ、星の位置がズレてるから星座が歪でしょ？　だからそこからずーつと降りたところにあるまた別の星の位置がズレてそこから連鎖的に全体がズレる、まあ手作りだし？　そこまで精密なのは期待してなかったけど楽しむ分にはいいんじゃない？　所々頑張りが見えるし」

そう言つて束は立ち上がつて部屋の電気を付けると、勉強机の引き出しの中から黒い厚紙を取り出してその内の何枚かをこっちに持つてくる。

なんとなく先が読めたけど、取り敢えず何するのか聞いて見たら『どーせこの後の事なんにも考え無いんでしょ？　だったら今から本格的な配置のプラネタリウム作るからそれ手伝えよ、君でも居ないよりはマシだからさ』つて言われた。

来客用のテーブルの上に工作道具を並べながら早く座れよ的な視線を飛ばしてくる束、えらい張り切りようだから箒ちゃんに見せる気なんだろうなあ。

そんな風に思いながら束の付けた印の通りに穴を開けてると、作業に夢中だった束がふと思ひ出したように顔を顔を上げた。

「そういえばさ、おじさんつてちよくちよく海外に行つてたよね？　確か頼まれ物のアンティーク探しとかで」

「うん、今月の頭もフランスに行つてたっけ」

「また隕石とか拾つて来てない？　アフリカとかこつそり行つてたりとかしてない？」

「お前は俺の親父を隕石ハンターと勘違いしてね？」

「おじさんの人脈ならギベオン隕石でもドファール隕石でも実物持って来れそうじゃん」

「え、何その隕石？ 隕石は隕石だろ？ 種類なんてあったんだな」

「ま、普通はそうだろうね。 丁度良い機会だからこの東さんが特別に個人授業してやるよ、有り難く思うんだね」

ふふん、と胸を張ってそんな風に言う東、宇宙に関する知識や雑学を語る時は凄く嬉しそうなので、何時も大人しく聞いているんだけど、内容が難しくくてほとんどちんぷんかんぷんなのが残念だ。俺ももう少し東の話に着いてける様に勉強した方が良いのかなあ？

一応星座の話とか彗星の逸話とかの雑学みたいな部分なら大分覚えただけど、それこそ専門用語満載の話とかされたら完全にお手上げ、話聞くのは好きなんだけどね。

「何考え込んでんのさ、私の話が半分も理解出来ないのは何時もの事でしょ？ 変な事考えてないで大人しく聞いてりゃいいんだよ、君は」

「んー、でもさあ？ 俺も多少はそーゆー話出来たらお前も楽しいんじゃない？」

「別にいいよ、私は君にそう言うの求めて無いし。ただこうやって私の話を聞いてくれるだけで充分だから」

顔を逸らして手をひらひらさせながらそんな風に言う東、何と無くその表情からは嫌味とか馬鹿にした様なのは感じなかった、多分本心なんだろう。

東が別に今のままでもいいってんなら無理して知識詰め込む必要は無いかなあ、にわか知識で話合わせてもあんまり会話は膨らまないし。

そもそも東に頼んだら分かりやすい様に噛み砕いて教えてくれる

と思うから態々自分で勉強しなくてもいいしな。

——まあでも。

「いつか束とおんなじ目線で色々見れたらいいなあ」

「……………あつそ、まあ期待しないで待つとくよ」

俺の眩きに束は素っ気なく返すと、ちよっただけ嬉しそうに笑いながら工作の続きに入るのだった。

小学四年生 19

今日学校で昔の偉人を調べる授業があったから図書室で適当に色々本を探してただけど、俺でも知ってる人の本を見つけたのでそれを題材にして感想文を書いてただけど、いつの間にか千冬が後ろから覗きこんでた。

「佐々木小次郎か？」

「うん、どんな人かあんまり知らなかったけど必殺技はしってっからなー」

「必殺技？ ああ、燕返しのことか？ だがあれは……」

「ん？ どつたの千冬？」

佐々木小次郎と言えば燕返し、俺でも知ってる事なのに千冬は意外にも少し悩んだ様なそぶりでチラチラと俺の顔を見ている、束に聞けばなんか分かるかもと思っただけど授業が始まってからずっとユーリイ・ガガーリンって人とニール・アームストロングって人の本を読み続けているから何となく邪魔し辛い。 まあでも剣士の事だし態々束に聞かなくても千冬に聞いた方が早いかな？

「てな訳さ、何でそんな顔してんのさ？」

「いや、本人もそうなんだが佐々木小次郎の燕返しは実在したかどうか分からないんだ、折角やる気なところに水を差すかと思っただけしなかったんだが……顔に出ていたか？」

「割と分かりやすく出てたよ？」

「……悪かった」

少しばつの悪そうな感じで指先で頬っぺたを搔く千冬、別に気にしてないんだけどなあ。

取り敢えず横の席に座らせながら色々話を聞くと、燕返しって名前の技があったかどうかはともかくとして、得意技はあるにはあったら

しい。

ただ、あんまり得意技の噂が広まりすぎると対策されてしまうから、わざと嘘を混ぜてたからどれがそれかはわからないとか。

「有力な候補としては虎切刀と言う技だな」

「ツバメよりすげえの切ってるなあ……」

「実際に切ったのかは分かんが、この技は真つ向から刀を振り下ろし、相手が空振りしたと思つたところを股下から顎先まで一気に斬り上げる、丁度こんな風にな」

そう言つて千冬は俺を立たせると、丸めたノートを剣に見立てながら俺の鼻先スレスレをしゃがみ込む様に振り抜き、二の太刀でそのまま立ち上がる勢いを加えながら股下を切り上げた。………俺の股間目掛けて。

当然、そんな事したら男の子の大事な物を引つ叩かれる、運がいいのか悪いのかは分からないけれど、叩かれたのが丸めたノートでほんとは良かった、竹刀だったらどうにかなってる、そんぐらい超痛い。

立つてられないから股間抑えて蹲るしか無かつたんだけど、涙目になりながら千冬を見ると完璧に『やつちやつた……』みたいな顔して固まつてる、俺の股間引つ叩いた衝撃が手に残ってるのか切り上げた体勢のまんまだし。

「す、すまん!! 大丈夫か?! 痛くないか!？」

俺が涙目なのに気が付いたのか、そんな風に声を掛けてはくれたけど、全然大丈夫じゃないしなんなら吐きそうなくらい痛い。

けど千冬が本気で心配した顔してるから頑張つて立ち上がつて大丈夫アピールして何とか落ち着かせた、わざとやった訳じゃ無いし怒る事じゃないからさ。

「と、とりあえず、その、分かったから……」

「……そ、その、どう謝ったらいいのか」

「べ、別に大丈夫、だからそれよりも、他になんか剣術ない？ 型だけでも見てたら気が紛れそうだし」

とは言ったものの、俺の事よりめちやくちやしよんぼりしてる千冬が気の毒だからそっちの気が紛れてほしい、俺怒ってないよー？ 本当に気にしてないよー？

そんな俺のテレパシー的な何かが伝わったのか、千冬は一回深呼吸すると、今度は丸めたノートを右手を中心に高く構えながら一気に振り下ろした。

掛け声みたいなのは上げてなかったんだけど、集中して振り抜いたからか空気が切れた様な雰囲気だった、すっげえな。

「コレが示現流の蜻蛉の構えだ、一撃で一切合切斬り捨てる剛剣なんだが……お前には似合わないな」

「あはは、まあ痛いのも痛くするのも嫌いだしなあ」

「ふふ、そうだな」

「男の子としてはちよつとカッコ悪いけどねー」

「そんな事は無いさ、お前は十分カッコいい男だとも」

千冬は妙に自信満々にそんな事言ったけど、今までそんな事言われた事無いからちよつと恥ずかしい。

「後は……お前なら新陰流の無刀取りが性に合ってるだろうが、それは今似たような事を練習中だったか」

「あつはつは、さては俺がお前から一回も無刀取り出来て無いからつて余裕かましてんな？ 今に見てろよ、絶対お前の手元から竹刀とつちやる」

「ああ、やれるならば是非そうしてくれ、私も取れる様になるまで何度でも付き合つてやるさ」

そんな軽口と一緒に顔を見合わせて笑った後、俺達は授業で提出する感想文の続きを書き始めるのだった。

因みに千冬が調べてた人は幕末の四大人斬りだとか言ってた、なんちゅーぶっそうな……。

あと、先生から賞を貰ったのは束の感想文だった、教室の壁に張り出されてたのを読んだけど、宇宙の憧れとかロマンをめっちゃ書いて、明らかに語り足りないって感じの内容だった。

「うーん、やっぱり間違えたかなあ……」

友達の家からの帰り道、俺は首元のマフラーを弄りながらとぼとぼと歩いていた。

いや別に深い問題じゃないんだけどさ、ウチから持ってきたマフラーがえらく長くて丈が余りまくってるんだよねえ。

昼間はあったかかったから巻いて無かったんだけど、日が暮れてから巻いたら明らかに二人分くらいの長さがあって、首元がゴワゴワしてる。これって頭にも巻くのかな？ うーん寧ろお腹？

使い方が分からないからあれこれやってたら、電気屋から何かを買ってきたっぽい束を見つけた。

「おい束ー!! ちよつといいかい？」

「……………何やってんの、君？」

首と頭にマフラーをぐるぐる巻きにした俺を見た束がいつになく馬鹿を見る目で俺を見てるあたりこの使い方は違うらしい、俺もちよつと思ってた。

とことこと呆れ顔でこつちに来る束にマフラーを渡しながら、なんでこんな長いのか聞いて見たんだけど、『興味無いからしらない』って言う素っ気ない返事しか返って来なかった。

「うーん、束にも分からない事があるんだなあ」

「悪かったな知らなくて!! 誰かさんが昔言ってたんですけど？ 私だって世の中の事ぜんぶ知ってるって訳じゃないって」

「おい、そーいやそんな事言ったなあ、俺てつきり忘れられてるもんだと思ってたぞ？ よく覚えてんなー」

純粹に束の記憶力を褒めたつもりだったんだけど、何故か無言で頬つぺたつねられた、痛い。

『そういうのは思っても言わないもんなの』とか言つてむすつとしながら明後日の方向を見る束、まあ束がそう言うならそうなんだろうな。

「てか結局このマフラーはどう使うんだよ？」

「君みたいなお馬鹿さんの首を絞める道具なんじゃない？」

「家にあつた奴だぞコレ!？」

「んじゃあ、槍として使うんじゃない？ こんな風に」

そう言つて束は俺の手からマフラーを取ると、素早く腕を振つて俺の顔面にマフラーを巻き付けて来た、なーんか似たようなのを前にアニメでみたなあ。

「いわゆる布槍術つて奴だね、マフラーでやるもんじゃないけど」

「やった後で言わないでくんね？ それなりにチクチクして痛いんだけど」

「別にいいじゃん、気にしてないでしょ？」

「まーなー」

別に痛くないし普段のやりとりだからなあ、けど結局マフラーが長い理由が分かんねーな。

そんな事を思いながら巻き付いたマフラーを解いてると、道路を挟んだ向かい側でマフラーを巻いてるカップルが並んで歩いているのが見えた。

お揃いの色だったし仲良しなんだなあと思つてた俺の頭にピーンと閃きが来た、成る程コレはつまりそう使うんだな？

「てな訳で束、ちょっと協力してくれよ、多分使い方が分かったから」

「ん？ 別にいいけど一人じゃダメなのかよ」
「うん、一人じゃダメ」

そう言っただけはまず一回自分にマフラーを巻いて、余った丈を束の首に巻こうとしたんだけど、途中から俺が何しようとしてるのか気付いた見たいで、胸を押されて距離を取られてしまった。

「ちよ、ば、馬鹿!! 人前で何やろうとしてんだよ!?!」

「え？ これ絶対二人で使う奴だろ？ だから俺とお前で使っただけだと思っただけ」

「そんな恥ずかしい真似出来ないってば!! やるならちーちゃんにやれよ!!」

「千冬今居ないだろ馬鹿!!」

「はああああ!! お前今馬鹿って言ったな!? この束さんに面と向かって馬鹿って言ったな!! ぜってーしてやんないからな!!」

「お前さつき協力してくれるって言ったろ!?!」

「あーあー聞こえない、聞こえない」

明らかに聞こえてるのに束は両耳を塞ぎながら聞こえないフリをして逃げ始めた、やつろう……!!

ぜってー捕まえてやる、家遊び派のお前がこの街知り尽くしてる俺に鬼ごっこで勝てると思うなよ!?!

「逃げたなこの野郎、止まれ束え!!」

「べーだ、捕まえられるもんなら捕まえて見ろよ、そしたらマフラーでもなんでも巻いてやるよーだ!!」

器用に後ろを見ながら走る束はあっかんべーをしながらスピードを上げる、まともに走ったら絶対追いつけないと感じた俺は、路地裏とか裏道を利用して束を先回りして待ち受ける。

束の帰り道は分かっているから問題無い、公園の茂みから飛び出す様

にして束の前に立ち塞がった俺は、そのまま飛びかかったんだけど、束はガードレールを蹴って俺の上を飛び越えた。

「ざんねんでしたー!! 君が私を捕まえるなんて十年早いよ!!」

「くっそ、ずるいぞそれ!!」

「へーん、近道して待ち伏せしてる君程じゃないもーん」

「そんなガン逃げしなくてもマフラーぐらい良いだらちくしよー!!」

結局、俺は束が家に帰るまでに捕まえる事が出来ず、ダブルマフラーは経験出来なかった。

仕方ないからまた今度千冬とやろうとか考えながら俺も自分の家に帰ったんだけど、走り回ってる間にマフラーが汚れてたらしく、めっちゃ母さんに叱られるのだった。

幕間：兎から見た彼 2

——お正月、篠ノ之神社はお守りを売ったりおみくじを売ったりと大忙し、そのおかげで遊ぶ暇が全く無い。

毎年の事だから流石にその事態には慣れたけれど、それでも知らない人の相手は疲れる。

だから大晦日は早めに寝る事に決めてたんだけど、ベッドに入った矢先に彼からメールが届いた事に気が付いた。

文面は『まだ起きてる?』と言う簡素なもの、多分彼自身も眠いんだろう、今日は朝から張り切って遊びまわってたらしいし。

『起きてるよ』とだけ返しながら少しでも体を起こして返信を待つ、どーせ寝るまでの無駄話に付き合わされるんだし、一々携帯置く方が面倒だ。

そうしたら『明日初詣』という短文が送られて来た、途中で寝ちゃったんだろう、彼らしいと言えば彼らしいけど。

「つーか寝落ちすんなら時間くらい書けよ、明日私も手伝いがあるから暇じゃないってのにさー」

そんな事をぼやきながら返信をしようと思面を打ち始めたところをやめた、どーせ寝てるから読んでも明日の朝だろうし、時間決めてもその時間に起きれないきや意味ないしね。

あーあ、ほんつと馬鹿みたい、いつつも急なんだからさあ。

——翌朝、私は少しだけ母さん達に無理を言っただけで抜け出させて貰った後、彼の家の前に来ていた。

着替える暇が無いからって理由で巫女服のまんまだけど、その辺りは仕方ない。これもそれもあの馬鹿が人を誘っつといて尻切れトンボのまま終わらせたのが悪いのだ、私のせいじゃないし、なんならこの馬鹿にも罰として雑用させてやろうかな? ……何だかんだ

楽しんでやりそうだし、罰にならないか。

インターフォンを押しておばさんに新年の挨拶を済ませると共に彼を呼び出して貰う、本当はこんな風に態々私から出向く必要は無いんだろうけど、それならそれで誰か別の奴と初詣に来そうでどこか癪だった。

冷えた手を自分の吐息で温めてながら、ふと彼との付き合いももうすぐ四年になるのかと思い、同時になんだか不思議な感覚に見舞われる。

自分で言うのもあれだけど、私はお世辞にも良い性格をしているとは思えない、彼とは違って社交的でも無いし他人に対しては非常に冷酷だ。

初めて会った時かなり酷い事も彼に言った、時には手を上げた事もあった筈なのに彼はそんな事はけろっと忘れて私と遊んだ記憶しか残してない。

何時もニコニコ笑って、こっちの都合など御構い無しに私の手を引くようにしてあちこち連れまわすわ、事あるごとに辞書扱いしてくるわ、ベタベタに頼られてる筈なのに妙に仕方ないと納得してしまう不思議な男の子。

私自身は振り回す側なのに事彼とのやりとりは終始やられっぱなし、ムカつくから少し意地悪を試してみてもちっとも怒りやしない。

一度本気で困らせてやろうかと考えた事があったけど、私は彼の泣いてる顔や困ってる顔を見るよりも何時もの笑顔の方がいいので結局辞めた、アイツは笑ってるのが一番似合うし。

そんな風に彼との付き合いに想いを馳せていると、慌てて着替えたのか少し寝癖が付いたままの彼が玄関から出て来た。

「あけおめー、だけどまだ六時にもなってないのに迎えに来てくれるとは思わなかったなあ」

「私だって暇じゃないんだよ、誘った癖に寝落ちした馬鹿に付き合い合っ

てやるだけありがたいと思えよ」

「おーあんがとなー、後毎回のことだけど巫女服似合ってるな」

「あつそ、ま、東さんは何着ても似合うからとーぜんだけどね」

「よっしや、じゃあ行こうぜ束!!」

そう言つて彼はごくごく当たり前の様に私の手を握つて神社の方まで走つて行く。

剣術を学び出してからは硬くなった手とそこから伝わる彼の体温、運動する様になつたからか身長も伸びてすっかり抜かされてる、今も後ろ頭に寝癖が付いてるくらい抜けてる癖に私の手を引いて走る彼の背中では少しだけ大きく見えた。

———神社に着いて初詣を終わらせた彼は朝ご飯を食べてなかつたのか、我が家のお雑煮を食べてから『んじや、俺これから用事あるからもう行くなー』と言つてあつさり行つてしまふ。

はいはいと手を振つて別れはしたが、あつさりし過ぎてるのはもう少しなんとかならないものだろうか？

確かに私は彼からすれば大勢居る友達の中の一人であつて、特別な個人じやないつてのは理解してるけどさあ……私だつてそれなりに長い付き合いなんだよ？ 彼はもう少しその点を考慮してくれてもいいんじゃないだろうか？ 仮にも幼馴染で気軽に遊びに来れる関係なんだしさあ。

そんな風に繋いでいた手を眺めながら、色々心の中で愚痴つてたら箒ちゃんがトコトコと歩いて来た。

「おねーちゃん、さみしーの?」

「んんー!?! 箒ちゃん? なーんで私がああ馬鹿が居ないだけで寂しがってるって事になるのかな? ベつつにいい? 私はあんな奴居なくても箒ちゃんが居るから全然寂しくないしい? なんなら今日もアイツからの初詣のお誘いなんか受けなくたってよかつたんだけど、せーつかく眠いの押してまで私を誘つたんだから付き合つてあ

げるのが友達でしょ？ だから別に私が新年早々顔を合わせたかったとかそんなんじゃないからね？ 仮にも幼馴染が朝から会いに来てるのにあつさり帰りすぎじゃないとか、そんな事ひとつかけらも考えてないから箒ちゃんの気のせいだよー？ そもそも、そーもーそーもー!! 初詣しに来ただけだから用事があるならさっさと帰るのは当たり前だし、いつまでも居座つても人混みでゴった返してるから結構疲れるのは目に見えてるじゃん？ 早く帰って正解、まあ今日母さんが早上がりさせてくれるって言うてたからアイツがもしも私の事待つてくれたなら、今日一日遊んであげるのも吝かじゃなかったんだけど、だ・け・ど!! さっさと、帰っちゃったなら別に私はそれでもいいしー？」

一息でここまで言った私だったが、途中から箒ちゃんは母さんのところに行つてたらしく『おねーちゃん、おにーちゃんが居なくてさみしいんだってー』と言いふらし回つて居た。

「やめて箒ちゃん!! そんなんじゃないから!!」

そう言つて、誤解を解く為の弁明をして回つた私のお正月は去年よりも忙しくなるのだった。

小学五年生 1

春の陽気、冬の間にはあんまり見れなかった花も色々咲いてて凄く華やかな通学路になった。

道端に生えてたタンポポを一つ摘んで眺めてながら、そーいやたんぽぽ茶つてのがあったよなーと前に他校の友達と話してた事を思い出す。

お茶にして飲めるって事は食べても大丈夫って事だよな？　じやなかったらお茶にはしないし、たんぽぽに当たったって話も聞いた事ないし。

気になつたら直ぐに試するのが俺の主義だから試しに口の中に突っ込んでみたんだけど、なんだろうコレ？　すっごい苦いつてか青臭いつてかそんな感じ、絶対これ食べ方間違えてるよな。

「……………何をしてるんだ？」

「ん？　ひふゆ？　おふあひよー」

「物を口に入れたまま話すな……………」

そー言われても飲み込めねーんだもん、吐きたくてもゴミ箱が無いしさあ。

一応ポケットティッシュは持つてるからそれに吐き出す手もあるんだけど、結局包んだティッシュをポイ捨てする訳にも行かないし。

昔束に教えて貰った様に野菜なら噛んでればその内甘くなるかと思つてさつきからもごもごやつてるけど全然どうにもならない、誰か助けて。

「ちーちゃんおはよー!!　って、このアホなにしてるの？」

「分からん、さつきからずつと何かを食べてるみたいなんだが……………」

「……………来る途中にたんぽぽが一本摘まれてたけどさ、まさかまさかだよな？　流石の私もちよつとこじ付けかなって思つたけどさ、も

しかしてもしかするの?」

完全にアホを見る目で束が俺を見てる、けど悲しい事にそれが正解だから手で丸を作った後、親指を立てて正解アピールしといたけど、束にはめっちゃ不評だったらしい。

「ぼつかだろ!? どーせ食えるかなあ? くらいのノリで食ったんだろ? お前もう少し脊髓反射で生きるの辞めろよ!? 飯にも文明人だろ、未開の地の部族みたいな生活すんなよ!!」

「待て束、コイツも好奇心が旺盛なだけでそこまで考え無しじゃない筈だ、ネットで調べても分からないたんぽぽの味が気になっただけで責める程の事じゃない」

「ちーちゃん!? なんか妙にコイツの肩持つてるけどさ、常識的に考えても道端に生えたたんぽぽを直で食べるのはおかしいと思うよ!」

「束、お前が常識を語るのか!」

「語るよ!? むしろ語っちゃダメなの!? 少なくとも私はたんぽぽ直食いはしないよ!」

「それはそうだが……たんぽぽか」

「ちーちゃん!? 何しげしげとたんぽぽ見てるの? 束さんも流石にツツコミ入れきれないから止めない? ねえちーちゃん? 聞いてる? ねえってば!? たんぽぽ摘まないで? ね? ね? コイツの馬鹿に付き合ったらちーちゃんもおんなじ馬鹿になるよ?」

「……苦い」

「ちーちゃああん!? なーんで食べたの!? 私の話聞いてた? ねえ、何で? コイツの真似しちゃだめだってば!!」

たんぽぽを食べて苦い顔をしてる千冬を揺さぶる束、俺のは苦味の塊みたいな葉っぱが少なかったからまだ良かったけど、千冬が口にしたのはかなり葉が多かった。

顔を顰めるとかそんなレベルじゃなくて顔が青い、そーとー口に合わないんだらう、しかも束の揺さぶりもあるから余計に気分が悪そ

う。あれ？ 千冬吐きそうじゃね？

ヤバイと思って近くのことでも110番の家に言ってピンポンを鳴らしたんだけど、俺も喋れねえ事に気づいて束を呼んだ。

「えっ？ 何？ 私!? 待つて知らない人の家だよね？ 何で私が知らない人と話さなきゃいけないの？ というかそもそも何を話せばいいのさ!!」

「ふおいへふトイありレるふ借ありるふんだけふだから!!」

「何？ トイレ借りろって言ってるの？ 私にそれ言ってるの？ お前ポケットティッシュ持ってんだから一旦それに吐き出せばいいじゃん!! 後でゴミ箱に捨てればさあ!!」

束のツツコミでティッシュを持ってた事を思い出した俺は、一旦口の中のたんぽぽを吐き出してからインターフォン越しに事情を話してトイレを借りた。

水に流せるタイプのティッシュだったからついでに俺の奴も流させてもらったけど、えらい目にあつたなあ。

「そもそもさ!! 野草ってのはちゃんとした知識があつて食べる物だからね？ 今回は何も無かつたから良かったけどたんぽぽに似た毒草とかだつたらどーするんだよ!!」

「す、すまん、つい気になって……」

「分かつた束、次からちゃんと野草の事調べてから食べるわ」

「だああああ!! 私は文字通りの意味で道草食うの止めろって言ってるの!! 寄生虫とかもあるから生で何でもかんでも口にすんなってば!! 終いにははっ倒すよ!?!」

ひと段落した所で流石に心配掛けたのか、かなりヒートアップした束のマシガントーク説教が俺と千冬を襲い、ソレを聞きながら歩いてたら遠くで学校のチャイムまで鳴ってるのが聞こえた。

あーあ、仲良く三人で遅刻だなこりゃ。

小学五年生 2

うちの学校は五年生になると課外授業とかで良く学校の外へ出たりするんだけど、新学期が始まってまず一発目が写生大会だった。

行き先は近くの山、今年は雨が降らなかつたり風の強い日が少なかつたりしたおかげで山桜が満開だったから描いてて凄く気持ちいい。

鉛筆の力加減を調整しながら色の濃淡で桜や他の木を表現したり、遠近法も入れて奥行きを出したりしながら真面目に描いてたんだけど、左肩の上に顎を乗せられた感覚がして鉛筆が止まってしまった。

「君って相変わらず趣味広いよね、鉛筆画も誰かに習ったの？」

「まーなー、就職して引越しちゃったけど近所の美大の人に教えて貰ったんだ」

「ふーん、その割に描くの遅いじゃん。私はもう終わったよ？」

『うりうり』と言いながら束は速攻で描いたっぽい絵を見せてくる、かなり上手なんだけど所々やる気のなさが伝わる手抜きがある辺りらしいっちゃらしい。

チラツと隣の千冬を見ると、束とは反対にめちやくちや真剣な表情をしながら写真見たいに精密な絵を描いてる途中だった。……昔は絵下手だったのになあ。

何となくそんなしみりした気持ちになりながらも、俺の絵をガン見してる束を気にしない様にしながら絵を描き上げて行く。

全体の六割が出来た辺りで今度は右肩に重みを感じたから鉛筆を止めたんだけど、今度は千冬が束の真似をして俺の絵を覗き込んできいていた。

「やはり上手いな、私の絵とは全然違う」

「う、うーん、千冬の絵はもう殆ど写真だもんなあ」

「見たまま描いた通りなんだが……」

「ちーちゃんは見たまんま過ぎるんだよ、もー少しデフォルメ効かせても良いと思うよ?」

「デフォルメか……」

呟く様に自分の絵を見る千冬の横に束は移動して、そのままスケッチブックをめくって新しいページに実演する様にちよつとファンシーな絵を描いて千冬に見せる。

真面目に二人がやりとりしてるのを邪魔するのは悪いから俺は自分の絵に集中して黙々と描き続けてたんだけど、もう一息で完成しそつてタイミングでお腹が鳴った。

今日の授業は弁当持つて来て外で食べるから割と自由にご飯食べられるんだけど、一回描くの中絶すると絵の全体が歪みそうなんだよなあ。

「ん? 何悩んでんのさ、もしかしてお弁当忘れた?」

「そうなのか? それなら私の弁当を分けてやるが……」

「んにゃ、絵が中途半端な出来のところだからこれ途中で切り上げたら今頭の中で出来てる形にはならなさそうでさあ、もし食べるんなら俺の弁当食っちゃつていいよ?」

「えー? 君はそもそも凝り性過ぎるんだよ、多少手抜いたつて良いじゃん」

「それはダメ、全力でやるから何でも話のネタになるんだぜ? 俺がこうやって真剣に絵を描けばさ、同じ様に真剣に絵を描いてる奴の気持ち分かるだろ? そしたらそいつと共通の話題が出来る友達にもなれる、そーゆーことなんだよ、束くん」

「二丁前に君付けすんな馬鹿、何様のつもりなんだよ」

ちよつと茶化す様に束にそう言ったらぼかりと頭を叩かれた、軽い感じだったから普通のツツコミだろうけど、ここで俺様のつもりとか答えたら思っ切り引っ叩かれるんだろうなあ。

と、束とやりとりをしていたところで俺の目の前に唐揚げがにゅつと出て来た。

視界の外から来たから割とびっくりしたけど、よく見たら千冬が箸で唐揚げを掴んで俺の口元に持って来ていただけらしい。

「えっと、千冬？」

「いや、手が離せないのなら食べさせてやればいいと思ってな、ほら口を開けろ」

「あ、あーん？」

言われたままに口を開いたら本当に唐揚げを食べさせてくれた。

しかも保冷剤を巻いてもって来たレモン汁もちゃんと掛けてくれる、俺の好み良く覚えてくれてたなあ。

けど確かにコレなら絵に集中出来るなー、なんて思ってたら今度は左側から卵焼きが出て来た。

位置的に束なので振り返る事無く口に入れたんだけど、卵焼きの次はお米、お浸し、唐揚げ、お米、と言った風に次々口に詰め込まれるから段々と口の中が渋滞してヤバイ。

一旦お茶で流し込もうとしたら左右から水筒の蓋に並々注がれたお茶が突き出されて来た、しかも同時に。

「ほら、口一杯で飲み込めないんだろ？ 束さんのお茶飲めよ」

「私のお茶はよく冷えてる、水を入れた上でタオルを巻いて水筒を保冷して来たからな、だから私のお茶を飲め」

張り合う様に二人はお茶を出し合ってるけど、俺別に自分の水筒持つてゐるからなあ。

そんな事を考えながら自分の水筒のお茶を飲んだら、少し間が空いた後、盛大なため息が二人から聞こえた。

「なーんか張り合ってたのが馬鹿みたい、ねー？ ちーちゃん」

「そうだな……」

「ん？ 何、なんか俺で遊んでたの？」

「ま、そんな所かな？ 君はおちよくりやすいからさー、あつ束さんこのレモン掛かってない唐揚げ貰うね」

「おま、ラス1取るか普通!？」

「別にいいじゃん、食べていいって言ったの君の方だしー？」

ひよいつと最後の唐揚げを持っていった束は悪戯っぽく笑うとそのまま口にする、文句を言われなかった辺り一応束の合格ラインの味らしい、作った側としてはちよつと嬉しい。

「ならば卵焼きを貰うでしょう」

「お、おう、しれつと千冬も持ってたな」

「食べていいんだろう？」

「良いけど……俺が作った奴だからあんまり期待すんなよ？」

「そうか、なら味わって食べるでしょう」

「人の話聞いてた!？」

俺の叫びに千冬も笑いながら宣言通りよく味わって食べてくれた、まあちゃんと美味しいと言う感想もくれたので満足っちゃ満足かなあ。

そんな風に騒ぎながら完成させた絵は自分でも中々の出来で、先生からも褒められるレベルだったので今日の課外授業も最高の一日だった。

小学五年生 3

——最近、我が家のお猫様であるみーくんが丸々と太り始めている気がする。

去年の冬に引き取ってから大体三、四ヶ月くらいだからまだ肥満児って感じじゃ無いんだけど、小さな身体が何処と無く丸みを帯びてる様に見えるんだよなあ、今日もオヤツ食べてるの見てて気が付いたくらいだし、最初が痩せてたからもしかして目の錯覚って奴？

「なあみーくん？ キミ太ったろ？ こうやって持ち上げてみても子猫の割にずんぐりむっくりしてて重たいし」

「なー？」

みーくんへの冗談はともかくとして、マジでみーくんの顔の輪郭とか首回りが丸い、原因は何だろう？

何となく探偵になった気分、折角だから前に雑誌の応募で手に入れたシャーロック・ホームズのコスプレ衣装にでも着替えてみよう。

そう思っただけでクロゼットの中から衣装を取り出して着替えてる時だった、階段を登る音と共にノックも無しに部屋の扉が開けられた。

「——相談したい事ってなに？ 態々私とちーちゃんを呼んでまで話さない……よう？」

「ん？ どうした束、部屋の前で固まって？」

着替えの途中で人が入って来るってのはアニメとか漫画でよくあるけどさ、これって普通男女逆なんじゃ……。ま、まあ良いや取りあえず変な雰囲気は何とかする為にお決まりのセリフを言っとこう。

「いやん」

「そんな下らない事言う前に服着ろ馬鹿!! ちーちゃんだけじゃなくていつくんも箒ちゃんも居るんだぞ!!」

顔を赤くしながら捲し立てつつ思いつきりドアを閉める束、尤もな事を言われたのでさっさと探偵衣装を着替えてみんなを部屋に上げる。

んで、正面に座らせた束達の前に着々とドラえもんに近付いていくみーくんを置いて悩みを打ち明けた。

「という訳で諸君、みーくんのでぶつちよ問題についての捜査を開始したいと思います」

「それはいいんですが……」

「何その口調、キャラ付け？ 全く似合っていないんだけど？」

「いや、探偵服着てるから探偵っぽい感じで行こうと思ったんだけど……ダメだったかなあ」

呑気にみーくんにおヤツをあげてる一夏くと箒ちゃんを脇に置いて置いて、本題の話に移ろうとしたんだけど、その前に千冬がチラチラとみーくんを見てる事に気が付いた。

「ん？ どつたの千冬？ 別にお前もみーくん拾った時に一緒に居たし、実質飼いまみたいなもんだから別に触ってもいいんだよ？」

「そ、そうか？ ならすまん、少し触ってくる」

普段クールな千冬も自分で拾って来た子猫は可愛いらしく、ポケットの中からおやつのおササミを取り出してみーくんに食べさせてる。

「んでさ、束。 見ての通りみーくんが丸くなり始めてるんだけど、原因とか分かんない？」

「はあ？ なんで私があんな猫畜生の事なんか気にしないといけないわけ？」

自分よりも猫に夢中になってる箒ちゃんを見て、みーくんに嫉妬し

てるっぽい束、めちやくちや拗ねた顔してるからこうなったら意地でも協力してくんないだろう。うーん、手詰まりって奴？

捜査が一発で難航してしまったので、腕を組みながら考えてたらみーくんがちよろちよろと束の周りを擦り寄り始めた。

「にやーお」

「寄ってくん、私はお前みたいに他人に媚び売って取り入ろうとする奴が嫌いなんだよ」

しっしと片手でみーくんを追っ払おうとする束だけど、それに構わずみーくんはぐるぐると束の周りを歩き始める。

んで三周目か四周目の時に、束の後ろから出てきたと思ったら何故かおやつ焼きたツオを啜えて出て来た。

ついでに何故か束も顔を赤くしながら目を逸らしてこっちを見てくれない、さっきからなんだか違和感がチラチラあるんだけどなあ……って、おやつ？

「てかさ、みーくん？ 今日お前おやつ貰い過ぎじゃね？」

待て待て、まず俺が学校から帰って来てちゅーるをやっただろ？

次に一夏くんと箒ちゃんがカニカマをあげただろ？ その次に千冬がササミで、束が焼きカツオ。

今日四回も貰ってんじゃない!? しかもこの直前のごはんもしっかり食べてるし、太るのは当たり前だわ。

気が付いてみれば今日集まってるメンバー以外も、俺ん家に遊びに来た人達は何かしらのお土産をみーくんにかけて来てるからしよっちゅー誰かしらから食べ物貰ってる事になる。

箒ちゃん和一夏くんや千冬は勿論、今思い返すと束もよくよく考えたら影で可愛がってた様な気がする、だから太ったんだなあ。

変な病気とかじゃなくてホツとしたけど、実際このままおデブちや

んになったら病気になる可能性はあるし、ダイエットをさせたいんだけど、まだ子猫なんだよね、首輪とリード付けてのお散歩より秘密兵器を使った運動の方が合ってるかな？

そう考えて、俺は二、三日前に買ってきた猫じやらしをリビングから持って来たんだけど、俺が使う前に一夏くんと箒ちゃんに取られてしまう。

ほんとは俺が使いたかったんだけどなーと思いはしたけど、楽しそうに仲良くみーくんと遊んでる二人を見て猫じやらしを諦めた。

「まーいいや、取り敢えずこれにて一件落着いて奴かな？ どー思うワタポンくん？」

「それを言うならワトソン、後この束さんがなんでお前の助手役なんだよ」

扇子を広げながら、そんな風にカツコつけた俺は束のツツコミと共に軽く小突かれるのだった。

小学五年生 4

突然だけど束の髪は長い。

男の俺からしたら手入れが大変だろうなあって感じだけど、趣味と実益を兼ねてるらしいから多分平気なんだろう。

前にも触った事があるけど、俺や親父の髪とは違ってさらっさらなんだよなあ。

「……さつきから何見てんのさ？」

「ん？ 束の髪って長いから色々な髪型試せるだろうなって思ってたさ」

ツインテールだろー？ サイドテールだろー？ 三つ編みなんかも似合いそうだなあ。

母さんは髪短いから絶対出来ないし、他の女子も束ほど伸ばしてる子居ないから、触らせて貰えないかな？

特に三つ編みの編み方を最近知ったから誰かに試したい、千冬に頼んだら一発でやらせてくれるだろうけど、今は先生に頼まれてプリント運んでて居ないからなあ。

「てな訳で束、OK？」

「さつき髪がどうのって言ってたけど、もしかして触りたいの？」

「ダメ？」

「……まあ、好きにしたら？」

どーでも良さげな顔をしながら顔を逸らされたけれども一応OKは貰えたので、遠慮なく束の髪を触ろうとしたら丁度千冬が帰って来た。

「何をしてるんだ？」

「今から髪触らせて貰うところ」

「髪？ ……………束の髪がいいのか？」

「ん？ 髪編んでみたいだけだからなあ」

「なら私が協力しよう、束は気難しいからなあ」

確かに前から髪を伸ばしてるから千冬も大分長い、編んだり結んだりするには十分だけど、束も雰囲気的にはあんまり嫌がってないからなあ。

どーしようか考えてる間に千冬が俺の横の席に座って背中を向けたから、取り敢えず髪を触ってみる。

束と同じくらい伸びた髪、サラサラとした手触りとシャンプーの香りがして流石に女の子って感じだなあ。

千冬の髪を三つ編みにしながらそんな事を考えてた俺だけど、ふと疑問に思った事を聞いてみた。

「なあ千冬、一個聞いても良いか？」

「どうした？」

「いや、昔は髪短かったよな？ 何で伸ばしたんだ？」

「……………髪の長い女がいいんだらう？」

ボソツと呟く様な千冬の返事は束並みに拗ねた感じで、振り向いた視線もジトツとした物だった。

なんか変な事言ったかな？ けど拗ねた顔が束に似た感じだし、多分俺のこの質問が引つかかかってるんだらう。

千冬 of 言葉から考えて昔聞かれた奴かな？ 髪 of 長い女の子の方がいいのかって話。

どんな流れでそんな話になったのかなあと思いついてる最中、ぽんぽんと肩を叩かれたので思わず振り返ったら、ほっぺたに束の指が当てられた。

「…………束さんを放置しないで欲しいんだけど？」

「おー悪い悪い、別に仲間外れにする気じゃなくってさー」

千冬の髪弄ってたから後ろ向きになってたし、会話を途中で切り上げちゃったからなあ。

そう思っただけ振り返りながら束の方を向いたら、今度は千冬に袖を引かれて正面を向かされる。

「私の髪を編んでる最中だろう？ そっちを向いてたらちゃんと編めないぞ？」

「お、おう、そうだな？」

確かに束の方を向いてたら作業の手が止まってた。後ろ向いて話しながら別の作業するような器用な真似は苦手だし、取り敢えず千冬の髪を編んじまおう。

あ、ついでに俺のお洒落用の伊達眼鏡もあるし、そいつも付けてちよつと知的な感じをプラスしてーつと。

「よしOK。さあ次は束の番だな」

「私への感想はどうした？」

「えっ？ んー？ 今までより大人びて美人になったけど、俺は何時もの千冬の方が見慣れてるからやっぱりそっちの方が良いな」

「……そうか」

何か妙に満足した様な感じでそう言った千冬はそれっきり何も言わなかったけど、横で聞いてた束がジトツとした目で俺を見てる。

怒ってるって感じじゃない、けど拗ねてるって言うのも微妙に違う、けど不機嫌な表情なのは分かった。

試しに髪に手を伸ばして手を払われるかどうかで怒り具合を確認してみたけど、触らせてはくれたので約束通り髪を弄ろうと思ったんだけど……三つ編みはもうやっちゃったんだよなあ。

じゃあ他の髪型に……とも考えたけど、どれもこれもしつくり来な

い。

「いつまで触ってんのさ、早いとこ髪弄れよ」

「うーん、やっぱいいや。普段の束が一番可愛いし」

頭の中で色々束の髪型を考えてたんだけどやっぱ普通の髪型が一番似合ってる、特に髪型変える必要が無いから弄る理由もないしなあ。

てか、そんな理由なら千冬も弄る必要は無かったかな？ んー、でも千冬はポニーテールとかも似合いそうだからなあ、クールビューティだし。

つーかさつきから束が何にも言わないんだけど、もしかして恥ずかしかったのかな？ けど可愛い物を可愛いって言うのは悪い事じゃないし、そもそも実際可愛いんだから言われても平気じゃないのかな？

実際面と向かって美人って言った千冬を見たら平気そうにしてるし、なーんでそんな恥ずかしがってんだろ？

「なー束ー？ なんでそんな恥ずかしがってんの？ 実際束は可愛いんだから別に恥ずかしがる事無いじゃん」

「お前さ!! お前さあ!! そーゆーとこだよ!! もういいから、分かったから、黙れってば!! お前だつて面と向かってカッコいいとか言われたら恥ずかしいだろ!？」

「えっ？ 俺カッコいいの?」

「だあああ、もう!! い・い・か・ら・だ・ま・れ!!」

そうやって束は俺を揺さぶりながら怒り始めたけど、恥ずかしさからか顔を赤くして涙目になってるから全然怖くないんだけど、俺の考えが読めたのかその日の束からの言葉の棘が割増になるのだった。

小学五年生 5

最近のアニメは夜遅いのが多いから普段は録画した奴を見てるんだけど、昨日はプラモデルを作ってたから中途半端な時間まで起きていた。

んで寝ようかなあと思ったところで普段見てるアニメが始まる時間になっちゃったからついそれを見ちゃったんだけど、そのせいで滅茶苦茶眠い。

お昼の授業までは頑張ったんだけど、昼ごはん食べてたらお腹一杯になったのとあったかい日差しのダブルコンボで本気でヤバイ。

一応昼休みだから昼寝する時間はあるし、屋上で寝ようかなあ？
んな訳で屋上まで行ったら束と千冬と一緒に飯食ってた、話しかけたいけどそれより眠い。

「てな訳でおやしみ」

「どんな訳だ……」

「まあ朝から眠そうだったし、なんか下らない理由で寝不足なんじゃない？」

「……私の膝で良ければ、枕にするか？」

「うん、あんがと千冬」

お言葉に甘えて千冬の膝を枕にさせて貰って横になる、そーいや膝枕って誰かにした事はあるけどして貰うのは初めてで少し新鮮。

と、そんな事を考えてたけど横になって目を閉じたら一気に眠気が倍増したから、そのまんま寝ようとしたんだけど、妙に視線が刺さる気がする。

チラッと薄く目を開けたら千冬が俺の寝顔をガン見してるみたいで、バッチリ目が合ってしまった。

「あ、あのさ？ 流石に俺も寝顔をマジマジ見られるのはちよつと恥ずかしいんだけど……」

「……いや、私は見ていないぞ?」

「えっ? そんな嘘吐く意味ある!? 今バツチリ目合ってるからね? しかも声が上ずってるし、目も逸らしてんじゃない!」

「きつと寝ぼけてたんだろう? 見ていないと言ったら見ていない」「そ、そうか?」

束がすっごいジト目でこっち見てるけど千冬がそう言うんなら信じよう、うん。

けど寝顔見られるのは恥ずかしいし、一応身体を横向きにして寝ようかな? これなら横顔で済むから見られる寝顔の面積も半分だし。

そんな訳で横になって今度こそ寝ようと思ったんだけど、また眠りそうなタイミングで身体を上向きにされた。

もしかしてと思ってちよーっと目を開けたらまた千冬が俺の寝顔をガン見してるところだった。俺の寝顔ってそんなに見たい顔してんの!?

いやいや、もしかしたら千冬も俺が寝辛いだろうって考えて体上向きにしただけかもだし? 寝顔見てる様な気がするだけで別に何ともなかったりするかもだ。

……けどさ、携帯取り出して寝顔撮影しようとするのはやめてくれない?

「なあ千冬? 顔を見られるくらいならともかく、寝顔撮影されるのはちよつと」

「……すまん」

俺がそう言うのと携帯を仕舞ってくれたけど、なんかもう大分眠気が覚めちゃった。寧ろ目が冴えて仕方ない、中途半端に寝ようとしたからかなあ?

とりあえず起き上がろうとしたんだけど、何故か千冬に体をやんわりと抑えつけられて起き上がれなかった。

膝枕は柔らかいから嫌じゃないんだけどもう眠く無いんだよなあ、

どーしょ？

「千冬さんや、俺はもう眠く無いんだけど……」

「そうか？　だが寝不足なんだろう？　ゆっくり寝たらどうだ？」

「いや、だからもう眠く無いって……」

「それは気の所為だ。どうせ起き上がったらまた眠くなって束の膝を借りる流れになるのは目に見えてる、私の膝だと落ち着かないからって理由でな」

「べつにいいー？　私はそんな風に頼まれても膝なんて貸さないしー？　そもそもその馬鹿が寝不足だろうと私はなーんにも思わないもーん」

ジト目で俺を見たままそんな風に呟く束、千冬が膝枕し始めた辺りから口数も少なくなってるから何となく拗ねてるんだろうなー。

俺に千冬が取られたと思ってるんのかなあ？　別に俺はそんなつもり無いし、束の事も友達だと思ってるから別に仲間外れとかにしないと思うんだけどなあ。

そんな事考えてたらチャイムが鳴り始めたんで、俺も立ち上げられる。

『ふんっ』と言って束もさっさと教室に行こうとしてたから、機嫌を直す為に後ろからハグをしたんだけど、そしたら肘打ちが鳩尾に突き刺さった。

「おまつ!!　いきなり何すんだよ!!」

「いや、ハグって海外じゃ親愛の証って言うじゃん？　だから俺はお前の事仲間外れにしてないよーって言う証拠にさ？」

「だとしても!!　後ろから抱きつくな馬鹿!!　一歩間違えたら痴漢だよ痴漢!!」

「あ、あははは、悪い悪い」

「反省してないだろその顔!!」

「あ、バレた？　まあでも元気出たみたいだし早く行こーぜ？　ほ

「千冬もむすつとしてないで行くぞー」

「そうやって俺は呆れた顔の二人と一緒に自分の教室へと向かうのだった。」

幕間：兎の秘密

——PCの前に座って一体どのぐらい時間が経っただろうか？
気が付けば随分と没頭していたらしく、窓から外を見ると既に日が傾いていた。

考えてみれば今日は休みだと言うのに一歩も外出していない、辛うじてご飯を食べにリビングには降りていたけれど、部屋の中に籠りっぱなしだった様な気がする。

「うーん、形は出来ただけだなあ」

誰に聞かせる訳でもなくそう呟いた私は背筋を伸ばして身体の凝りをほぐし、一旦休憩も兼ねてベランダへと出て沈む夕日を眺める事にした。

アレが沈んで少しすると今度は月が昇り、辺りが暗くなって星空へと変わる、今私が没頭してるのは丁度それに関する事。

まだ名前が決まっていないマルチフォーム・スーツ、理論や基礎設計は大まかに完成したけれどまだそれじゃダメ。

頭の中には完成系があるし、それを作ろうと思えば施設の問題はあれど一人で作り上げる自信もあるが、それでは私以外の人が理解出来ない。

私が理解できて、私がそれを十二分に扱えたとしても他の人が理解出来なければ存在しない物と同じ、個人でやれる事などたかが知れている。

人は未知を恐れ理解の及ばないモノを排斥する生き物、本気で宇宙の果てを目指すのならば、その足掛かりになるこの子は目に見える夢じゃないとダメだ。

彼との些細な会話から夢見るようになった浪漫、それを追い求めるなら個人でなく全体で。

……昔の私なら考えもしなかっただろうけどね？ あーあ、誰かさんの所為なのかなあ。

思考が横に逸れたけど、理論や設計を簡潔に噛み砕いて分かりやすい様に仕上げるのは簡単だ、似たような事を普段からやってるし。

だから今悩んでるのは名前、ようやく完成が見えて来たんだからこの子にも名前を付けてあげないと可哀想だ。

そう考えて既に二時間くらい掛かってるけどまーつたく浮かんできて来ない、自分の夢の結晶なのだから変な名前にはしたくないし、凝り過ぎて何が何だか分からないものにもしたくない。

「星座、惑星、恒星、銀河、うーんこの中からそれっぽいのを充てがう？ なーんかしっくり来ないなあ」

一瞬あの馬鹿に電話しようと思ったけど、みーくんの名前を決める時かなりアレなネーミングセンスしてたらしいし却下。

纏まらない思考で、椅子の背もたれが軋む音を聞きながら名前の候補を絞ってたら、廊下を歩く小さな足音が聞こえて来た。

歩幅と音の軽さ的に箒ちゃんだ、時間的にも夕飯だし私を呼びに来たんだらう。

「おねーちゃん、ごはんだよー？」

「うん、今行くね箒ちゃん」

部屋の中を覗き込む様にして私を呼びに来た箒ちゃん、相変わらず可愛いなあなんて考えてたら、付けっ放しの画面が気になったのかP Cの前に来たんだけど、内容が難しいのか眉を寄せながら困った顔をしてた。

「おねーちゃん、これなーに？」

「これはねー？ おねーちゃんの夢なんだよー？」

「ゆめー？」

「うん、ゆめー？」

こてんと首を傾げる箒ちゃんと目線を合わせてそんな風にこの子の説明をする、といってもまだ完成してないんだけどね？

これで伝わるかな？と思っただけど、『おねーちゃんは起きてるよ？』と不思議そうだった。

「んー、そうだねえ。箒ちゃんはもしもお月様に行けたら何をした
い？」

「おつきさま？」

「そ、夜のお空でぶかぶか浮いてるお月様だよー？」

「わたしはうさぎさんとお餅が付きたい！！ それで、それでね？ い
ちかといっしょにお餅たべるの！！」

「うんうん、やっぱ箒ちゃんは可愛いなあ！！ おねーちゃんもね？」

あのいーっぱいあるお星様を近くでみたいんだ。 それで、これはそ
れをする為の物なんだよー？」

「そうなんだー」

箒ちゃんはある程度納得出来たのか、私の方を見てにぱつと笑った
ので、こつちも笑顔で返しながら頭を撫でる。

無限に広がるこの宇宙の果て、それがどうなってるのかを直接見た
人は居ないし、近隣の星々ですら人類の手が届いている部分は僅か
だ。

しかも大多数の人は宇宙空間は愚か行けて成層圏、そこで擬似的な
宇宙体験をするのが関の山。

地球は広く大きいけれど、その外側に出てしまったら誰も彼も酷く
小さな存在でしか無い、この私ですらも。

—— ああ、そうだ。それこそがこの子を作った理由、狭過ぎる

人の可能性を伸ばす為、無限の未知を探求する為、成層圏までしか人が行けないのなら、成層圏そのものを伸ばしてしまえばいいんだと。

「ねー箒ちゃん、この子の名前知りたい？」

「うん!!」

「あのね？ この子の名前は——」

——
インフィニット・ストラトス
無限の成層圏っていうんだよ？

小学五年生 6

うちの学校は高学年になるとキャンプ体験やスキー体験とかの県外に出る授業がある。

日帰りじゃなくて一泊二日、去年からずっと楽しみにしてた行事だったから、当日はバスに乗ってからも身体がそわそわしててなんだか落ち着かなかった。

「うー、早く着かないかなあ……」

「お前さつきからそわそわし過ぎだったの、もうちよつと落ち着けよ」
「そう言うな束、去年から楽しみにしてたのはお前も知ってるだろう？」

俺の様子を見て通路を挟んだ隣の席に座る束と千冬の声が聞こえて来た。

班分けで別々になったから微妙に席遠いから話し辛いんだよなあ……けど俺の横の子は昨日夜中までゲームやってたからつつて爆睡してるし、前や後ろの人に話しかけようにも身を乗り出さないとダメだから危ない、何とか二人と話せないかな？

千冬は手前に居るからまだ話しやすいけど、束は窓際に座ってるから影になってて中々顔を見て話せそうに無い、一応ガラスの反射越しに時々目が合うから雑談する気はあるみたいだけど。

補助席を使う方法もあるんだけど、危ないからって理由で先生に止められてるしなあ。

しょうがないから雑談は諦めよう、こんな時の為に俺は家から本を持って来てるし。

そう思ってカバンから英会話の本を取り出したんだけど、それを千冬に見られたのか興味深そうにこつちを覗き込んできた。

「……お前は今何を読んでるんだ？」

「えっ？ 何って、英語の本？」

「英語？」

「うん、英語。この前道に迷ってる外人さん見つけたんだけど、俺挨拶くらいしか英語知らないから道案内出来なくてさ、それが悔しくて外国語勉強しようかなあって」

「そっか、動機がお前らしいな」

ふっとクールな笑いを浮かべた千冬の顔を見た俺は、思わず気恥ずかしくなったから読書に集中しようとしたんだけど、その瞬間に束がボソツと呟いた言葉が耳に入って来た。

「——ほんつと、君らしいね。英会話の本と英語で書かれたドイツ語の会話本を間違えるなんてさ」

「えっ!? マジで!? 確かに昨日チラツと見た時に日本語全然書いてねーなって思ってたけど、コレ違うの!?!」

「見た段階で気付けよ馬鹿野郎!! 何お前その違和感スルーしてんだよ!?! 毎度の事だけど私のツツコミ待ちしてんの!?!」

「待て束、辞書を片手に読めば英語を学ぶ事は出来る」

「ちーちゃん!?! 何でもかんでも庇えばいいってもんじゃないよ!?! 着々と馬鹿が移ってない!?!」

「ひっでえいい方だなあ」

なんか前にも似た様な事を言われた様な気がする、いやでも好奇心って重要じゃね? 何でも試さなきゃ始まらないし、今回がちよつとミスっただけで。

「大体さ、お前はその本どこで手に入れたんだよ？」

「あー、親父の店で買った」

「なんて言っただけで買ったのさ……もう何となく読めるけど」

「……私も何となく分かったぞ、束」

「何って……別に普通だよ普通、『英語の本で外国語の奴下さい』って」
「だ・か・ら!!」昔っからずううつと言ってるけどさ!! その圧縮言語やめろっていつてんだろ!? 頭の中で話す内容が完結してっからこう言う事になるんだよ!! そもそも英語も外国語だよ!! てか店の人も良く条件に合致する英語で書かれた外国語の講座本見つけたよね!」

こう言うの堰を切ったようにって言うんだっけ? めちゃくちゃ凄いいでツツコミを入れてくる束、確かに毎回同じ事言われてるけど気を抜くとつい出ちゃうんだよなあ。

席の奥から身を乗り出す様にしてそんな風に捲し立てる束にちよつと千冬が迷惑そうな顔してる。

「おい束、少し落ち着け……」

「落ち着けないってば!! どーせこの後私のところに英語とドイツ語の両方をいっぺんに教わりに来るに決まってるんだから!!」

「えっ? 教えてくんないの!」

「お前もう少し遠慮しろよ!? 私だって年がら年中暇って訳じゃないんだよ!」

「暇じゃ無かったのか束!? 私はてつきり箒と遊ぶぐらいしかやる事無いと思ってたぞ!」

「あるよ!? 私は普通にやる事沢山あんの!! 神楽舞の練習だってやってるってのに!!」

「そーいやもうそんな時期だっけ? 去年の束は綺麗だったからさ、今年の写真撮っていい?」

「……………ま、まあ? 撮りたきゃ撮れば?」

何故か急にクールダウンした束は、そのまま姿勢を直す様に自分の席に座って窓の外に視線をやった。

ちよつと照れてんのかな? と感じたけど、反対に千冬が妙にジトツとした目をしながらこつちを睨んでた、なんでだろ?

束を褒めたからかな？ けど別に俺は千冬に頼ってないって訳じゃ無いんだよなあ、実際稽古の時も色々面倒掛けてるし。

「てな訳でさ、俺の無刀二扇には千冬が必要なんだよ」

「私が必要……そうか、私が必要か。なら次の稽古からは今より厳しくやるとしよう」

「お、おう？ よろしく……な？」

千冬の機嫌は直ったけど代わりに俺の稽古は厳しくなるとは思わなかったなあ……。

まあでも、相手を傷付けない様に無力化する技つてのは生半可な練習じゃダメだって師範も言ってたし……な？ 大丈夫なはず、うん。

ちよつとだけ不安になったけど、そんな事を考えてる内にキャンプ場に着いたから、綺麗さっぱり不安は吹き飛ぶのだった。

一泊二日のキャンプ体験、俺は着いてから溪流釣りに出かけたり、周辺の散策をしたりして一日中遊び回ってたけど、夜になってコテージの前のベンチで星を眺めてた。

よく束の話を聞いてたから俺も何となく宇宙に興味がある、昔聞いた話だと今俺達が見てる星にも寿命つてのがあって、もしかしたら今見てる夜空の中から明日無くなる星つてのがあるかもしれないなかつたり、誰も見つけてない星があつたりするんだとか。

ひよつとすると俺の見上げてる夜空の中にもそんな星があるかもしれない、そう考えた俺は空を見上げて探しては見たけれど、星座の形くらいしか分からない俺じゃそんなもん分かるわけ無かつた。

「なーにやってんのさ、もう夜だよ?」

少し気落ちしてる所に上から声が降ってきた。

見上げてみると、女子の泊まつてる方のコテージの二階から束が声を掛けて来たらしくて、ベランダの手摺に頬杖つきながら俺を見下ろしながら控えめに手を振ってる。

束の表情から多分俺みたいに空を見上げてたんだろう、自分の夢を語ってる時と同じ顔してるし。

「星探してたんだけど……中々見つかんねーわ」

「星? 何探してたのさ?」

「何って、消えた星?」

「消えた星なんて消えてるんだから探せる訳ないでしょ……」

呆れた様のため息を吐いた束はそのまま部屋に引っ込むと、しばらくして玄関の方から上着を羽織って出て来た。

それで俺の横に座ると、チラツとこつちを伺う様にしながら俺の顔

を覗き込んで来た、なんか顔に付いてるのかな？

「で？ 今日珍しく一人で居るみたいだけど、どうしたの？」

「俺だって偶にはそんな日もあるよ、そー言うお前も千冬と一緒にじゃねーじゃん」

「ちーちゃんは他の子と一緒にトランプで遊んでる、ちーちゃんも君ほどじゃないけど慕われてるからね」

「千冬はすっかりしてて頼りになるからなあ……」

最近ちよつと拗ねたりする事が多くなったけど、前までに比べたら大分笑う様になったし趣味も多くなった。

その事について本人から『お前の影響だ』とか色々言われたけどそんなに俺は何かした気はしないんだよなあ、ただ普通に遊んでただけだし。

涼しい夜風の所為なのか、少ししんみりした気分になってた時、束から俺に質問が飛んで来た。

「……前から思ってたんだけどさ、君はどうしてそんなに友達を作りがるのさ？」

「どうしてって……理由が無きや作っちゃダメなの？」

「ダメって訳じゃ無いけど……正直私みたいな面倒くさい女を好き好んで友達にする奴なんか君くらいのものだよ？」

「んな事言われても……考えた事もなかったなあ」

束を面倒だと思った事は一回も無い。そりゃ昔は嫌われてたけどさ、人付き合いが苦手な人なんて子供だけじゃなく大人にだって居るんだ、別に束だけが特別苦手な訳じゃない。

確かに下手したら先生より頭も良いし、千冬よりも運動神経いいからその点は他の人と違うのかも知れないけど、たったそんだけだ。

千冬だって本気を出したら他の人より頭もいいし、運動神経だって束以外に負けた所を見た事が無いのに友達が居る、慕ってる人って

言ってもいいかもしれないけど、そんな超人にだって人の輪が出来るんだ、それで人を避ける理由にはならないと思う。

けどこれは束の事を気にしない理由であって、友達を作る理由じゃないんだけど……やっぱ理由がないんだよなあ。

「だーめだ、やっぱ思いつかねえや」

「そっか、まあ君らしいっちゃ君らしいけどさ……」

「まあ俺は馬鹿だからなあ、難しい事考えてねーからそんなもんだよ」

「はあ……ある意味それ、才能だよ」

やれやれと呆れた様のために息を吐きながら俺の横から立ち上がると、『そろそろ門限だからコテージに帰ったら?』と言って自分のコテージに帰って行った。

そして、玄関のドアノブに手を掛けた時にふと思い出した様に束は俺の方へ振り向き――。

「――ああ、そうだ。いつになるか分からないけど、友達の君に私の夢を真っ先に見せてあげる、ちーちゃんにも箒ちゃんにも内緒の秘密なんだからね?」

そう言って、束はウィンクしながらコテージへと入って行った。

束の夢がどんな物かは分からない、けど束が自信満々な雰囲気だったからきつと凄い物なんだろう、だったら俺に出来る事はそれを楽しみに待つ事だけだ。

――そんな風に束が見せてくれる夢に期待を膨らませながら、自分のコテージに帰る前にもう一度空を眺めるのだった。

夏の暑さを吹き飛ばす為には涼しくなる事が大事な事なんだけど、プールや海水浴は子供だけじゃ行けない。

篠ノ之道場にある井戸水を頭からかぶる方法もあるけど、心臓がきゅつとなるくらい冷たいから多分やり過ぎは良くないんだろうなあ。

けど今日は道路から湯気が出るぐらい暑い、外に遊びに行きたくてもクーラーと扇風機が働いてる自分の部屋から出たくない。

ゲーム……は大体やり切ってるし、アニメも今見終わったところだからなあ。

誰か遊びに来ないかなあとか思ってた窓から外を眺めると、日傘を差した千冬と一夏くんが散歩してるのが見えた。

「おーい千冬ー!!」

思わず窓を開けて名前を呼んでみたけど、結構遠くて距離があったからもしかしたら聞こえてないかもしれない。

とりあえず携帯で改めて呼ぼうかと考えた時、千冬が俺の方を振り返って手を振ってるのに気が付いた。

車とか結構通ってるのに良く俺の声が聞こえたなーなんて思ったら、千冬の方から着信が掛かってきたんでそれも聞くために電話に出た。

「よっ!! 結構距離あるのに良く俺の声が聞こえたなー」

『不思議とお前の声は特別良く聞こえるんだ、それで? 何の用なんだ?』

「暇だから遊びに来ねえ? 一夏くんも一緒にさ」

『そうだな、丁度私もどこかの店にでも入って涼もうと思ってたところだ』

「よっしゃ、じゃあ待ってるぜ?」

そつから暫くしたら二人とも俺ん家に来たんで、一夏くんに冷たいジュースをあげながら部屋まで案内したところで……どうしよつか?

呼んだまではいいんだよ? 一人で遊ぶのつてのは暇以外の何でもないからさ、けど元々何しよつかな? って暇してるところだったからやる事がない。

「てな訳で千冬、どーする?」

「どーするも何も、何かする気だったから私を呼んだんじゃないのか?」

「そのつもりだったんだけど、何するかを考えて無かつたんだわ」「まったく……お前という奴は……」

呆れた様にやれやれと頭を抱える千冬、横に居る一夏くんも同じ様にやれやれポーズを真似してるのを見て笑って誤魔化そうとした時、ピーンと閃いた。

頭を抑えるその仕草はこの時期限定のアレだ!! 確か親父の部屋に道具があつたはず。

「つつー訳で!! 持ってきたぜかき氷機!! 結構重かつたけどな」

「鉄製のかき氷?」

「むかーしの奴なんだつてさ、ここにでっかい氷のブロックを置いて取っ手をぐるぐる回すんだつてさ」

親父の趣味で毎年かき氷を作ってるから家には氷のブロックが置いてある、ちゃんとシロップも持って来たからこれで涼しくなろうつてな寸法よ!! あと、一夏くんはかき氷機回すの初めてだろうし。

興味深そうにぐるぐると取っ手を回す一夏くん、けどよく見ると千冬の方も少し触ってみたそうな顔してるのが分かった。

「にーちゃん!! にーちゃん!! まわしたい!!」

「よーし!! じゃあ一夏くんは千冬の分を作る係だ!!」

「うん!!」

「んで、千冬は一夏くんの分を作る係だな!!」

「……私も良いのか?」

「ん? 俺ってそー言われてダメって言う意地悪な奴に見える?」

「そうは言っていないが……」

「やりたいんだろ? 顔見りや分かるよ、千冬は分かりやすいから」

ぱつと見クールな感じに見えるけど、案外一夏くん並みに好奇心の塊だからなあ、表情に出して無くても視線とか指の動きとかで十分何考えてるのかは分かる。

最近脱デブ猫をしたみーくんに対しても一夏くんが構ってるからって自分は一步引いたところで見てたり、部屋の猫じゃらしとかに視線が行ったりするから割と千冬は素直なんだよなあ。

「ま、そんな訳だからさ、思う存分ぐるぐるしなさいな、一夏くんみたいにさ?」

「そう、か? なら遠慮なくやらせて貰おう」

そう言って、千冬は心なし嬉しそうな顔をしながら一夏くんの次にぐるぐると氷を削り始めた。

ゴリゴリ削れる氷の音とその感覚が心地良かったのか、思う存分削った後に一夏くん用にしては量が多い事に気付いたらしく、ちよつと冷や汗が流れてる。

一応そのかき氷は俺が貰う事で解決したんだけど、申し訳なさそうな千冬が気になった。

前々から思ってた事なんだけど、千冬はちよつとした失敗とかに結構凹む所がある、しよつちゆうやらかしてる俺からすれば何でそこまでするのかが分からないんだよなあ。

「なあ千冬？　これぐらい誰だつてやる事だろ？　そんな凹まなくても良いじゃん」

「……お前からすればそうかも知れんが、私にとっては些細なミスでも重大な事なんだ」

「かき氷の量ミスったくらいでも？」

「ああ、そうだ」

「んー、完璧主義つて奴か？　けど千冬つてそんなに完璧なのにこたわつてたっけ？」

「私に関しては分からない……だが、父と母は私に完璧を求めるんだ」

かき氷を食べていた手を止めて俯きながらそう呟く千冬、前々から結構大変な家族なのは知ってるけれど、だからと言ってそれを解決できる様な人間じゃないのは自分がよく知ってる、だから俺は黙って話を聞く事しか出来ないんだけど……それがちよつと悔しい。

「あまり父と母とは会話らしい会話はしない、偶に学校の成績を聞かれる程度なんだが、その時に期待を下回る成績だと……酷く失望した目をされるんだ」

「千冬……」

「完璧であつて当たり前前、些細なミスも許さない、あの人達は私に対して一体何を期待してるんだろうな……」

俺はそう言ったきり無言になった千冬を抱き締める、少しでも励ましたかったのもあるけど、一夏の前では弱い所を見られたくないだろうと思つたからだ。

結局俺は母さんが慰める様にゆっくりと頭を撫でながら千冬を慰めるしか出来なかつた……。

夏休みの宿題ってのはとにかく量が多い、休みが長いから計画的にやれて奴なんだろうけど、それにしても気合い入れ過ぎだと思う。てな訳で、今年は夏休みの頭の方で宿題を終わらせる気で束と千冬に協力して貰いながら宿題をしようと思っただけで家に呼んだんだけど、二人とも終業式の日が終わらせたらしくて何故か完全に家庭教師状態になつてる。

「……問三の計算間違つてる。途中式を省いて暗算なんかするからだよ」

「問六もだな。小数点の計算が違つてるぞ、途中の式を省くからだ」
「うへえ、お前ら国語の時は静かだったのに算数になつたら容赦ねーのな」

計算問題は途中の式をちゃんと書けばまあまあ解けるんだけど、暗算で解けそうな奴はつい暗算でやっちゃうんだよなあ、んで結局そこが大体間違つてる。

良く束からは『君は頭の中で話す事が完結してるから結論だけを言う癖があるのと一緒で、頭の中で計算式が完結してるから式が間違つても気が付かないんだろうね』って言われるから直そうとは思うんだけど、気を抜くとついやっちゃうんだよなあ。

「てな訳で束、なんとかできない?」

「もう既に会話を省略してる時点で直す気ないよね?」

「……まあ、その、なんだ? 自分の癖とは上手く付き合っていくべきなんじゃないか?」

「それって遠回しに一生直んないって言つてね?」

思わず千冬にそう言つたら速攻で目を逸らされた、その態度が既に

答えだよね？

「はっ、いいもんね!! こっちにはニュータイプの束が居るんだ!!
一生通訳して貰えば困らなねーもーん!!」

「それって私が困るんだけど!?!」

「……三人居るんだ、どうにか癖を直す方法を考えるか」

「そーだな、三人寄ればもんじやの知恵って言うしな!!」

「それを言うなら文殊の知恵!! ゲームのやり過ぎだったの、少し
ゲームから離れるよ」

ゲームから、離れる? 確かに俺の後ろにはテレビがあるし、ゲー
ム機本体も繋がったままで置かれてるけど、こっから離れたらいいの
かな?

取り敢えずゲーム機から距離のある千冬の方へ移動したんだけど、
束はすごい溜息を吐きながら違う違うと手を振っていた。

「ぜーったいやると思ってたけど、物理的に離れろって意味じゃな
いからね?」

「えっ? マジで? 違ったの!?!」

「違うっての!! なんでゲーム機から離れろって話になるのさ!!
ゲームから離れろってのは発想の話だよ!!」

「ああそっちな!! なーんでゲーム機から離れるって話になったの
か不思議だったんだよ」

「疑問に思ってたんならちゃんと疑えよ!?! 英語のドイツ語講座の時も
そうだったけど、ちよつとは疑う事を学べよ!!」

バンバンと机を叩きながらそんなツッコミを入れる束の言葉に思
わず目を逸らしてしまった。

けどその視線の先には例の講座本の入った本棚があったから、余計
に気まずくて曖昧な笑いが漏れる。

だってあの後も間違ってイタリア語の本とかラテン語の本も買っ

ちやつてるからなあ、この流れで見つかるのはどう考えてもまずい。
ちよつとだけ身体を動かして束から本棚を隠すように移動したんだけど、その時に千冬が本棚のラインナップが気になったのか、何冊か抜き取って机の上に広げ始めた。

「何々？ 『0から始めるラテン語入門講座上巻』『ネイティブなフランス語を話そう』『解説DVD付き実践ドイツ語』『英語を話せば世界と話せる』……何カ国語話せれば気が済むんだ？」

「あ、あはは、だつてほら？ ね？ 世界中の人と話せたら便利じゃない？ 将来的にもなんかの役に立つと思うし」

「はあ……将来云々言うならまずは目の前の勉強優先したら？ 少なくとも国外の言葉よりも今の内は数字の勉強の方が役に立つだろうからさ」

「……はい、頑張ります」

騒いでる間に多少の休憩が出来たから頑張つて算数の宿題を終わらせたんだけど、その頃にはもう三時のおやつどきで、すこしお腹が空いてる。

宿題も自由研究とか日記以外は大体終わったから、お礼にリビンクから母さんが焼いてくれたクッキーと、ペットボトルに入ったミルクティーを持って部屋に戻ったんだけど、部屋に入るなり二人が本棚を調べてるところだった。

「何やってんの二人とも？」

「いや、本棚が気になってな……」

「一週間くらい前に来た時には漫画が並んでたのに、何時の間にか小生方向けの講座本とかが多いのが気になってさ。手前と奥とで二冊並べてるのかと思っただけで、それも違うし……捨てたの？」

「捨ててねーよ？ 向かいの空き部屋に片付けてる」

真面目に外国語の勉強し始めた頃に親父が使つて良いって言つて

くれたから遠慮なく使わせて貰ってる、ちよつとした書齋って言うのかなこれ？

一応辞書とかも親父が買ってくれたから外国語の勉強はあんまり束に頼らなくても大丈夫になった、忙しいって言ってたし頼り過ぎるのも良くないしな。

「てな訳で、俺は自力で外国語覚えるから束に教えて貰わなくても大丈夫だぜ？」

「……………ふーん？ まあ別にいいんじゃない？ 私も私でやる事多いから君の語学習得にまで付き合わなくて清々するし手の空いた時間に教えてあげる必要も無くなって万々歳だもん。別に、べ・つ・に!! 君がどーしてもって言うなら頑張って時間作ってあげたけど、その必要も無いんだもんねっ!!」

大丈夫って言ったのに妙に不機嫌になった束、本人も今ぽろっと言ってたけど多分頼み込んだら束は時間作って勉強に付き合ってくれたと思う。

けど、自分からやる事が多くなって言ってる時点で束自身が興味を持って何かに取り組んでるって事だし、束が見せてくれるって言う夢が凄く気になるからそれを邪魔したく無い。

んで、その事を説明したら少しだけ機嫌が良くなったんだけど、今度は何故かちよつと頬を膨らませた千冬に軽くほっぺたを抓られた。

……………何故に？

——二、三日前に親父の大学時代の友達と会ったんだけど、その時に面白い話を聞いた。

その名も昆虫はエイリアン説!! なんでも虫の起源ってなんなのかイマイチ分かってないらしくって、ある時期から一気に増えたんだってさ。

んでその話を束にしに行ったんだけど、意外な事に昆虫エイリアン説よりも親父の友達の方に興味があつたみたい、やっぱり宇宙に情熱燃やしてる同士で気になるのかな？

「けど知らなかったなあ、虫がこんなに意味不明な生き物だったなんてさ」

「虫は他の生き物みたいに進化途中の化石が発見されてないからね、体の構造も特異だし地球外生物説は良い線行ってるんじゃない？」

「おおー!! じゃあ虫はUFOで地球に来たって事になんのか!?!」

「あのね……昆虫の地球外生物説だって有力な一説ってだけだから、仮に進化途中の昆虫の化石が発見されたら直ぐに覆されちゃうし、他にも甲殻類……カニとかエビが陸に上がって虫になったって説も有力だからね?」

「そーいや、セミも揚げたら川のエビ見たいな味してたしなあ……」

「そーそー、バッタとかもそんな味がするって言われてるし、私としてはこっちの説を——って今なに食ったって?」

「え? セミだけど?」

結構昔に親父と一緒に行ったキャンプのイベントで昆虫食?って奴を体験した事がある。

セミはその時に食べたんだけど、その前にも岐阜で蜂の子とかイナゴの佃煮とか食べた事があるし、あんまり抵抗は無かったんだよなあ。

流石にその辺のバッタを捕まえて唐揚げにしようと思うほどじゃなかったけど。

「……道端で捕まえた虫、食べようとか考えないでよね」

「いやいや、いくら俺でもそんな真似しないってば」

「どーだか。文字通りに道草食べてたのはどこの誰だっけ？」

「あ、あはは、それはほらアレだから、な？」

「何がアレなんだよ……で？ 話はこれだけ？」

「ん？ まあな、虫が宇宙人って話がしたかっただけだし、結構満足したけど」

話したい事も話したからこのまんま帰るのもありっちゃありなんだけど、今帰っても家着くのは四時前だからなあ。

稽古日じゃ無いけど道場で師範に稽古してもらおうかな？ ああでも扇子は持って来てるけど、道着とか二刀流用の竹刀持って来てなかったや。

「……ねえ、ちよつと聞きたいんだけどさ？」

「お？ 束が俺に質問とか珍しいなー、何でも答えるよー？」

俺がこの後何するか悩んでると意外な事に束から質問が飛んで来たんで、束のお母さんが持って来てくれた濃い目のカルピスを飲みながら姿勢を直しながら向き合う様に坐り直す。

「さっきの虫の学説の話だけど、おじさんの友達に聞いたって言ってたよね？ そんなにしよつちゆう会う人なの？」

「うん。大学の時からの友達らしいけど、割と定期的に土産とか持って遊びに来るよ？ 前に束が見せて貰ってた隕石もその人が研

究の為に頼んだもんらしいし」

「ふーん……そうなんだ」

何か納得した様な、知りたかった事を知れたって顔をしながら束はそう言つて、少し無言になった。多分俺には分からない事を色々考えてるんだと思う。

普段なら話しかけても返事してくれるけど、かなり真剣に考え事をしてるっぽいから話しかけたら迷惑だよな？

そんな風に考えて俺も黙つてたら、暫くしてまた束が口を開いた。

「……あの、あのさ？」

「うん？ どつたの？」

「その、おじさんの友達つてさ？ 優しい人？」

妙に緊張した様な雰囲気です束はそう聞いて来た。

表情と聞き方から考えると多分親父に紹介して貰つて宇宙談義か何かをしたいんだと思う、そうじゃ無かつたらこんな不安そうな顔しないし。

俺は人見知りしないから知らない人と話すのは苦手じゃないけど、束は人付き合いが苦手だから話したくてもあんまりその勇気が出ないんだろう。

最近はクラスの子とも本当に少しだけ話す様にはなってるけど、自分から話しかけてる姿は見た事ないし、どうやって話のきつかけを作つたらいいのか分からないのかな？

うーん、でも完全に初めて会う相手とかならともかく、あの人には会つた時に偶に束の事話してるし、束にも時々逆の事してるから会つたら普通に話し合ふと思うけどなあ。

まあでも優しい人なのは間違いないし、束の事にも興味あるっぽいからそんなに心配する事は無いと思う。

「てな訳でさ、あの人は別に子供相手に怒るような人じゃないから

心配しなくても平気だよ」

「……君の人を見る目だけは認めてるから、信じてあげる」

「おっ？ 褒められた？」

「私は君ほどコミュニケーション能力高くないからね、そこだけは勝てないし」

「ふふん、そーだろーそーだろー!! なんならもつと褒めても良いんだぜ？」

珍しく束に褒められた俺は思わずそんな風にドヤ顔しながら胸を張ってただけど、途中から『ちよつと褒めたくらいで調子に乗んな』と言って頭を軽く叩かれた。

とまあそんな話をしたら束も聞きたい事が無くなったのか、パソコンの前に座ったので俺も帰る事にしたんだけど、その時にチラツと何かの設計図みたいなのが見えた気がする。

盗み見る気は無いからそのまま帰ったんだけど、その内聞いてみようかな？

幕間：兎の秘密 2

——遂に、インフィニット・ストラトスの設計図が完成した。

まだ開発資金やその他の問題が解決していないけれど、一応は現実的な物に仕上がってる筈、おじさんに頼んで例の友達さんに会わせてもらえる事になったから何度も何度も入念にチェックを入れてるから大丈夫な……はず。

今はおじさんと一緒にファミレスでその人を待ってるんだけど、さつきから妙な緊張感が背中を登って来てる。

こんな事ならあの馬鹿も一緒に連れて来て貰うんだったとか一瞬考えそうになったけど、まだこの子は完成しきってないからそうも行かない。

大きく息をしながら気持ちを整えていると、お目当ての人が来たらしくておじさんが手を振ってるのが見えた。

「やあ、君が束ちゃんかな？ 初めまして天王寺です。あの子から君の話は良く聞いてるよ、俺に相談があるんだって？」

「あ、はい。今日はその、お願いします」

おじさんの友達だからと言う先入観もあつたけど、目的の人は物腰が柔らかくて話しやすかった。

自己紹介も兼ねた雑談を挟んだ後、私は本題となるISの設計図が入ったノートPCを天王寺さんへと見せる。

いくら私が完璧な設計図だと思っけていても受け取り方や理解力は人それぞれだから、正直この設計図を差し出すのは凄く怖かった。

けれど夢を現実にする為には横の繋がりは絶対に必要な事だから、いくら否定される事が怖くても、ここは絶対に妥協出来ない。

膝の上に置いた手を握りしめながら天王寺さんが中身に目を通し終わるのを待つのは苦痛で。途中から文字通り見る目が変わったから、この後に何を言われるのかと言う不安で胸が締め付けられる様

な、息がつまる様な、そんな緊張感だった。

「これは……これを、君が？」

「……は、はい、一から作りました」

「小学生がこれだけの物を……？」

「天王寺、そんなに凄いのかい？」

「凄いなんてもんじゃない!! これは、これが実現したら宇宙開発……いや、現代科学のブレイクスルーになる!!」

熱が籠った様にそう叫びながら立ち上がった天王寺さんに少し驚いたけど、ファミレス中の視線を集めて少し恥ずかしかったのか、顔を赤くしながら席に座り直しながら咳払いをしつつ、おじさんにISの事を話し始めた。

「これは宇宙空間での活動を目的とした物みたいだけど、それ以外にも新技術のオンパレードだ。実際にここに書かれている物に再現性があるのかはまだ分からないが、不思議なくらい説得力のある説明が付いてる、コレを小学生が作ったなんて……」

信じられない、と言った目で私を見る天王寺さんの目に私は背中に氷の柱を突っ込まれた様な錯覚を覚えたけれど、そんな感覚は杞憂だったみたいで、天王寺さんは私の事を恐れる節は無かった。

そんな彼の目を見たら、何となくあの馬鹿に背中を押された様な感じがして、不思議と緊張感が消える。

——— だったら、本題に入ろう。

「相談と言うのは、その機体についてです」

「この機体？ 見たところなんの欠点も無さそうだけど……」

「私は小学生ですからその、なんのツテもなくって……」

「なるほど確かに、君は小学生だからこれを発表したくても出来ないし、開発だって出来ない、再現性のある無しすら分からないペー

パープラン止まりって事だね?」

「はい、だから、この機体の開発にきよ、協力して欲しいんです」

自分から他人に頭を下げて頼み事をするなんて我ながららしくないけど、そんなちつぽけなプライドは捨ててしまえ。

少しどもりながらのお願いになっちゃったけど、天王寺さんは少し腕組みをしながら考え込んだ後、片手でOKサインを作ってくれた。

「ただ、俺に出来るのはこの機体の話を所長に通すところまでだ、そっからの説得は君がする以外に方法が無いけど……大丈夫?」

「はい!! そこまで漕ぎ着けられれば、何とか説得してみます」

相手が責任のある立場ならメリットデメリットをはっきりと分けて利益が見込める事を上手く話して相手を丸め込めばいい、とにかく実現のためのチャンスを掴めたなら詐欺師の様に虚実入り交えて確実に説得してみせる。

約束の握手をして、連絡先を交換したところで天王寺さんは『早速この話を持って行く』と言って先に退店していった。

私は一仕事終えた様な疲労感と共に長椅子にもたれかかったんだけど、珍しくおじさんが難しい顔をしながらコーヒを飲んでいるのに気が付いた。何かあったんだろうか?

「おじさん? どうかしたの?」

「ん? ああ、ちよつとね」

そう言っておじさんは曖昧に誤魔化しながら私の頭を撫でる、なんとなくその態度に隠し事をする様な気がした私は、少しだけ恨みがましい目で睨んで見た。

この人はあの馬鹿と似た様な性格をしてるから、こうやって罪悪感を煽ればよほどの事じゃ無かったら話してくれるはず。

思い通り、おじさんはバツの悪そうな顔をしながら頬を掻きだし、

凄く言わずらそうな顔をして口を開いた。

「いやね？ 水を差す様な事を言いたく無いから黙ってたんだけど……束ちゃん、君は少し気を引き締めた方がいいと思うよ」

「えっ？ 私は初めからそのつもりだけど……」

「フラーレンによる52kでの超電導は知ってるかな？」

「確かそれは研究不正と論文捏造でその業界では一時期話題となった話だったような……でも私のISは発表すらしてないよ？」

「うん、事件の概要としては合ってる。けど僕が言いたいのはね？

一人の天才に対して人は盲目的になるって事だよ」

「盲目的……」

コーヒーを飲み終わったおじさんは空になったカップを眺めながら寂しそうにそう言って、支払いの為に席を立つのだった。

小学五年生 11

最近知り合いの高校生から演劇部で使う小物を作ってくれて頼まれた。

なんでも、子供が書いたホラーちつくなストーリーっぽいラブレターってのが必要らしくて、何通か内容の違う文面で書いてくれって言われたんだけど、安請け合いした割にはぜんぜん文書が思い浮かばない。

大体ホラーちつくでストーリーっぽいラブレターってどうしたら書けるんだろ？ 何人かの男友達と一緒に昼休みを使って考えてたけど、そもそもストーリーカーの文章ってのが分からないからなあ。

あんまり怖くない文面になった便箋を丸めながらそんな事を考えとると、お昼を食べ終わった東達が教室に戻ってきた。

それを見た友達の一人が、『書く相手を想像できないから怖い文章が書けないんじゃない？』と言って、東達を呼びに行ってしまった。

うーん、でも東や千冬に向けてストーリーカーみたいなラブレターって……書けるのかな？

「おーい、織斑と篠ノ之。委員長が困ってるから手伝ってくれてさー」

「はいはいどーせ下らない事で悩んでるんでしょ、君らもこの馬鹿の相手するだけ時間の無駄だよ」

「東……確かにこの男は圧縮言語のせいで時々会話の余地が無い時はあるし、思い立ったらすぐ行動と言う言葉がぴったりなくらい無駄に行動力があるが、何時もその下らない事を真剣に悩んでるんだぞ？」

「なんか褒められてるのに全然そんな気しないんだけど……」

「うん、正直俺達も委員長はその圧縮言語？に振り回されてるからバトンタッチ、力になれなくてごめんな委員長」

「おー、あんがとなー」

両手で謝りながら束達と入れ替わった奴らに手を振った後、改めて束と千冬に強力してもらおう事になったんだけど、二人をモデルにして文章を作るのは思ったよりも文章が浮かんで来たから結構楽そうでした。良かった。

「で？ 何で困ってるのさ？」

「ラブレターの文面が浮かばなくてさー」

「……………ラブレター？ 誰宛ての物だ？」

「それが分からないから困ってるんだよ、千冬」

怪訝な顔をした千冬と束に詳しい説明しながら、俺は新しい便箋を取り出して二人宛のラブレターを書いていく。

意外に喋りながら物を書くのは難しいけど、何となくスラスラと文面が浮かんでたのでとりあえずホラーっぽく仕上がったので、早速二人に読んでもらった。

まあ書いた本人が言うのもなんだけど、束の添削待ちって感じだからそんなに怖くないはずなんだけど、何故か二人共固まってる。

「どつたの？ 全然怖くないだろ？ だから困ってるんだよ、何かいい知恵ない？」

「…………いや、その、十分以上に怖いぞ、これは」

珍しく不安げな目をしながら声を震わせる千冬、中々レアな表情をしているけど、別に特別な事を書いた訳じゃ無いんだよなあ…………。

ただ普段の千冬の行動とか考えとかを想定しながら、ストーリーらしくずつと監視してるつもりで文章を組み立てただけなんだけど、そんなに怖いのかな？

「なあ束？ 束は怖くないよな？」

「…………こ、怖くない。怖くないんだけど、この束さんが引くくらい不

安になる内容なんだけどコレ。君ホラー作家の才能があるよ、絶対に。東さんが保証する。いや全然怖くないんだけどね？ どつちかって言うのと生理的な気持ち悪さが酷い、例えるなら読めば読むほど背中にナメクジが這い上がってくる様な感じ？ いや、怖くないよ？ 夜眠れなさそうだとか、暫くカーテン開けられなさそうだとかそんな事は無いよ？ 多分TRPGで言うSAN値チエックってこんな手紙読んだりしてなるんだろうね、本当に怖くないからね？」

「いや、涙目でそんな事言われてもなあ……」

取り敢えず不安になりそうな文体と言葉選びをして敢えて日本語が不自由な感じにしながら、それでも内容が理解できる様に書いて見たんだけど、これは二人の性格を知ってるからってのが大きいと思う。

だからこう、誰が読んでも怖い文章ってのが書きたかったんだけど、中々上手くいかねーなあ。

「あ、2枚目も……ひっ?！」

「ああそれ？ 束はビビらないって思ってたから、昨日の夜にちよつとオマケで書いた眼球の挿絵入れてみたんだけど、書いた甲斐があつたみたいで良かった良かった」

「おまつ、お前!! これ、挿絵ってレベルじゃないだろ!! サイコパスの書いた絵みたいないな眼球のイラストがどの角度から見ても視線が合うってなんなんだよ!! 君の努力は趣味に全力なのは知ってるけどさ!! 努力の方向音痴過ぎない!! 背後から見たちーちゃんも絶句してるし!!」

「それめっちゃ力作なんだからな？ 親父にトリックアートの作り方も教えてもらって作ったからさ」

結局、この昼休みは騒ぐだけ騒いでたら何時の間にか終わってた。取り敢えず放課後に二人に協力して貰おうと思ったんだけど、二人とも『日が暮れる前に帰りたい』とか言って早足で帰っちゃったから、

今日の内には完成しなかったんだよなあ。

でも次の休みに演劇の内容を教えて貰ったから、それに合わせて手紙を書く事は出来たんだけど、後から聞いたら読んだ女の人が泣き出したらしくて、お蔵入りになったのかなんとか。

………俺、真面目に書いただけなのになあ。

その日は朝から大雨で誰かと遊べそうになかったから大人しく本を読もうと思つてたんだけど、中々読みたい気分の本が無くて困つてる。

漫画は全部読んだし、DVDも全部見終わってるからなあ……後は正面の部屋に片付けてある親父が昔購読してたつて言う古雑誌くらいしか読む物無いんだよなあ。

けどあれ、五行くらい黒塗りされてて読めなかったり読める部分もトリカブトの栽培方法とか爆弾の作り方とかだからなあ……知つてどうしたらいいんだろ？

試しに親父が買つて来てくれた本の中から一冊手に取つて、中身を見てみると一発目から『死体を溶かす酸・塩基』って項目が出て来たからそつと棚に戻して他の本を探したんだけど、そうやってる内に気になる二冊を見つけた。

——『De la Terre · la Lune』と『A u t o u r d e l a l u n e』の二つ、日本の本ばかりの本棚の中で外国語で書かれたこの二冊は異様に目立ったから、暗号解読みたいな気分で部屋の中の外国語の辞書を片っ端から使つて翻訳したら『地球から月へ』と『月を回つて』というフランス語の本なのが分かった。

しかもこれ書いてある元々の発刊日見ると1865年と1870年つてなってるから百年以上昔の人が宇宙を目指した本つて事だろ？ タイトルのにも絶対束が喜ぶよな、これ。

そんな事を考えながら棚に本を戻そうとしたんだけど、やる事が無いのを思い出して何と無く机の上にこの本を置いて、床に散らかした辞書を一冊拾う。

日本語に翻訳された本くらい親父の店に置いてそうだけど、束との

会話のネタになりそうだし、フランス語の勉強にもなるだろうから、暗号解読ごっこを延長して読んで見よう。

この時の俺はそんな軽い気持ちでこの本を読み始めたんだけど、辞書を片手に文法と単語を一個一個調べながら読むのはかなり時間がかかって、朝ごはんを食べたと思ったら何時の間にかお昼時になって、ご飯を食べに来ないからって母さんに怒られた。

取り敢えずお昼ご飯は急いで食べて、速攻でまた書齋に入って翻訳を始めたんだけど、また没頭し過ぎたのか気が付いたら周りが暗い。

お昼ご飯を食べたのが12過ぎで、机の上の電子時計を見たらもう19時45分、ダイニングに行ったらラップの掛けられた晩御飯が置かれて、『お風呂入って来るから、その間にもしも食べに来たらちやんと洗いなさいね byお母様』って書かれたメモが貼られてた。

……もしかしくなくても俺休み丸ごと使っちゃった？

「——てな事があって、この本を読み切るのに二週間くらい使ったんだよねー」

「ほー、外国語の本なんか俺だったら読む気しないのに大したもんだなあ」

篠ノ之道場での稽古日に束に見せる目的で持ってきたあの二冊の本の話をもつて、門下生の先輩としてると、丁度束が道場に顔を出したらしくて、もう一人の先輩が呼んでくれた。

翻訳に忙しかったから最近遊べてなかったから久々に長話が出るなあとか考えてたんだけど、束が少し疲れた顔をしてると、服装が整ってる事から何処かへ行った帰りなのがあった。

今日は千冬も家の用事とかで休みだし、ちよつと元気付けてあげようかな？

「どつたの束、なんか疲れてるっぽいけど？」

「……ちよつとね、予算とか利益とかの現実的な数字を出して大人

を説得するのに疲れただけ」

「ふーん、よく分かんないけど頑張ったなあ、頭でも撫でてやろーか？」

よしよしする様なジエスチャーをしつつ、俺は次に来る筈の束の口撃に少し身構えたんだけど、意外な事に何の罵倒も来ない。

精神的に少し疲れてるみたいだからちよつとからかってストレスを発散して貰おうと思ったんだけど、失敗だったかな？

「……………折角だし、頭撫でて貰おうかな」

「えっ？ マジで？ じゃあ遠慮なく」

そう言っしておらしい束にちよつと驚きながらも手を伸ばした瞬間、——両手で伸ばした手を掴まれた。

「あっ!!? おまつ、まさか——」

「なーんて、しおらしい事言うと思った？ 残念ブラフでしたあ!!」

束のしてやったりと言う顔を見ると同時に、俺はそのまま床に背負い投げられて天井を見上げる事になった。一応加減はしてくれてたみたいで、あんまり痛くはなかったけど。

「あースッキリした。この束さんが何年君の幼馴染やってると思ってたのさ？ 考えてる事バレバレだったの」

「ちえー、まんまと嵌められた…………」

「ま、おかげで大分気が晴れたし、その辺は感謝してあげる。んで？ 今日は何の用で私を呼んだのさ？」

「よつと、実は俺の鞆に入ってる本について話がしたくつてき」

そう言って、俺は例の二冊を鞆から出して束に見せたんだけど、その本のタイトルを読んだ束は無言のまま中身を読み始めた。

フランス語で書かれてるのに良くスラスラ読めるなあとか思ってた。関心してたんだけど、途中で視線を本に向けたまま束が口を開く。

「——ねえ、この本の何が凄いか、分かる？」

「えっ？ うーん、親父から聞いたけど世界初のSF小説だって話？」

「それもあるけど、この本の凄い所は天体力学的な理論面で概ね不備が無いところだよ。着陸する時にロケットを逆噴射する方法も先見性があるし、考証の甘い部分はあるけれど現代から見た時にその甘さを指摘できる」

「百年以上昔の小説が？」

「そう、百年以上昔の最先端の知識を注ぎ込んでるの。そしてこの本に影響された人はみんな宇宙を目指してる」

パタンと本を閉じて、束は優しい笑顔を浮かべながら俺の方を振り向き、真っ直ぐとこつちを見る。

「ロケットの父って呼ばれてるコンスタンチン・ツイオルコフスキー、世界初の液体燃料ロケットを飛ばしたロバート・ゴダード、全てのロケットの元祖を開発したヴェルナー・フォン・ブラウン、みんなこの本に影響されて空の果てを目指した。——この二冊の本が無ければ、人類はまだ地球の外へ出てないと言いつてもいいくらい、凄い本なんだ」

言いたい事は言い切ったのか、束は『この本、ちよつと借りるね？』と言って二冊共持つて部屋に帰って行ったんだけど、後に残された俺は束のこの言葉は妙に心に残って——思わず空の上を見上げるのだった。

昨日の昼休みに俺は体育館で隣のクラスの奴らとバスケットをしながら雑談してただけど、その時に六年生の知り合い同士が付き合っていると云う話になった。

「へえー、あの二人が付き合ってるのかー」

「そうそう、僕直接聞いたから間違いないって」

「そーいや、委員長つて篠ノ之さんと織斑さんのどっちと付き合ってるの?」

「えっ? 俺? 別に束とも千冬とも付き合っていないよ?」

突然妙な事を聞かれたからか、シュートしたボールがポストを外れてしまった。

五年生になってから結構この手の話題を振られる事があるんだけど、普通に接してるだけなのにみんなの目にはどー映ってるんだろ?

それに束が俺や千冬以外の人と話してるのを見ただけで『篠ノ之さん変わったよなあ』とか『織斑さんも笑う様になったよね』とか、まるで俺が何かした見たいにみんな言ってくる事もある。

特に何かした気はしないし、感動バラエティ番組みたいに良いこと言っただけかも知れない。

そもそもみんなは変わったとか優しくなったとか言うけど、元々二人共優しくかつたし、取っ付きにくさは単に人との距離が分からなかったというだけで、誰だっけ仲良くなれたと思うんだよなあ。

ただコレを言うとはほぼ全員から『それはお前だけだよ……』的な事言われるし、当の本人の筈の束達からも似た様な事を言われるから釈然としない。

そんな訳でその日はすっきりしないまま学校が終わったんだけど、束達と一緒にご飯を食べてたらその事を思い出したので、何となく俺の事をどう思ってるか聞いてみる事にした。

「なー束、ちよつと聞きたい事があるんだけどさあ」

「なに？　また欧州だか欧米だかの本でも読んだの？」

「いやそうじゃなくて、お前俺の事好き？」

そう聞いた瞬間、紙パックのお茶を飲んでた束は予想外過ぎたのか思いつきりお茶を吹き出し、横でご飯を食べようとしてた千冬も思わず箸を落としてしまった。

「お、おまつ、お前は?!　どーいう意味でき、聞いてるんだよ!!」

「待て束、落ち着け!!　きつと何時ものパターンだ。主語が足りなくて勘違い発言になってるだけで——」

「いや勘違いも何も、そのまんまの意味だけど？」

俺はもう長い付き合い友達だから二人の事大好きだけど、最近是谁と誰が好き合ってるとか、誰々が告白したとかって話を妙に盛り上げるのが流行ってて、割と迷惑してる人が多い。

特に噂話だから勝手に話が進んでたりする事もあって、俺も下級生から告白されたとか、他校に彼女が居るとかって言う噂が流れた事がある。

その辺は誤解を解いたし、そう言った人の迷惑になりそうなの噂は出来る限り訂正してるんだけど、もしかしたら二人もその手の噂を流されてるかもしれない、というより俺と付き合い合ってるって話が出る辺りもう大分流れてるかもしれない。

こう言うのを……火の無いところに煙は立たない、だっけ？　取り敢えずその可能性があるから、友達として好きなのを誤解されて無いか確かめる為に好きかどうかを聞いたんだけど、完全に束の目が泳いでる。

「なーなー、結局どうなのさ束？」

「……………き、嫌いじゃ……………ない」

「えっ?!　じゃあ好きでも無いの!?!」

「そ、そうは言っていないでしょ!？」

「じゃあ好きなんだな!!」

「だ、だから!! 嫌いじゃないって言ってるでしょ!! す、すす好きだなんて一言も束さんは言っていないから!! そ、そもそも君はどうなのさ!! 私のことどう思ってるの!？」

「大好きだけど?」

何を当たり前な事を聞いてるんだろうと疑問に思いながらそう答えた瞬間、束は体ごとそっぽを向いてしまい、完全に黙ってしまった。何をそんなに恥ずかしくがってるのかな? 首を傾げながらとりあえず千冬の方にも聞こうと思つて横を振り向いたら、少し拗ねた様子の千冬に両頬を引つ張られる。

「いひや^痛いっ^てひえ、ひひ^{千冬}ゆ^ふ」

「好きなのは束だけか?」

「いてて……なんでそんな事聞くのか分かんないけど、俺は千冬も大好きだけど?」

「……………ああそう言う意味か。確認するが当然『友達』として好きと言う意味だな?」

「それ以外になにかあるの?」

別に二人ともそう言う対象として俺を見てないだろうし、特に束は昔俺の事をカマドウマ呼ばわりしてたから友達くらいならともかく、それより先の関係にはなんないだろ。

そんな事を思いながら千冬の間い掛けに答えたんだけど、その瞬間に空になった弁当箱が俺の後頭部に飛んで来た。

……………地味に痛いぞこれ。

「どーせそんなこつたらうとは思ってたよ!!」

「そんな事ってなんだよ!! てか空箱投げやがったな!？」

「ハッ!! 投げて悪い? 乙女心を弄んだ罰だから当たり前でしょ

？」

「俺がいつ弄んだんだよ!？」

「数分前の発言をよーく思い出して見たら? まあそれで分からなかったとしても君が私に口喧嘩で勝てるとは思えないけど」

「ぐぬぬぬ、上手い返しが思い付かない!!」

「慣れない喧嘩をしようとするからだ……」

確かに他人と喧嘩するなんて殆ど無いからなあ……けど弁当箱を投げ付けられたし、どうにかして束を言い負かしたい。

無い知恵を振り絞って色々考えてたら、弁当を食べてたのが屋上だった事もあって、風が俺の頬を撫でて行った。

この風で少しだけ落ち着いた瞬間、頭の中に名案が浮かんだ俺はそのまま屋上の柵の近くまで行くと、校庭や中庭に居る人達に向かって『束が大好きだあああ!!』と大声で叫ぶ。

正面から好きだとか大好きだとか言われてあれだけ照れたんだからこれは効果抜群だろと思った瞬間、後ろから束にチョークスリパーをかけられた。

「こ、ここ、この大馬鹿ツ!! そんな事言ったら変な噂が流れるだろ!?! ただでさえ私やちーちゃんがお前と付き合ってるって噂されてんだよ!?! 自分から燃料投下してどうするんだよ!!」

「はっ!? しまった、つい忘れてた!!」

「はあ……お前と言う奴は……」

千冬の呆れた声と束の焦った声を聞きながら、俺は自分から噂を広めるような真似をした事を後悔するのだった。

小学五年生 14

俺の母さんは結構口が悪いけど、裁縫や料理とかが凄く得意でそれ関連の友人が多い。

親父が言うには昔は家事も何も出来なかったらしいけど、結婚してからはめっちゃくちや上手になったんだとか。

なんで上手になったのか聞くと『恥ずかしい事聞くんじやないわよ』とか言つて拳骨食らうから最近は聞いて無いけど、今日はそれ関連の友人から少しお願いをされたらしい。

所謂コスプレ衣装って奴の製作の手伝いなんだけど、思いの外早くその衣装が仕上がって材料も余ったからって、俺用の衣装を二着作ってくれた。

片方は執事服、もう片方はメイド服なんだけど……両方とも俺用の衣装なんだよなあ。

「なあ母さん、なんでメイド服も作ったんだよ」

「んー？ そりゃ昔の事思い出したからよ」

「昔の事？」

そう言われて、俺がもつと子供の頃に母さん側の実家で『丈夫な子に育つように』と言うおまじないとして女の子の着物を着せられた事を思い出した。

確かまだ写真があつたよなあとか思ってたら、どこからかアルバムを持って来た母さんがその写真を見せてくれたんだけど、俺って分からないくらい女の子してる。

なんで女の子の格好するのが魔除けになるのか聞いてみたけど、母さんはあんまりそういう風習には詳しくないらしく、親父が帰って来たら聞いた話によると、昔は男の子の方が病気になるやすかつたら、女の子の格好をしたら病気にならないと言う考えがあつたらしい。

それが女装をすれば魔除けになると言う風習に繋がり、小さな頃に女の子の格好をしたら丈夫な子に育つと言う話になったと教えてくれた。

「……………という事は今の内に一夏君に女の子の格好をさせれば将来丈夫な男の子に成長してくれるって事？」

そう考えた俺は次の休みに母さんが作ったメイド服を持って千冬の家に行ったんだけど、千冬に女の子の服を持ってきた事を不思議がられてしまった。

「唐突に遊びに来たと思ったら……………私にコレを着せに来たのか？」

別に着るのは構わないが、着たことが無いから時間がかかるかもしれないぞ？」

「んにゃ、今日は一夏君にコレを着せに来たんだよ」

「……………一夏は男だぞ？」

「うん、知ってる。だから着せるんだよ？」

男の子にやる魔除けだから別に変な事を言っていないと思うんだけど、千冬が本気で戸惑ってる。えっ？俺何か変な事言った？

「……………私は束の様にニュータイプじゃないんだ。頼むから話の過程を省くのをやめてくれ」

「うーん、魔除けのため？」

何時もの癖が出てたらしいので、取り敢えず親父から聞いた話をしたんだけど、案外一夏君は女装が似合う。

メイド服は俺用のサイズだからちよつとぶかぶかだけど、顔立ちが千冬に似てるからコスプレ用のカツラをつけてあげれば十分女の子っぽく見える。

最初はちよつと嫌そうな顔してたんだけど、俺が女の子の格好して写真を見せてあげたら真似して着てくれた。

「これで一夏君も丈夫な男の子の仲間入りだ!!」

「わーい!! にーちゃんと一緒ー!!」

「本当に効くのか? その魔除けとやらは」

「まあ古いおまじないらしいし、束なら『今時そんな迷信を信じるの?』とか言つて馬鹿にして来そうなものだからねえ、どれだけ効くのかは分かんないけど気持ちの問題だよ」

「病は気から、だな」

そんな風に千冬と話してたら、ちよいちよいと一夏君に服の裾を引かれて見上げられた。

「どつたの一夏君?」

「にーちゃんもしないの?」

「うーん、じゃあ千冬の服借りていい?」

「分かった。じゃあ少し待て」

そう言つて千冬は自分の服を脱ごうとしたので慌てて止めて、タンスの中から丁度良さそうな服を探したんだけど、スカートが無かったからあんまり女装つて感じにはならなかった。

それでも一夏君は満足だったらしく、今度は千冬に向かって『ねーちゃんも!!』と言つて俺の服を千冬に渡してる。

渡された側の千冬も素直に着ようとしたみたいだけど、他人の服を着る事に少し抵抗があつたのか、俺の服の匂いを嗅ぎ始めたんだけど……中々服から顔を上げない。

「……なあ千冬? 流石にちよつとくらいならともかく、ずっと匂いを嗅がれるのは恥ずかしいんだけど?」

「す、すまん。つい!!」

そう言つて顔を上げた千冬はかなりテンパってたのか、俺が居るの

にも関わらず勢いよく服を脱ぎ始めた。

慌てて俺は後ろを向いて千冬の着替えを見ない様にしようと思っただけ、姿見があった所為で着替えてる最中の千冬の姿が見えてしまう。

肌が白くて綺麗だなあとか思いそうになったけど、鏡越しの視線に気が付く子だから目を瞑って着替えが終わるまで待った。

着替え終わった千冬は服装的にあんまり普段と変わらなかつたけど、俺の服を着てるだけで何となく何時もと違って見える。

折角なので三人で写真を撮っただけど、この日の服のとつかえっこが一夏君は気に入ったらしく、別の日に箒ちゃんと服をとつかえっこしたり、千冬の服を着て遊びに来たりして、しばらくの間妙な癖がついてしまった事を後になって知るのだった。

小学五年生 15

今日はなんとなく束の家遊びに来ただけ……結構雰囲気重い。

というのも、何でか知らないけど箒ちゃんが『私怒ってます!!』って感じでほっぺを膨らませてアピールしてて、束が話しかけてもずっとそっぽ向いて無視してるから、段々と束が涙目になっててさっきから何も話せてないんだよね。

どうしようかと考えてると、横の束に肘で突かれて何とかしろと言うアイコンタクトが飛んで来た。

不器用な束だと全然上手く不機嫌の理由を聞けなかったんだろうなあ、と思いつながらアイコンタクトがバレない様に箒ちゃんにそっと耳打ちをする。

「ねえ箒ちゃん？ 俺だけに内緒で怒ってる理由を教えてくださいませんか？」

「……あのね？ ねーさんがあそんでくれないの」

「あの束が？ 世の中で一番箒ちゃんが好きって言うてるくらいなの？」

「でも!! ねーさんはきのうもあそんでくれなかったもん!!」

ヒソヒソ話だからか、箒ちゃんの不満を知る事が出来ただけ……これって束の所為なのかなあ？

言われてみれば最近色々忙しいらしくて学校や道場くらいしか会わないんだけど、家でも帰るのが遅くなってるって事を言ってた様な気がする。

箒ちゃんが拗ねまくってる理由も多分その忙しくて遊んでくれないって部分なんだろう、ただコレを束に伝えたくても『ないしよだよ!?!』って言うって教えてくれた反面、中々伝え辛い。

……俺に対してはニュータイプ能力発動してるのになんで箒ちゃんには発動出来ないんだろう？

「だから私をそんな変なカテゴリーに入れるなつての」
「やっぱニュータイプじゃんか、その調子で箒ちゃんの事も理解してみろつて」

「君の表情とか雰囲気を考えてる事を察してるだけで、意思疎通が出来てる訳じゃないからね!？」

「えっ? てことは束は俺の事をめっちゃくちや理解してるつて事?」

やだ照れる。とか思った瞬間束からめっちゃくちや鋭い視線で睨まれて黙らされた。完全に『お前が構いに来るから覚えただけ』って感じの意味が込められてるよねこれ?

箒ちゃんと同じような態度でふいつと顔を逸らす束、そしてそんな束を見て俺と遊んでると感じたのか、さっきまで会話してくれてた箒ちゃんがまた膨れっ面になってしまった。

しかもむっすーとした顔で涙目になりつつ、俺のお腹をぽかぽかと叩きながら上目遣いで抗議して来たから、箒ちゃんを除け者にして遊んでると思われたらしい。

「ご、ごめん箒ちゃん!! 除け者になんてしてないから!!」

「にーさん、嫌い!!」

「何箒ちゃんを泣かせてんだよ馬鹿!! ほーら箒ちゃん? おねー

ちゃんの胸に飛び込んでおいで?」

「ねーさんも、嫌い!!」

「何で!？」

「ほ、ほら箒ちゃん!! 束も一緒に遊んでくれるから!? ね? おままごとでも鬼ごっこでもなんでもするからさ!!」

「そ、そうそう!! 今日研究所の人達からの連絡はないし、特に私がやんなきゃダメな事は片付けて来てるから一日中遊べるよ?」

「……ほんと?」

「ほんとほんと!! なっ束?」

「うんうん!!」

小さい子だからか、俺たちが必死にそう謝っていると少しずつ機嫌が良くなって行く箒ちゃん。

膨らんでいた頬つぺたが徐々に小さくなって行つて、笑顔を見せてくれた彼女は、俺たちへ小指を差し出して指切りをねだつて来た。

別に約束を破る気は無いし束も元々そのつもりだったのか、俺たちは普通に指切りをしたんだけど……この後箒ちゃんが言ったセリフを聞いた俺は、アニメとか漫画を持ち込み過ぎたと少し反省する事になった。

「ゆーびきーりげーんまーん。うーそついたーらにえたなまりのーます、ゆびきつた!!」

「待って箒ちゃん!? 煮えた鉛つて言葉どこで覚えたの!? 流石の束さんもビックリだよ!」

「多分神奈川県川崎市の赤いヒーローじゃね?」

「この馬鹿!! 明らかに箒ちゃんが悪影響受けてるだろ!」

「大丈夫だつて!! 絶対意味分かってないから!!」

その証拠に箒ちゃんはなんで騒いでるのか分からないらしく、キョトンとした顔をして首を傾げてるし、束にも『ねーさん、にえたなまりつてなあに?』って聞いてるからやっぱ分かってないっぽい。

多分とりあえず怖い事つて事はなんとなく分かったから、それを言つとけば約束守つてくれるつて発想なんだと思う。

しばらく箒ちゃんに影響の出そうな漫画とかアニメを持ってくるのはやめようかなつて思いながら、嬉しそうにおままごとの道具を持ってきた箒ちゃんを見てみると、束の携帯が鳴った。

「束ー携帯なつてるよー?」

「……研究所の人からだ」

東は『どーせまた融資が断られたって話でしょ……』とか言いながら心底嫌そうに電話に出ただけで、見るからに機嫌が悪くなつて見たことが無いくらい笑顔になり、『やつつたああああ!!』と叫びながら抱き付いて来た。

「融資が取れたって!! 開発の許可も降りたって!! 部品の発注先も見つかったって!! やつと、やつとだよ!! やつたああああ!!」

「お、おう、何作ってるのか知らないけど良かったな?」

普段箒ちゃんにやってる様な感じで、東は俺に頬ずりしながら嬉しさを爆発させている。

箒ちゃん以外の事でこんなに東が喜んでるのは初めて見るから、結構新鮮だったんだけど、全力で抱き付いて来てるからか少し苦しかった。

そんな事を思いながら箒ちゃんを見ると、また仲間はずれにされたと勘違いして膨れっ面になっていて、それを宥めると嬉しさが爆発した東に苦勞する事になるのはまた別の話。

幕間：兎の秘密 3

インフィニット・ストラトスの開発が本格的に始まり、私は研究所で各機能の開発と理論の再構築に追われていた。

当初の設計図だとコストが掛かり過ぎたり、フレームの強度が足りなかったりと、細かな問題の修正をしなきゃいけない、これからも当分は忙しいだろう。

今はISの機能の一つのハイパーセンサーの開発を進めているんだけど……思うような結果を出せていない。

恒星間の位置把握や搭乗者のバイタルチェック、視界を全方位に広げる機能などを盛り込んでるんだけど、エラーや性能不足が多くて困る。

「……つと、再調整終わり。視界はどうなったー？」

「さつきよりは広がりましたけど……魚眼レンズみたいな感じで若干景色が歪みますね、後真後ろが視認できません」

「ちえー、また作り直しなあ……」

技術試験用のゴーグル型ハイパーセンサーをテストしてくれている人に声を掛けたけど、返って来た答えは私の望むものじゃなかった。

色々な事を気にせず一から十まで私が作ればこの問題自体は解決できるんだけど、それだと結局私一人で作り上げる事になるし、利権絡みでも多方面へ角が立つ。

妥協や不満を飲み込んだ上で今があるのだから、私がやるべきなのは現行の技術から離れすぎない範囲内での問題解決。

彼じゃないけど、ちよつとした縛りプレイをしてる様な気分だよ。

「やあ、調子はどうかな？」

「天王寺さん……まーだまだ実用化は先かなあ」

ぐーつと背伸びをして体の疲れを解しながらお茶を淹れて来てくれた天王寺さんに返事をしたけど、実の所型が出来始めてるからこのハイパーセンサーに関しては時間の問題だと思う。

そんな風に考えていると、少し考え事をしていた天王寺さんが口を開いた。

「実用化はまだ先かあ……束ちゃんなら新技術とかで何とか出来るじゃない？」

「出来るには出来るよ？ でも人は魔法を信じないからね」「魔法？」

「SF作家アーサー・チャールズ・クラークのクラーク三法則にあるでしょ？ 『充分に発達した科学技術は、魔法と見分けが付かない』つてさ」

私が全てを一人で仕上げない最大の理由がこれだ。

人は科学を信じて魔法を信じない、他人に理解出来ない発展した科学技術は魔法の様に異端視されて理解しようとする気すら起こさせないのは人類史が証明している。

だから私が夢を叶える為にはISが科学の範疇である必要がある、最終的なスペックは魔法の域に持つていくとしても、一発目の機体がそこまでである必要は無い。

そりゃ確かに高性能に仕上げたいと言う気持ちは私にだってあるよ？ だけどそれで認められなかったら何の意味もないでしょ？

「ま、そーいう訳だから、私はそんなに焦って無いかなあ」

「成る程ね、じゃあハイパーセンサー以外の話に移ろうか」

「あー、やっぱダメだった？」

「うん。ISのコアなんだけど、材質が悪かったのか、試作品を起動して数分で動かなくなったよ」

「むう、既存の材質じゃダメなのかなあ……」

ISの開発が始まったばかりだから躓くのは仕方ないにしろ、ハイパーセンサーよりも先が見えないのはISの核となるコアの製作。

これに関しては当初予定していた材質と予定通りの製法で仕上げただけで、いざ作ってみると不具合が多くて私でもどこから手直ししたらいいのか分からないレベルで少し悩んでる。

ISを動かすだけなら他にもやりようがあるんだけど、宇宙空間で活動する以上機械的なサポートだけだと不測の事態が発生するかもしれない。

だからIS自体に意識を持たせ、ある程度の自己進化を可能にする事でより自在に活動が出来る様にしたんだけど、そのコアへ意識を持たせると言う部分がネットクになってる訳で……いつそ誰も聞いた事の無い素材でも使おうかな？

「けどそんな材料……あるのかなあ？」

「束ちゃん？ そろそろ時間だろう？ 後の事はこっちでやるから

君はウチに帰りなさい」

「あ、もうそんな時間かあ……じゃあ箒ちゃんに怒られる前に帰ります」

時間的にはまだ夕方になるけど、本格的な研究開発になると深夜まで続くからと、子供の私はキリのいい時間で上がらせて貰う。

少しだけ疎外感を感じるものの、年齢差はどうしようも無いと割り切った私は帰る道すがら、今日は彼が道場に来る日だと思いついた。

——時間的に少し急げば彼が帰るまでには家に着く、そう気が付いた私は不思議と足早に帰路へと付くのがあった。

冬になったから学校行事でスキー体験をする事になったんだけど、実は俺は昔からこのスキー体験が楽しみで仕方なかった。

と言うのも、俺は毎年冬になると家族旅行でスキーをしに行くから東や千冬に対してある程度リードをしてる。

つまり!! 普段は教わる側の俺が唯一あの二人に対して教える側に回れる日と言う事!! この日の為に俺はマイスキーウェアだってちやーんと用意してきたからな!!

だからスキー場に着いてから真っ先に着替えて二人を待ってたんだけど、俺のやる気に反して肝心の二人が中々来ない。

委員長だから集場所に一番乗りしたんだけど、浮かれて無いで二人の様子を見に行った方が良かったかな?

結局時間も近くなって来たから先生に二人を探して来いと言われて宿の女子部屋の方に向かったんだけど、案の定と言うか何というか、東と千冬の班部屋の中から二人の言い争う声が聞こえてる。

「だ〜か〜ら〜!! 私はこんな誰が着たのかわからない貸し出しのスキーウェア着るのはイヤだってば!!」

「だったら自前の物を用意すれば良かったじゃないか!! そうしなかった以上、これを着るしか無いだろう!!」

「よく考えてよちーちゃん!! 学校行事くらいでしか使わない物をお父さんやお母さんに買ってって言えると思う!?! そこそこな値段するんだよ!?!」

「だ・か・ら!! ブツブツ文句を言わずに貸し出しの物を着ると何度言わせるんだ!!」

「嫌だから行かないって言ってるでしょ!! ちーちゃんの分からず屋!!」

ドタバタと部屋の中から暴れる音とヒートアップする喧嘩の声、取

り敢えずタイミングを見計らって部屋のドアを開けたんだけど…… スキーウェアを片手に握った千冬が束を馬乗りになって押し倒して
る所だった。

「えっと、落ち着いた？」

「……一応」

「……そうだな」

取り敢えず集合時間まではまだ少しだけ時間があるので、二人から話を聞いて見たんだけど、さつきドアの外から聞こえて来た内容が大体の物らしく、単純に束が貸し出しのスキーウェアを着るのが嫌だと言って千冬と喧嘩してて遅れたらしい。

『だって貸し出しってことは不特定多数の人が着てるんだよ!! なんでそんな物を私が着なきゃいけないのさ!!』とは束の談。

まあ確かに束に貸し出されたウェアは少しくたびれ気味で、襟元にも汚れが目立ってるから束からしたら少し抵抗があるのかも。

「君がなんと言おうと絶つ対私はそれ着ないからね!!」

「私も説得しようと思っただがさつきからコレでな。もうほったらかして行った方がいいんじゃないか？」

「うーんでもそんな理由で休まれるのもなあ……」

言い出したら頑固な束の事だから、着ないって言ったら絶対着ないし行きもしないし……でも要はこの貸し出しのウェアが嫌ってだけだろ？ 本人も別にスキーが嫌とは言ってないし、俺が使ってるウェアなら誰が使ったのか分かってるだろうから束も着るんじゃないかな？

「てな訳で束、俺のウェア貸すから早く行こうぜ？」

「えっ？ 君は二着も持って来てたの？」

「ううん、俺の今着てる奴。誰が着てるか分からない方は俺が着る

からさ、ちよつと大きいかもしれないけどこのウェア束に貸すよ。てな訳で着替えてくるな〜」

「えっ？　ちよつ——」

束が何か言つてたけど、気にせず部屋に備え付けられてるトイレの中でささつと着替えた俺は脱いだウェアを束に手渡した。

その時ジトつとした目で千冬に睨まれた様な気がしたけど、急かす様に俺のウェアを抱えた束をトイレへ押し込んだらため息を吐かれてしまった。……何故に？

「取り敢えずこれで一件落着だな!!」

「確かに誰が着たのか分からない物では無いが……一休さんかお前は」

「ええ……だってそろそろ集合時間だし、俺早く滑りたいからこうするしか無くね？」

俺の奴か貸出の奴かの二択なら多分俺の奴を着るだろうし、着て出てきた所を問答無用で連れ出したら言いくるめられる前に集合場所まで連れてけるし、多分これしか無いと思う。

説得しようにも口論で束に勝てる気しないし、寧ろ負けた後に適当な理由で納得させられて先生のところまで行かされる自信がある。基本俺バカだし。

だから余計な事は考えずに強引に押し切る!!　もしこれでも着なかつたら最終手段として千冬と二人掛かりで着替えさせて外に運び出すのが一番!!

「てな訳で千冬さんや、いざとなつたら強制連行。OK?」

「結局力技か……」

「……そんな事しなくても、着替えて来たから」

ガチャリとトイレの扉が開くと、そんな言葉と共に俺のウェアを着

た束が若干顔を赤らめながら出て来たんだけど……まあ、その、ね？
改めて束が俺のウェアを着てるのを見ると――。

「な、何？ ジロジロ見て、私の顔になんか付いてる？」

「なあ束……そのウェアなんだけど、さ？」

「う、うん。その、似合ってる――」

「ぜんっぜん!! これっぽっちも!! 似合ってるねーな!! やっぱ男物だからかな？ 可愛さ全くねーや!!」

束は可愛い系だし、女の子らしい子だから割と何着ても似合うんだけど、こればかりは俺の好みに合わせた奴だから全然似合っていない。

千冬はキリツとしてる美人系だし、体幹もすつとしてるから割とメンズでも着こなせると思うから、千冬の方なら似合わなくも無いと思うんだけどこればかりはしゃーないな。

とか思いつつ、声を殺しながら笑ってる千冬に『先に行くね?』と言うジェスチャーをした後、ぽかーんとした束が俺の感想を頭の中で処理する前に全力で部屋を出て玄関まで走って逃げる。

するとドアを開け放って逃げた俺にハツとなったんだろう、真後ろから『待てこの馬鹿あああ!! 一発殴らせろおおお』と叫びながら束が追って来た。

よし!! 束が小難しい事を言いだす前に何とか連れ出せた!! 後は外まで出て……出て? ……そこからどーしよ? てか靴履いてる時に後ろから捕まる様な気がする。

――まあ捕まったら捕まったでその時だうん。一発殴られよう、そしたら多分気が済むだろうしな。

そう考えた俺は何とか束から逃げ切ろうとしたものの、玄関に着く前に追い付かれてしまい、有言実行と言わんばかりに一発殴られるのだった。

一発殴って気が済んだ束と、後からきつちり用意してきた千冬を連れて集合場所まで行くと、もうみんな集まっていたのか早速インストラクターの人の滑り方の説明が始まった。

千冬は真面目に話を聞いているみたいだけど、束の方は完全にやる気が無いのか暇そうに空を見上げてる。

普段なら注意するところなんだけど、まだつーんとした態度してるから注意しても意味が無いし、下手すると俺に罵倒が飛んで来てインストラクターの説明が聞けない人が出てくるだろうからなあ。

そうこうしてる間に説明が終わり、リフトで滑るポイントまで登る事になったんだけど、実際に滑る順番が束・俺・千冬の順番になった。

話も聞いてないし、滑り方の実践も見えてない束が滑れるのか心配になった俺はこそつと大丈夫か聞いてみたんだけど『大丈夫に決まってるじゃん』と言って自信満々に滑り出して行ったんだけど、マジで滑れててちよつと驚き。

でも先に行ったインストラクターの人のところまでいくだけだからそんなに長い距離を滑る訳じゃ無いし、要領の良い束なら当たり前っちゃ当たり前かと思いきや束がこの後やりそうな行動を千冬に予言しといて、後から束をからかってやろうと思いついた。

「なーなー千冬、束の事なんだけどちよつといい？」

「ん？ どうした？」

「アイツ今ぬるぬる滑ってんじゃない？ んで絶対——」

『滑り終わったらこっち見てドヤ顔するよ』と言いたかったんだけど、来る途中のリフトで千冬と束が一緒だった事を思い出して、思わず黙ってしまう。

そう、束と千冬が一緒だったって事は暇な移動時間で何かしら話し

てる訳だから、話題としては俺に対する愚痴とか嫌味を一方的に束が喋ってる筈。

そんな流れで『あのバカ絶対私が滑れないとか思ってるよね』とか言ってるに違いない、んでもって『きつといざ私が滑り出したら勝手に納得して、滑り終わったらこつち見てドヤ顔するよ?』とか言ってるんじゃない? あいつバカだから』とか千冬に言ってるはず!!

「その手には乗らないぞ千冬!!」

「待て待て!! 何がどうなってるそんな発言が飛び出したんだ!? そもそもさつきは何を言おうとしてたんだ!」

「言える訳無いだろ!」

「言えない事を言おうとしたのか!」

「千冬なら俺が何を言おうとしたか分かるだろ!!」

「無理を言うな!! 私は束の様なニュータイプじゃないんだぞ!」

「そんな事言ってる、俺を引っ掛けたいんだろ? そんなドヤ顔フェイントに引つかからないぞ!!」

「なんなんだドヤ顔フェイントって!」

「ドヤ顔フェイントはドヤ顔をフェイントする事に決まってるだろ!!」

「頼むからもう少し会話の余地をくれ……」

やんややんやとした言い争いをしてて気が付いたけど、何となく千冬の様子から隠し事してる様子が感じなかったから、多分俺の思い過ごししなんでしょう。

「ごめん千冬、俺の考え過ぎだったみたい。俺が言いたかったのは

「次の人ー順番だよー?」

「あ、俺の番だわ。じゃー先に行ってくるなー?」

「……お前も束の事を言えんくらい自由な奴だな」

千冬のため息を疑問に思いながらも、俺は今年の初滑りを存分に楽しみながらインストラクターの所まで滑って行った。

先に滑りきってた束の横に上手く止まった俺は、そのまま束にドヤ顔カウンターを決めてみたんだけど、束は心底アホな人を見る目で俺を見ていた。……流石ニュータイプ、俺の考えてる事が分かったみたい。

「……今私の事を何時もみたいに妙なカテゴリーに入れてただろ？あとそのドヤ顔、ドーせ私が滑り終わった後にドヤ顔するとか考えて、それを予想されてるとか深読みした仕返しでしょ？丸分かりなんだよバーカ」

「スゲエな花丸百点だわ。何でわかんの？」

「上の方でちーちゃんと色々やり取りしてるのが見えてたし、会話と会話の間に君独特の間があったから大体分かるに決まってるじゃん。昨日今日の付き合いじゃないんだし嫌でも分かる様になるって」

手をひらひらしながらそう言う束。完全に俺の行動を読まれてんなーとか考えてると、あっさり慣れた人みたいな滑り方をして来た千冬と目が合った。

「お前ら……初心者なのになんでそんなあっさり滑れる訳？」

「何故と言われても……人の滑り方を見ていたらおおよその滑り方は分かるだろう？」

「束さんは天才だからねえ。そもそもスキーって滑るだけでしょ？何処がどう難しいのか分からないだけど？」

「俺滑れる様になるのに結構掛かったんだけどなあ……」

まあこの二人に運動系で勝てないのは今に始まった事じゃないし今更気になる気はないけどね。

けどどーしよっかなあ……二人にスキーを教える気満々だったんだけど、これじゃ俺が何か教える事は無いだろうし、大人しく一人

で楽しもうかなあ？ 偶には一人で滑りたいし。

そんな事を考えてる内にクラスの人が一通り滑り終わったから自由行動になったんだけど、一人で許可されてる範囲で一番難しいコースに行こうとしたら束に止められた。

「ほら、暇だからさっさと上行くよ」

「えっ？ 俺一人で滑ろうかと——」

「まあ待て。私も束も初心者だから何かあるといけないだろう？

ここは経験者が付いて来てくれるとありがたいんだが？」

「んーじゃあ俺と同じくらい滑れる奴紹介して——」

「はあ？ 何で束さんが見ず知らずの人と滑らないといけないのさ

？ そもそも呼びに行かなくてもお前が経験者なんだから付いて来いよ」

ずるずると両腕を束と千冬に捕まれて引き摺られて行く俺は、まるで捕まった宇宙人みたいな気分で二人に連れてかれてるのだった……。

冬休みになってしばらくしたある日の事。その日は隣のクラスの田中君と斎藤君と一緒に炬燵で人生ゲームをしてたら束から電話が掛かって来た。

今日は急に暇になったから遊びに行く的な事を一方的に言っただけで、さつきも言った様に別の友人がここに居る。その事を伝える前に切られちゃったから一応メールしとこうかと思っただけを考えてたら、軽い足音が階段を登って来て俺の部屋の扉を開けた。

「げっ、他に人居るならそう言っよ」

「電話してから俺ん家来るの早くね？」

「だって君ん家の前で電話したからね」

そう言いながら束は俺の横に座って炬燵の中に足を入れたんだけど、中々ポジションが決まらないのかしばらくもぞもぞと足を動かしていた。

「なー束？ さつきから足が当たるんだけど？」

「えー別にいーじゃん、と言うかなんかあるの？ さつきから足元

でもぞもぞしてるんだけど？」

「みーくんが中で丸まっているからじゃね？」

「だから変なもこもこがあるんだ。まあ良いけどね、で？ 人生

ゲーム？ やるならちーちゃんも呼んでよ」

「うーん、実は面子集めに呼ぼうと思っただけだよさあ……」

実は束が来る前に連絡を入れてたんだけど、携帯の電源を落としてるのかアナウンスが流れるだけで全然繋がらない。

最近ちよくちよく連絡取れない事があるからあんま気にして無

かったんだけど、束も知らなかったのかな？

とりあえず繋がらない事を束に伝えたら、確認する様に千冬へ電話してただけけど、やっぱり繋がらないのか首を傾げて不思議そうにしていた。

「珍しいね、ちーちゃんに繋がらないなんて」

「確かに珍しいけど別に千冬にだって用事があるだろう？ そんな気にする事じゃ無いって」

「うーん、でも……」

俺は特に気にならないんだけど、束は何か引っかかる物があるらしく、難しい顔をして悩んでしまった。

ただ、束なりの答えが出る前にゲーム盤の上を田中君が片付けて駒を置き出したからか、考え事を中断してしまったらしい。

「まあいーや後で考えよ。とりあえず束さんの番からだねー。ちーちゃんが一緒じゃないのは不満だけど、我慢して君達に付き合ってるよ」

「んじや俺が一番なー？ ルーレットだけどダイスロール!!」

カラカラと回る人生ゲーム用のルーレットが止まって、出目の通りに駒を進めたんだけど……止まったマスが不幸マスのところみたいで、かなーりキツイマスに止まってしまった。

「えーっど？ 委員長の止まったマスは……『父親が交通事故で死亡。片親カードを手に入れる』だった」

「うへえ、俺の車からお父さんピン抜かなきゃいけないのかあ……」

「ドンマイ委員長!! いい事あるって!!」

「ちよつと待って!! まだこれ幼年マスだよね!! なんでいきなり人生ハードモードスタートなマスがあんの!? てかそのお前もドンマイじゃ済まないから!! それに片親カードって何!? しれつと

不謹慎なアイテム混ざってない!？」

「東、これゲームだろ？ ちよつと過激なだけだつて」

「ま、まあ、確かに……そう、なのかな？」

そう言つて東は自分の番になったからルーレットを回して、止まったマスで手に入れたのが『超天才カード』とか言うアイテムで、プレイヤー兼進行役の田中君に『なんかの嫌味!』と食つて掛かつた。んで一周回つて俺の番、今度は思いつきり回して良いマスに止まろうとしたんだけど、力を入れ過ぎてまた不幸マスに止まつてしまう。

「えつと？ 『生活の為に働き過ぎた母親が過労死。片親カードを手に入れる。既にカードを持つている場合は天涯孤独カードになる』だつてさ」

「ごめん母さん、この車一人乗りだったみたい」

「委員長運が悪いなあ」

「さつきから不幸マスがエグすぎない!? 子供向けの内容じゃないよ!？」

「なんかリバーブローになってて裏表で子供用と大人用で分かれてるんだつてさ。斎藤君の親戚が勤めてる会社でボツになった奴なんだつて?」

「大人用にしたりつてブラックジョーク過ぎる気がするんだけど!？」

あとリバーブローじゃなくてリバーシブル!! こんなアホみたいな物ボツになるに決まつてんでしょ!？」

「あ、篠ノ之さん? ツツコミ入れているとこ悪いけど天涯孤独カードって手に入れた時にルーレット二回回すんだつてさ、だから委員長回してくんない?」

「ほいほい。……おつ、1と4が出たよ?」

「マジで? じゃあ追加で親戚たらい回しカードと人間不信カードの二つゲットだつて」

「この馬鹿が何したつての!? コイツ悪い事なんて一個もした事ないのに、さつきから踏んだり蹴つたり過ぎるよ!？」

「あの一、あれだよ東。人生山あり谷ありつて奴？」

「さつきから谷しか無いんだってば!! 急転直下の紐なしバンジー!! 緩やかな傾斜とかじゃなくて切り立った絶壁から落ちてるじゃん!!」

ついに耐えられなくなったのか、炬燵の机をバシバシ叩きながら東は不幸マスを一つ一つツツコミを入れてダメ出しし始めた。

まあ確かに東が来る前にやってた子供用のマスでもちよいちよいわ変なマスがあつたにはあつたけど、そんなにツツコミを入れる程かなあ。

結局、裏表全部ひっくり返してゲーム性のダメ出しとか、内容へのツツコミをした東は、よつぽど疲れたのかその一回きり遊んだだけでフラフラと帰ってしまうのだった。

今日俺は篠ノ之道場で実戦形式の試合をしたんだけど……何時に無く荒々しい千冬の剣に手も足も出ずにボコボコにされてしまった。でも俺をしばき倒した千冬はあんまり嬉しそうじゃない、てか寧ろうわの空って感じ？ 試合の最中も首筋とか胸元とか、漫画とかで言われてる急所狙い？ ばつかだったから、なんかあつたのかな？ とりあえず疲れが取れて来て動ける様になったから、のろのろ歩きながら千冬の横に座ったんだけど、集中して考え事してるのか反応が無かった。

「おーい千冬ー？ ちーふーゆー？ 今日のはちよつと剣が荒つぽいけどどーしたのさ？」

「……荒つぽい、か」

「うん。なんつーか、人を守る剣じゃなくてその逆って感じ」

「昨日サバイバルゲームのような事をしていてな。その時の感覚が抜けきってないだけだ」

そう言つて深いため息を吐いた千冬は改めて俺の方を向いて――
「ぼかんとした間の抜けた表情を浮かべていた。」

「ん？ どつたの千冬？」

「いや……えっ？……どうしたはこっちのセリフだ!! 何故女装してるんだ!？」

「えっ？ 今更？ 今日俺朝からウィッグと化粧してたんだけど……」

今は道着に着替えてるからあんまり女装って感じは出てないけど、私服もちゃんと女の子用の物を揃えて来たからてつきり気付いててスルーしてると思ってたんだけどなあ。

「いやあ実は昨日テレビで性同一性障害？って奴の番組がやってるの見てさー。そう言う心と身体の性別が違う人の気持ちをどうやってら分かってあげられるのかなあって思ったから取り敢えず女の子になつてみた」

「普通は抵抗があるものじゃないのか？」

「んー、俺は特にないかなあ？　ただ束からは『酷く浅はかな事考えたね』って言われたけどな」

「で？　女の気持ちは分かったか？」

「うんにゃ、ちーつとも。でもまあ何事も形からって言うだろ？」

それに、やってみてダメだからもういいやってのはあんまり好きじゃない。どーせオレは束や千冬ほど頭良くねーから馬鹿なりにやる努力って奴をした方が為になるからさ。

そんな風な事を胸を張って千冬に言ってみたら、暗い雰囲気や和らいで少しだけ笑顔になった。

「まったく……お前と話していると悩んでるのが馬鹿らしくなってくるよ」

「おっ？　褒められた？」

「ああ、褒めたんだ」

「そっかそっか!!　いやあそれほどでも無いかなあ!!　何をどう褒められたのか分かんないけど!!」

千冬に褒められる事なんてあんまり無いから思わず照れ笑いしてただけど、元気が出た千冬が次にしそうな行動が思い浮かび、笑顔が引きつってしまふ。

「さあ休憩は終わりだ。次の試合も手は抜かないからな？」

「千冬？　今の俺は女の子だから手加減はするべきだと思うんだ」

千冬は体力が回復したかもだけど、肝心の俺はまだ全然へろへろだから今やつても千冬の攻撃を捌けない。普段から千冬との試合は防戦一方になるのに、絶好調の千冬と試合なんてしたら俺はきつと口が聞けなくなる。

だから手加減を要求しながら女の子っぽい笑顔を作って愛想笑いをしてみたんだけど、千冬はその顔を見て何か思うところがあつたのか『早く立て。癖になる前に自分が男だと実感させてやる』と言って俺を引きずって行った。

「いやーだー!! 俺はまだ休むんだー!! 女の子だからまだ休むんだー!!」

「私も女だぞ? その女がこうしてピンピンしているのだから男のお前が回復していない訳あるか」

「サンドバッグにする側とされる側じゃ疲れ方が違うからね!」

「ならお前も私をサンドバッグにしたらいじやないか」

「それが出来たら苦労しないってば!」

———そんな抗議も虚しく結局またしばき倒された俺は、稽古が終わるまで足腰が立たず、申し訳なきそうな顔をした千冬と一緒にふらふらと家まで帰っていた。

折角の可愛い服装や小さなポーチも今になったら動きにくいし邪魔でしかない、スカートもミニにしとけば良かったんだけど、寒いからってロングにしたのが間違いだったなあ……。

「本当にその格好で道場まで来たのか……」

「ゆ、有名無実って、言うだろ……?」

「それを言うなら有言実行だ」

「ま、まーねー……」

「……その、すまない。少しやり過ぎた」

「うん、まあ、気にしないから大丈夫だって」

そんな風にしよんぼりとした千冬を慰めつつ家まで送ったら、丁度一夏くんが帰りを待ってたところだったのか、玄関の扉を勢い良く開けて千冬に抱きついて出迎えてくれた。

「ちふゆねえ!! おかえりっ!!」

「ああ、ただいま。一夏」

「やつほー!! お出迎え出来て偉いね一夏くん!!」

「にーちやつ……にーちゃん? ねーちや……にーねーちゃん?」

出迎えてくれた一夏くんは声で俺だったのは分かっただけ、格好が女の子だから目を丸くして俺を見てたから、ウインクしながら目元にピースサインを持って来たんだけど、知らない人を見る目で見られてしまった。

「……すまん、一夏が混乱してるようだから今日は早く帰ってくれないか?」

「あ、あはは、じゃあまたな?」

千冬に抱きついて隠れながら、顔を半分出してこっちの様子を伺ってる一夏くんを手を振って挨拶した俺は、女装は失敗だったかなあ……とか考えながら自分の家に帰るのだった。

——今更言う事じゃ無いけど俺は二刀流を学んでる。

千冬に勝つ為に二本使ったら二倍強くなるんじゃないかね？みたいな発想で始めた二刀流だけど、実際に使うのは右手の竹刀だけで、左手の竹刀は防御とか牽制に使ったりするだけなんだよねえ。

いい加減長い付き合いになって来た千冬から未だに一本も取れない事を考えると……もしかして二本使っても二倍強くならないだろうか？

ふとそんな不安が頭に浮かんだ俺は、左右に並んで下校してる二人に向かって俺の二刀流について聞いてみた。

「……てな訳でどう思う？ 二人とも」

「いやどう、と聞かれてもな……」

「ねえ？ 私普段から言ってるよね？ 過程を省くなってるよ。なのになんで改善されるどころか悪化してるんだよ。流石の束さんもその入りから君の思考を辿る事なんて出来ないんだけど？」

「えっ？ そのまんまの意味だけ？」

「圧縮言語を更に圧縮したのか……束、通訳を頼む」

「無理、ヒントが無さ過ぎるよちーちゃん。……とりあえず一から話してくれない？ 君の圧縮言語に負けるのはすっごく癪だけど」

「一からって言われてもなあ……」

二人に話題を振ったのは確認の意味が強いから実際に言い直してまで聞こうって感じじゃないんだよねえ。

実際問題千冬には全敗してるから俺の二刀流二倍強い説は否定されちゃってるし、そうなると思しろ二人に聞きたいのは『どうやったら強くなれるのか』とかかな？

うーん、でも別に俺って武士になる気ないしなあ。千冬に勝ちたいだけだし、強くならなくても別に良いっちゃ良いし……するってーと

千冬に勝つ方法？

でもなあ、本人に聞くのもなんか違う様な気がするし、東に聞いて教えて貰った答えを俺が実践できるか分からないし、そもそもそれで勝っても俺が勝ったんじゃないやなくて東が勝ったって感じになるだけだろ？

なーんかそれは東に頼り切ってる様な感じがして嫌だし、やっぱ俺が強くなる方法を聞いた方が良いかなあ。

そうになると、千冬の鋭くて速い攻撃を捌く方法が必要になるんだろ？ どーやるかはともかくとして、前みたい握力無くなるまで竹刀を受けてたらこっちが持たないのは身をもつて知ってるから……受け側の左手を鍛えるとか？ うん、何となくそれっぽい答えだし試しに聞いて見ようかな!!

「……取り敢えず俺右利き辞めるわ」

「ねえ大丈夫？ 勝手に話ぶっちぎってない？ 東さんの経験則的に頭から話す前に話題が自己完結しちゃって次の段階にシフトしてる気がするんだけど気のせい？ あと右利き辞めるってほんつと何の話!？」

「……これは何時ぞやのドヤ顔キャンセルにちなんで説明キャンセルとでも呼べばいいのか？」

どうもまた俺の悪い癖が出ちゃったみたいで二人が完全にテンパってたから一から順に話をしたんだけど……『だーかーらー!! 過程を省くなつて言ってるんだろ!! 一生注意しなきゃ治らないの!!』つて東に揺さぶられながら言われてしまった。……東なら伝わるって思っただけだなあ。

「まーそんな訳で、俺の右手は封印されし右腕になるからそこんこよろしく!!」

「それするのは別にいいけどさ……おばさんに怒られるんじゃない?」

「それ以前に左手一本で生活できるのか？ 試しに左手で名前でも書いてみる」

そう言つて、千冬はランドセルの中から鉛筆とノートを取り出してこつちに差し出してきた。

東や千冬は何の苦労も無く左手で字が書けてるんだし、別に難しい事じゃないだろうと考えた俺は、近くの塀にノートを押し付けながら余白の部分に自分の名前を書き込む。

それでバツチリ書けた事を胸張つて二人に見せたんだけど、二人が露骨に眉を潜めて俺の字を凝視してる事に気が付いた。

「あれ？ どつたの二人とも」

「その……なんだ。無理に左手を使えるようにならなくても良いんじゃないか？ 左利きになったからと言つて剣の腕が上達する訳では無いからな」

「ちーちゃんはどーして無条件に庇うのかなあ……。そもそも君のスタイルは剛の剣というよりは柔の剣なんだから左手鍛えるよりも柔術鍛えた方が良いんじゃない？」

「うーん、二人が言うつとそうなのかなあ」

妙案だと思つたんだけど、俺より圧倒的に強い二人にそう言われたら何となくそうなんだろうなあ。

けど柔術なあ……。親父の店にあつた世紀末漫画でも激流を制するのは静水とか言つてたし、千冬に勝つにはそれで行くしか無いんだろうけど、俺にあんな動き出来るのかな？

「なー二人とも？ 俺瞬間移動とか出来ないよ？」

「……………今日は意味不明さが絶好調だな。決して褒めてる訳ではないが」

「流石のちーちゃんも庇いきれないのかあ……。あとね？ 君の家にいる世紀末格ゲーみたいな動きは現実で出来ないからね？」

そんなツツコミと束のアホを見る目をビシビシ受けながらも、俺達は適当な話題に話を膨らませながら帰り道を歩くのだった。

……あと、こっそり左利きになれる様に訓練しようとして左手でご飯食べてたら、ボロボロ溢して母さんに拳骨くらった。やっぱ束はエスパーじゃん。

幕間：兎の秘密 4

—— 紆余曲折はあったものの、ISの製作自体は順調に進んでいる。

まだ飛行実験までは出来てないけど、歩行実験やパワーアシストなんかの試験にはパスできてるから、ハード面に関しては四割弱の完成度と言った所だろうか？

しかし、それに反してコアの問題は未だに解決出来ていない。

仮にコアへ意識を持たせる事を諦めたとしても、既存の材質だと常識的な出力しか出せず、搭載予定の各種機能が圧倒的なエネルギー不足を引き起こす事が分かった以上、コア自体の設計を一度見直す必要があるかなあ？ 今のままだと搭載予定の絶対防御はおろか飛行すら危ういし。

この問題は正直誤算—— いや、自分のやれる範囲でISを形作ってくれているみんなに対してそれは失礼かな？ 誤算と言うより、自分との技術力の差を把握しきれいでなかった私自身の見通しの甘さが原因だろう。

解決策としては二つ、一つはIS全体の性能を目標としてるスペックから更に下げる事。

それなら現状のエネルギー不足に関連した問題を何とか出来るかもしれないけど、さっきも言った通りスペックの低下は搭載予定の技術を諦める事とイコールな訳で……。

宇宙空間での不測の事態から身を守る為の絶対防御や、地球や衛星なんかの位置を正確に把握する為のハイパーセンサーは最低限搭載しなきゃだし、搭載したらしたでこの案だと絶対防御が一回発動するだけで一気に安定感が消えてしまう。

二つ目は私が新素材と新技術を使って完璧な代物に仕上げる方法。

—— 魔法扱いになるのが目に見えてるから却下、論外。

「うーあー……どーしよっかなあ……思い付く限りの素材で試し

「ちやつたしなあ……」

急いで作る気は無いにしろ、コアありきのIS製作なのだからここがしつかりしてないと無駄に高価な宇宙服にしかないし、なんだから行き詰まってる感が凄い。

そんな風に自分の部屋で寝転びながらあーだこーだと解決策を考えていると、玄関のチャイムが鳴った。

下にはお母さんと箒ちゃんがいるし、足音も玄関に向かってるから対応してくれるだろうと思っていると、そのお客さんの足音はこつちに向かって歩いて来る。

その音の軽さから察するに彼が遊びに来たのだろう、とりあえず一日中ゴロゴロしながら考え事に耽ってた所為でボサボサになってる髪を軽くセツトしてから扉を開けたんだけど……。

「メリー・クリスマス!!」

「……………女装の次はコスプレに目覚めたの?」

扉の向こうには赤いサンタ服に身を包んだ彼の姿があり、無駄に膨らませたある白い袋を担いだ状態でそんな事を言われた。……ほんつとコイツの頭の中ってどうなってるんだろ?

と言うか、玄関から入って真っ直ぐこつちに来たって事はその時点でこの格好だったって訳だよな? 自分の家からコスプレした状態で出歩いてんの? コイツ。

「で? そんな格好で何しに来たわけ? コスプレ見せに来ただけなら鼻で笑ってあげるよ?」

「あのな東、俺はサンタクロースだぞ? サンタは良い子にプレゼントをあげるお仕事なんだからプレゼント配りに来たに決まってるじゃん」

そう言つて、彼は袋の中に手をつ突っ込んで何かゴソゴソと探してた

らしいんだけど、適当に入れてたのか『あれっ？ どこ行ったのかな？』とか呟きながら綺麗に包装されたプレゼントを私に差し出してきた。

「ほいプレゼント」

「……どーしてもって言うなら、貰ってやるけど？」

「んじゃ、どーしても貰って欲しいな」

「……ふん」

私の嫌味にも気が付かない能天気な馬鹿からのプレゼントを受け取り、これ見よがしに目の前で開けてやると、中身は動物型のクッキーと見た事の無い小さな結晶片がデコレーションされたボールペン。

クッキーは彼のお手製だろうけどボールペンの方が分からない、けどこれを直接彼に聞くのは負けた気になるから自力で――。

「そのボールペン俺がデコったんだぜ？ 確か……る、る、ルクセンブルク公国？ ってところに旅行で行ったから記念に作って来たんだよ」

「……ルクセンブルク？ ヨーロッパにでも行ったの？」

「あれ？ ルクセンブルクじゃなかったっけなあ……なんか似たような名前だった様な気がするけど思い出せねーや」

彼はあっけらかんとそんな風に言っただけで笑ってから、また別の知り合いのところにプレゼントと称してクッキーを配りに行くのか、そのまま帰って行った。

………毎度毎度、彼の即決即行動には振り回されてばかりな気がする。

クリスマスでも忙しい奴だなあと呆れていた私はすっかりコアの事で悩んでいた事を忘れ、下でお母さんと一緒にクリスマスツリーを出している箒ちゃんのところへ向かうのだった。

小学六年生 1

桜並木を歩きながらふと思う。そーいえば束と千冬に出会ってもう六年経つんだなあって。

いやそれがどうしたって訳じゃないんだけどさ、なんだかんだでよく遊ぶから毎年毎年なんとなくそう感じちゃうんだよねー。

千冬にマシンガントークをしてる束をチラッと見るとコイツも良く笑う様になったなあと実感する。ただ、こうやって見るとふっつーに俺の視線に気がつくんだよなあ。やっぱ達人だわコイツら。

「何？ さつきからチラチラ見て、私達になんか付いてるの？」

「ふむ……見たところそんな様子は無いが……強いて言えばさくらの花びらくらいか？」

案の定チラ見してるだけなのにあっさりバレた。いや別にバレてもいいんだけどさ？ 何時もの事だし。

けど何か付いてるかって言われても千冬が言ってた通り、束の髪に花びらが絡まってるくらいだしなあ。そもそもチラ見してたのだから何となくだし、うーん。

取り敢えず目に見えた花びらを取る為に束の髪の中に手を入れてそこから一枚取ってみる、それぐらいしか思いつかないし。

「ん？ 何？ わざわざ花びらくらい言ってくれたらいいのに？」

「いや別になんも考えて無かったし……強いて言えば目に付いたのが花びらだったから？」

「お前の頭は空っぽなのかよ……」

そう言っただきなため息を吐く束を見つつ、今度は千冬の後ろ髪に絡まってる花びらを取ってみる。

二人とも髪が長いからこうやって花びらを取ろうとすると髪を触

る事になるんだけど、何とというかこう、不思議な感じ。

千冬も髪が伸びたから結構触りごたえ？みたいなものがあるんだけど、なんだろう？ 髪質が違うのかな？ 束と千冬の髪の触り比べを何となくしてみるんだけど、段々と自分でも何がしたいのか分からなくなってきた。ただ何故か千冬は髪を触ってる間は緊張した様な感じだった。なんでだろ？ 何時もの事なのに。

そんな風に考えながら暫くずっと髪をさわさわしていると、猛烈な衝撃が脇腹に突き刺さり、思わず膝を突いてしまった。

何が起きたのかは言わなくても分かる、千冬は絶対こんな事しないし、なんならずっと髪を触らせてくれるからさ。

「は、犯人は、お前だ束……」

「いつまで人の髪触ってんだよ」

「まだ十分くらいだろ!？」

「なんで “まだ” なんだよ!? もう十分も触ってんだよ!? いい加減通行人から妙な目で見られてるのに気付け馬鹿!!」

そう言われて周りを見るとなんとなく注目を集めてる様な気がする。たしかに言われてみれば右手で千冬、左手で束の髪を触りながら十分も歩いてたら……うん。まあ変な奴だ。

謝りながら立ち上がった俺は、脇腹をさすりつつジト目で睨んでくる束の視線から目を逸らす。

「まったくもう。六年生なんだよ？ もーすこし脳味噌使って生活したらどうなのさ。君には落ち着きが足りないんだよ落ち着きが」

「えっ？ 俺興奮してないよ？」

「そーいう意味の落ち着きじゃないっての!! 大体お前はさあ!!」

ガーツと怒りながら俺への文句を言う束、聞き流すと更に怒るからちゃんと聞いてただけど、その時にふと気が付いた。

普段ならこのやり取りの合間に千冬が仲裁に入ってくれるんだけ

ど、今日は何故かそれが無い。別に助けて欲しい訳じゃ無いんだけど、千冬の仲裁も含めてお決まりのパターンになってたから何となくチラツと千冬の方を見ると、なんかわたわたしてるのが見えた。

多分仲裁に入ろうとしてるんだろうけど、なんでかそれを躊躇ってるっていうか……………なんだろう？

「えっと、千冬？　なんでそんな妙な動きしてんの？」

「何でもない、はずなんだが…………」

千冬にしては齒切れが悪い返事。普段からこういう反応をする時は大体自分の事で戸惑ったり、分からない事があったりする時だから何か悩んでるのかな？

流石に束も様子がおかしい事に気が付いたのか俺への説教をやめて千冬の方を向いている。

「どうしたのちーちゃん？　何か悩み事？」

「悩みは無い。…………はずだ」

「うーん、でも悩みがないって顔じゃないよ？　俺で良かったら力になるけど、なんか困ってたなら相談してよ」

そう言って近付いた瞬間、千冬は何故か一步下がった。

「えっ？　俺なんかした？」

「い、いや、何もしていない」

「……………キミの肩に毛虫乗ってるからじゃない？」

「うえっ!?!　まじで!?!」

思わずシャツの袖を引っ張ったら本当に毛虫が乗ってたのかポロツと俺の肩から毛虫が地面に落ちる。

踏まれちゃかわいそうだからそこら辺の枝を拾って安全な場所に移してあげてたら、千冬の耳元で束が何かを話してた。

なんか内緒話みたいな感じで喋ってるし、俺が聞いたりしない方がいいのかな？ 束の顔が凄く真剣な顔してるし、変なことしない方がいいかも。

そんな風に思いながら、俺は暫く毛虫君の動きを観察するのだった。

————そーいやさつき膝付いた時も手を出そうとして引っ込めてたよなあ、何でだろ？

小学六年生 2

——最近、千冬の様子がおかしい。

何がどうとは答えられないんだけど、一緒に登下校してる時も一歩引いた距離を保つてたり、妙に上の空だったりって言うか、とにかくそんな細かい部分が気になるんだよね。

………後は、千冬の剣が変わったのもかな？

この間、道場で勝負した時に感じた事なんだけど、物凄く『冷たい』感じがして、千冬らしくないと思った。

こう、なんだろう？ 千冬の剣って、身体能力もそうなんだけど、『技』って言えばいいのかな？ あんな感じで返しとか、先読みとかがしつかりとしててさ、綺麗な剣なんだよ。

んで、束の場合は技術も使うんだけど基本アイツは『見てから反応する』って奴で、動きが完全に読めないから千冬とはこう、別な強さって言うのかなあ？ そんな感じなんだけど、最近の千冬はそっち側に近付いてる気がする。

長年千冬と一緒に剣術学んでたから、俺の感じた感覚は多分合ってると思う。でも、束と違うのは今の千冬はなんていうか……暴力的なんだよね。

この前の手合わせもボコボコにされたんだけど、竹刀越しなので両腕が痺れたし、胴に入れられた一撃で暫く立てなかった。

——その時の千冬が自分の手を見て悲しそうな顔をしてたのが頭に残る。

「てな訳で束、なんか知らね？」

「……あのさあ、真面目な顔で相談しにくるんならその癖をどうにかしろよ」

椅子に座った状態で振り向き、ため息を吐きながら呆れる束に謝りつつ、改めてここ最近俺が感じてる千冬への違和感を口にして行く。

束に相談しに来たのは、千冬との付き合いは俺より長いだろうし、もしかしたら俺には相談してなくても束には相談しているかもしれないと感じたからだ。普段から仲が良いし、男の俺には話せない悩みとかだったら悪いかなあと思って聞いてみたんだけど、話を聞き終わった束は怖い顔をしながら小声でぶつぶつ言っつて、何かを考えたままになってしまった。

「……………の経過と完成度に不満があるからかな？ この前のリアクションが気になって調べた時に連中大分追い込まれてみたいだしあり得る……………か？ けどもしそうなら……………の被験者である以上要求スペックに達しなかったら廃棄？ いやでも大金を注ぎ込んだ以上是非でもプロジェクトは完遂させたいはず、いや、そもそも身体スペックが規定値以上だったから完成品としての。と言う事は外部環境から受ける刺激による精神面の変化が彼らの想定値以上で、その修正を——」

「なーなー束？ 難しい事言っつてねーで千冬の悩みをしつてるのかどうか教えてくれよー」

思わず急かす様に言っつちやっただけど、真面目な考え事をしてる束が考えを纏め終えるまで待つの大分時間が掛かるし、束なら考えながらでも返事を返してくれるだろうからなあ。

「……………多分、ちーちゃんが何を悩んでるのか、私は分かるよ？」

「えっ？ マジで？」

「まあ……………キミには話せない内容だけどね」

「むー、俺が力になれる事も無い感じ？」

悩んでる事を相談して貰えないって事は、千冬は俺が頼りなく感じてる訳だし、コレで束にはつきり無理って言われたら毎日話しかけたりして元気付けるくらいしか出来る事は無いんだけど……………と、考えてた俺に返って来た束の返事は正直言っつて予想外の物だった。

「……………別に、何もしなくてもいいんじゃないかな？」

「……………えっ？」

絶対に千冬は何か悩んでる。コレは俺の感覚だけど、絶対間違っていない自信があったから東に相談に来たし、その事は東にも話してる、なのに何でそんな事を言うんだ？

予想外の言葉に固まって俺の方へ東が椅子から立ち上がり近寄ってくる。ゆつくりとした足取りで俺を目を真っ直ぐに見つめながら、『そもそもさ』と呟き俺の目の前に東は座る。

部屋の中央でカーペットの上に座ってるし、春の陽気であつたかいはずなのに、何でかは分からない緊張感で寒気を感じる。東と俺の距離は膝を突き合わせるくらい近く、そのままグイッと東は顔を寄せてきた。

「……………お前の幼馴染は私だろ？ だったらいいじゃん別に。多分ちーちゃんこのままだと……………キミに分かりやすく言えば近いうちに転校して引越すだろうし？ まあちーちゃんの悩みを解決すれば何とかなるだろうけど？ お前じゃちーちゃんの抱えてる『問題』を解決するのは難しいからさ」

「……………お前、本気で言ってるのか？」

「割と本気だよ？ 昔はちーちゃんしか居なかつたし、ちーちゃん以外はどうでも良かったけど、今はキミが居るからさ。キミだつてそうだろ？ 私やちーちゃんはキミしか居ないけど、キミにとって私達は大勢居る中の一人、極論すれば疎遠になつてもキミの人生に大きな影響は無いじゃん。大人になる頃にはきつとちーちゃんの事は忘れちゃうだろうし、私も……………キミが側に居るなら織斑千冬と存在への興味は捨てても構わないよ」

東がそう言った瞬間、俺は凄い力で押し倒された。

両腕を掴まれた状態で馬乗りになられたからまるで動けない、いき

なりの事に完全に反応出来なかったのも問題だけど、俺を押さえ込んでる束が本気なのが一番の原因だと思う。

だから束の言葉も本気……とは俺は思わない。

確かに束の言葉には力が入ってるし、真っ直ぐ俺の目を見ながら真剣な顔で話してはいるけれど——それ以上に心配そうな顔をしてたら説得力が全然無い。

「束。俺じゃ千冬の悩みを解決するのは難しいって言ったよな？」

「言ったよ。キミじゃ『難しい』って」

「無理じゃ無いんだな？」

「……………うん」

「なら、俺は千冬の力になりたい」

押し倒された状態で言う言葉じゃないけど……俺は束の目を見てはつきりそう言い切る。

その時の束の顔はとても複雑そうな表情で、俺の返事を予想してたのと一緒に悲しい顔を浮かべていた。

「なあ束、俺はお前も千冬も大事な友達だと思ってる。だから、どんな小さな事でも力になりたい。もしもお前が困ってたら絶対に力になる、だから千冬の力になる方法を教えてくれ!!」

俺の思いが通じたのか、束は顔を伏せながら俺の上から降りると、後ろを向きながら短くこう言った。

——キミが、剣術の勝負でちーちゃんに勝てばいいんだよ。それで……多分……致命的に解決するから。

俺が千冬に勝てばいい。束はそう言ってたけど、それが出来るなら苦労は無いんだよなあ……。

成長して俺の方がもう背が高いのに、年々動きに追い付けなくなっ
て行ってるし、竹刀の鏝迫り合いでも身体ごと弾き飛ばされる事も多
い。

伊達に長年無刀二扇の型を練習してきた訳じゃないから、受け流し
の技術にはちよつとだけ自信があったのに昔に戻った様な気分だ。
ただ千冬に勝つ為の特訓を束が付けてくれるらしいし、落ち込んで
てもしやーない。きつとなんかすげえ修行メニューとか用意してく
れるんだろう、波紋の呼吸とかやらされんのかな？

「束……流石に息を五分吸って五分吐けって言われても無理だよ
？」

「……先に言っとくけど、変な特訓とかしないからね？」

「マジで？ じゃあ何すんのさ？」

「私と模擬戦。ちーちゃんの動きを完璧にトレースしてあげる。反
復練習で動きと癖を徹底的に学ぶこと、良い？」

「へっ？ そんな事できんの？」

「私は出来る。でも、ちーちゃんには私の真似は無理。まあやった
ら分かるよ」

そう言って束は髪を結びながら門下生が全員帰って二人きりにな
った道場で俺に向かって竹刀を投げ渡して来た。

素直に受け取って構えたんだけど、本当に千冬の動きで踏み込まれ
て驚いた。しかも剣の速さも重さも完全に再現してたし、まるで千冬
と戦ってるみたいで普通にボコられた。すげえな束。

何本かやって全部ストレート負けした上に疲れて息切れし始めた
俺を見かねたのか、束は竹刀を下ろすと、用意してたらしいタオルと

スポーツドリリンクを手渡してくれた。

「分かる？　これが君とちーちゃんとの実力差。1000回やろうが1000回やろうが今の君じゃ掠らせる事すら出来ない」

「ぐぬぬぬ、やっぱ千冬は強いなあ」

割と毎回千冬と試合してる時に思うんだけど、あの反射神経に勝てる気がぜんっぜんしない。偶に決まるカウンターを見てから避けるとか平気でするようになったし、最近なんか足捌きのフェイントだけで後ろに回られるなんてのもザラにあるし、益々強さに磨きが掛かっている。

その動きを完全に再現してる時点でやっぱ束つてすげえんだなと思いつつ、本格的にどうしようかという悩みが出始めた。

昔から千冬の動きには着いて行けてない、そりゃ長年同じ道場で剣を振ってるから普段通りの千冬なら表情だったり雰囲気だったりから太刀筋は予測できるよ？　でも今の千冬はなんて言ったらいいのか、例えるなら機械っぽい動き？　めちやくちや正確な動きだからうん、そんな感じ。だから全然動きが分からん。

うがーつとなった俺は休憩中なのでと道場で大の字になって横たわりながら考えるけど、良い案が浮かんでこない。そんな俺の様子を見て、束が近くに座りながら俺の顔を覗き込んできた。

「あのさ、キミはバカなんだから深く物考えててもまともな解決策出ないだろ？」

「いやいや、もしかしたら俺の中に眠るなんかよく分からん才能とかが目覚める可能性が!!」

「んなもんあつたら私はこんなに苦労してないっての」

そう言いながら束は俺にデコピンを当てつつ『そもそもさ』と言いながら立ち上がる。

「キミはバカだから難しい事は他人に聞く主義でしょ？　んで、私にその『難しい事』を聞きにきた。それで私はそれに対する答えを教えた。――私が信用出来ない？」

俺に背を向けながら、そう言う束。その声は若干の寂しさを滲ませた様な感じがしたので、俺はそのまま立ち上がり、その問いかけに対しての答えを返す。

「うんにゃ。信用も信頼もしてるぜさんぼー」

昔のあだ名を使ってそう言ってみたけど、束からの反応が無い。もしかして滑った？

そう思っただけ少し不安になったのも束の間、深いため息と共にやれやれと言ったポーズをしながら、束が振り返る。

「懐かしいあだ名を使うのは良いけどさ、別に私は君の参謀役になつた訳じゃ無いんだけど？」

「でもほら、今は俺に知恵貸してくれてるじゃん。じゃあやつば参謀じゃん」

「君の理論武装は単純なんだか考え無しなんだか……色々考えてるこつちが馬鹿みたいじゃん」

そう言っただけ少し寂しそうな笑顔を浮かべる束を見て、俺は思わずにっこり笑い返す。

なんでそんな顔してるのかは分からないけれど、束も大切な友達だ。だからこそそんな顔をして欲しくない、そんなつもりで笑顔を向けてただけで、竹刀の先でデコをぐりぐりされた。何故に？

「ほら、休憩終わったんなら続きやるよ!!　君の身体能力じゃ逆立ちしたってちーちゃんには追いつけないからね、動きを徹底的に頭に叩き込んでカウンターを狙う事!!　ゲームで言うボス戦のパターン

攻略みたいなイメージでね!!」

「よっしや分かった!! でもちよつと待って」

そう言っただけは一旦束に待ったを掛けた後、道場の隅に置いてた荷物の中から携帯電話を取り出して母さんに電話を掛ける。

理由は簡単、束との特訓を続ける為にまだ道場に居たいから心配を掛けない様に電話するのと、束が準備してる時に道場借りる事を束のお父さんに言いに行ったら『何か特訓の様な事をするのなら、良かったら泊まっていきなさい。束も箒も喜ぶし、私も剣術の手解きをしてあげられるからね』と言っただけで、その報告。

『もしもし? 急に電話してきてどうしたの?』

「てな訳で、束ん家泊まるから!!」

『は?』

「は? えつ、ちよつと待って?? 私聞いてないんだけど?」

とりあえず言いたい事は言ったので、携帯の電源を切って束に向かって竹刀を向けたんだけど、肝心の束が驚いてた。あれ? 言っただけでなかったっけ?

「師範から泊まっていいよーって言われたからさ、折角の特訓だし、そっちの方がいいかなーって」

「ま、まあ、それはそうかもだけど……」

「それに師範からは俺が泊まると束と箒ちゃんが喜ぶって——」

「お父さああああん?!? 何ある事ない事言ってるの!?!」

そう言っただけは束は俺との特訓をほっぽり出して束のお父さんの所へ走って行ってしまった。

放置された俺はとりあえず束の後を追ってたんだけど、なんだかんだで結局泊まる事にはなったので無事特訓を続ける事が出来た。

……ただ、特訓の結果。このままだと冬ぐらいまでは猛特訓しなきゃいけないらしい。やっぱ才能ないのかなあ？

小学六年生 4

今日は束に用事があるから特訓は休み。かなりしごかれたからか、束に『休む時はしつかり休む事』と言われてるので、久々に釣りをしてる。

釣り糸を垂らしてゆつくりと魚が掛かるのを待つ、その間に聞こえる波の音や、風の音なんかがあるととも言えない心地良さを感じさせるんだよねー。

そうやって暫く堤防で足をぶらぶらしながらヒットを待ってたら、背後から声を掛けられた。

「此処に居たのか。お前は趣味が多いから少し探したぞ」

「ん〜？ その声、千冬か？ どーした？」

最近微妙に距離を置かれてる気がしないでもなかったから態々探して会いに来てくれた事が少し意外だった。もしかして考えすぎだったのかな？

そう思つて『まーとりあえず横に座つて話しようぜ』と言つて自分の横をペしペし叩きながら千冬を呼んだんだけど、微妙に間を置かれてしまった。

今までは呼んだら割と近い距離に座ってたのに、人一人分の距離を開けられたのが微妙にショックだった。けどなんかこう、別に嫌われてる訳じゃ無いっぽいから、ちよつと距離を詰めてみたんだけど、詰めたら詰めた分だけ距離を離されてしまう。

近寄る、離れる、近寄る、離れる、この繰り返しで暫く距離を詰めてみたけど、途中で千冬に止められてしまった。

「待て待て待て、距離を詰めるな流石に私も対応に困る」

「あつ、ごめんつい」

何も考えて無かったから思わず距離を詰めに行っちゃったけど、人には付き合いを見直したくなるときがあるってのを知り合いの大学生から聞いたことがある。

多分千冬もそんな感じなんだろうなあと納得した俺は、人一人分の距離を空けたまま、改めて釣り糸を垂らす。

「んで？　なんで俺探してたの？」

「……相談したい事があってな」

かなり思い詰めたような声色で、そう吐き出すように呟く千冬。頼ってくれた事を嬉しく思うけど、俺は束ほど頭良くないからなあ。

まあでも俺に相談しに来たって事は人間関係とかかな？　誰かと喧嘩したとか、喧嘩した誰かを仲直りさせたいとか。

「ん。分かった。俺に解決出来るか分かんないけど、俺なりに力になるよ」

「……お前は、『最強』や『最高』な人についてどう思う」「悩み事が想像の斜め上だったんだけど？　それって詳しい話聞ける感じ？」

「……すまないそれは話せない。だが、真面目な話なんだ」「それなら俺なりに考えてみるけど……うーん。なんつーか、なんだろ。言葉にしづらいけどさ……」

最強とか最高とか、ゲームの中だけの話でしかない俺にはそれがどう繋がって千冬の相談事になるのかは分からない。

けれど、強いて言えば別になんにも意味がないんじゃないかなあとそう思う。

だって誰よりも強かったとしても、誰よりも凄かったとしても、ひとりぼっちじゃ寂しいし、頑張り甲斐が全然無いんじゃないかな？

束だって昔は殆ど人と関わろうとしなかったし、千冬だって人付き合いはするけど深いところまでは踏み込もうとしてなかった。

でも二人とも誰かと一緒に居るのが嫌だった訳じゃない。そりや今思い返すと俺もすげえ強引に仲良くなりに行つた様な気はするけどさ、それでもすーっと俺を拒絶してた訳じゃ無いし、誰だって一人は寂しいんだと思う。

「てな訳で、最強とか最高とかそういう人らって寂しがり屋さんなんじゃ無いかな？」

「何がどう言うわけなんだ……私は束じゃないから言葉からお前の思考は推察出来んぞ……」

「まーあれだよ、どんだけ強くつてもどんだけ凄くつてもさ、それだけで人とは仲良くなれないんじゃないかねって話」

そう言いながら、俺は持つていた釣り竿を千冬に渡す。少し距離が離れてるから手渡し辛かったけれど、千冬は首を傾げながら受け取ってくれた。

「釣り竿……？」

「何かで見たけどさ『永遠に幸せになりたかったら釣りを覚えなさい』って言うんだってさ、なんで釣りしてれば幸せになれるのかはさっぱりだけど、千冬が今すげえ悩んでるのは分かるよ」

けど俺は多分千冬の悩みに答えは出せない。さっきの答えが腑に落ちてないって感じだったし、俺自身も千冬が何を悩んでるのか分からないから一緒に悩んでやる事も出来ない。

でもだからって、俺が千冬に何も出来ないってのは悔しいじゃないか。だって友達が悩んでんだぜ？俺に解決能力が無かったとしてもさ、せめてちよつとの間だけでも悩みから離れて遊んでほしい。

「てな訳で釣りしようぜ!! 竿一本しかねえけどな!!」

「……ふふっ。お前と一緒に居ると、毒気が抜ける様な気がするよ」

「おっ？ 褒められた？ ま、俺は難しい事考えんの苦手だからさ、

悩み事の相談されても千冬の納得する答えが返せるかは分かんねーけど、一緒に居て一緒に遊ぶ事は出来るからさ。またなんか悩んでたら釣りに行こうぜ？」

「……………ああ、そうさせて貰おう」

そう言って、千冬は俺から貰った釣り竿を使って釣りを始めた。

一本しか釣り竿を持って来なかったから、魚が掛かるまで俺は千冬の横に座って色々適当な事を話してたけど、何となく千冬の雰囲気は明るくなった様気がする。

もしそうなら嬉しいな。

今日も束は忙しいらしく、特訓が休みだった。

束も束で色々やる事があるらしくて、本当なら俺と特訓なんてやってる暇なんか無いらしいんだけど、何とか時間を作って鍛えてくれるらしい。正直悪いなと思ってるし、束にも俺が出来る事ならなんだってしてやりたいと考えてるから、お礼をしなきゃいけないと思ってる。

けど今月はお小遣いを使い切ってるし、宇宙談義とかもレパトリーが束に比べると少ないし、なんか無いかなあ。

「てな訳で千冬、なんか無い？」

「……腹でも減ったのか？」

「ん？ 腹減ってねーけど？」

「毎回の事だが分かる様に話してくれ……」

一人で考えてても多分束にツツコミ入れられる様な事しか浮かばないから千冬ん家に来てるんだけど、良く考えたら千冬も束に似た様な部分があるし、取り敢えず千冬が喜ぶ様な事をやれば束も喜ぶ様な気がして来た。

千冬の喜びそうな事かあ……そーいや前に膝枕した時気持ちよさそうに寝てたよな？ 今も膝枕喜ぶかな？ 何なら一夏君もお昼寝中だし、川の字に添い寝とかでも良いんだけど。

「よし!! 千冬さあこい!!」

「待て待て、全く話しが分からん!! 何の話だ!？」

「いやだから、膝こいって」

「なんだ？ 私がお前に膝蹴りでもすれば良いのか？ 痛いぞ!？」

「なんで突然膝蹴りされなきゃいけないんだよ!？」 膝枕だよ膝枕!!」

「ああ、なんだそう言う意味か……。お前の事だから私には理解できん思考で膝蹴りを求めて来てるのかと思っただぞ」

「お前俺がそんな事する奴だと思ってるのか……………」

「少なくともお前との付き合いの長い人間は私の印象に同意するだろうな」

あつさりと言いきり切る千冬を見て、俺は他人からそんな風に見えるてんのかあとちよつと悲しい気持ちになったが、目的は千冬に膝枕する事だし、そもそも昔の行動を考えるとまあ仕方ない様な気もするし、気にしなくてもいいかなあ？

とりあえず膝をペシペシしながら千冬を膝枕に誘ってみただけど、今までならすんなりとされに来てたのに、躊躇ってるような様子が見えた。

「どした千冬？」

「…………いや、その、今日は…………」

「遠慮すんなよ千冬。俺とお前の仲だろ？ 何なら頭も撫でてやろうか？」

俺がそう言うと、千冬はゆっくりと俺の側に近付いて来てそのまま頭を俺の膝の上に乗せる。

んでその頭を撫でてみたんだけど、少しだけ千冬の方が強張ったような気がする。ただそれも最初だけで、ゆっくり撫でてると、千冬も目を瞑ってリラックスし始めたらしい。

そんな風に暫く頭を撫でていると、千冬がボソッと呟き始めた。

「…………私は、弱いな」

「いや強いだろ？」

「いいや、弱いさ。私はお前の優しさに甘えている。お前を汚したく無いと思いつながら、こうして優しくされるとそれをつい受け取ってしまう」

ぐりぐりと俺の膝に頭を擦り付ける様にして、そう語り出す千冬。時々俺に見せる弱音なんだろうと思ひ、千冬が話終わるのを待つ。

「……私は強くなければいけないのに、お前が私を弱くする。それは良くない事だと理解はしているが……お前は私の欲しいものを全てくれる。私の知らない物を全て教えてくれる……どうしてもその誘惑を振り切れない……お前は……私にとって……」

そう言つて千冬はそのまま黙ってしまう。どうしたのかと思つて顔を覗くとすっかりと眠つてしまつて、すーすーと寝息まで聞こえてくる。

前にも千冬を膝枕した時に同じ様な事があつた様な気がするな。と懐かしい気持ちになつたけど、このままだと俺の膝が死んじゃうので、とりあえず千冬を抱き抱えて一夏君の隣に寝かせようとしたんだけど、気が付いたら抱きつかれて離れられそうになかつた。

しようがないから俺も添い寝しとくかと思ひ、一夏君と千冬の間に入るようにして横になる。

そーいやこの部屋にもだいぶ通つてるけど、相変わらずなんも無いよなあ……。

ちらつと見ると昔よりは物が置かれてるけど、俺の部屋みたいにおもちゃやら漫画やらゲームやらで溢れかえつてる訳じゃないし、片付いてるつて言えば片付いてるけど、どつちかつてーとなんも無いつてのが正解な気がする。

そんな風に考え事をしてたんだけど、一夏君と千冬の寝息を聞いていると俺も眠くなつて来た。時計を見たらまだ昼の一時、千冬も寝ちやつたし離してくんないし、携帯のアラームだけ掛けて昼寝でもしとこうかなあ？

そう思つてポケットの携帯を取り出そうとしたんだけど、何時の間にか千冬が足まで絡めて来てたらしく、ポケットから携帯を取り出せなくなつていた。

いや、取り出そうと思ったたら取り出せるよ？ けどそうになると千冬の身体を触らなきゃいけないし、そうになるとリラックスした顔をしてる千冬を起こす事になる。

流石に起こすのは可哀想なので自分自身の体内時計を信じて、俺も目を瞑る。起きてても良いんだけど、そうすると千冬を変に意識しちゃいそうだから、俺の方が多分持たない。

——まあ二時間くらいで起きれるだろ!!

とか思ったらガッツリ寝過ごした上に一夏君に起こされた時にはもう夕方だった。

……体内時計って、役に立たないんだな。

幕間：戦乙女の秘密

——報告。計画の進捗は現在やや難航しており、研究主任の提唱した『完璧な感情コントロール』に関して不具合が発生している模様。

この不具合は本年になってから顕著に発現しており、織斑千冬への影響が見られました。

端的に申しまして私は研究主任の語る『究極の人類』の条件として『如何なる状況、環境下であっても完璧に感情をコントロールし、常に最高のコンディションで最適解を行う』という物へ些か疑問を抱いており、不具合の発生も主任の不手際と考えております。

彼らは『親』と言う役割を演じてはおりますが、それ以前に『研究者』としての側面が非常に強く、織斑千冬のコントロールが完全であるとは到底思えません。

その証拠に実戦訓練終了後に織斑千冬は精神的疲労を負っている節が存在し、それは感情余計な物を持たせた事に起因するのではないのでしょうか？

その為、感情の完全なるコントロールを目的とする本計画の中断及び織斑千冬並びに織斑一夏の回収を進言致します。

以上の報告書をPCから白衣の男が何処かへと送り、深いため息を吐く。

究極の人類を誕生させると言う研究、それに非常に心が踊った彼は道徳や倫理などを捨ててその研究に終始し、彼らは遂にその計画の成功例を作り出す事が出来た。

計画外の番外個体を作り出す事にもなったが、ある意味では必要経費であり、それ自体は例外とも言えるのだが……彼が深いため息を吐いたのには理由がある。

現在のプロジェクト担当主任。その男は一種の完璧主義者であり、『究極』と銘打たれた人類が人形であるはずが無いと主張し、その意見

が通ったからこそ一般社会に晒しながら情操教育を行い、感情のコントロールと他者の観察から得た洞察力を用いたマインドコントロール技術を与える事、それを徹底していたはずだった。

しかし現実はそのならず、人形然としていた数年前の方が感情のコントロールや精神掌握が得意であったとそう結論付ける事が出来る。

これは明らかな失敗であり、致命傷に近い失態なのだが、それを主任自身が理解している為か、その不具合を修正しようとするあまり、更に精神が追い込まれていくと言う悪循環を発生させていた。

報告を作成していた男はその事に頭を悩ませる。彼からすれば感情こそ究極の人類には不都合な存在であり、機械的に全てを完璧に熟せてこそ究極であると、人類を不完全な存在にしている物こそ、善悪論を生み出す感情に他ならないと、彼は持論を述べていたが同意が得られず、その後一般研究員として計画に関わる事になっていたものの結果はこの通り。

究極の人類の作成は成功した。しかし、究極の人類の育成には失敗したのだ。

彼にとってもそれは屈辱であり、心血を注いで作り上げた最高傑作が鈍ったなどと認められる訳もない。

しかし、かといって新たな『究極』を作ろうにも、資金面は勿論、時間と言う意味でも問題が存在しており、仮にその二つを解消したとしても『織斑千冬』を越える答えが作り出す事が出来るかは不明である。

その為、彼は織斑千冬にある程度の見切りを付けており、もう一つの成功例である『M』の教育に着手しようとしていた。

カタカタとタイピングの音が鳴り響き、研究主任が万が一失脚した場合の保身を行う為の情報収集と――――織斑千冬の間関係の中で発見した一つの不安要素を報告書として纏め上げる。

『篠ノ之束』

『究極』の育成計画の最中に現れた異常存在であり、織斑千冬と引き合う様に友好関係を構築した不安要素。

当初は身体能力等の水準が一般以上の『天才』止まりと判断されており、彼らの手中にある『究極』には程遠いと判断されていた。――

——少なくともこの計画の担当主任からは。

だが、彼だけはその異質さを研究者としての肌感覚から感じており、態々織斑家にハウスキーパーに偽装した人員を配置する事で、織斑千冬から間接的に情報収集を行っており、その結果推察される内容を報告書へと記載して行くのだった。

——報告。本計画に於いて度々『X』と呼称していた存在である『篠ノ之束』について、織斑計画の根底を覆す可能性が存在する事が判明致しました。

主任の報告によれば『究極』以下であるとの結論が降っておりますが、私が個人的な調査を致しましたところ、明らかに『X』は他の存在から逸脱しており、身体能力は勿論の事、頭脳面での才覚が我々の想定以上の水準となっております。

その証拠として調査班の入手した情報『インフィニット・ストラトス』と呼ばれるマルチフォーム・スーツについてをご参照ください。

このマルチフォーム・スーツは大気圏外での活躍を想定した代物として現在開発中との事ですが、問題となるのはこのインフィニット・ストラトスと呼ばれる存在ではなく、この代物を若干11才の少女が設計し、主体となつて開発していると言う事実です。

——早急な調査が必要と思われれます、場合によっては我々の悲願は唯の道化となるかもしれません。

夏の日差しが強くて日射病とか熱中症の注意報が出ているある日の事、俺は東の都合で特訓が休みになってたから家でゴロゴロしてた。

今日は父さんと母さんは出かけて夕方まで居ない。俺も外に出ようと思つたけど、太陽からの紫外線アタックに負けてしまった所為でクーラーを効かせながらソファでみーくんと一緒に横たわってる。だって暑いんだもん。

そんな風にパチパチとテレビ番組のチャンネルを変えながらボーっと時間を過ごしていると、昼頃に家のチャイムがなった。

お客さんかな？と思つて覗き穴から外を確認すると、用事があつた筈の東が暑そうにしながら扉の前に立っている。

疑問に思いながらも玄関を開けて家に入れた俺は、冷たい麦茶を出しながら東になんの用なのかを聞いた。たしか今日は一日用事があるって言つてたような気がしたし。

「なあ東。今日は一日用事じゃなかったっけ？」

「その予定だったんだけどね。出掛け先の方で電気工事が入つてたらしくて急に用事がなくなっちゃってさ、家に帰つても良いんだけど今日はお父さんとお母さんが箒ちゃん連れて水族館に行つてるし、暇だからキミン家来たんだよ」

そう言つて、襟を摘んでパタパタとクーラーの冷気を服の中に入れるような仕草をしながら東はみーくんの頭を撫でる。

まあ予定のドタキャンは珍しい事じゃないし、東が遊びに来たから俺も暇を持て余さなくて良いかななんて考えてたんだけど、小さく東の方からお腹の鳴る音が聴こえて来た。

チラツと見ると、みーくんを撫でた体勢のまま若干顔を赤くしながらプルプル震えている。多分恥ずかしかつたんだろう、なんだかんだ

言って束もその辺気にするし。

俺も時間的にもそろそろ昼ごはんを食べようと思ってたし、折角だから束の分も作るか。昨日の夜に親父が作ったビーフシチューがちよつと残ってるし、オムライス作ってその周りにデミグラスソースみたいに掛けるのもやってみよう。母さんが居たら絶対怒られるけど、お客さんが来てるんだし許されるだろ、多分。

「よし!! とりあえずメシ作るか!! てな訳で束は手洗って座ってる? ちやちやつと作るからさ」

「私もいいの?」

「食ってないんだろ? 別に良いって、一人分も二人分も変わらないし」

そう言って俺は冷蔵庫から食材を取してオムライスを作って行く。ビーフシチューを掛けるから味自体は濃すぎない様に調整して、サラダも付け合わせに追加でバランスも考えた。

テーブルに座った束に皿とコップに入れた麦茶を出しながら、俺もその正面に座ったんだけど、食べた束からの評価は『……まあまあんじゃない?』的な感じだった。ちよつと料理には自信があつたからシヨック。

そんな事を思いながら、俺もオムライスを食べてたんだけど、正面上品に食べる束を見てそういや、なんだかんだ言って一番長くつるんでるのってコイツなんだよなあと気が付いた。

普段から色々な奴と遊んでるから特に考えた事無かつたけど、六年間同じクラスだったし、道場にも通ってるし、席も大体左側だし、うん思い返したらやつぱ一番長いな。

そつかあだから束は俺が考えてる事が分かるのか、付き合いが長いしこれが以心伝心って奴?アレでも俺は束から伝心してないよな? ?

付き合いが長いから束が俺を分かっていると思ってたのに俺は束の考えてる事が分からん。となると単純に束の頭がいいからかな?

そーいや、頭いいって言うけどどのぐらい頭いいんだろ？

俺と何倍ぐらい離れてんのかな？ 十倍とか百倍とかじゃ絶対無いよなあ……百人俺がいても東に勝てる気しないし、じゃあ千倍？ うーんでも東にそれ言ったら『キミとの差が千倍しかないとかバカじゃないの？ キミの頭脳だと私の一万分の一以下だよ？』とか言われそう。てなると、万とか億とかでもなんか似た反応されそうだし……。

「……ねえ、人が食べてるところマジマジ見ないでくれないかな？ 食べ辛いんだけど？」

「あぁごめん。考え事してた」

「どーせ下らない事でしょ」

「東と俺って何倍ぐらい頭のデキが違うのかなあつてさ」

「……気にしないでいいんじゃない？ キミにはキミの良いところがあるし」

つて言われてもなあ？ 俺が東と伝心出来てないって事は東の理解者になるって言う約束が守れないワケじゃん？ だから東を理解する為には俺が東に近づかなきゃ行けないわけで、その差がどれだけあるのか知りたいんだよなあ。

いやでも、めちゃくちゃでかい数字っぽそうだし、東に聞いてみるか？

「なあ東」

「何？」

「お前さ、俺より5000兆倍頭いいよな？」

「馬鹿にしてる？ ねえ、東さんの事馬鹿にしてる?? その数字は絶対対頭悪いからね!」

「大真面目に考えたんだけどなあ……」

「はぁ……キミはもう少し言葉のキャッチボールしなよ、私以外には普通に喋ってるのに私と話す時だけ圧縮言語になるんだからさ。思

いつきり大暴投、私以外まともに会話出来ないよ?」

そう言った呆れた様にため息を溢す束。今回は普通に話してたはずなのに、何で呆れられたんだろ?

けど言葉のキャッチボールかあ……よく言われてるけど中々治せないんだよなあ、この癖。

別に他の友達には普通に話せるんだけど、束や千冬と話す時はめちゃくちゃ楽にして何も考えずに喋ってるか、めちゃくちゃ考えて喋ってるかの大体二択だし、偶に二人を揶揄うつもりでわざとそう言った喋り方するけど、殆ど意識して喋ってるわけじゃないんだよね。

だから別に言葉のキャッチボールを適当に投げてるつもりは俺には無いんだけど、キャッチャーの束には大変なんだろう、何とか治したいと思う反面、野球で言うところのバッテリーだから気にしなくても良いんじゃないかと言う考えが浮かんできた。

でもバッテリーかあ、となると俺がピッチャーで束がキャッチャー? ああでも、野球用語だとバッテリーのキャッチャーを女房って呼んだりするよな?なるほどだから束と話すのが楽なのか。

そう思っ束の顔を見る。いつの間にか束はオムライスを完食しており、麦茶を飲んでるところだった。

「てな訳で束。お前は俺のお嫁さんだったのか……」

「ブフツ!」

俺が神妙な顔でそう束に聞くと、束は盛大に麦茶を吹き出し、思いつきり咽せ始めた。びっくりしすぎじゃないかな? とりあえず拭いところ。

「ゴホツゴホツ!! おまつ、お前何馬鹿な事言っただよ!」 なんて束さんがお前なんかのお嫁さんにならなきゃいけない訳? そりゃ確かにキミのその圧縮言語を喋る癖を解説して理解できるのは束さ

んだし？ キミの突拍子のない思い付きとかに付き合い切れるのは東さんだけでも？ 私たちはそもそもまだ12才だから年齢的にそう言う関係になるのは早すぎるし日本で結婚できる年齢は男性18歳女性16歳だから最低でもキミが18歳になる六年後まで待ってくれないとそういう関係には成れないしお父さん達の仲が良いけどちゃんとした挨拶の手順踏まなきゃいけないのにそれもしてないっていうか結婚以前にプロポーズすらされてないし彼氏彼女の段階すらすっ飛ばされてるんだから色々段階を踏みたいって気持ちがあるんの中にもなくもなかったりするんだけどその辺りは汲んでくれるのかなっていや全然そういう関係になるとは一言も言っていないよ？ どうせキミのいつもの思考ロジック的に適当な事言って人を動揺させてるパターンでしょ？ 私は分かるから!!」

「いやそのまんまの意味なんだけど？」

「ふえっ!？」

一気に一息で東が話切ったから最後の部分以外全く聞き取れなかったけど、女房って単語って嫁さんって意味だよな？ 別に間違っていないと思うんだけど……。

そう思っただけでか固まってる東に確認をしたらめっちゃやくちや怒られた。『お前は毎回毎回紛らわしい言い方を過程を省いてするから私が誤解するんだろ!』とか言っただけから俺は一時間くらい東のマシンガントークを浴びせられるのだった。

——千冬に勝つ事を目標にして束の特訓を受けて暫く経った。

その一環で今の實力差を把握する為に千冬と体術込みの手合わせをする事になったんだけど、はつきり言って打ち込む隙が全くない。

夏場の道場の中で全く体が揺れずに竹刀を真つ直ぐに構える千冬は、まるで機械の様に感じる。なんと言うか、呼吸やリズムが読み取り辛いと言ったらいいのかな？

上手く口で説明するのが苦手だからどう例えればいいのか分からないんだけど、そのせいか俺から攻めた時に返される動きが読めない。いや、元々俺の剣は待ちの剣なんだから攻めに向いてないけどさあ……。

試合前に待ち合戦の根比べだと集中力の差で絶対に勝てないって束に言われてたのを思い出す。向かい合って十分くらい経ってるけど、千冬は本当に微動だにしてないし、ジツと俺の目を見続けているから逆に攻めっ気を見抜かれてると思う。焦れて手を出して来るのを待たれてるのか、もしかしたら攻めづらそうにしてる俺に付き合ってくれてるのかは分かんないけど、見透かされてる気分だ。

チラツと束の方を見て、『ギブアップしてOK?』と目で訴えてみたけど、『つべこべ言わずにやれ』って感じの空気を感じ、ダメ元で斬りかかろうとしたんだけど、いつの間にか千冬が踏み込んで来ていた。

「——試合中に私から目を逸らすとは、良い度胸だ」

若干不機嫌そうな声色でそう言う千冬。完全に反応が遅れた所為で咄嗟に竹刀を差し込む事しか出来ず、横薙ぎに振るわれた一閃で右手の竹刀を弾き飛ばされた。

思わず後ろに引こうと思ったけど、束との特訓で悉くそれを狩られたのを思い出し、残った竹刀を手放しながらその場に踏みとどまり、

千冬の後ろに回り込む様にして組み付き、羽交い締めにする。

とりあえずこれで剣は封じられたんだけど、問題はこつからなんだよなあ……。

身長差によって少し床から浮いた状態の千冬はぱつと見どうしようもないように見える、実際俺だったらどうにもならないと思う。けど、千冬は違う。

身体が浮いてる事を利用して俺の腹に両足を押しつけると、そのまま足を伸ばして密着した体の間に空間を作り、その空間を利用して鉄棒回転の様なイメージでくるつと回り、俺の拘束を抜け出した。

そして、漫画みたいな抜け出し方に少し感動したのが悪かったのか、俺はそのまま千冬に水面蹴りで転倒させられると、体勢を起き上がらせる事も出来ずに馬乗りになられて顔面に拳の寸止めを打たれていた。

「私の勝ちだな」

「両腕が千冬の足で挟まれてるし、抵抗したくてもできねえ」

「背後を取られたのには少し驚いたが、詰めが甘かったな」

そう言うと、千冬は俺の上から降りてタオルで汗を拭き始める。チラツとその横顔を見れば、道着を少しはだけて内側に籠った熱を外に出している。タオルで汗を拭いてはいるけど、その汗は多分俺との試合で流した汗と言うより、道場の暑さで出た汗なんだろうなああと、少しだけ悔しかった。

ただそんな風に千冬を見ていたら、束が俺の顔を覗き込んで来た。床に大の字になってるから逆さまになってる束の顔にはやれやれ、みたいな表情を浮かべてる。

「ま、とりあえず今キミに一番必要な物は余計な事を考えないようにする思考ロジックだね、ちーちゃんの動きに一々頭の中で反応しちゃってたらキリがないよ」

「……………束。この男にそれが出来るなら私達とのコミュニ

ケーション能力に劇的な改善が出来てると思わないか？」

「……………だ、大丈夫。タイムマシン作るよりは多分簡単だから」

「比較対象がその時点で色々察するんだが……………まあいい」

呆れたようなため息を吐いた千冬は、そのまま倒れている俺のところまでくると、凍らせたスポーツドリンクを渡してくれた。

「何を企んでいるのかは分からないが、稽古なら何時でも付き合うぞ」

「さんきゅー千冬。今に見てろよ？ 直ぐに強くなってお前に勝つてやつから」

「ふふっそうか。それは楽しみだな」

「ふっふっふ、今のうちに余裕ぶってるんだな。俺には覚醒イベントが多分残ってる」

「ま、楽しみにしといてよちーちゃん。冬までにはコイツ仕上げとくから」

「そうか、そこまで言うなら……………よし、もしお前が私に勝てたなら何でも一つ言うことを聞いてやろう」

「うわぁ師匠キャラみたいなさ言ってる……………」

『しししょー』だからな」

「キミに対してのちーちゃんの『何でも』は本当に何でも言う事聞きそうなんだけど……………大丈夫？」

そう言つてドヤ顔する千冬とジト目で俺を見る束を横目で見つつ、どう束に返そうかと考えながら体を起こして貰ったスポーツドリンクを口にする。

タオルで保冷してるからか、まだ凍ったままの中身は溶け始め独特の妙な甘さじゃなく、少し薄まったような味がする。よく見れば開封済みで、横に振つてみるとちやぶちやぶと量が少ない事が分かる。あれ？これ一回千冬が飲んだんじゃね？。

「なあ千冬?」

「ん? どうした?」

「これ、間接キスじゃね?」

俺がそう聞くと、少しの間を開けた後——千冬は顔を赤くして
そっぽを向いたのだった。

今日は東との秘密特訓の日。なんだけど、今日は基礎トレーニングじゃなく、メンタルトレーニングをするらしい。

内容は東と一緒に街中をただ歩くだけ、普段のキツイトレーニングとは全然違うなあと思ってたら、『何も考えずに』歩かないといけないらしい。

東曰く、『キミは普段何も考えてないように見えてその実色々考えてるからさ。それ自体は悪いことじゃないんだけど、その所為で自分の頭の中に入ってきた情報を考え過ぎちゃう悪癖にも繋がってる。と私は見てる』との事。

「この前のちーちゃんとの勝負も打って誘わないといけないのに、色々考え過ぎてて勝手にドツボに嵌っちゃってたでしょ？」

「いや、そー言っても隙が全然無かったじゃん」

「そんなのちーちゃん相手だし当たり前じゃん。だから打ち込んで隙を作りに行かなきゃダメだったんだよ」

「つつてもなあ……」

実際問題、俺があの時千冬へ打ち込んだとして結果は変わったのかなあ？ 何を打つても二の太刀であしらわれてたような気がする。これまで同じようなシチュエーションで東と打ち合った時は普通にしばかれたし、この考え自体は間違ってるかと思うんだけどなあ。

そもそもとして、昔から千冬相手にこつちから仕掛けて勝った覚えが無い。いやまあ普通に通算して全敗してるけどもさ、とにかく俺よりの反応が早いしなんなら忍者みたいな動きで裏取りされるから後の先を取るような待ちの剣になった訳で……。

——と、そんな事を考えてたら、頬をムニッと摘まれた。

「ほら、今も考え過ぎてるでしょ？ せめてちーちゃんと勝負する

時くらいは余計な事を考えないよーに!! 分かった?」

「わ、分かったよ」

「よろしい。じゃあ今日は何にも考えず、見たままの事をそのまま口にして会話しな。今日一日東さんが横で見といてやるからさ」

「いやまあ、それはいいんだけどさ」

「ん? 何? なんか東さんに意見でもあるの?」

東の言ってる事は何となく分かる。目の前の事に集中しなきゃいけないのに、それ以外の事がぐるぐる頭の中で回ってるから何も考えられないようにして、『相手がこう来たらこう返す』ってな感じの集中力を持たせたいんだろうけど、その練習は俺の頭の中を見れないと難しいんじゃないかな?

「何も考えてない状態になってるとか俺が色々考えてるとかって見ただけで分かるのか?」

「——私はキミが思ってる以上にキミの事を分かってるからそんな事今更考える必要無いよ」

「なるほどなあ流石ニュータイプ」

「だからその妙ちきりんなカテゴライズするなって言ってるんだろ」

そう言って、東はジト目で俺にペチンとデコピンをしてくる。余計なことを言ったかもしれないけど、思ったまま会話しろって言ったのは東だしなあ。

とりあえず、適当に手を繋ぎながら二人並んで歩いてたら近くのスーパーの前でたい焼きの屋台が出てるのが見えた。

「たい焼きかあ……」

「何? たい焼きが気になるの?」

「たい焼きって詐欺だよな」

「は?」

「いやだってたい焼きって鯛が入ってないじゃん。中身あんこだ

し、鯛の形してるからたい焼きなのは分かるけどさ、じゃあたこ焼きってタコの形してるかっていったら別にそんなじゃん？ なんなら明石焼って明石市を焼いてるのかって話になっちゃうじゃん。なりたい焼きは『鯛焼いてない焼き』にするべきじゃね？ あっ、でもそうなるらジオ焼きのラジオってなんだろう？ マジでラジオ入れてる訳無いだろうし……ラジオ……ラジオ？ なんかの頭文字かな？ ラジオのラは……ラーメン？ んでジ……ジ？ ジングスカンとか？ じゃあ最後はオレンジかな？ あれでもラジオ焼きってこんにやくと牛すじが入ったたこ焼きのルーツつぽい食べ物じゃなかつたっけ？ うわーどうしよう、めっちゃ気になるんだけど！？ あ、でもそう言う話になるとイカ焼きもアレだよな？ なんか大阪の方だとクレープみたいなのがイカ焼きもアレだよな？ なんか大阪のそうそう粉物って言ったら焼きそばも粉物だけどき、なんで『粉物』なんだろう？ 小麦粉から出来てるから麺料理じゃね？ それならパスタも粉物だから大阪の文化料理になるのかな？ キヤベツと豚肉炒めてパスタ入れてソースいれて、『焼きパスタ!!』とか言ってさ!! あ、パスタって言ったらさ——」

「ちよつと待ってストップ!! たい焼き一つでどこまで話広げる気なんだよ!?!」

「えっ? いや別にたい焼きで話広げてるつもりは無いけど……? あ、でもたい焼きって尻尾まであんこたっぷり入ってるとかカスタードがはいってるのとか色々あるけどさ、おかずクレープとかみたいに中にシーチキンとか詰めてるおかず系たい焼きとかってあんのかな? 俺見た事無いんだけどあったらあつたで実際どんな感じなんだろ? 案外無難な味してそうだけど、米粉使った白いたい焼きとかだつたら普通にマツチしそっだし、なんか作ってみたくなつたんだけど、今度みみなで作ってみねえ? 確か知り合いの大学生のにーちゃんが家庭用のたい焼き機持ってたと思うし、よしそうと決まつたらちよつと待ってて今から電話すつから。あーでも今もあるのかなあ? 前に動画投稿用に改造して全自動たい焼き機とか言つてかなり大掛かりなたい焼き機にしてるって話だったし、あれ完成したの

かな？ 前に試運転を見せて貰った時はたい焼きの金型が無駄にめちゃくちゃ高速回転しながらたい焼き作ってたし」

「あれ？もしかして私パンドラの箱開けちゃった？」

そんなこんなで東と1日中一緒に居ただけど、帰り際に『……コイツがこんなに喋るなんて予想外だった……今後はこの方法はボツ』と疲れ切った様子なのが気になった。

東の言われた通りにしたと思うんだけど、喋り過ぎだったのかなあ……。

千冬との立ち合い。今も昔も変わらずに勝てない勝負だけど、今は今まで以上に勝ちにこだわってる以上、次に繋がる試合にしようと思っただのは多分束との特訓のお陰なんだろう。

千冬からの打ち込みを必死に受け流しながら徹底して攻めつ気を押し殺し、ひたすら相手の動きに合わせる事だけを考える。

竹刀の動きを見てからだと確実に間に合わない。千冬の剣の疾さは間違いなく日本……いや世界一と言ってもいい、鞭の様に竹刀の先端が音速になるって程じゃないけど、少なくとも『目』で追っちゃダメだ。

だから今日は千冬の動きだけを見る。腕や足、視線や表情、息づかいや足音、周りの事なんか全部一回どつかに投げて、目の前の千冬だけを理解しようとして——その瞬間。千冬表情と動きがまるで別人の様になり、俺は一方的に打ちのめされた。

今までの千冬とは全く違う、かと言って最近の千冬の様な暴力的な荒い剣でもない。急所を徹底的に狙って、その為の捌手も合わせるよ、うな、例えるなら大袈裟だけど人を殺す為の剣みたいな感じ。

完全に予想外だったからほぼ無防備で受けちゃったし、焦って防御しようとして型も何もあつたもんじゃなくなって、それで余計に消耗したからか、俺は酸欠と疲労で立ち上がれず少しだけ横になってる。そんな俺を見て千冬はめちやくちや落ち込んでるし、それに釣られて他の門下生も空気が落ち込んでる。

ただでさえ今日は朝からどんよりした空模様だったのに、道場の中の空気が重苦しくなって正直気まずい。俺ってあんまこんな感じの空気感嫌いなんだよなあ。

それで、横になつたまま周りの人の顔を見ながらどうやってこの空気良くしようかなあと考えてたら、千冬と目が合った。

とりあえずフォローしとかなきゃなと思つて、『気にすんなよ』的なジエスチャーをした瞬間——千冬は弾かれた様に走つて道場を飛び出して行つた。他の人が止めようとしてくれたけど捕まえられず、逃げ出す様に走り去つた千冬を見て、俺は思わず体を起こす。

俺の何が千冬をそうさせたのか正直分からない。もしかしたら束ならその理由に察しが付くのかも知れないけど、俺が見た限りだと……いや、違うそうじゃない。誰だつて人に言えない事、人に理解されない事が一つや二つなんてもんじゃなくらいある筈だ。それなら俺の知つてる千冬が千冬の全部みたいな考え方は間違つてる。特に最近のあいつは思い悩んでるし、今日も別人なんじゃないかつてくらいには激しかったけど——きつとそれも千冬の中にある物の一つなんだろう。誰だつて良い所だけじゃない、悪い所だつてあるもんだから、今回のそれは俺が知らない部分なだけだ。だつたらその部分も知つて、そんで後は……まあなんとかなるだろう!! 追いかけてから考えりゃいい。そう考えて、俺は千冬を追いかけて道場を飛び出した。

▽

………私が道場から飛び出して直ぐに空模様が崩れ、雨が降り始めた。
がむしやらに走つて乱れた呼吸を整え、私は自分の行動を自嘲気味に笑う。

「究極の人類が聞いて呆れるな………」

自分の出生を知つたのは……いや理解したのは最近だった。

今までは自分の身体能力や家庭を全く疑問に思わなかつたし、『訓練』での武器の扱い方や使い方を徹底させられた事に興味などなかつ

た。私は与えられた命令を完璧に遂行すれば『家族』と言う肩書きの男女が僅かばかりに私を褒めてくれる事だけを目的として生きて来た。それは今も変わらない、その筈なのに……彼が関わると私は私で無くなるような気分がする。

それは決して嫌な感情ではない、彼が笑えば私も釣られて笑えるし、彼に褒められたり、必要とされたのなら私の内側が自分でも理解出来ないほどに満たされる。今の私が居るのは、束と出会ったばかりの人間を演じていた時の私から成長したのは間違いなく彼の影響だと、そう断言できる。

だかしかしそれは私の中の決定的な何かを変化させる。彼が束と話すのが嫌だ。彼が私から離れてしまうのが嫌だ。彼が私の物にならないのが嫌だ。様々な『嫌だ』が溢れてしまう。

そしてこの思いが限界を迎えたのなら私の中の優先順位を揺るがせる。『両親』を優先していたのに『彼』を優先するようになる、私はこの感情に抗う事など出来ない。

——私は彼を愛しているのだから。

私を振り回している彼が好きだ。束を呆れさせる彼も、一夏と遊ぶ彼も、負けず嫌いな彼も、嫌いな所など何一つない。

だけど、だからこそ怖い。私がこの感情に身を任せた時、『両親』は一夏をどうする？ 彼が私を恐れる様になったら？ 彼が、彼がもしも私に勝ってしまったら？

私は束程頭の回転が優れている訳では無い。だがそれでも分かる。彼が私に勝てば、きつと致命的な解決になると。

『織斑計画』プロジェクトモザイクとやらも、私のこの不安定なココロも、間違い無く。

「……………いや、それも良いかもしれないな」

本降りになりだした雨に打たれながら、口を突いて出た言葉にいよ

いよ取り繕えなくなり始めたかと再度笑う。

今日の彼は恐らく余計な思考を全て、いや私の剣を捌く為にそれだけを考えていたんだろう。私の打つ剣が、足捌きが、息づかいが、彼の手玉に取られる様な感覚は私に興奮と喜びを与えてくれた。

——だがそれと同時に私を見る目が、私を知ろうとするその目が、どうしても研究者達とダブって見えてしまったのだ。

酷い八つ当たりだと冷静になった頭で思う、だがあの瞬間私は考えてしまったのだ『この出会いすら計画の一環だったのか?』と。

その思考に行き着いた瞬間、私の中の暖かい気持ちは全て殺意に裏返って、そしてあのザマだ。

感情一つコントロール出来ないとは……………本当に、究極の人類が聞いて呆れるよ。